神門横穴墓群　第 10 支群

十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021 年

出雲市教育委員会

出雲市の文化財報告 45

神門横穴墓群　第 10 支群

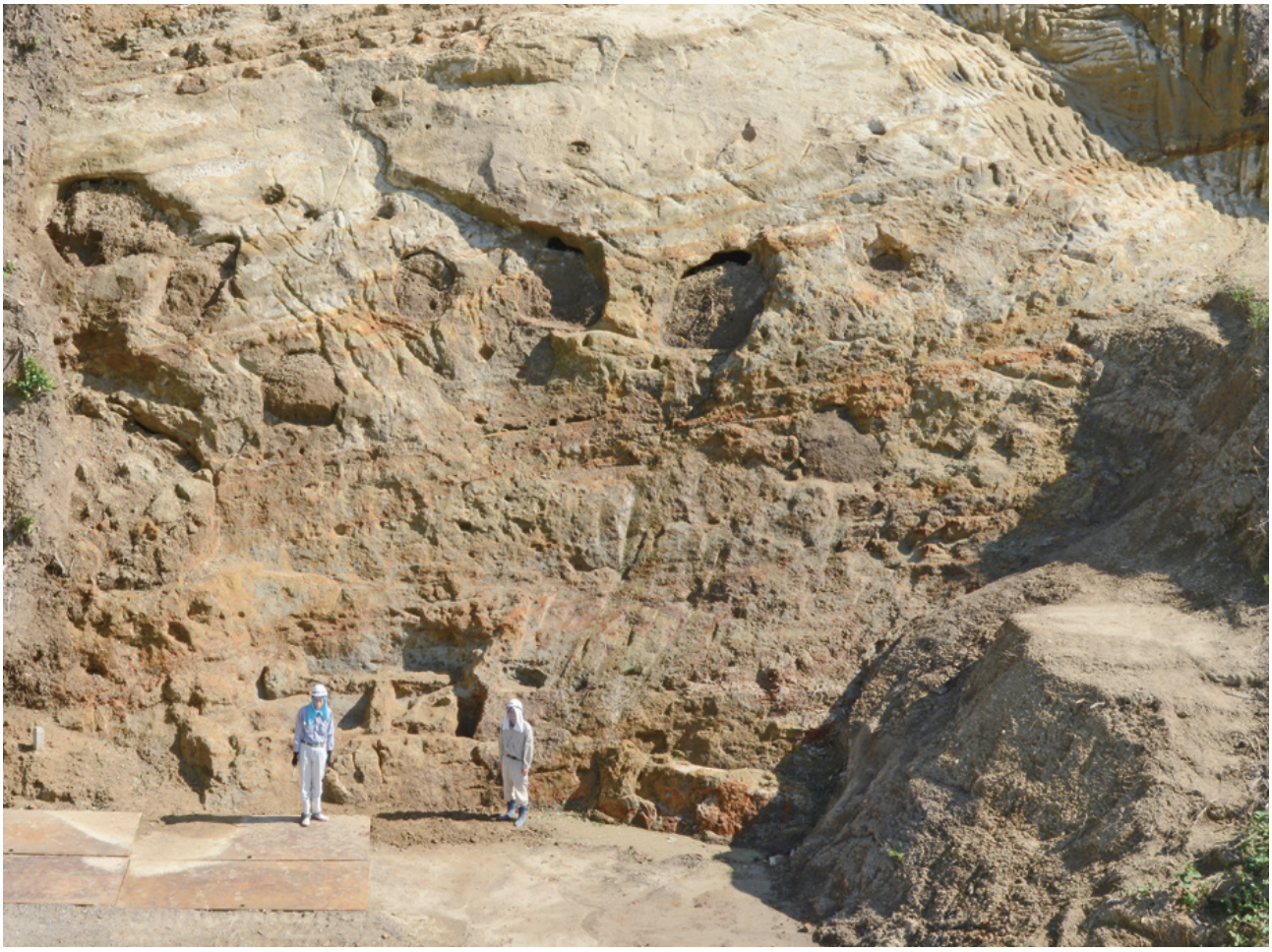
十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021 年

出雲市教育委員会

全景（南西から）

全景（南東から）



横穴墓確認状況（西側調査区・南西から）

横穴墓確認状況（東側調査区・南東から）

K-1 号横穴墓付近からの遠景（北東から）

K-1 号横穴墓　遺物出土状況（南から）

J-2 号横穴墓　完掘状況（南西から）

J-4 号横穴墓　線刻壁画（天井）

J-4 号横穴墓　線刻壁画（天井）

J-4 号横穴墓　線刻壁画（奥壁）

J-5 号横穴墓　完掘状況（西から）

J-9 号横穴墓　玄室内部の状況（南西から・肋骨状加工痕）

J-9 号横穴墓　玄室天井の状況（南から・肋骨状加工痕）

K-1 号横穴墓　出土遺物（須恵器）

K-1 号横穴墓　出土遺物（金属製品）

H-4 号横穴墓　出土遺物（須恵器・金属製品）

H-4 号横穴墓出土鉄製鍔の象嵌

J-7 号横穴墓　出土遺物（須恵器・金属製品）

H-4・H-5・J-7 号横穴墓出土の耳環

序

本書は，島根県出雲県土整備事務所から依頼を受けて，平成30・令和元年（2018・2019）度に実施した十間川防災安全工事に伴う神門横穴墓群第10支群の発掘調査を記録した報告書です。

神門横穴墓群は，12の支群に120基以上の横穴墓が集中する島根県内でも有数の横穴墓群です。そのなかでも10支群については，発掘調査により前回の調査で35基，今回の調査で15基，合わせて50基を発掘調査した支群で，丘陵先端部に密集していることがわかりました。

出土した遺物や確認した横穴墓の形態から，横穴墓の作られた時期や様相を知ることができました。

本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高めるための一助になれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査と報告書作成にあたりご協力いただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

令和３年（2021）３月

出雲市教育委員会

教育長　杉谷　学

例　言

1　本書は，平成 30 年～令和 2 年（2018 ～ 2020）度に出雲市教育委員会が実施した，十間川防災安全工事に伴う神門横穴墓群第 10 支群の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめた報告書である。

2　調査は下記の体制，期間で実施した。

調査地及び調査面積　島根県出雲市神西沖町地内　1,021㎡

調査期間　平成 29 年（2018）7 月 30 日～令和 2 年（2020）2 月 28 日（発掘調査）

調査体制　事務局　木村　亨（出雲市市民文化部次長兼文化財課長　平成 30 ～令和元年度）
片寄友子（出雲市市民文化部次長兼文化財課長　令和 2 年度）
大梶智徳（同　文化財課主査）
景山真二（同　文化財課課長補佐）
原　俊二（同　文化財課課長補佐）
江角　健（同　文化財課主任）
調査員　石原　聡（同　文化財課主任）
黒田祐介（同　文化財課主事　令和 2 年度）
下江裕貴（同　文化財課主事　令和 2 年度）
調査補助員　加藤章三（同　文化財課会計年度任用職員）
長岡伸幸（同　文化財課会計年度任用職員）

3　本書の編集は，職員の協力を得て石原が行った。執筆は，石原のほか第 3 章第 2 節，第 3 節の金属製品については，下江が行った。第 4 章，第 5 章については、文末に記した。

4　図面･遺物の整理作業は，荒木恵理子，石原和子，吹野初子，中島和恵，妹尾順子，前島浩子（文化財課会計年度任用職員）が行った。

5　本書に掲載した写真は，石原が撮影した。

6　本書に掲載した遺物及び実測図，写真は出雲市文化財課が保管している。

7　本書で使用した方位は，座標北を示す。座標は，世界測地系第Ⅲ系に基づくものである。標高は海抜高を示す。

8　発掘作業（安全管理，発掘作業員の雇用，機材等の借上）については，平成 30 年度から令和元年度にかけて，トーワエンジニアリング株式会社に委託した。

9　調査･整理にあたっては，以下の方々から指導，助言を得た。記して感謝申しあげます。（敬称略）
岩本崇（島根大学法文学部准教授）・内田律雄（元島根県教育庁職員）・大谷晃二（島根県立三刀屋高校教諭）・西尾克己（松江市史編集委員会松江城部会長）・原田敏照（島根県立古代出雲歴史博物館学芸情報課長）・宍道年弘（荒神谷博物館企画員）・澤田正明（島根県立古代出雲歴史博物館専門学芸員）・高橋誠二（雲南市教育委員会文化財課グループリーダー）・深田浩（島根県埋蔵文化財調査センター課長）

10　本書を作成するにあたっては，以下の方々から玉稿を賜った。（敬称略）

第４章第１節：渡邉正巳（文化財調査コンサルタント株式会社代表取締役）

第４章第２節：亀井淳志（島根大学総合理工学部教授）・小林莉菜（島根大学総合理工学部地球学科）

第４章第３節：フジテクノ有限会社

第５章第１節：岩本真実（島根県古代文化センター特任研究員）

第５章第２節：吉松優希（島根埋蔵文化財調査センター主任主事）

11　調査年次の呼称について

調査の時期について，前回，平成４年から５年（1992・1993 年）にかけての調査を１次調査と呼称し，今回，１次調査区のさらに東側と西側を平成 30 年から令和２年（2018・2020 年）に実施した調査を２次調査と呼称することにする。

12　遺構番号，調査時期について

遺構番号については，１次調査の番号を踏襲して付けた。前回の調査では，支群のなかにさらに横穴墓のまとまりがあるとして，７個の小単位ＡからＧの番号を付しさらに連番で１から付す方法で横穴墓の番号を付けている。分類の根拠は，平面分布のまとまりと，横穴墓の高低差からである。今回の２次調査区は，１次調査区と隣接していることから，前回の番号を踏襲している。

また，１次調査時に検出しているが，調査区に入らず，未調査で開口部に土のう袋を詰め保護してあった西側調査区の J-1，J-2 号横穴墓は，前回の調査時にすでに番号が付されており，その番号を利用することとした。

また，H-1 号横穴墓は，すでに開口しており，１次調査時に記録がある。そのすぐ西で横穴を確認したため，H-2 号横穴墓とした。

13　本書で使用した遺構略号，横穴墓の遺構内名称，形態名称は次ページのとおりである。

14　本書を作成にあたり，編年及び過去の調査については，下記の参考文献を利用した。

【編年参考文献】

○須恵器（出雲編年）

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会』第 11 号　島根考古学会

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳』平田市埋蔵文化財調査報告第８集　平田市教育委員会

○須恵器（石見編年）

岩本真実 2019「石見地域における須恵器の編年と地域性―「石見型須恵器」再考―」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第 22 集　島根県古代文化センター

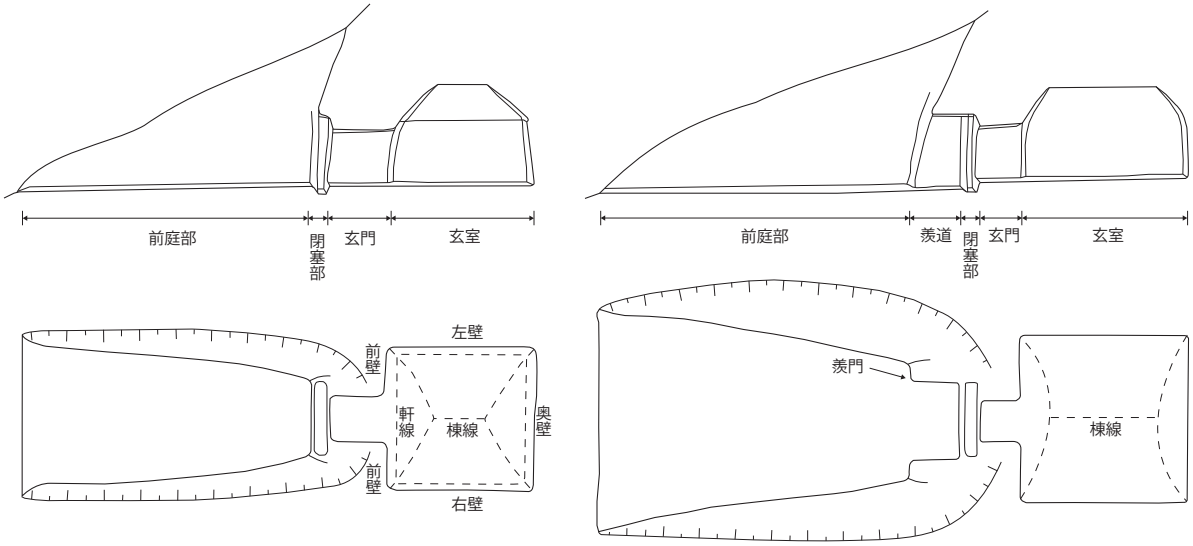
【既刊報告書等】

○神門横穴墓群　　１次調査

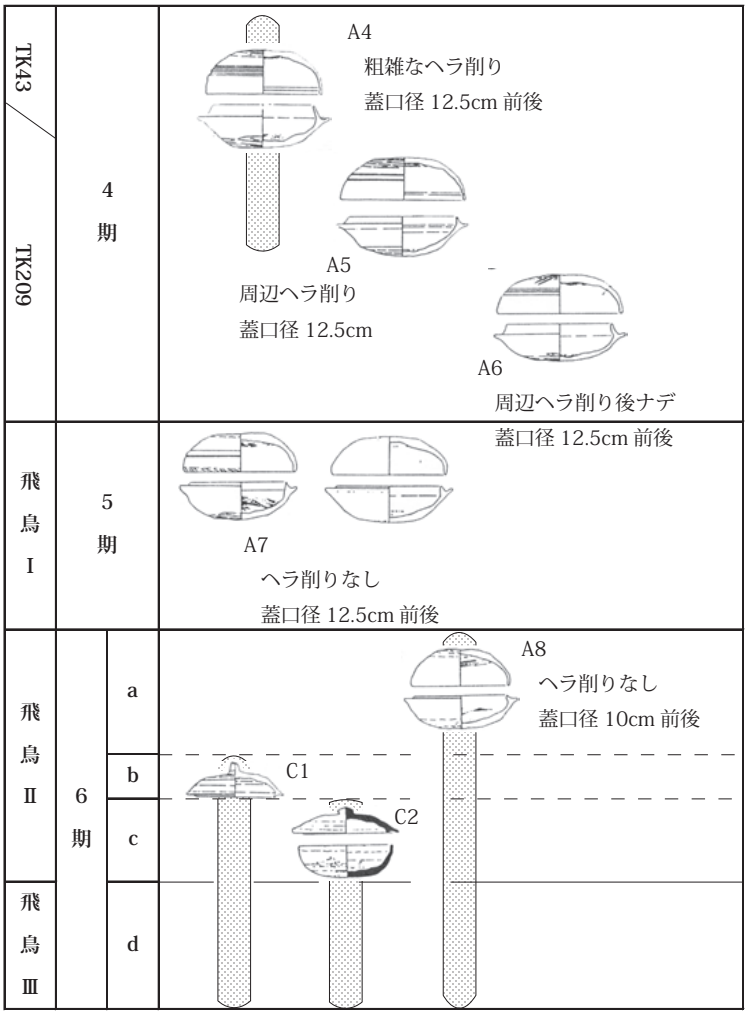
出雲市教育委員会 1995『小浜山横穴墓群Ⅰ　十間川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 本編 -』

出雲市教育委員会 1996『小浜山横穴墓群Ⅱ　十間川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 観察表・写真図版編 -』

横穴墓模式図と各部名称



須恵器分類



（出雲地方の須恵器編年表　大谷晃二 1997『出雲の横穴墓 - その型式・変遷・地域性』より）

目次

第１章　調査に至る経緯と経過 ・・・

挿図目次

第 1 図　出雲平野周辺の主要遺跡・・・・・・・・・・・8
第 2 図　神門横穴墓群全体図　・・・・・・・・・・・11
第 3 図　神門横穴墓群第 10 支群西側　・・・・・・・12
第 4 図　神門横穴墓群第 10 支群東側　・・・・・・・13
第 5 図　神門横穴墓群第 10 支群遺構配置図　・・・・14
第 6 図　K-1 号横穴墓遺構土層図①　・・・・・・・・・17
第 7 図　K-1 号横穴墓遺構土層図②　・・・・・・・・・18
第 8 図　K-1 号横穴墓出土遺物実測図 1・・・・・・・19
第 9 図　K-1 号横穴墓出土遺物実測図 2・・・・・・・20
第 10 図　K-1 号横穴墓出土遺物実測図 3・・・・・・21
第 11 図　H-2 号横穴墓遺構土層図　・・・・・・・・・22
第 12 図　H-3 号横穴墓遺構土層図　・・・・・・・・・23
第 13 図　H-4 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・25
第 14 図　H-4 号横穴墓遺構土層図②　・・・・・・・26
第 15 図　H-4 号横穴墓遺物実測図・・・・・・・・・・27
第 16 図　H-5 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・29
第 17 図　H-5 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・30
第 18 図　H-5 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・31
第 19 図　J-1 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・33
第 20 図　J-1 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・34
第 21 図　J-1 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・35
第 22 図　J-2 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・37
第 23 図　J-2 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・38
第 24 図　J-2 号横穴墓石棺配置図・・・・・・・・・・39
第 25 図　J-2 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・39
第 26 図　J-3 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・41
第 27 図　J-3 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・41
第 28 図　J-3 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・42
第 29 図　J-4 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・44
第 30 図　J-4 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・45
第 31 図　J-5 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・47
第 32 図　J-5 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・48
第 33 図　J-5 号横穴墓石床配置図・・・・・・・・・・49
第 34 図　J-5 号横穴墓出土遺物実測図　・・・・・・・49
第 35 図　J-6 号横穴墓遺構土層図①　・・・・・・・・・51
第 36 図　J-6 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・52
第 37 図　J-6 号横穴墓出土遺物実測図　・・・・・・・53
第 38 図　J-7 号横穴墓遺構土層図①　・・・・・・・・・54
第 39 図　J-7 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・55
第 40 図　J-7 号横穴墓出土遺物実測図・・・・・・・55
第 41 図　J-8 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・57
第 42 図　J-8 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・58
第 43 図　J-8 号横穴墓出土遺物実測図　・・・・・・・59
第 44 図　J-9 号横穴墓遺構土層図①・・・・・・・・・60
第 45 図　J-9 号横穴墓遺構土層図②・・・・・・・・・61
第 46 図　J-10 号横穴墓遺構土層図　・・・・・・・・・62
第 47 図　H-1 号横穴墓遺構図　・・・・・・・・・・・64
第 48 図　神門横穴墓群第 10 支群横穴配置図・・・・71
第 49 図　J-2 号横穴墓平面図　・・・・・・・・・・・72
第 50 図　J-2 号横穴墓 C-C' 断面図・・・・・・・・・72
第 51 図　J-5 号横穴墓平面図　・・・・・・・・・・・72
第 52 図　J-2 号横穴墓の C, N,/N, P の分布　・・・・・73
第 53 図　J-2 号横穴墓 C-C7 断面尾 C, N,/N, P の分布・73
第 54 図　J-5 号横穴墓の C, N, C/N, P の分布　・・・・74
第 55 図　P-C 相関図・・・・・・・・・・・・・・・・74
第 56 図　C-N 相関図　・・・・・・・・・・・・・・・74
第 57 図　J-2, 5 号横穴墓の 50％粒径分布　・・・・・76
第 58 図　神門横穴墓群第 10 支群周辺の地質図・・・79
第 59 図　神門横穴墓群第 10 支群周辺の発掘現場における
神西層の砂岩・泥岩の産状　・・・・・・・・・80
第 60 図　石棺石材の切断面の岩相写真・・・・・・・80
第 61 図　J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓の石棺石材と
各地層岩石のスパーダー図比較　・・・・・・83
第 62 図　代表的な蛍光 X 線スペクトル・・・・・・・87
第 63 図　劣化状態による表層の違い・・・・・・・・・88
第 64 図　H-4 号横穴墓出土耳環・・・・・・・・・・90

第 65 図　H-4 号横穴墓出土耳環・・・・・・・・・・91
第 66 図　H-5 号横穴墓出土耳環・・・・・・・・・・92
第 67 図　H-5 号横穴墓出土耳環・・・・・・・・・・93
第 68 図　J-7 号横穴墓出土耳環・・・・・・・・・・94
第 69 図　神門横穴墓群出土須恵器の諸系統・・・・・97
第 70 図　神門横穴墓群出土須恵器の諸系統・・・・・99
第 71 図　神門横穴墓群出土須恵器の諸系統・・・・102
第 72 図　V 字状工具痕・・・・・・・・・・・・・・107
第 73 図　島根県内象嵌装大刀出土古墳・横穴墓・・108
第 74 図　島根県域の象嵌装大刀編年案・・・・・・109
第 75 図　出雲地域の金銀装装飾付大刀・
象嵌装大刀分布・・・・・・・・・・・・・110
第 76 図　第 10 支群の時期的分布・・・・・・・・113
第 77 図　出雲市内古墳・横穴墓の特徴的遺物の分布
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第 78 図　出雲市の肋骨状加工の残る横穴墓 1・・・115
第 79 図　出雲市の肋骨状加工の残る横穴墓 2・・・116
第 80 図　全国の肋骨状加工痕の横穴墓・・・・・・117
第 81 図　出雲地域の線刻壁画・・・・・・・・・・118
第 82 図　第 10 支群の石棺・石床配置図・・・・・119
第 83 図　出雲地域の有窓方頭式鏃・・・・・・・・121
第 84 図　全国の有窓方頭式鏃・・・・・・・・・・122
第 85 図　出雲地域の毛抜状鉄製品・・・・・・・・123
第 86 図　神門横穴墓群周辺の古墳時代後期から古代の
遺跡分布・・・・・・・・・・・・・・・・124
第 87 図　3D データ　K-1 号横穴墓・・・・・・・130
第 88 図　3D データ　H-3 号横穴墓・・・・・・・131
第 89 図　3D データ　H-4 号横穴墓・・・・・・・132
第 90 図　3D データ　H-5 号横穴墓・・・・・・・133
第 91 図　3D データ　J-1 号横穴墓・・・・・・・・134
第 92 図　3D データ　J-2 号横穴墓・・・・・・・・135
第 93 図　3D データ　J-3 号横穴墓・・・・・・・・136
第 94 図　3D データ　J-4 号横穴墓・・・・・・・・137
第 95 図　3D データ　J-5 号横穴墓・・・・・・・・138
第 96 図　3D データ　J-6 号横穴墓・・・・・・・・139
第 97 図　3D データ　J-8 号横穴墓・・・・・・・・140
第 98 図　3D データ　J-9 号横穴墓・・・・・・・・141
第 99 図　3D データ　J-10 号横穴墓・・・・・・・142

挿表目次

第 1 表　遺跡一覧・・・・・・・・・・・・・・・・9
第 2 表　神門横穴墓群一覧表・・・・・・・・・・・11
第 3 表　神門横穴墓群第 10 支群法量と玄室形態・・・65
第 4 表　神門横穴墓群第 10 支群出土遺物一覧表・・・66
第 5 表　神門横穴墓群第 10 支群須恵器観察表 1・・・67
第 6 表　神門横穴墓群第 10 支群須恵器観察表 2・・・68
第 7 表　神門横穴墓群第 10 支群耳環観察表・・・・・68
第 8 表　神門横穴墓群第 10 支群金属製品観察表 1・・69
第 9 表　神門横穴墓群第 10 支群金属製品観察表 2・・70
第 10 表　PCN 測定結果・・・・・・・・・・・・・・75
第 11 表　粒度分析結果（J-2）・・・・・・・・・・・77
第 12 表　粒度分析結果（J-5）・・・・・・・・・・・78
第 13 表　石材の分析結果・・・・・・・・・・・・・81
第 14 表　分析対象資料・・・・・・・・・・・・・・87
第 15 表　神門横穴墓群の横穴墓ごとにみる須恵器の
系統・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
第 16 表　象嵌装大刀集成・・・・・・・・・・・・112
第 17 表　肋骨状加工痕のある横穴墓の時期的変化・117

写真目次

写真１　現地説明会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
写真２　速報展　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３
写真３　調査区周辺の航空写真・・・・・・・・・・・・７
写真４　足場を使用した発掘調査の状況・・・・・・・14

図版目次

巻頭図版１　全景
巻頭図版２　横穴墓確認状況西側調査区・東側調査区
巻頭図版３　K-1 号横穴墓付近からの遠景
巻頭図版４　K-1 号横穴墓出土状況・J-2 号横穴墓完掘状況
巻頭図版５　J-4 号横穴墓線刻壁画
巻頭図版６　J-4 号横穴墓線刻壁画・J-5 号横穴墓完掘状況
巻頭図版７　J-9 横穴墓玄室内部の状況・玄室天井の状況
巻頭図版８　K-1 号横穴墓出土遺物
巻頭図版９　H-4 号横穴墓出土遺物
巻頭図版 10　J-7 号横穴墓出土遺物・H-4・H-5・J-5 横穴墓出土の耳環
図版１　東側調査区調査前状況・調査後の状況
図版２　K-1 号横穴墓
図版３　K-1 号横穴墓
図版４　H-2 号横穴墓
図版５　H-3 号横穴墓
図版６　H-3 号横穴墓・H-4 号横穴墓
図版７　H-4 号横穴墓
図版８　H-4 号横穴墓
図版９　H-5 号横穴墓
図版 10　西側調査区調査前状況・調査後の状況
図版 11　J-1 号横穴墓
図版 12　J-1 号横穴墓
図版 13　J-2 号横穴墓
図版 14　J-2 号横穴墓
図版 15　J-3 号横穴墓
図版 16　J-4 号横穴墓
図版 17　J-5 号横穴墓
図版 18　J-5 号横穴墓
図版 19　J-6 号横穴墓
図版 20　J-7 号横穴墓
図版 21　J-7 号横穴墓
図版 22　J-8 号横穴墓
図版 23　J-8 号横穴墓
図版 24　J-10 号横穴墓
図版 25　J-10 号横穴墓
図版 26　K-1 号横穴墓出土須恵器
図版 27　K-1 号横穴墓出土金属製品
図版 28　H-4 ～ J-5 号横穴墓出土須恵器
図版 29　H-4 ～ J-5 号横穴墓出土金属製品
図版 30　J-6 ～ J-8 号横穴墓出土須恵器・金属製品

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　経緯

十間川は，その源を出雲市馬木町の神戸川馬木の岩樋に発し，途中，新宮川，花月川，保知石川等の支川を合わせながら出雲平野を西流し，九景川，常楽寺川等の支川とともに神西湖に至り出雲市湖陵町差海を貫流し，日本海へ注ぐ流路延長約 13㎞，流域面積約 43㎢の二級河川である。

その流域は，出雲市に属し，出雲平野西部地域の社会・経済の基盤をなすとともに神西湖を中心とした豊かな自然環境に恵まれており，十間川の保全に注力することの意義は極めて大きい。

神西湖は，縄文時代には現在の神戸川河口まで大きく湾入した海跡湖で，江戸時代の大洪水により大規模な地形変動が生じ現在の湖が形成された。形成された当時は，出口のないいわゆる「無口湖」であったため洪水の度に周辺が浸水していた。このことから，大梶七兵衛らの手によって神西湖から日本海までの差海川の開削や，新田開発のため神西湖上流の十間川開削が行われた。

当該発掘調査にかかる十間川の部分は，平成４年（1992）に真幸ヶ丘の丘陵先端部を開削して河道に改変した部分であり，その際，神門横穴墓群 10 支群の発掘調査を実施している。

今回，平成 29 年（2017）５月に島根県出雲県土整備事務所より十間川改修工事を行うとの連絡が入り，現地踏査の結果，開削部分が神門横穴墓群 10 支群の範囲内であると確認したため，埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

第２節　手続き

平成 29 年度

平成 29 年（2017）６月 12 日　島根県出雲県土整備事務所長より島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第 94 条第１項の埋蔵文化財発掘の通知。

６月 16 日　島根県教育委員会教育長より島根県出雲県土整備事務所長及び出雲教育委員会教育長へ周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について通知。施工前に発掘調査を実施することを勧告

平成 30 年度

平成 30 年（2018）７月３日　出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ文化財保護法第９９条第１項の埋蔵文化財発掘調査の通知。

平成 31 年（2019）３月 22 日　出雲市教育委員会教育長より出雲警察署長へ埋蔵物発見届を提出。

３月 22 日　出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ埋蔵物保管証を提出。

４月３日　島根県教育委員会教育長より出雲市教育委員会教育長へ埋蔵物の文化財認定及び帰属について通知。

令和元・２年度

令和元年（2019）５月 24 日　出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ文化財保護

法第９９条第１項の埋蔵文化財発掘調査の通知。

令和２年（2020）２月 12 日　出雲市教育委員会教育長より出雲警察署長へ埋蔵物発見届を提出。

２月 12 日　出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ埋蔵物保管証を提出。

２月 13 日　出雲市教育委員会教育長より島根県教育委員会教育長へ十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財（神門横穴墓群 10 支群）発掘調査に関わる遺跡の取扱いについて協議（遺跡の記録保存）。

２月 13 日　島根県教育委員会教育長より出雲市教育委員会教育長へ遺跡の取扱いについて回答（遺跡の記録保存でやむを得ない）

２月 25 日　島根県教育委員会教育長より出雲市教育委員会教育長へ埋蔵物の文化財認定及び帰属について通知。

第３節　調査の経過

平成 30 年度の発掘調査は，平成 30 年（2018）７月 30 日より開始した。表土掘削を行い，遺構検出を進めた。丘陵頂部の平場は，発掘作業員により表土の除去を行った。また，急傾斜地については，法面専門業者により表土掘削を行った。８月 20 日には，西側斜面の横穴墓の遺構を検出した。前回調査時に確認し，土のう袋で保護していた J-1・J-2 号横穴墓の位置を再確認した。さらに，未調査区の部分から J-3 ～ J-9 の７基を確認した。J-1 東側の１基についても後の調査指導で小横穴の可能性があるため，J-10 として遺構番号を付け調査した。

その後，東側についても，法面専門業者によって表土掘削を行った。新たに５基を確認した。うち，１基は他の横穴墓より，２m以上高いところで確認したため，新たにＫグループとすることにした（K-1 号横穴墓）。

今回の調査全体で 15 基新たに確認した。

各横穴の調査では安全に調査ができるように足場を設置した（写真４）。また，転落防止の安全帯を装着して調査に臨んだ。平成 30 年度は，西側の J-6 号横穴墓から調査を開始し，その後，東側に移り，K-1，H-2，H-3，H-4，H-5 と調査を進めた。令和元年度は，西側を中心に調査し，J-1，J-2，J-3，J-4，J-5，J-7，J-8，J-9，J-10 と調査を進めた。すべての横穴墓が調査終了した段階で現地説明を実施した。10 月 30 日に小中学校社会科教員説明会（10 名），11 月 26 日に発掘現場から比較的近距離にあった出雲市立河南中学校の１年生徒 100 名が見学した。また，12 月 15 日に地元向け説明会，一般説明会（写真１）を実施し，約 90 名が参加し，好評を得た。また，地元，神門ヒスタムの会（神門コミュニティセンター郷土史の会，令和元年４月 26 日），大社まなびま専科（大社コミュニティセンター郷土史の会，令和２年５月 29 日），出雲弥生の森博物館での職員リレー講座（令和元年６月 22 日），調査速報展「肋骨に抱かれて」（令和２年２月６日～６月３日），「新発見・横穴墓の線刻壁画－神門横穴墓群の調査から－」（令和２年９月 16 日～令和３年１月 18 日・写真２）の報告によって遺跡の周知活動を行った。

（参考文献）

島根県　2006 『十間川水系　河川整備基本方針　～神西湖流域の自然に抱かれた暮らしの実現と豊かで美しい神西湖の継承～』

写真１　現地説明会

写真２　速報展

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

神門横穴墓群は，出雲平野の南西部，出雲市神門町から神西沖町にまたがる真幸ヶ丘丘陵の斜面に所在している。

出雲平野は，中国山地と島根半島（北山）に南北を挟まれ，斐伊川と神戸川の沖積作用によって形成された島根県下最大の平野であり，その規模は，日本海から宍道湖西岸まで東西約 20㎞，南北８㎞の広がりをもつ。『出雲国風土記』によると，現在の出雲平野南西部から神西湖一帯は，「神門水海」として水域が広がっていた。神門水海は斐伊川と神戸川による砂礫運搬によって次第に埋められていった。斐伊川が 17 世紀前半（1639 年）に東流するようになると，東部では土砂の堆積が加速され，沖積平野が拡大していった。一方，西部では河川からの土砂の供給量は減少し，河川の両側に形成される自然堤防の微高地を除けば湿地帯や湖沼が散在し，洪水が起これば一面に冠水して流路もしばしば変わった。また，冬季の西風が強く，日本海側には砂浜が形成され，そこから強風にあおられて東に向かって飛砂が生じ，農作物を埋め尽くすこともあった。このような土地を農用地として開拓していく必要が生じ，その一環として，元禄２年（1689）から十間川の開削も進められた。

真幸ヶ丘丘陵は，独立丘陵であり，その地質は神西層である。真幸ヶ丘丘陵を含む，神門，知井宮周辺の地質は，古い方から大森層（1450 万年前～ 1400 万年前），布志名層（1400 万年～ 1200 万年前）の砂岩・泥岩層，神西層（1200 万年前～ 1000 万年前）の礫・砂・泥（シルト）及び貫入岩からできており，南から北に向かって古い地層から新しい地層に変わっている。神西層は，陸に近い海で礫・砂・泥（シルト）が堆積，隆起し丘陵となったものである。丘陵の形成が堆積岩であるため，横穴墓の掘削，加工がしやすい点も数多くの横穴墓が造墓された一要因であろう。

第２節　歴史的環境

縄文時代

著しく海水面が上昇したいわゆる「縄文海進」期には，出雲平野にあたる部分に大きく海が入り込み，古穴道湖湾を形成していた。海進が鈍化すると，斐伊川と神戸川による河川堆積が進み，島根半島と陸続きになった。つまり東に古穴道湖，西に神門水海の成立を見ることになる（約 5000 年前）。しかし斐伊川域では平野部の大部分はまだ水面下であった。その後沖積作用を受け陸地が拡がってくるものの，基本的にこの地勢は江戸初期まで変わらない。

出雲平野周辺で最も古い土器が出土したのは，島根半島（北山）南麓の山持遺跡から早期の押型文土器が出土している。さらに，早期末から前期の土器が，板津焼山遺跡（68），上長浜遺跡（12），菱根遺跡（55）で出土している。

弥生時代

弥生時代になると，出雲平野全域に集落が形成される。前期は，特に平野西部の神戸川下流域や大社湾沿いの砂丘上から平野周辺の丘陵裾部に多くの遺跡が確認され，原山遺跡（54），出雲大社境内遺跡（51），矢野遺跡（42）などがあり，矢野遺跡は拠点集落となった。中期の遺跡は，神戸川の西岸や平野中央部には古志本郷遺跡（20），白枝荒神遺跡（37），天神遺跡（29），下古志遺跡（19），知井宮多聞院遺跡（13），小山遺跡（41）などが知られ，古志本郷遺跡や矢野遺跡などの大規模集落が出現し始め，大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡が出現する。また，北部の姫原西遺跡（40），山持遺跡（47），青木遺跡（48）などの遺跡が出現する。墳墓では，大規模な四隅突出型墳丘墓が築かれた西谷墳墓群（34）がある。また，平野低地部の中野美保遺跡や青木遺跡などが加わる。神門水海南岸では，玉泉寺裏遺跡（８）で弥生時代終末から古墳時代初頭の土壙墓が検出されているが，平野中央部・北部のような四隅突出型墳丘墓は今のところ確認されていない。

古墳時代

古墳時代に入ると，出雲平野の集落は神戸川流域の古志本郷遺跡や下古志遺跡などで集落の廃絶，縮小化が顕著となり，平野全体を見ても集落数の減少傾向が見られる。その後，中・後期には再び営まれる集落のほか，新たに集落が形成されるものも出現するが，弥生時代のような拠点的な集落の存在は明確でない。

古墳時代前期は，前期前半から中期中葉になると浅柄遺跡（３）で建物跡が確認されている。御崎谷遺跡（７）からは，中期を中心とする遺物が出土した。九景川遺跡（９）の集落のように新たな集落が形成された。

墳墓では，前期末から中期初頭には，西谷７号墳，大寺１号墳（49），山地古墳（11），間谷東古墳（６），浅柄北古墳（４）など，平野周辺部に古墳が造られる。

古墳時代中期中葉には北光寺古墳（10）が築造される。この時期では出雲部最大規模の前方後円墳である。

古墳時代後期になると，神戸川下流域に集中して大型古墳が築造される。神戸川右岸地域には，今市大念寺古墳（33），上塩冶築山古墳（26），上塩冶地蔵山古墳（25）といった有力首長層の巨大古墳が現れる。神戸川左岸地域には，妙蓮寺山古墳（15），放レ山古墳（７），宝塚古墳（14）が存在し，出雲平野の最高首長層に次ぐ位置付けとして評価される。これらの古墳の存在は，神戸川下流域を中心とした，出雲西部一帯における支配秩序の形成を意味している。そして，後期後葉頃から平野南部の低丘陵には横穴墓が造られ始める。上塩冶横穴墓群や神門横穴墓群は突出した規模を誇り，副葬品から被葬者層は地域の豪族・有力農民層と理解されている。また，神門横穴墓群と時期を同じくして浅柄北古墳のある丘陵斜面にも横穴墓が造られ，前期古墳である１号墳を後背墳丘として造墓された可能性が指摘されている。

古代（奈良・平安時代）

奈良時代は，奈良時代前半に書かれた『出雲国風土記』（733 年）によれば，出雲平野が「神門郡」と「出雲郡」に編成され，当地域は，神門郡に属する。出雲平野の官衙関連遺跡は，近年の発掘調査の成果により神門郡家は古志本郷遺跡が，出雲郡家の関連施設として出雲市斐川町後谷Ｖ遺跡（62）が比定されている。

火葬墓の事例は，出雲市内で９例確認できる。出雲平野西南部に集中し，石櫃を伴うなど規模の大きいものがある。このうち，小坂古墳（21）では古墳石室内から石櫃・蕨手刀が出土した。奈良時代に追葬ないし改葬が行われたと考えられている。光明寺３号墓は方形墳丘に火葬骨を入れた石櫃を納める特殊な例である。

北山南麓の大寺薬師には，地方では珍しい平安前期の木造仏が残されている。その仏像が残される大寺薬師周辺に大寺谷遺跡が広がり，古代の軒丸瓦が出土している。鰐淵寺に所蔵される銅造観音菩薩立像銘にある「出雲国若倭部臣」は『出雲国風土記』にみえる楯縫郡郡司氏族であり，かつ青木遺跡出土木簡にもその名が見えるなど，この地域を代表する氏族であった。

中世（鎌倉・室町時代）

佐々木義清は，承久３年（1221）６月に起きた承久の乱で武家方に味方して勝利した功により出雲・隠岐２国の守護となり，出雲に下向した。佐々木義清の孫頼泰は，13 世紀後半に塩冶郷を根拠とし塩冶氏を称した。この塩冶氏に関わるのが築山遺跡で上塩冶築山古墳に隣接して礎石建物跡や区画溝などが見つかっている。塩冶氏が出雲平野に定着したころ，出雲大社の国造家は千家・北島に分かれた。出雲大社境内遺跡（大社町 杵築東）で発見された巨大な三本柱の社殿は，これを少し遡る宝治２年（1248）の正殿式遷宮のものと推定されている。この遷宮には鰐淵寺の僧も参加した。出雲平野の中世前半期は，出雲大社と鰐淵寺，そして塩冶氏が動かしていった。

守護職塩冶氏に対し，有力な国衙在庁官人だったのが朝山氏である。蔵小路西遺跡（39）はこの朝山氏の居館跡と目され，12~15 世紀にわたる大量の貿易陶磁器が出土した。貿易陶磁器は築山遺跡（上塩冶町 築山）にも優品があるほか，越前焼大甕に龍泉窯系青磁が副葬された荻杼古墓（荻杼町 槍ヶ崎）が著名である。この時期の遺跡には，他に渡橋沖遺跡（38），矢野遺跡（矢野町）などがある。

古代には杵築郷，伊努郷，河内郷の領域は神門郡に，宇賀郷と美談郷の領域は楯縫郡に組み込まれたと考えられる。残りの郡域は鎌倉期から戦国期にかけて出東郡に変わった。その後近世初頭に出雲郡となった。

近世（江戸時代）

斐伊川は流域に風化した花崗岩が広く分布し，中世から近世にかけて砂鉄採集と「たたら」と呼ばれる施設によって製鉄が盛んに行われた。その影響で多量の土砂が排出され，出雲平野の東部域は中世以降に急速に拡大していった。

近世に入ると，松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川

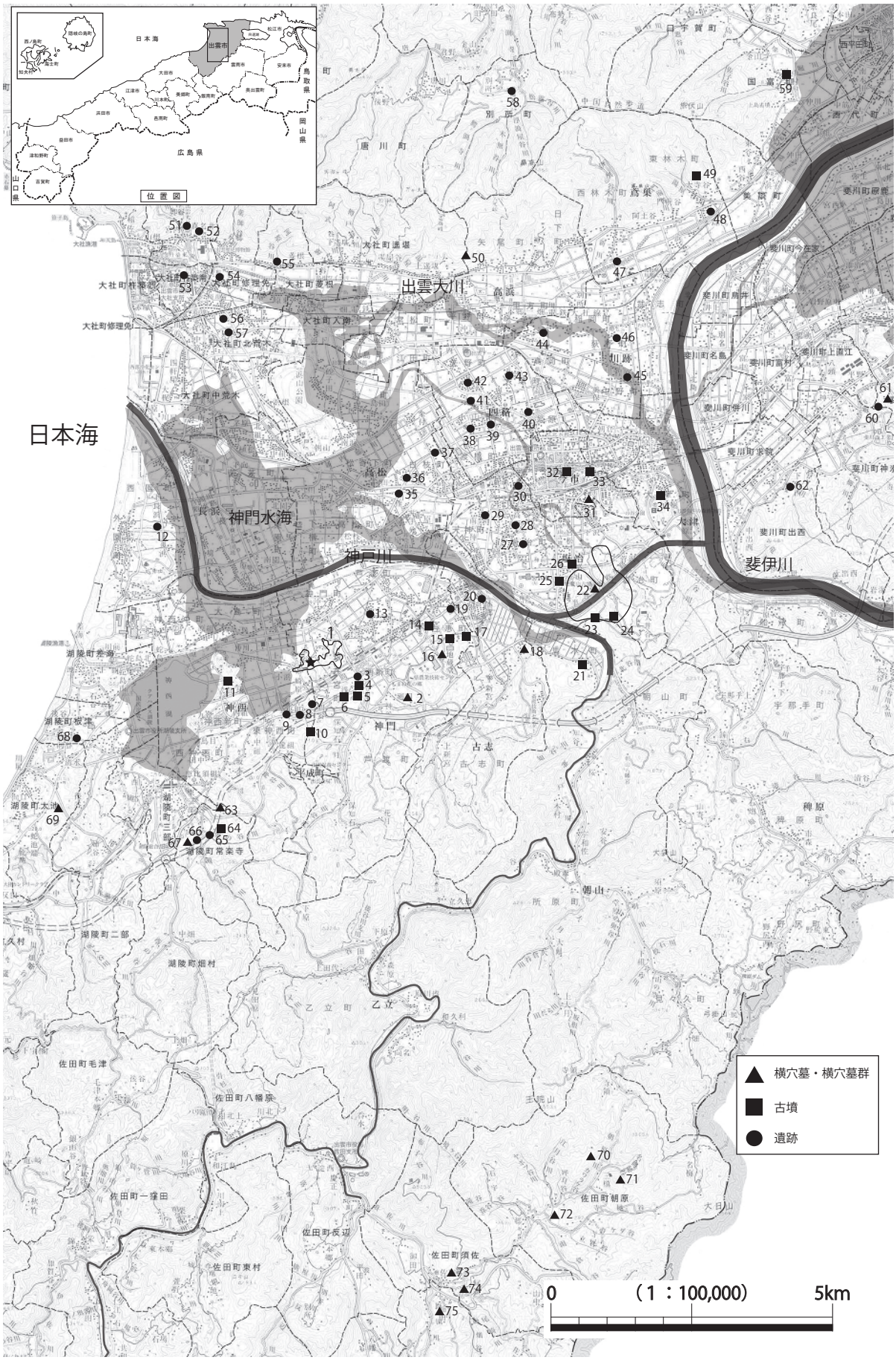
は，この改修により一本の大河川に統合され，出雲平野の新田開発が進むことになる。大梶七兵衛が主となって，斐伊川左岸では来原岩樋や間府岩樋が開削され，物資輸送や，農業用水の確保に利用された。また，神戸川左岸では，馬木岩樋が開削され，十間川が出雲平野を西に流れ，神西湖に至る。さらに神西湖から日本海まで開削した差海川から日本海に流れる。このような松江藩の水利政策は，出雲平野を有数の穀倉地帯とした。

参考文献

神戸川史編纂委員会 2010『未来に神戸川の歴史を伝える　神戸川史』神戸川史作成協議会

写真３　調査区周辺の航空写真（東上空から）

※右下が調査区，中央に流れる十間川，
左上に神西湖，右上に神戸川，中央奥に日本海を望む



第１図　出雲平野周辺の主要遺跡

第１表　遺跡一覧

番号	名称	種別	概要
1	神門横穴墓群(第10支群)	横穴墓群	本書掲載
2	深田谷横穴墓群	横穴墓群	2穴,線刻人物壁画
3	浅柄遺跡	集落跡	須恵器,土師器
4	浅柄北古墳	古墳	須恵器,土師器他
5	浅柄古墳	古墳	箱式石棺,人骨,鉄斧他
6	間谷東古墳	古墳	土師器,須恵器,刀子
7	御崎谷遺跡	散布地	古墳?,須恵器
8	玉泉寺裏遺跡	住宅跡	竪穴住居,弥生土器他
9	九景川遺跡	集落跡	土師器
10	北光寺古墳	古墳	前方後円墳,鉄器他
11	山地古墳	古墳	円墳,木棺,箱式石棺他
12	上長浜貝塚	貝塚	貝類,獣骨,土錘他
13	知井宮多門院遺跡	貝塚	弥生土器,須恵器他
14	宝塚古墳	古墳	横穴式石室,埴輪,横口式家形石棺
15	妙蓮寺古墳	古墳	前方後円墳,円頭大刀,刀子,馬具,鉄器他
16	地蔵堂横穴墓群	横穴墓郡	5穴,須恵器
17	放レ山古墳	古墳	円墳,横穴式石室,須恵器他
18	井上横穴墓群	横穴墓群	24穴,須恵器
19	下古志遺跡	集落跡	弥生土器,須恵器,土師器他
20	古志本郷遺跡	郡家跡他	掘立柱跡,須恵器
21	小坂古墳	古墳	円墳,横穴式石室他
22	上塩冶横穴墓群	横穴墓群	40支群,200基以上
23	光明寺1・2号墳	古墳	横穴式石室他
24	光明寺4号墳	古墳	方墳,横穴式石室
25	上塩冶地蔵山古墳	古墳	円墳,横穴式石室他
26	上塩冶築山古墳	古墳	円墳,横穴式石室,須恵器,埴輪,玉類,馬具他
27	神門寺付近遺跡	散布地	縄文土器,弥生土器他
28	高西遺跡	散布地	弥生土器,須恵器,土師器他
29	天神遺跡	集落跡	柱穴,溝,弥生土器他
30	海上遺跡	散布地	弥生土器,木製品
31	久微園横穴墓群	横穴墓群	土師器,須恵器
32	塚山古墳	古墳	円墳,家形石棺他
33	今市大念寺古墳	古墳	前方後円墳,家形木棺,馬具,大刀,須恵器他
34	西谷墳墓群	墳墓群	四隅突出型墳墓,土廣他
35	余小路遺跡	集落跡	木棺,人骨,土師器他
36	白枝本郷遺跡	集落跡	木棺,木製品,人骨他
37	白枝荒神遺跡	散布地	弥生土器,鏡他
38	渡橋沖遺跡	集落跡	掘立柱建物跡,土師器他
39	蔵小路西遺跡	集落跡他	掘立柱建物跡,土師器他
40	姫原西遺跡	その他	木道,貝塚,弥生土器他
41	小山遺跡	集落跡	弥生土器,土師器他
42	矢野遺跡	貝塚他	弥生土器,土師器他
43	大塚遺跡	散布地	土師器
44	高岡遺跡	散布地	弥生土器,土師器他
45	荻杼Ⅰ遺跡	古墓	五輪塔
46	荻杼Ⅱ遺跡	散布地	五輪塔
47	山持遺跡	集落跡	弥生土器,土師器他
48	青木遺跡	集落跡	掘立柱建物跡,弥生土器他
49	大寺古墳	古墳	前方後円墳,横穴式石室他
50	矢尾横穴墓群	横穴墓群	3穴
51	出雲大社境内遺跡	社寺	旧本殿遺構,縄文土器,弥生土器,土師器他
52	真名井遺跡	銅戈出土地	銅戈,硬玉勾玉
53	鹿蔵山遺跡	貝塚他	貝類,石斧,土師器他
54	原山遺跡	散布地	縄文土器,弥生土器他
55	菱根遺跡	散布地	縄文土器,人骨片他
56	南原遺跡	散布地	弥生土器,土師器他
57	中分貝塚	貝塚	銛,漁具,獣骨,貝殻他
58	鰐淵寺境内	寺院	中世土師器,陶磁器他
59	国富中村古墳	古墳	家形石棺,須恵器,大刀,馬具他
60	杉沢横穴墓群	横穴墓群	15穴,須恵器,鉄製品他
61	杉沢遺跡	住居跡	弥生土器,須恵器他
62	後谷Ⅴ遺跡	住居跡	須恵器,土師器他
63	のの子谷横穴墓群	横穴墓群	2群12穴,須恵器,鉄製品他
64	常楽寺柿木田古墳群	古墳	前方後円墳1基,方墳1基?
65	御領田遺跡	集落跡	竪穴住居跡,縄文土器他
66	京田遺跡	集落跡	縄文土器,石器他
67	安子神社横穴墓群	横穴墓群	8穴?,須恵器,刀
68	板津焼山遺跡	集落跡	縄文土器,弥生土器他
69	大池横穴墓	横穴墓	1穴,須恵器
70	槇山横穴墓	横穴墓	
71	原山横穴墓	横穴墓	隅丸丸天井型,鉄製品
72	大塚横穴墓群	横穴墓群	11穴,須恵器,耳環他
73	高松寺横穴墓群	横穴墓群	3穴,須恵器
74	尾崎横穴墓群	横穴墓群	須恵器
75	塚松山横穴墓群	横穴墓群	横穴3穴,須恵器他

第３節　各支群の概要

神門横穴墓群については，１次調査時（1992 年調査）に分布調査が実施され，その結果，二つの支群が追加され，12 支群となっている。

第１支群は，最も古くから知られている「福知寺山横穴墓群」である。真幸ヶ丘丘陵北東の福知寺の裏山中腹に位置し，19 基が確認されている。

第２支群「山本陽一郎宅裏横穴墓群」である。第１支群の丘陵尾根を挟んだ真北に所在し，10 基が確認されている。

第３支群「神田工業倉庫裏横穴墓群」は，第２支群から西へいった先の丘陵であり，１次調査の分布調査で確認された支群である。８基が確認されている。

第４支群「三成範夫宅裏横穴墓群」は，第３支群の西，丘陵北側に所在する。５基が確認されている。

第５支群「東谷（あずまや）北横穴墓」は，第４支群の南東に位置し，単独で１基確認されている。

第６支群「東谷横穴墓群」は，開けた丘陵中腹にあり，９基が確認されている。

第７支群「マキチン坂横穴墓群」は，第６支群とは，谷を挟んで位置しており５基が確認されている。

第８支群「マキチン坂裏横穴墓群」は，１次調査の分布調査で確認された支群である。３基が確認されている。

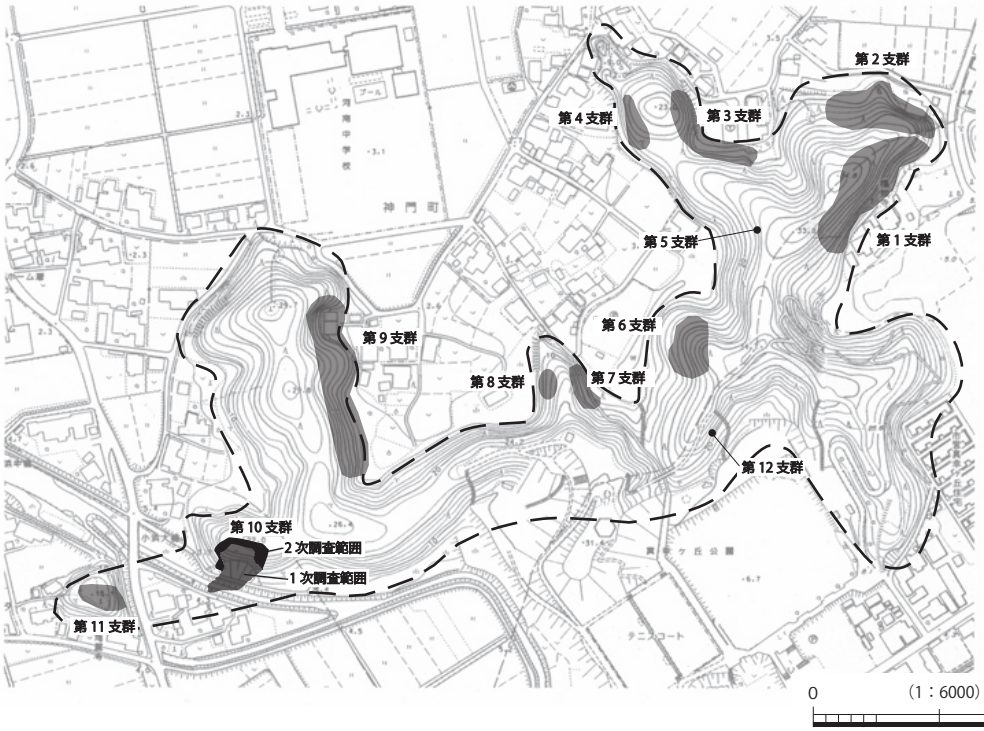
第９支群「梶谷徳次宅裏横穴墓群」は，真幸ヶ丘丘陵の北西部にのびた丘陵の東側斜面に築かれている。６つの小支群を成し 19 基が確認されている。

第 10 支群「小浜山横穴墓群」は，神門横穴墓群のなかで唯一発掘調査が実施された支群である。1992 年の十間川開削にともなう発掘調査（1 次調査）で 35 基が調査され，本書報告２次調査の 15 基を合わせると 50 基を数える。

第 11 支群「小浜寺山横穴墓群」は真幸ヶ丘丘陵の西端，十間川を挟んだ独立丘陵である。２基が確認されている，

第 12 支群は，真幸ヶ丘丘陵南側で１基のみが確認されている。

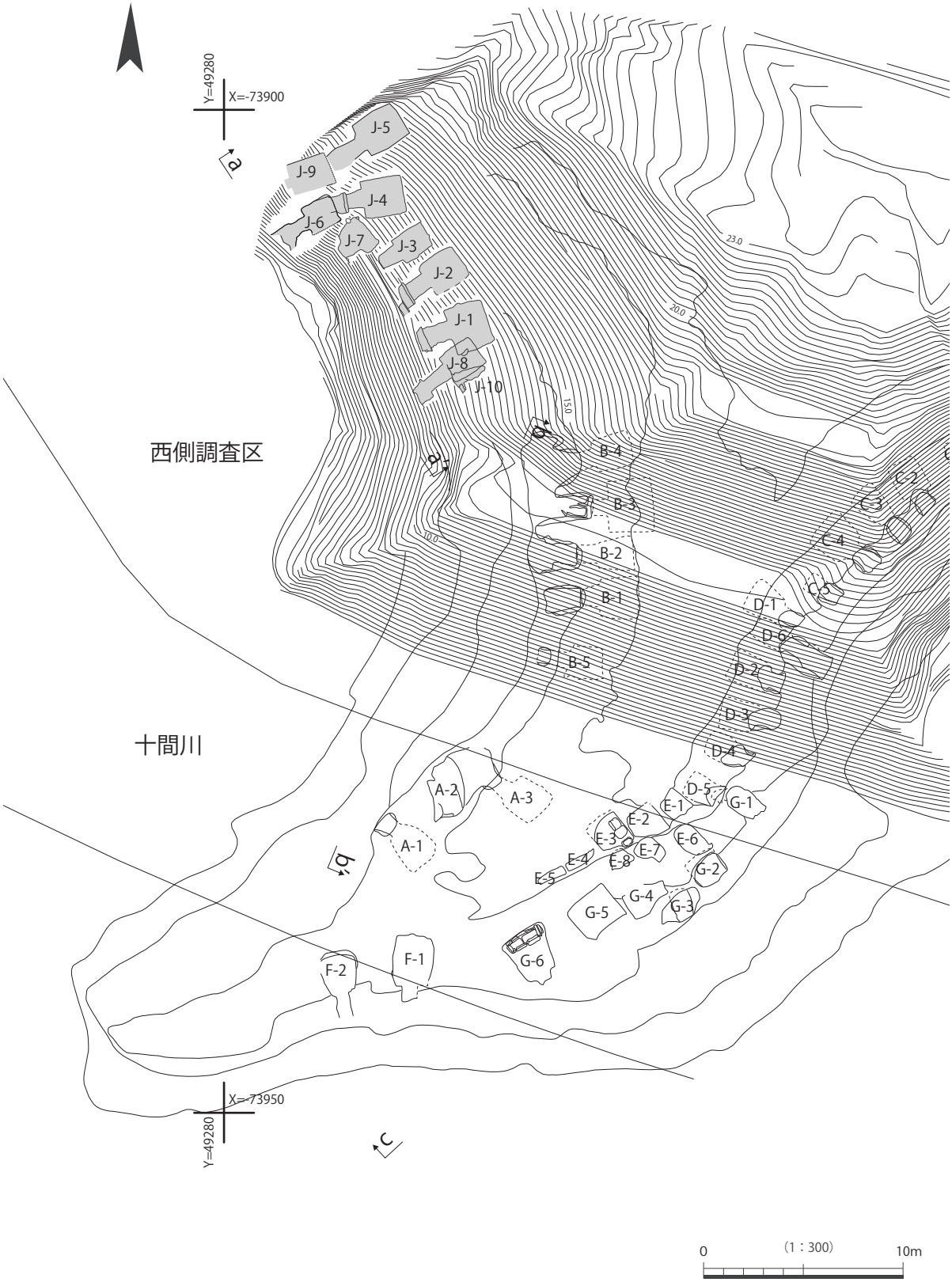
発掘調査では，第 10 支群の発掘調査で密集している状況が確認された。他の支群については，分布調査で確認した基数であり，その数が増加することは確実である。



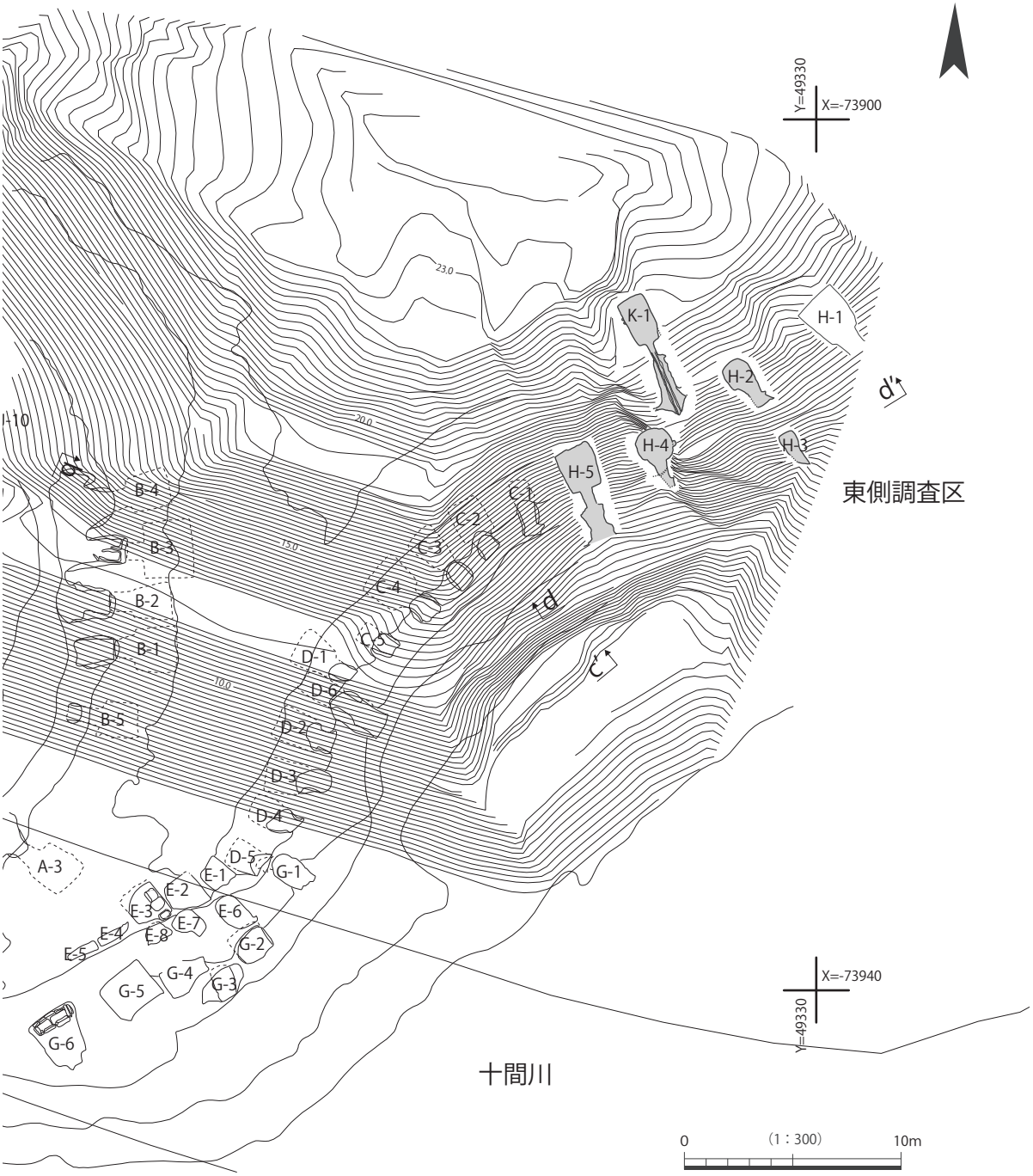
第２図　神門横穴墓群　全体図

第２表　神門横穴墓群　一覧表

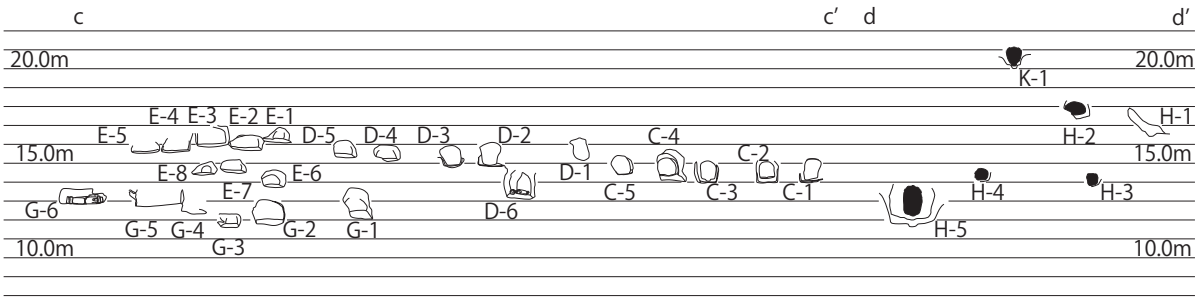
支群番号	旧横穴墓群名	確認横穴墓数	概要
第１支群	福知寺山横穴墓群	19基	4つの小支群を成す・家形石棺あり
第２支群	山本陽一郎宅裏横穴墓群	10基	5つの小支群を成す
第３支群	神田工業倉庫裏横穴墓群	8基	疎らな分布状況を呈する
第４支群	三成範夫宅裏横穴墓群	5基	
第５支群	東谷北横穴墓群	1基	
第６支群	東谷横穴墓群	9基	3つの小支群を成す・家形石棺あり
第７支群	マキチン坂横穴墓群	5基	
第８支群	マキチン坂裏横穴墓群	3基	
第９支群	梶谷徳次宅裏横穴墓群	19基	6つの小支群を成す
第10支群	小浜山横穴墓群	56基	11の小支群を成す・家形石棺あり
第11支群	小浜寺山横穴墓群	2基	
第12支群	真幸ヶ丘横穴墓群	1基	
	合計	**138基**	



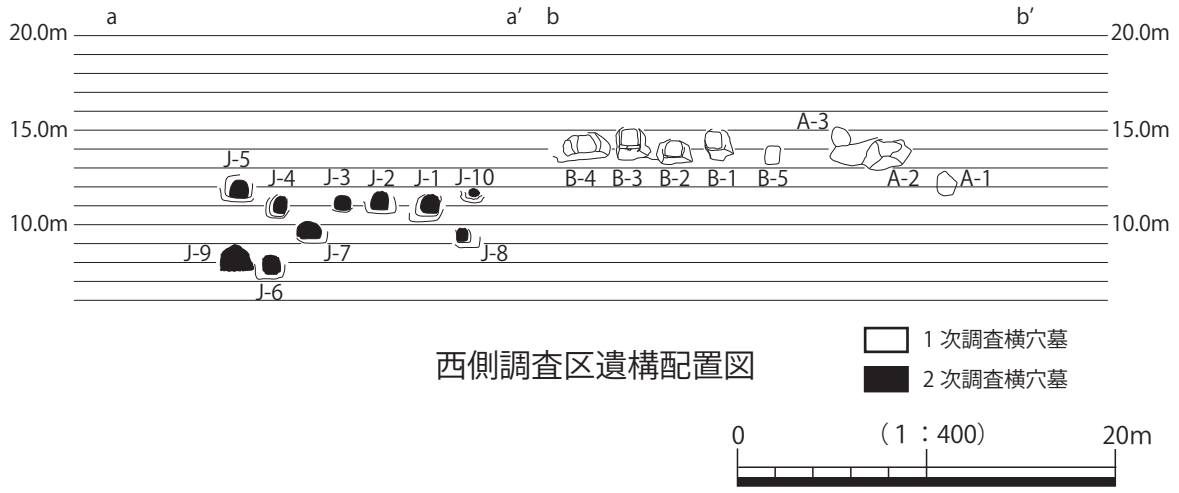
第３図　神門横穴墓群　第 10 支群　西側



第４図　神門横穴墓群　第 10 支群　東側



東側調査区遺構配置図



西側調査区遺構配置図

第５図　神門横穴墓群　第 10 支群　遺構配置図

写真４　足場を使用した発掘調査の状況（東側調査区）

第３章　調査の成果

第１節　　調査の概要

１　位置（第３・４・５図）

東側調査区のもっとも標高の高い位置に K-1 号横穴墓が所在する。標高差は K-1 号横穴墓と H-5 号横穴墓の玄室床面で約 7.5 ｍある。１次調査時のＣ，Ｄ，Ｅ群が，標高 14 ～ 15 ｍ前後で並ぶのに対して，今回の２次調査，東側調査区の横穴墓は，標高差が大きい。K-1 及び H-2 ～ 5 と５基の横穴墓を確認した。

西側調査区では，J-1 ～ 10 号墓の 10 基を確認している。石棺を有する J-2 号横穴墓，線刻壁画の残る J-4 号横穴墓，石床を有する J-5 号横穴墓がほぼ同じ標高 11.0 ｍ前後である。

２　調査方法（写真４）

横穴墓検出のために表土除去を行い，その後横穴墓付近まで上がれるように足場を組み立てた。横穴墓内の埋土は，すべて 1㎜メッシュ網目のふるいを通して洗浄し，微細遺物の確認を行った。

第２節　東側調査区の調査成果

東側調査区では，K-1 号，H-2 号～５号の横穴墓５基を確認した。

１　K-1 号横穴墓（第６～ 10 図）

位置

東側調査区の最も高い場所，標高 20 ｍ前後に１基のみ所在する。S － 25° － E 方向に開口している。

前庭

前庭と考えられる長さ 220cm，幅 70 ～ 120cm の平坦面がある。中央には玄門からつながる長さ 340cm，幅 23 ～ 16cm，深さ最大 20cm の溝がある。初葬時からこの溝が存在したのか土層観察では確認できなかったが墓道であろうか。

前庭床面は，閉塞部，玄門を経て玄室内側に向かって傾斜があり下がる。

玄門

玄門平面形は，細長く床面で幅 24cm，長さ 56cm を測る。玄門の天井部分は，完全に崩落しており，高さは不明である。

玄室

玄室は，奥壁部分のみ残存している。玄室奥壁は，やや丸く傾斜しながら立ち上がり，アーチ状の天井であることがわかるが，中央部分から玄門にかけて崩落しており大部分の天井については不明である。床面の平面形状は，長さ 228cm，前幅 96cm，奥幅 120cm の縦長長方形である。

加工痕

奥壁及び左右両壁の一部に円刃状工具による斜めの加工痕が確認できる。

土層堆積状況

玄室の８層上面から遺物が出土している。３層・４層は，廃絶後の堆積，２層は玄室崩落のレキ層である。

遺物出土状況

玄室崩落土の下から遺物が出土しており，これらは，盗掘などは受けていないようである。出土須恵器からは，初葬時と時期差のある須恵器が出土しており，追葬があったと考えられるが，土層観察で追葬を面的に確認することはできなかった。

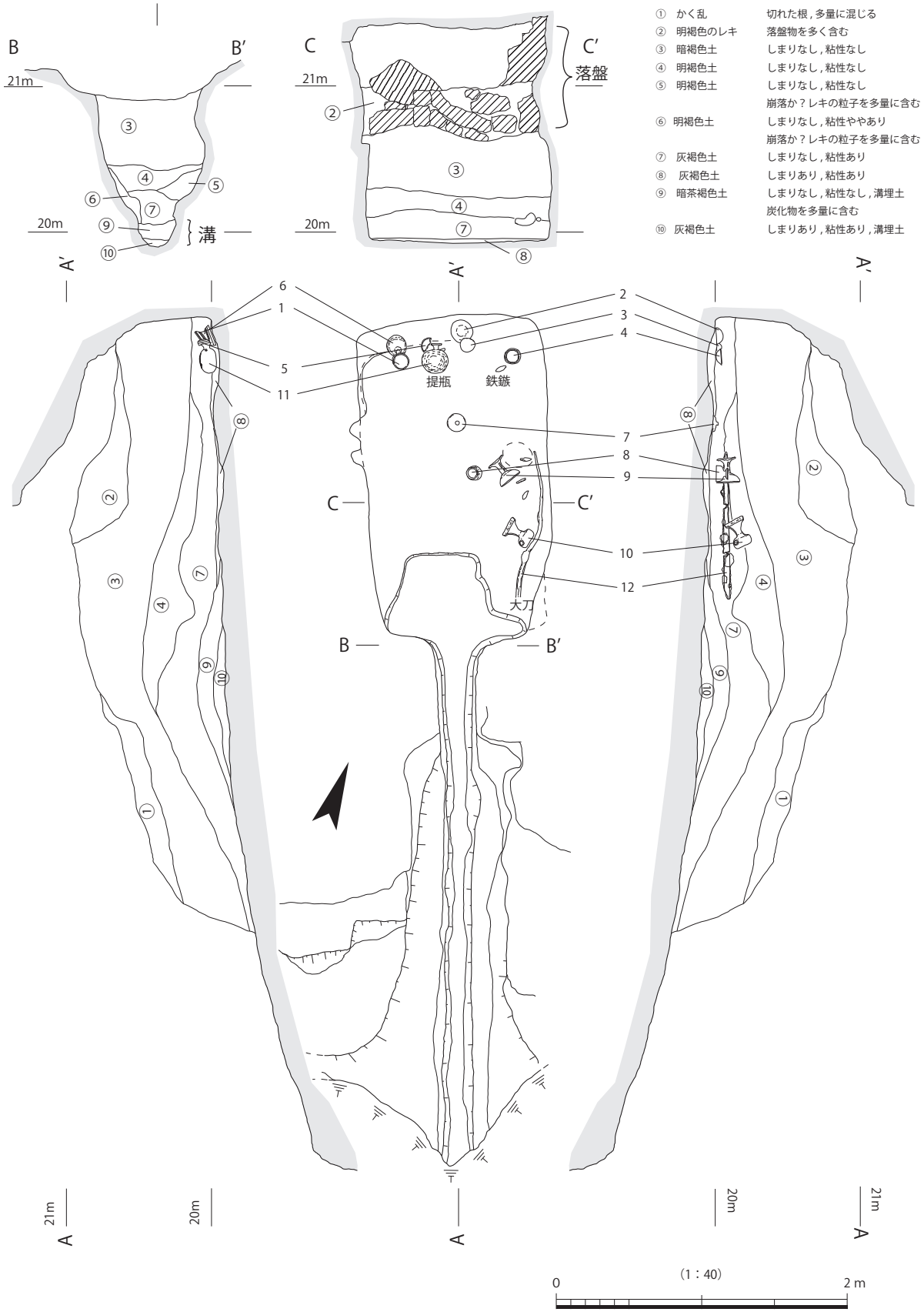
出土遺物

須恵器 11 点，金属製品 22 点が出土した。遺物は玄室奥壁側と右側側壁から出土した。玄室奥壁側は床面直上の出土であるが，左側側壁は，床面から浮いた状態で，７層上面から出土した。１から 11 は須恵器である。１から６は，８層直上，玄室奥床面直上で確認した。１は，須恵器の杯Ｈ蓋で，口径 11.6 ｃｍである。大谷分類Ａ７型。２は，須恵器の杯Ｈで，かえりのつくものである。口径 11.4 ｃｍ，大谷分類Ａ７型。３は，須恵器の杯Ｈ蓋で，口径 10 ｃｍである。天井外面にヘラキズあり。大谷分類Ａ８型。４は，須恵器の杯Ｈで，かえりのつくもので，口径９ｃｍである。内面底部にヘラ記号「×」印あり。大谷分類Ａ８型。５は，須恵器の杯身で，口径 8.6 ｃｍと小型である。６は，須恵器脚部が欠損した無蓋高杯の杯部である。平らな底部に直立する体部であり，体部外面に段が２段ある。床面直上に伏せた状態で置いてあり，土器枕として使用したものであろうか。また，３と重なっていた。７は，須恵器杯の蓋で，天井回転ヘラケズリのあと，擬宝珠状のつまみを付ける。かえりのつくものである。Ｃ２型か。８の低脚杯との組み合わせが想定されるものである。８は，須恵器低脚杯で，体部外面に段が２段ある。脚部の透かしはなく，脚端部は，切り離したあとナデにより面をつくる。７の蓋との組み合わせが想定されるものである。９は，須恵器無蓋高杯で，脚部の透かしは，２段２方，上・下段とも狭い長方形の透かしである。Ｂ型か。10 は，瓶である。口縁部に櫛描波状文がみられる石見（石西）系のＡ５型である。浜田市森ヶ曽根古墳出土例と類似した文様構成である。11 は，提瓶である。口縁部は，広口口縁で，瘤状把手のものである。石見系のＢⅢａ－１型であろうか。

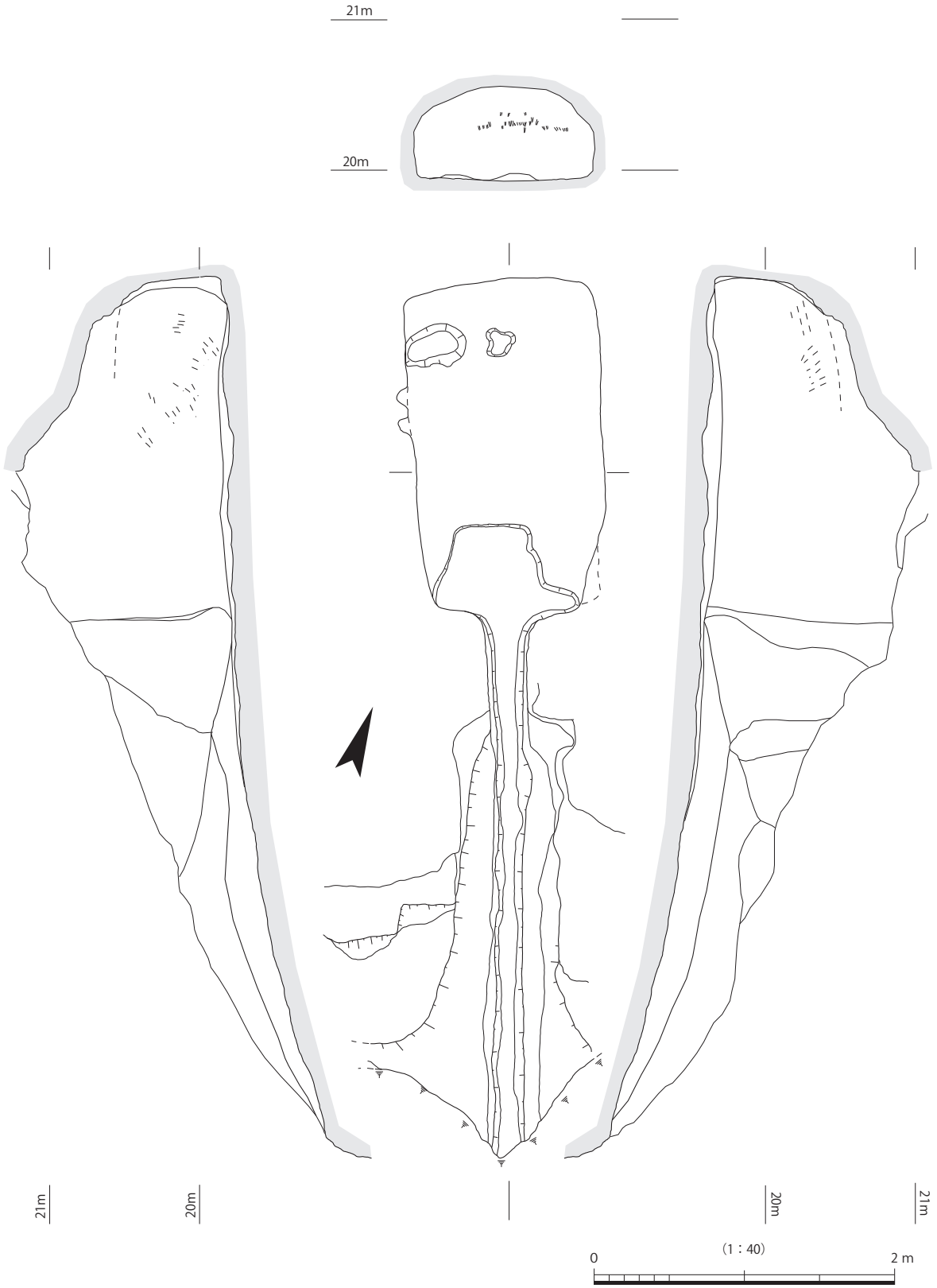
12 は大刀で，茎の破片１つと刀身から切先までの破片１つがある。13 は全ての面が破断・剥離しており，全形は明らかでないが，形状的に 12 の大刀に付属する鍔である可能性が高い。14 は内面全体に木質が残存しており，鞘口金具と考えられるが，12 の大刀に伴うものかは不明である。

15 から 19 は柳葉式鉄鏃で，鏃身関は全てナデ関である。17 から 19 には茎関が残っており，棘関である。また，17 と 19 には矢柄が，16 と 18 の茎部には糸巻き痕が残っている。

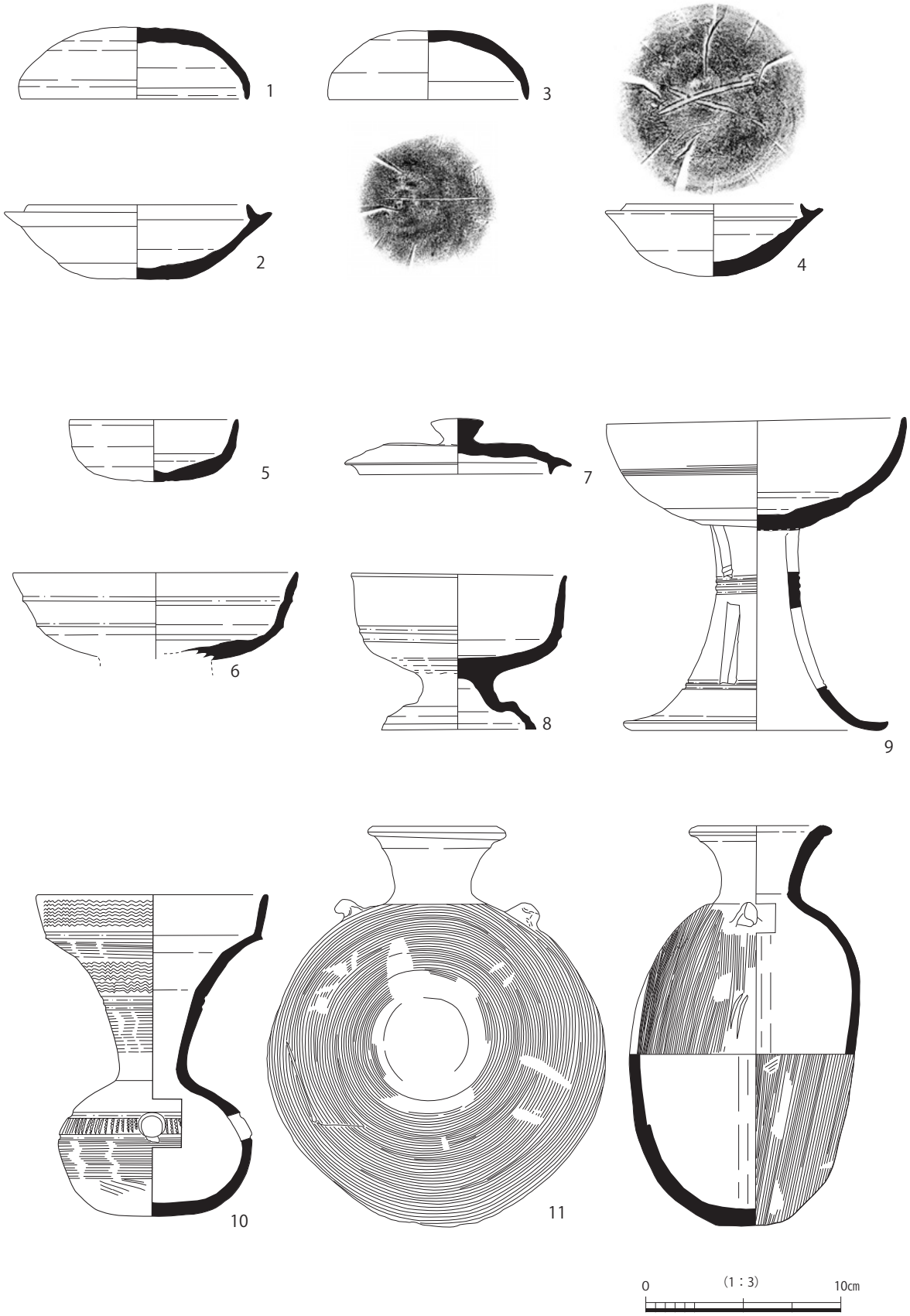
20 から 24 は有窓方頭式鉄鏃で，全てほぼ同一の寸法となっている。20 と 22，24 には茎関が残っており，棘関である。有窓方頭式鉄鏃は近畿や瀬戸内，九州北部を中心に分布し，島根県内では本横穴墓のほかに４例の出土が知られている（第５章第３節）。５点まとまって出土した事例は国内初であ



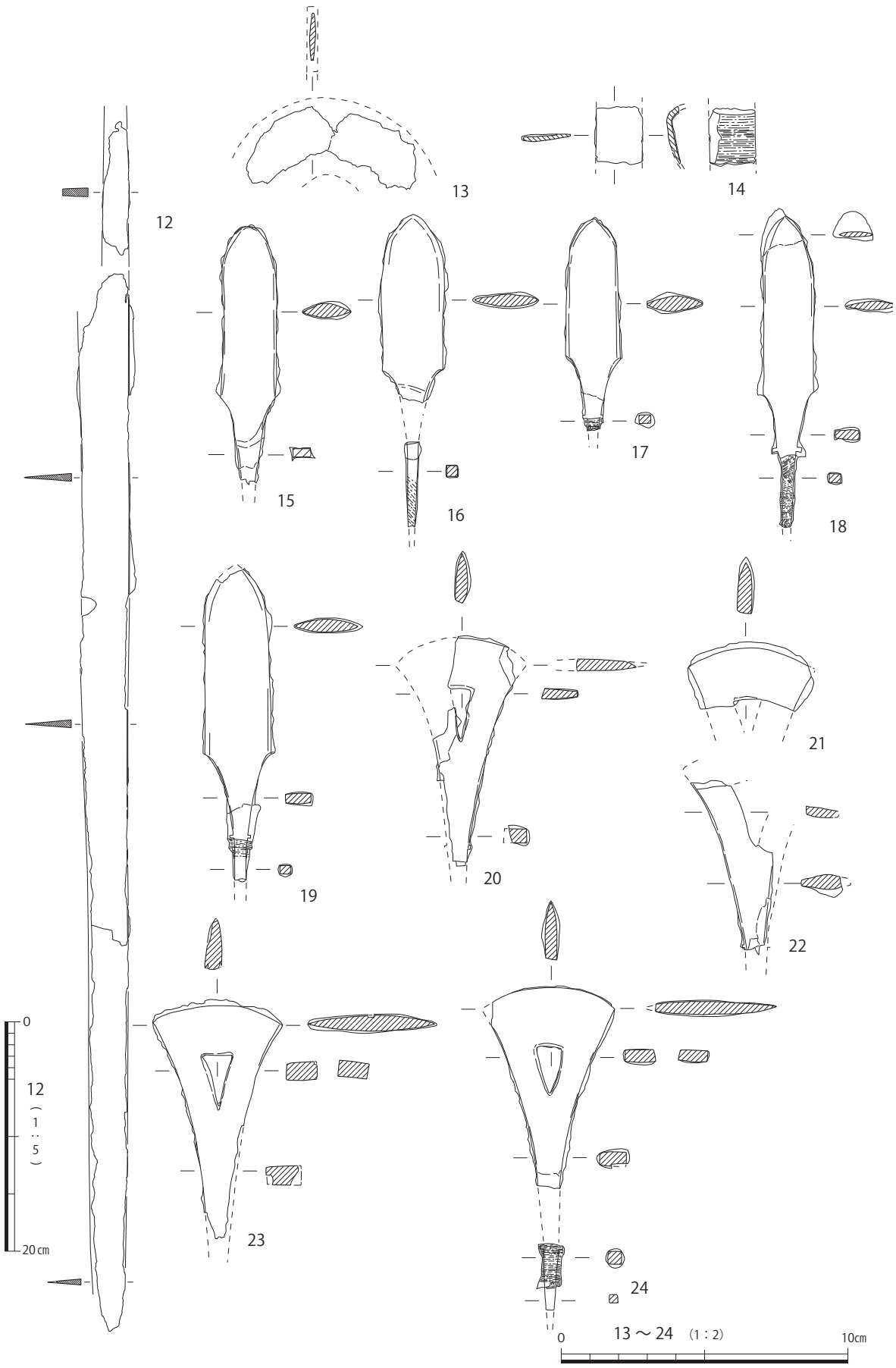
第６図　K-1 号横穴墓①　遺構・土層図



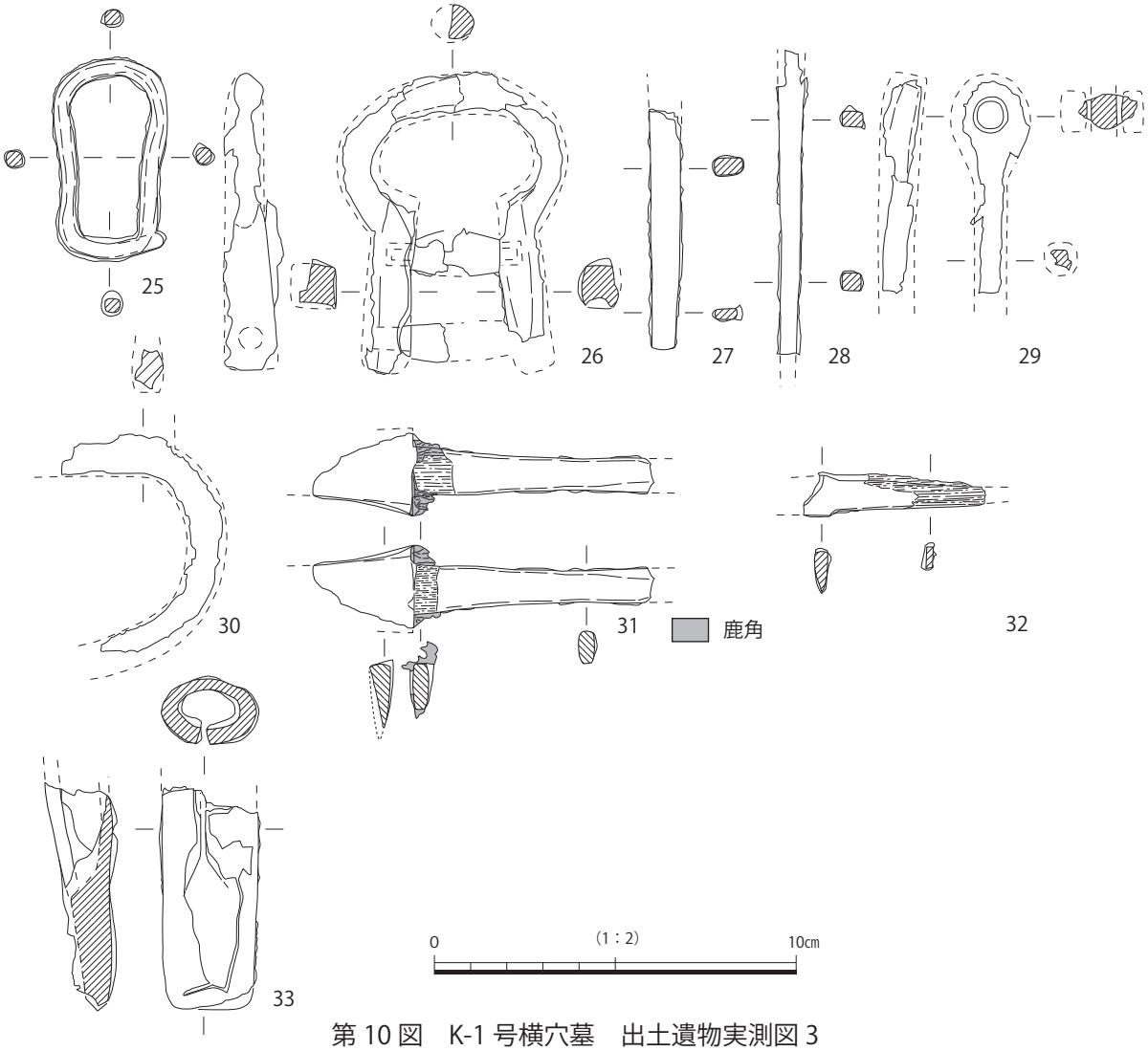
第７図　K-1 号横穴墓②　遺構図



第８図　K-1 号横穴墓　出土遺物実測図１



第９図　K-1 号横穴墓　出土遺物実測図２



第 10 図　K-1 号横穴墓　出土遺物実測図 3

る。また，24 には矢柄が残存している。

25 から 30 は鉄製馬具である。25 と 26 は鉸具で，25 の輪金は一本の鉄棒を折り曲げて右下端部で鍛接しており，輪金の下端には帯革の痕跡が残っている。後述する轡に伴う鉸具と考えられる。26 は刺金部分の遺存状態が悪いが，T 字形の刺金を凸字形の輪金で挟む型式と考えられ，鐙に伴う鉸具である可能性が高い。27 は馬具の一部だと考えられ，何らかの部位の端部であるが詳しく特定できない。28 も馬具の一部と考えられるが，詳細な部位は特定できない。29 と 30 は轡の残片である。29 は引手もしくは銜の一部だが，ほぼ全ての面が破断・剥離しており，全形は明らかでない。また，環部の中に連結した銜の残欠が残っている。30 は素環鏡板の一部である可能性が高いが，遺存状態が悪く全形は明らかでない。以上のことから，K-1 号横穴墓出土の馬具には，少なくとも素環鏡板付轡と鐙のセットが揃っていたと考えられる。

31 と 32 は刀子である。31 は関部分に鹿角が残存しており，鹿角装刀子であったことがわかる。関については，峰・刃側ともに角関をもつ両関である。32 は柄の木質が残存しており，関については，わずかに湾曲する両関である。33 は袋状鉄斧である。内部に鉄錆等が詰まっており，詳しい内部構造は判別できないが，厚手のつくりから縦斧としての使用を想定できる。

時期

初葬は，出土遺物から出雲４期の古段階と考えられる。その後，出雲６期までの遺物が確認できる。時期幅のある遺物が出土しているのは，追葬されたためであろう。

２　H-2 号横穴墓（第 11 図）

位置

未完成の横穴である。K-1 号横穴墓から床面で約 2.5 m低く，標高 17.5 mに所在する。Ｓ－ 45°－Ｅ方向に開口している。

前庭

玄門の前に長さ 30cm のほどの平坦面があるが前面が崩落している。

玄門

玄室の左前壁を造り出しており，玄門を意識しているようである。

玄室

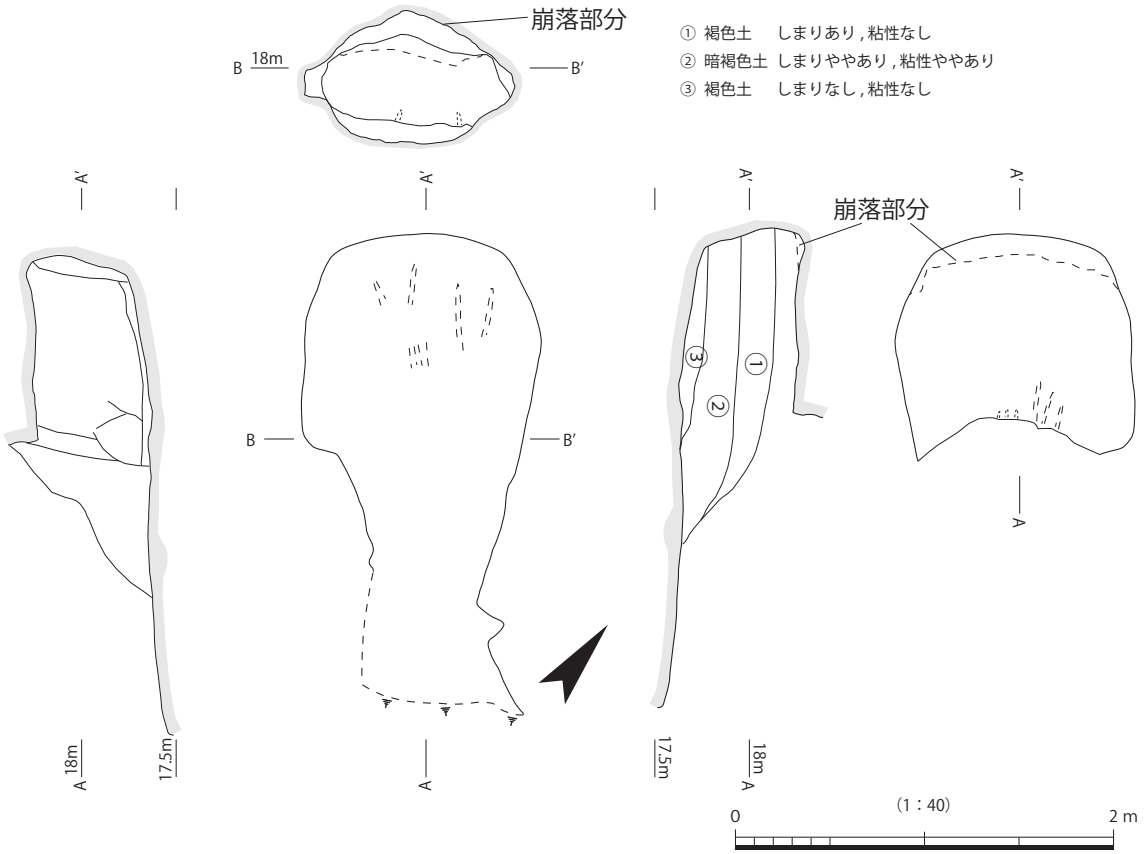
玄室は，長さ 100cm 最大幅 123cm，高さ 60cm で，造墓途中である。アーチ形を目的に掘削している。

加工痕

玄室が荒掘りの状態である。鑿状工具により玄室床面及び天井に主軸方向の加工痕が残る。

土層堆積状況

造墓途中で，放棄したようであり，流入土が堆積している。掘削途中の埋戻し痕跡はない。



第 11 図　H-2 号横穴墓　遺構・土層図

遺物出土状況

遺物は出土していない。

時期

時期は不明である。

３　H-3 号横穴墓（第 12 図）

位置

未完成の横穴である。H-2 号横穴墓から床面で約 4.0m 低く，標高 13.5 mに所在する。Ｓ－ 30°－Ｅ方向に開口している。

前庭

前庭は，前に長さ 70cm のほどの平坦面があるが大部分が崩落しており，前庭の規模等不明である。

玄室

玄室が想定できる奥壁部分は，円形に加工されておりアーチ形の玄室を目的として掘削している。

加工痕

加工痕は，側壁を主軸方向に削っており，天井には，大きな溝状加工痕が残っている。玄室の成形段階途中で止まっている。

土層堆積状況

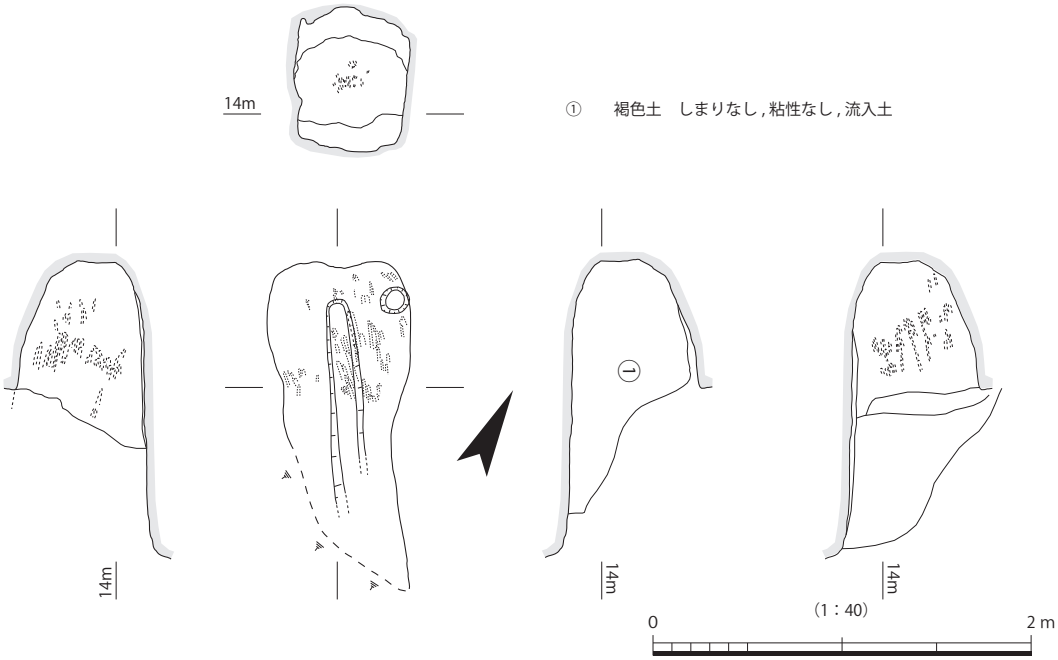
土層は流入土のみの１層である。掘削途中の埋戻し痕跡はない。

遺物出土状況

遺物は出土していない。

時期

時期は不明である。



第 12 図　H-3 号横穴墓　遺構・土層図

４　H-4 号横穴墓（第 13 ～ 15 図）

位置

H-3 から西へ 6.0m，標高は玄室床面で 14.0 mである。Ｓ－ 14°－Ｅ方向に開口している。

前庭

長さ 40cm，奥行 10cm，深さ 8cm の閉塞部（溝）があり，前に長さ 30cm のほどの平坦面があるが大部分が崩落しており，前庭の規模等不明である。

玄門

玄門は，長さ 85cm，幅 54cm ～ 45cm と細長い。

玄室

玄室は，長さ 160㎝，幅 165cm の平面円形のドーム状である。高さは，最大で 71cm と低く，天井と側壁の境目はなくなだらかに立ち上がる。

加工痕

玄室奥側の天井及び側壁に荒掘り時の加工痕が残る。

土層堆積状況

５層より上層については，流入土の可能性がある。６層上面で遺物がまとまって出土しているが，原位置とは考えにくい。後の進入により移動したと考えられる。また，床面直上の平瓶は，割られた状態で，さらに 35 の須恵器の杯身が入った状態で出土している。時期は不明だが後に進入し，平瓶に杯身を入れ込む作業を行ったようである。

遺物出土状況

６層直上で，耳環２点，象嵌のある鉄製鍔破片１点，須恵器が出土しており，さらに６層下，床面直上から割られた平瓶１点が出土している。

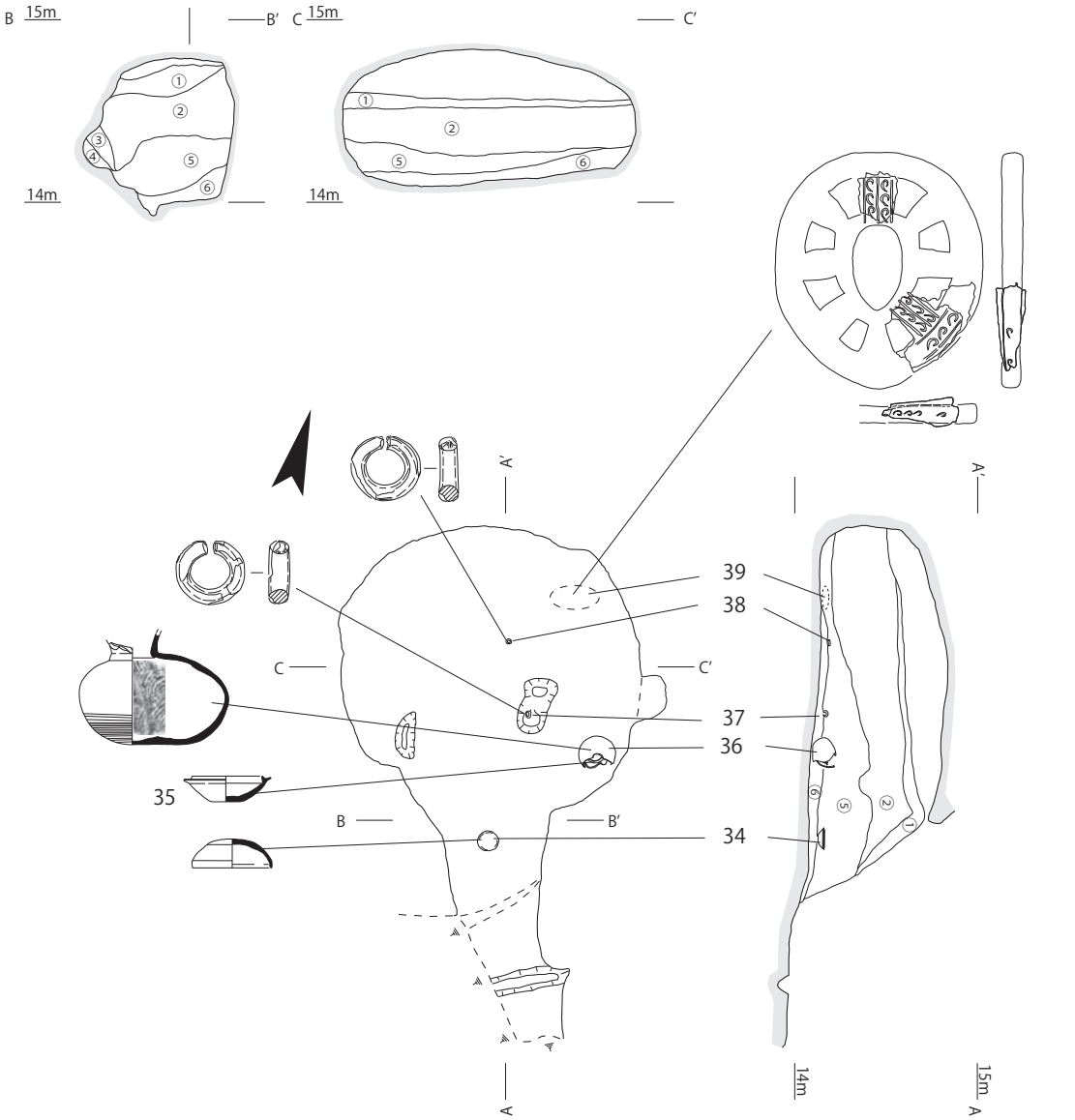
出土遺物

34 は，須恵器の杯Ｈ蓋で６層直上，玄門付近から出土している。口径 10.7㎝でＡ８型か。35 は，須恵器の杯Ｈ身で，かえりのつくものである。36 の割れた平瓶の内部に入っていた。内面底部にヘラ記号「×」印がある。34 とセットか。36 は，須恵器の平瓶である。把手の痕跡がまったくなくなったＣ３型か。床面直上の出土であり，片付けを行った可能性がある。

37 と 38 は耳環である。２点とも銅芯に銀板を巻いたあと，鍍金を施して製作されたことが判明している（第４章第３節）。どちらも劣化が進行しており，全体的に緑青が吹いて，鍍金は部分的に残存するのみである。小口はたたみ込んで仕上げている。39 は銀象嵌を施した鉄製鍔である（第５章第２節）。象嵌は鍔の平面に圏線Ｃ字文，耳部にＣ字文が施されている。

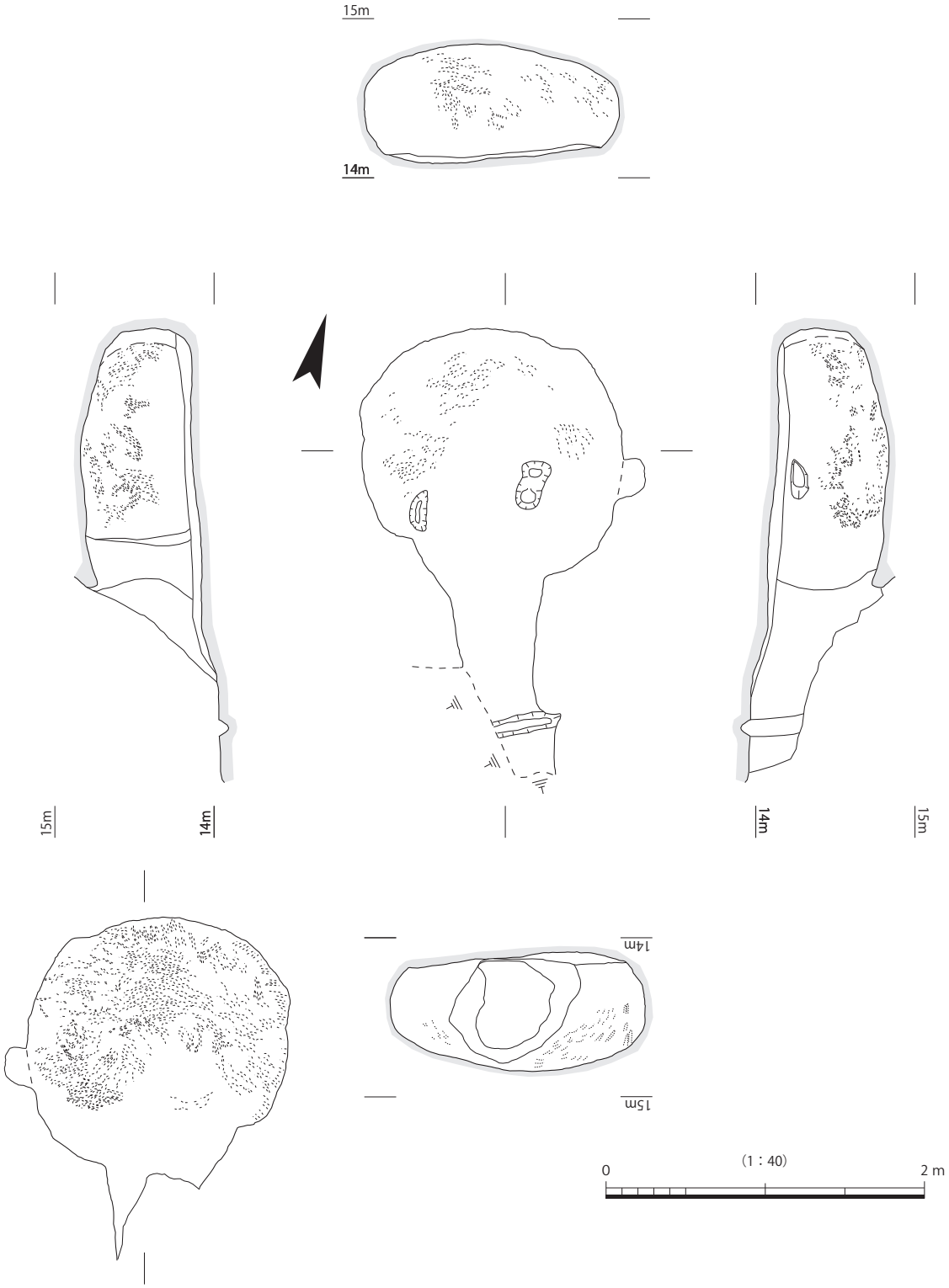
時期

出土遺物から出雲６期と考えられる。

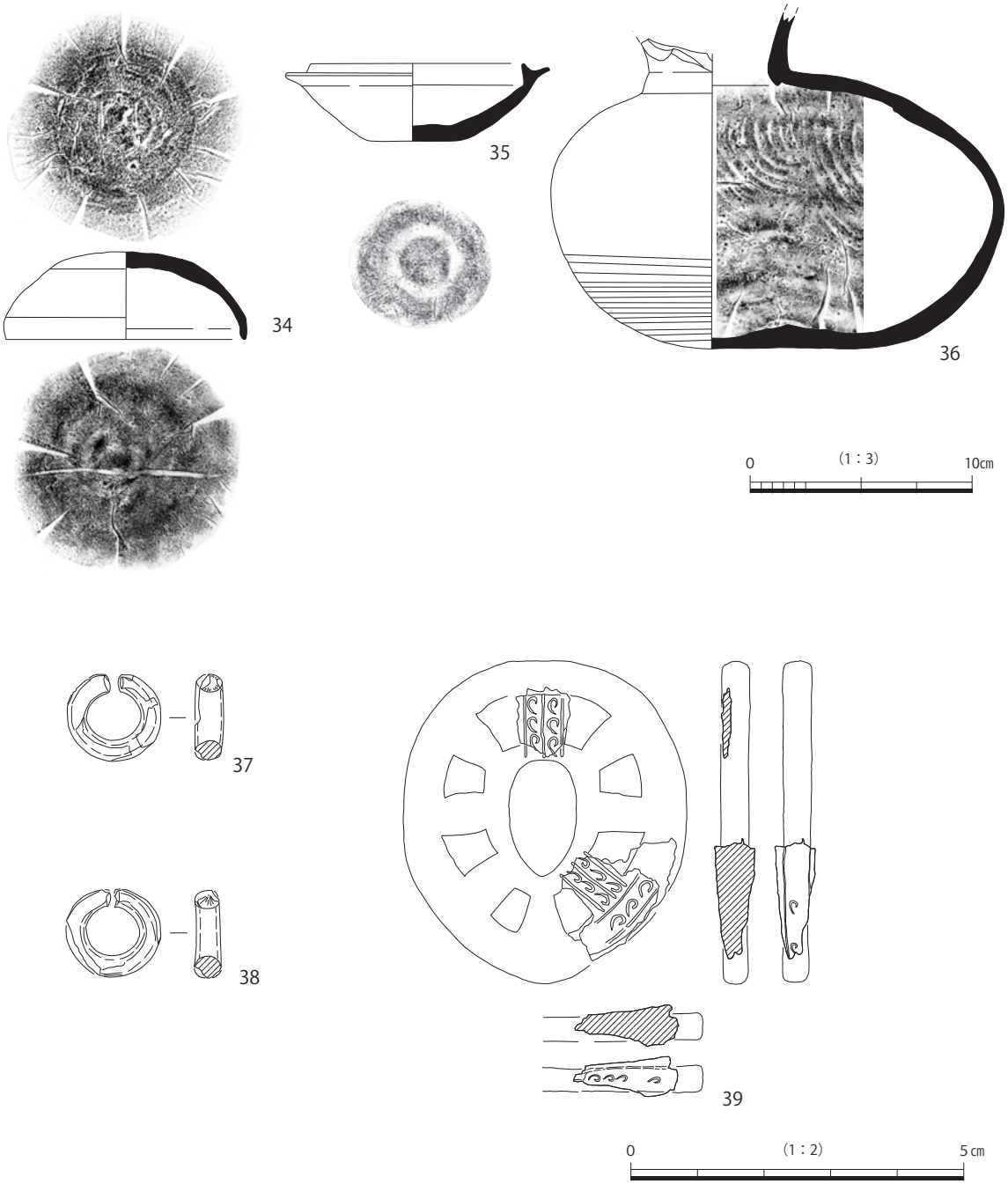


1　黄褐色土　　しまりなし , 粘性なし , 切れた根あり , 流入土の可能性あり
2　暗黄褐色土　しまりややあり , 粘性なし
3　暗褐色土　　しまりややあり , 粘性なし
4　浅橙色土　　しまりなし , 粘性なし , 地山崩落土
5　暗褐色土　　しまりあり , 粘性あり , 炭化物を含む
6　灰褐色土　　しまりあり , 粘性あり

第 13 図　H-4 号横穴墓①　遺構・土層図



第 14 図 H-4 号横穴墓②　遺構図



第 15 図　H-4 号横穴墓　出土遺物実測図

５　H-5 号横穴墓（第 16 ～ 18 図）

位置

H-4 から西へ 4 .0m，標高は玄室床面で 12.5 mである。S － 22°－ E 方向に開口している。

前庭

長さ 150cm，幅 110 ～ 75cm である。中央には玄門から続く長さ 190cm，幅 40 ～ 20cm，深さ 10cm の溝がある。排水溝であろうか。

玄門

閉塞石が一部残る。盗掘の可能性もあるが，再度進入する際，閉塞石の上部を破壊している。

玄室

玄室は，床面で長さ 200cm，前幅 140cm，奥幅 170cm，高さ 106cm で，正方形（やや縦長）のアーチ形である。奥壁は，ほぼ垂直に立ち上がる。

加工痕

玄室天井には，肋骨状の加工が部分的に施されているが，加工痕は薄い。天井頂から左右の側壁に平行に削り落された加工痕が残る。加工痕は幅８cm 前後である。

土層堆積状況

瓦や板ガラスなど現代の廃棄物が３層に混じっていることから，埋葬時の遺物などは後世に掻き出されたと考えられる。

遺物出土状況

閉塞石周辺に掻き出し土が堆積しておりその中に，須恵器，耳環，大刀，鍔が残存していた。

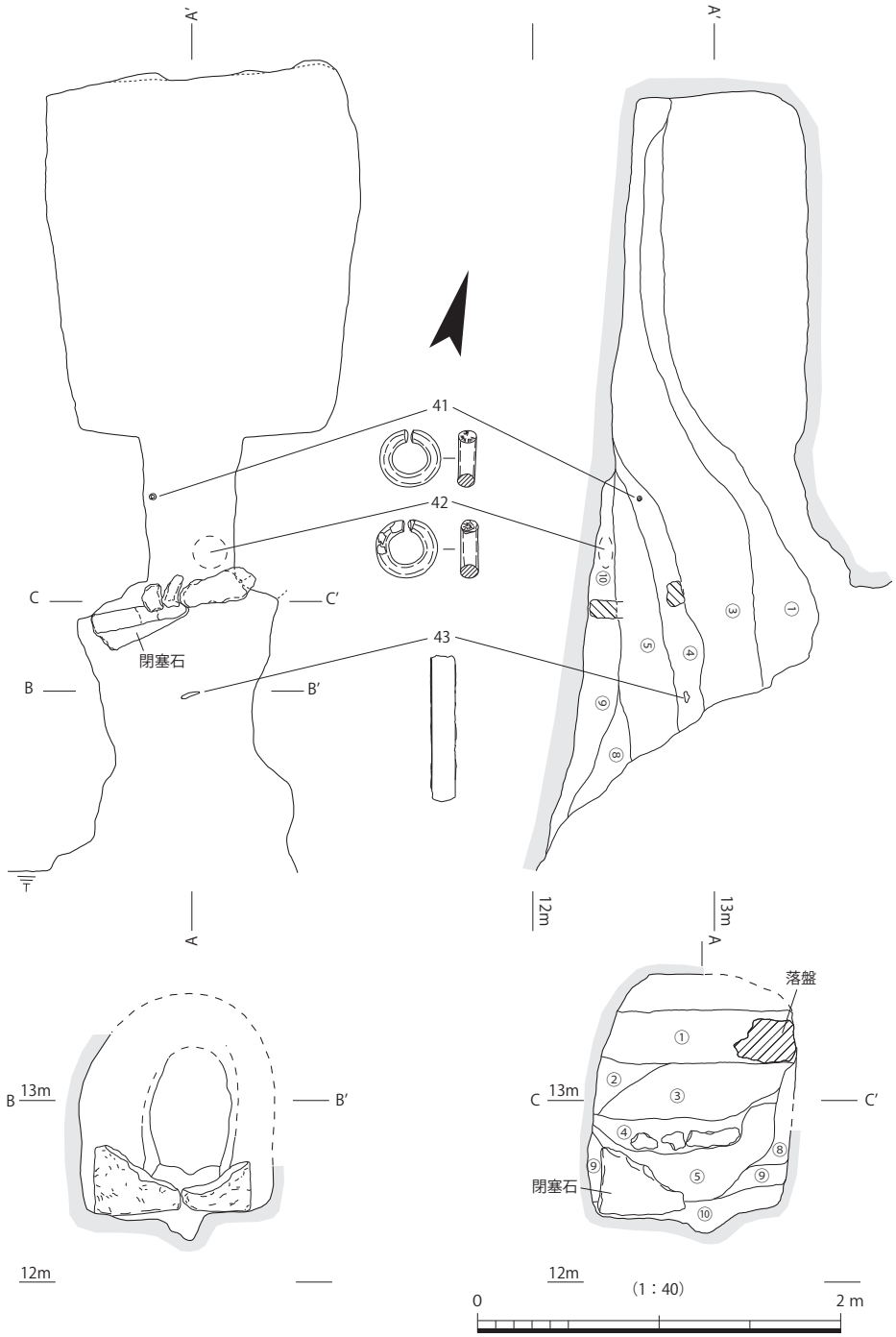
出土遺物

40 は，玄門付近から出土している。須恵器の杯 H 蓋で，３層中，掻き出し土中からの出土である。口径 12㎝で，出雲５期である。

41 と 42 は耳環である。２点とも銅芯に銀板を巻いたあと，鍍金を施して製作されたことが判明している（第４章第３節）。小口はたたみ込んで仕上げている。41 は特に遺存状態が良く，全体に鍍金が残存し，仕上げの研磨痕を確認できる。43 は大刀で，刀身の破片が４つある。44 は鉄製鍔で，やや歪んだ倒卵形を呈しており，無窓である。45 は内面全体に木質が残存しており，鞘口金具と考えられるが，43 の大刀に伴うものかは不明である。

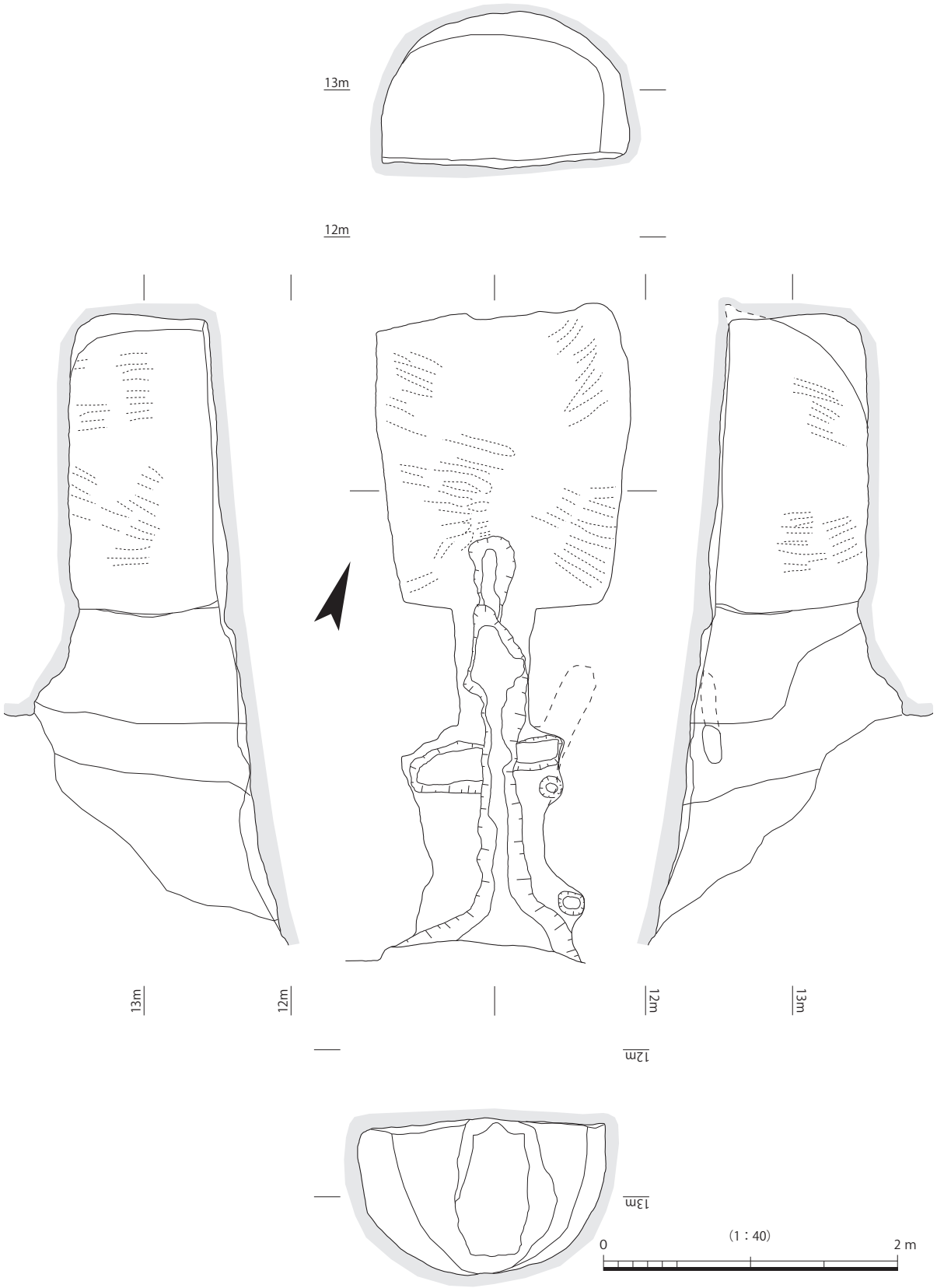
時期

出土遺物から出雲５期と考えられる。

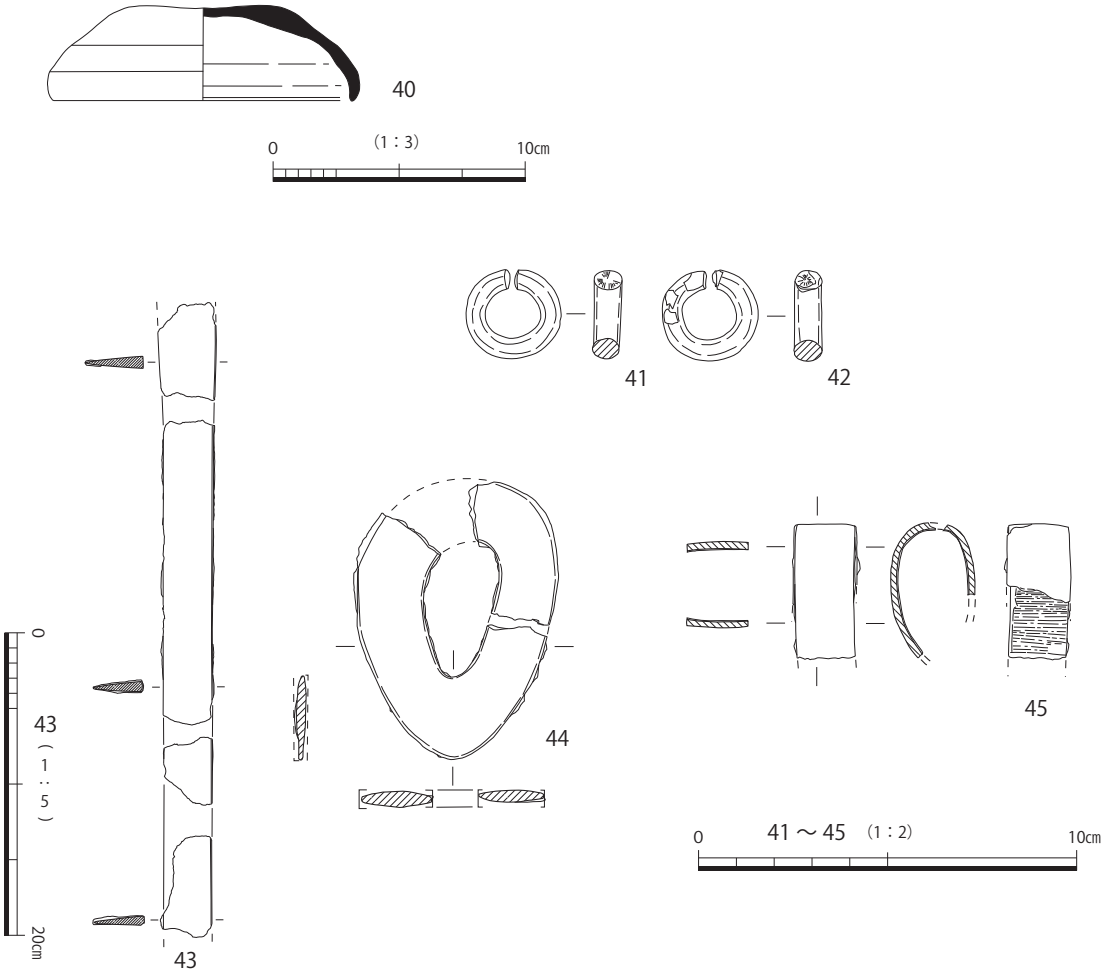


① 黄褐色土　後世の流入土（瓦，板ガラスを含む）
② 暗褐色土　粘性ややあり，しまりなし
③ 明黄褐色土　黄褐色レキ，10cm 程度のもの含む，粘性なし，しまりなし（瓦，板ガラスを含む）
④ 黄褐色土　粘性ややあり , しまりなし
⑤ 暗褐色土　粘性ややあり，しまりなし
⑥ 暗褐色土　粘性あり，しまりあり
⑦ 明黄褐色土　岩質の崩落ブロック多量に含む，粘性ややあり，しまりなし
⑧ 褐色土　粘性ややあり，しまりややあり
⑨ 灰褐色土　炭化物多量に含む，粘性あり，しまりあり
⑩ 暗褐色土　ややしまりあり

第 16 図　H-5 号横穴墓①　遺構・土層図



第 17 図　H-5 号横穴墓②　遺構図



第 18 図　H-5 号横穴墓　出土遺物実測図

第３節　西側調査区の調査成果

J-1 ～ 10 号横穴墓は，西側調査区で確認した横穴墓 10 基である。

１　J-1 号横穴墓（第 19 ～ 21 図）

位置

Ｓ－ 70°－Ｗ方向に開口している。玄室床面の標高は，10.5 ｍである。

前庭

前庭は，前に長さ 30cm のほどの平坦面があるが大部分が崩落しており，前庭の規模等不明である。

玄門

玄門は，長さ 113 ｃｍ，高さ 116cm 前後で，天井アーチ形であったようであるが，玄室中央部分が崩落している。

玄室

玄室は，長さ 190cm，前幅 226cm，奥幅 210cm，高さ 130cm で，平面形態は，横幅がやや広い横長長方形のアーチ形である。

奥壁は，高さ 130cm でやや丸みを帯びて垂直に立ち上がり，天井との境には軒を示す段を有する。天井は，肋骨状加工がなされており，棟を造り出しているようであるが，落盤しており不明瞭である。

加工痕

棟から軒まで左右両側壁に平行に削り落された肋骨状加工痕が残る。また，軒の下にも右側壁に肋骨状加工痕が一部みられるが，軒の上に比べ薄く残る。

土層堆積状況

４層は，盗掘時の掻き出し土，３層より上層はその後の流入土である。

遺物出土状況

床面直上から鉄鏃が４点出土している。その他，４層の掻き出し土中から，須恵器，刀子が出土している。

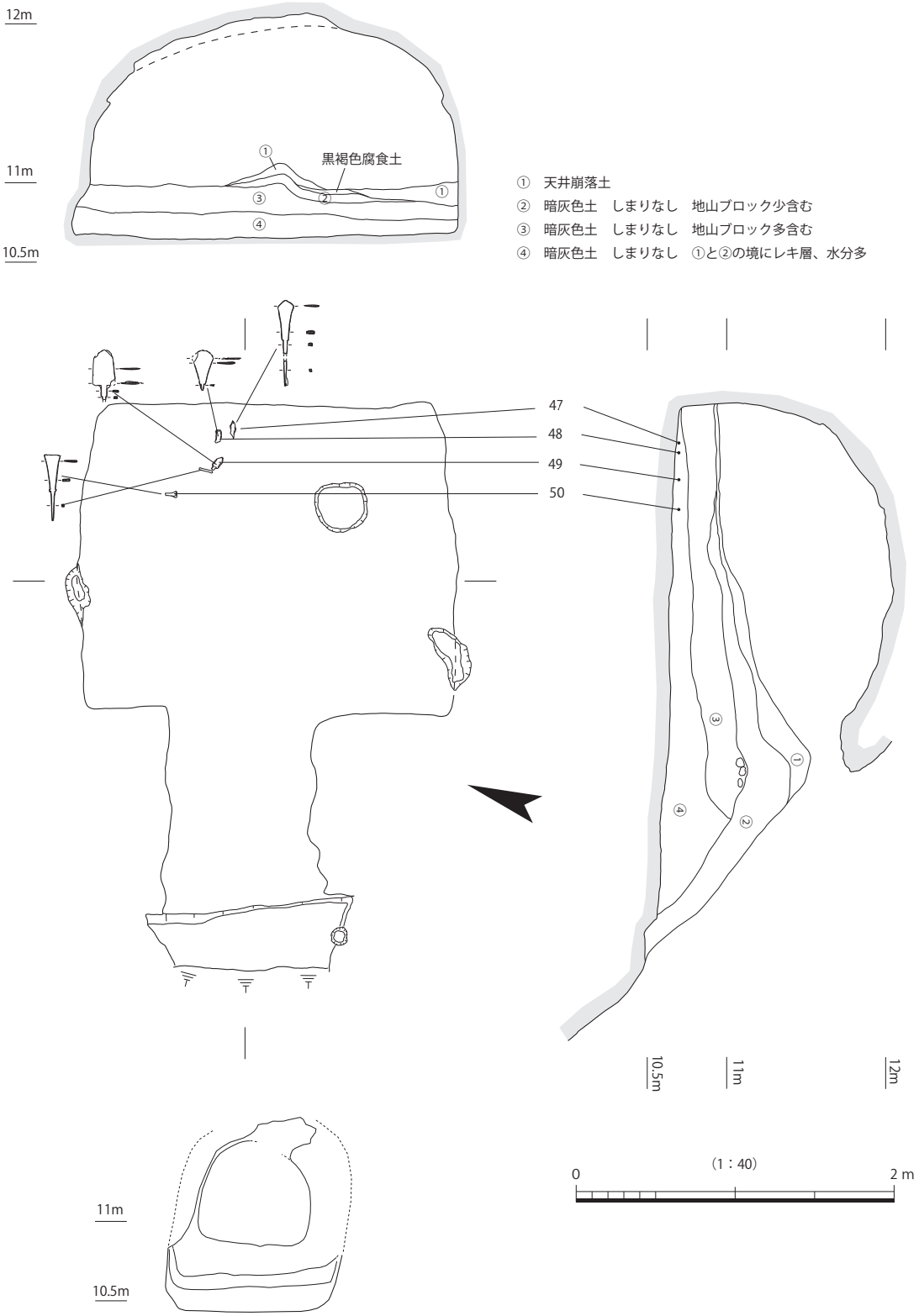
出土遺物

46 は，玄門付近から出土している。須恵器直口壺の口縁部である。

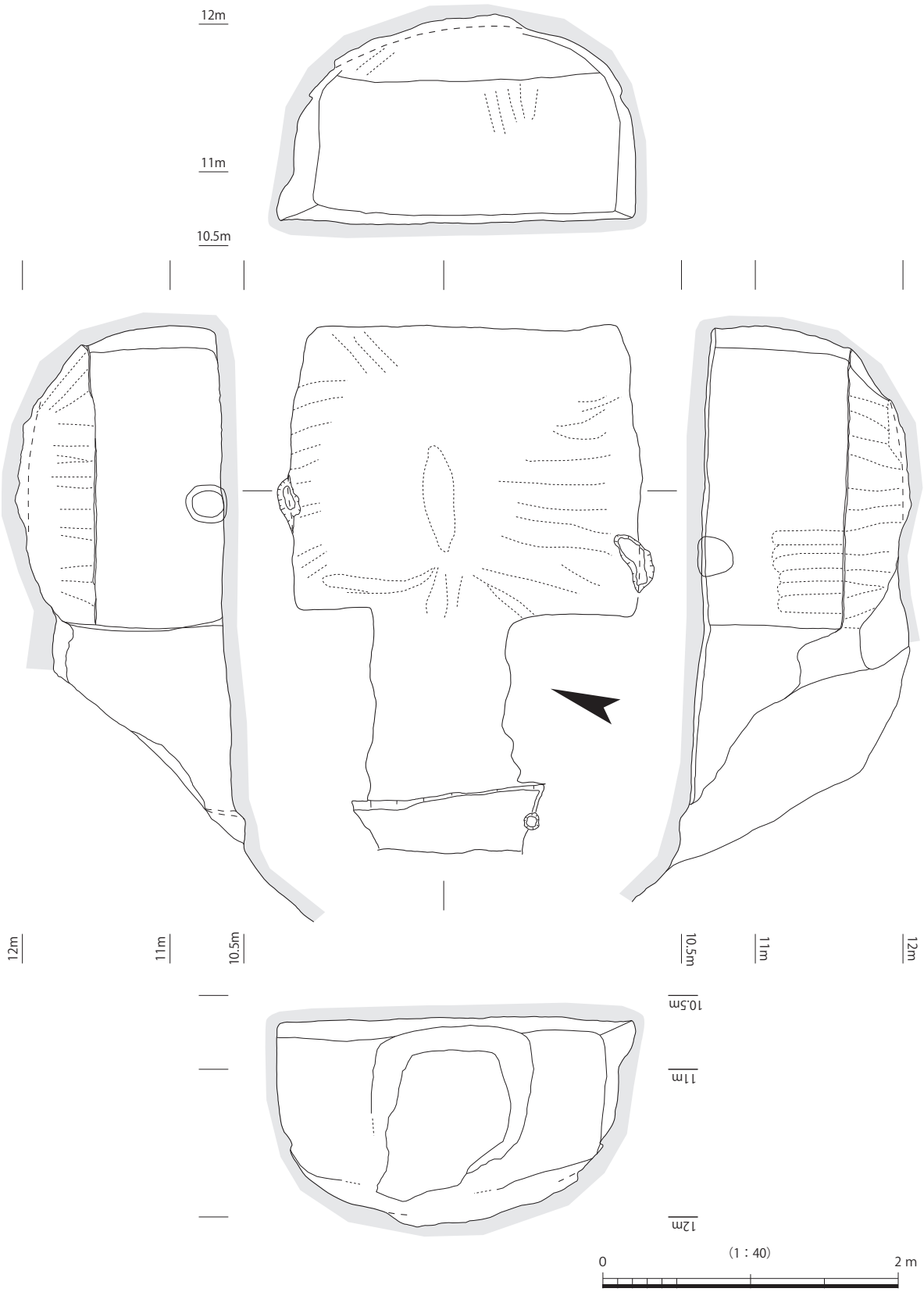
47 から 50 は鉄鏃である。47 は圭頭鏃で，茎関は角関である。48 は刃部が丸く湾曲する方頭鏃で，茎関は角関である。49 は長三角形鏃で，鏃身関・茎関ともに角関である。50 は刃部がほぼ一直線の方頭鏃で，茎関は棘関である。51 は刀子で，柄の木質が多く残存している。関については，峰側にのみ関をもつ片関である。

時期

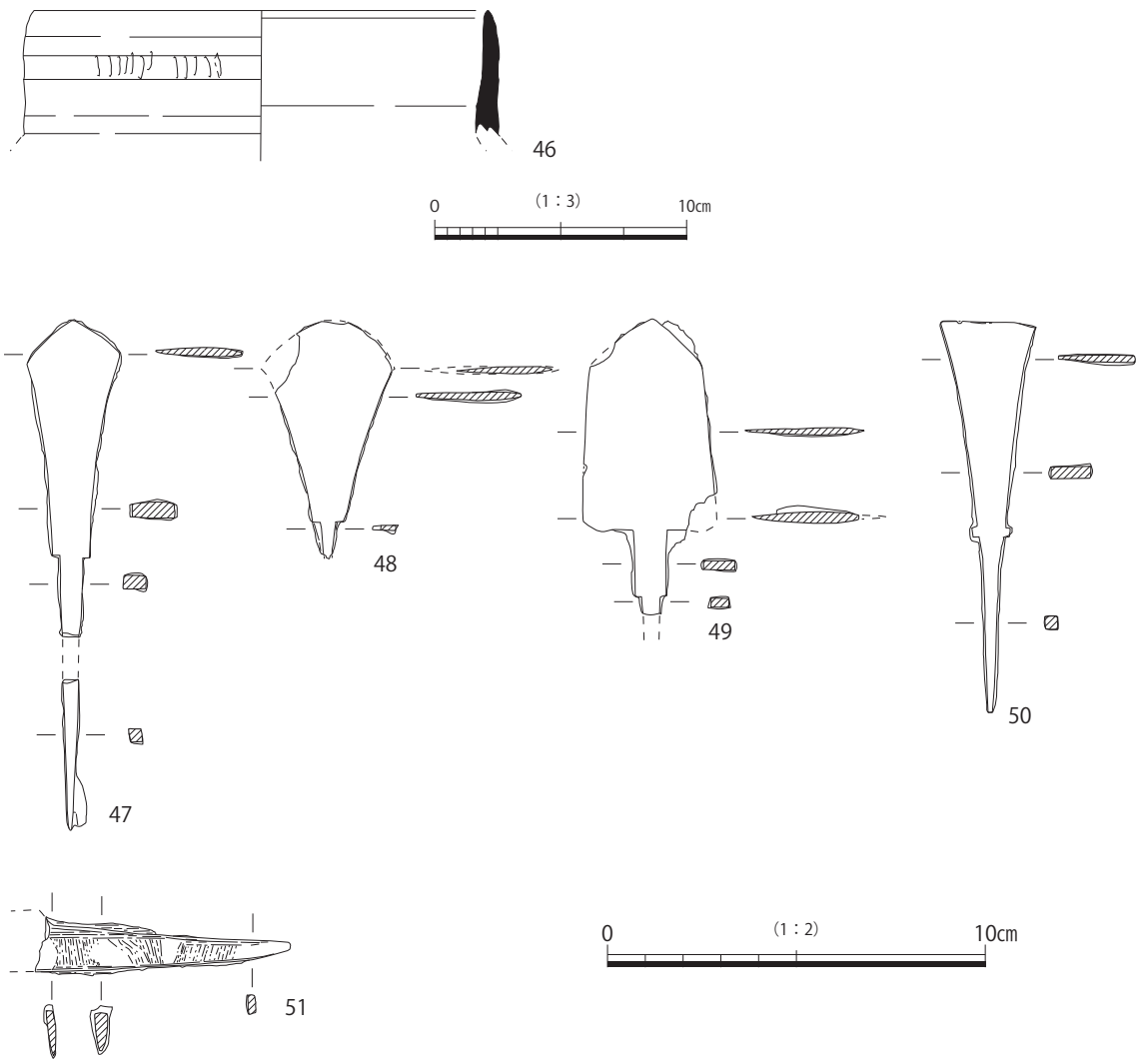
遺物では特定できず，不明である。



第 19 図　J-1 号横穴墓①　遺構・土層図



第 20 図　J-1 号横穴墓②　遺構図



第 21 図　J-1 号横穴墓　出土遺物実測図

２　J-2 号横穴墓（第 23 ～ 25 図）

位置

Ｓ－ 51°－W方向に開口している。玄室床面の標高は，10.9 mである。

前庭

前庭は，閉塞部の溝より前面に長さ 40cm のほどの平坦面があるが大部分が崩落しており，前庭の規模等不明である。

玄門

玄門は，長さ 108cm，高さ 120cm 前後で，天井アーチ形であったようであるが，途中から崩落している。長さ 124cm，奥行 10cm，深さ 8cm の閉塞部（溝）がある。

玄室

玄室は，長さ 200cm，前幅 190cm，奥幅 180cm，高さ 120cm で，平面形態は，やや縦長長方形のアーチ形である。石棺のある右側壁側を左側より大きく造り出している。

奥壁は，軒線の高さ 80cm まで垂直に立ち上がる。奥壁及び側壁にはやや丸みを帯びて垂直に立ち上がり，天井との境には軒を示す段を有する。天井は，肋骨状加工がされており，棟を造り出している。

石棺

玄室右側壁沿いに組合せ式石棺を設置している。床石には 4 枚の切石を並べており，床石の左側には，高さ 2cm 程度のＬ字状の縁がある。

床石の短辺側に断面Ｌ字状の側石を立てている。蓋石は存在しない。石材は，全て凝灰質砂岩もしくは，砂質凝灰岩である（第 4 章第 2 節）。リン分析等の結果，リン濃度分布などから流れ込んだ堆積物とともに骨が移動し，石棺の奥に集まったと考えられる（第 4 章第 1 節）。なお，石棺の石材は，すべて持ち帰り保管している。

加工痕

棟から軒の上まで左右の側壁に平行に削り落された肋骨状加工痕が残る。また，軒の下にも左右両側壁に肋骨状加工痕が一部みられるが，軒の上に比べ薄く残る。

土層堆積状況

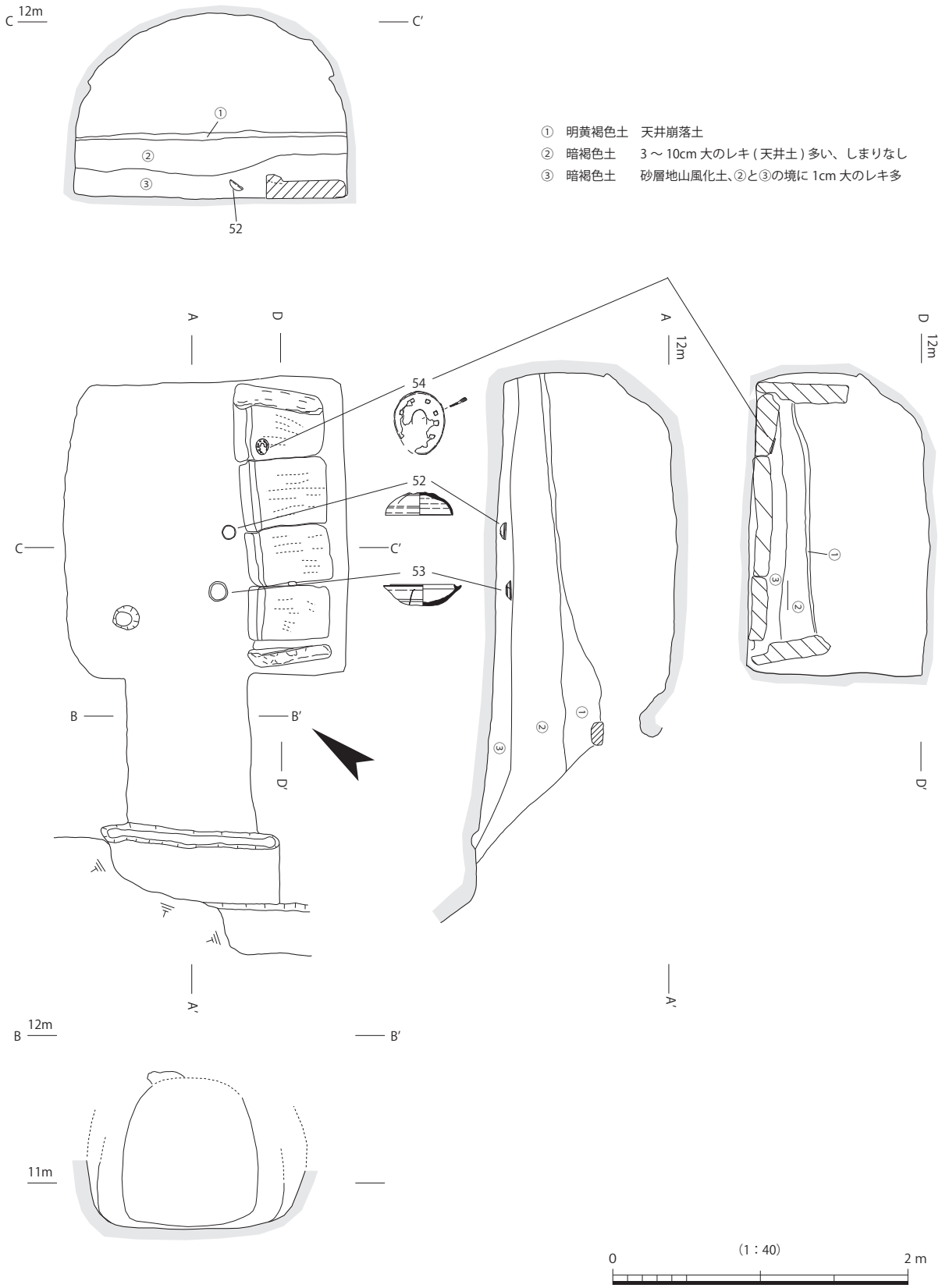
土砂の流れ込みによる堆積が 3 層ある。遺物は，少なく後世掻き出されたと考えられる。

遺物出土状況

須恵器 2 点は，石棺の外，玄室中央部の 3 層中に浮いた状態で出土している。また，鉄製鍔については，石棺床石直上から出土している。

出土遺物

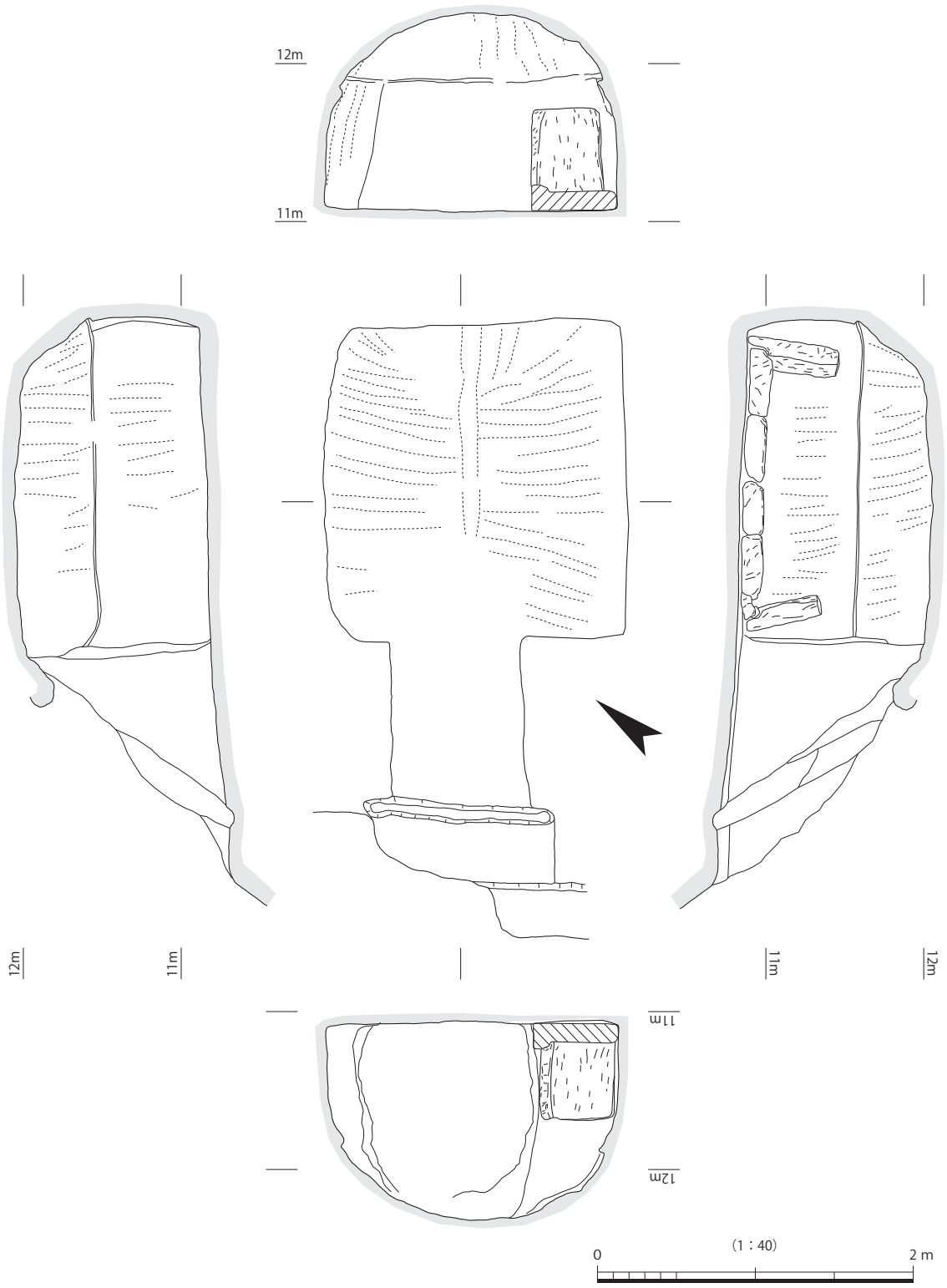
52・53 は，玄室石棺の北側中央，３層中から出土している。52 は，杯Ｈ蓋で，口径 11.5 ｃｍである。Ａ７型。天井外面にヘラ記号「×」印がある。53 は，杯Ｈで，Ａ７型。外面に底部から延びるヘラキズあり。52 と 53 は，組み合わない。54 は鉄製鍔で，倒卵形を呈しており，透かし８つの八窓鍔と推定される。端部は肥厚し，上面側にのみ段がついている。側にのみ段がついている。



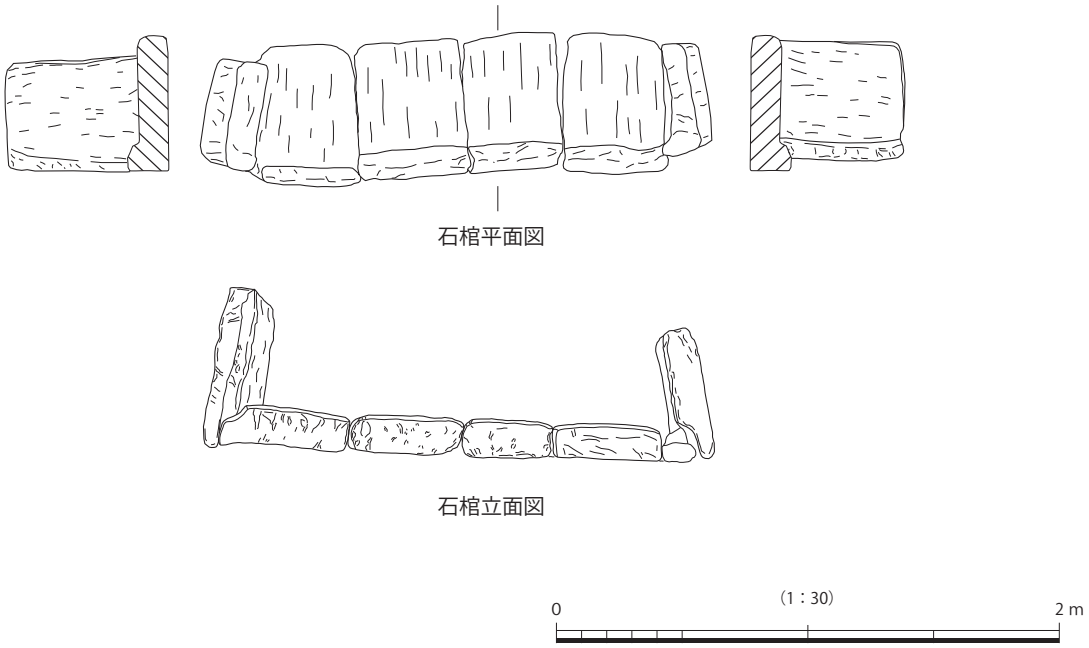
第 22 図　J-2 号横穴墓①　遺構・土層図

時期

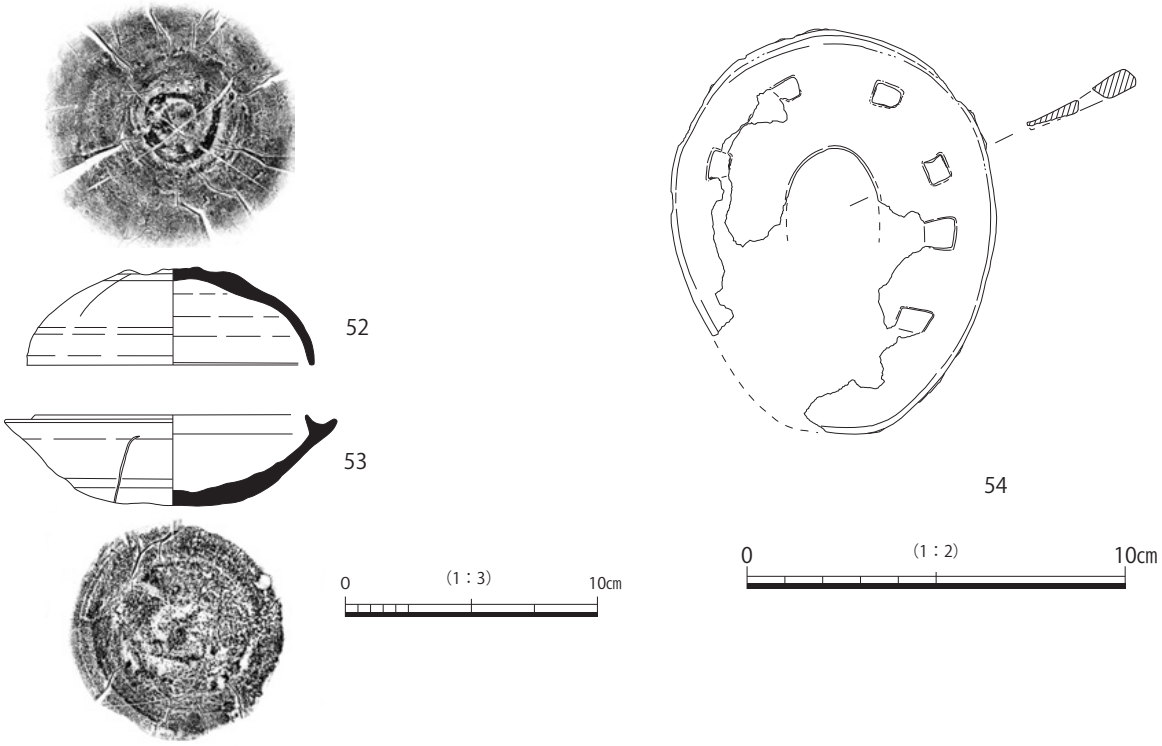
出土遺物から出雲５期と考えられる。



第 23 図　J-2 号横穴墓②　遺構図



第 24 図　J-2 号横穴墓　石棺配置図



第 25 図　J-2 号横穴墓　出土遺物実測図

３　J-3 号横穴墓（第 26 ～ 28 図）

位置

玄室床面の標高は，10.9 mで，Ｓ－ 50°－W方向に開口している。

前庭

前面が崩落しており，ほとんど残っていない。

玄門

玄門は，長さ 100 ｃｍ，高さ 85cm 前後で，天井アーチ形であるが，途中から崩落している。

玄室

玄室は，長さ 170cm，前幅 134cm，奥幅 128cm，高さ 90cm で，平面形態は，正方形（やや縦長）のアーチ形である。

加工痕

床面の奥側及び左右両側壁に狭い穴状の痕跡，刺突痕が多数みられる。

土層堆積状況

土砂の流れ込みによる堆積が３層ある。遺物は，須恵器２点のみで，後世掻き出されたと考えられる。

遺物出土状況

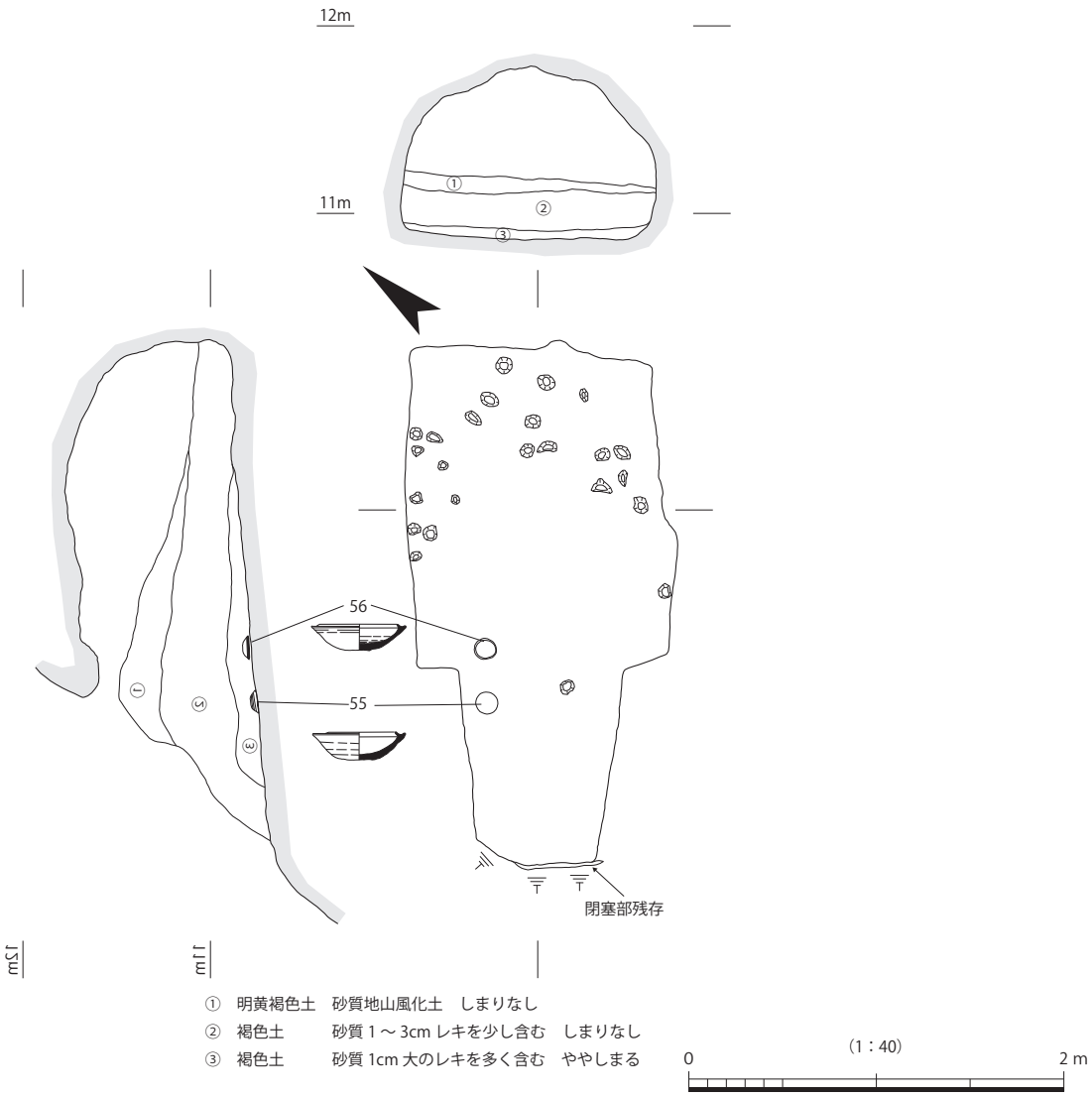
須恵器杯身２点は床面の直上に伏せた状態で出土している。

出土遺物

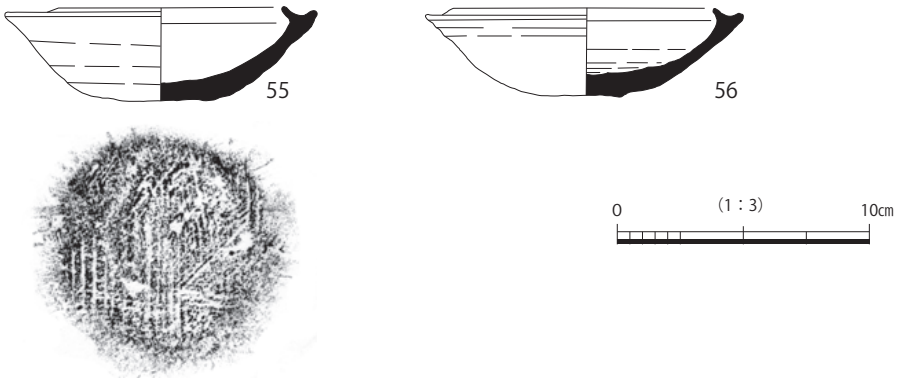
55・56 は，玄門・玄室で杯Ｈ身が２点出土している。55 は，杯Ｈで，Ａ７型。56 も同様に杯Ｈ身である。Ａ７型である。この横穴墓で杯蓋は出土していない。

時期

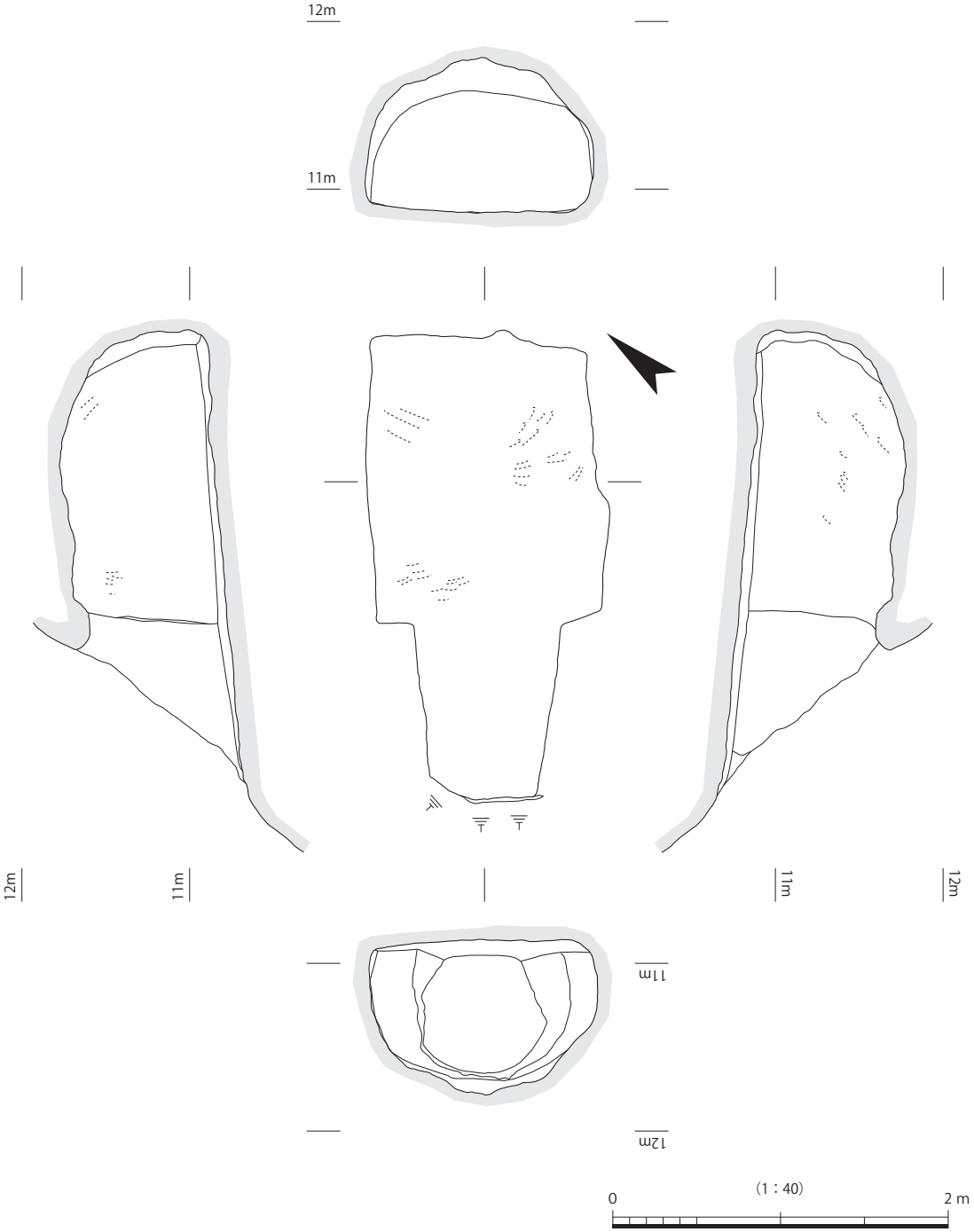
出土遺物から出雲５期と考えられる。



第 26 図　J-3 号横穴墓①　遺構・土層図



第 27 図　J-3 号横穴墓　出土遺物実測図



第 28 図　J-3 号横穴墓②　遺構図

４　J-4 号横穴墓（第 29・30 図）

位置

Ｓ－ 75°－W方向に開口している。床面玄室奥壁から前庭にかけてなだらかに下がり，奥壁が標高 10.8 m，前庭で 10.2 mである。

前庭

玄門の前に長さ 100cm，奥行 14 ～ 10cm，深さ 10cm ほどの溝がある。閉塞部（溝）と考えられる。前庭は，閉塞部の溝より前面に長さ 70cm，幅 100 ～ 75cm のほどの平坦面があるが大部分が崩落しており，前庭の規模等不明である。

玄門

玄門は，長さ 75cm，高さ 100cm 前後で，天井アーチ形であるが，途中から崩落している。

玄室

玄室は，長さ 205cm，前幅 180cm，奥幅 180cm，高さ 110cm で，平面形態は，縦長長方形のアーチ形である。奥壁は，垂直に 85cm 立ち上がる。奥壁が垂直に立ち上がるのは，線刻壁画を描くためであろうか。

加工痕

天井頂から左右の側壁に平行に削り落された肋骨状加工痕が残る。

線刻壁画

肋骨状加工痕を残し，その上から奥壁，天井を中心に線刻している。線刻の内容は，天井中央に曲がった矢を円形に描き，周辺に 4 本足の動物もしくは舟，弓・矢，奥壁に人物もしくは太陽などを線刻している。その他，出雲市内で同様に線刻壁画が残るのは深田谷横穴墓群（芦渡町）1 号横穴墓，上塩冶横穴墓群（上塩冶町）23 支群 7 号横穴墓の２例である。

土層堆積状況

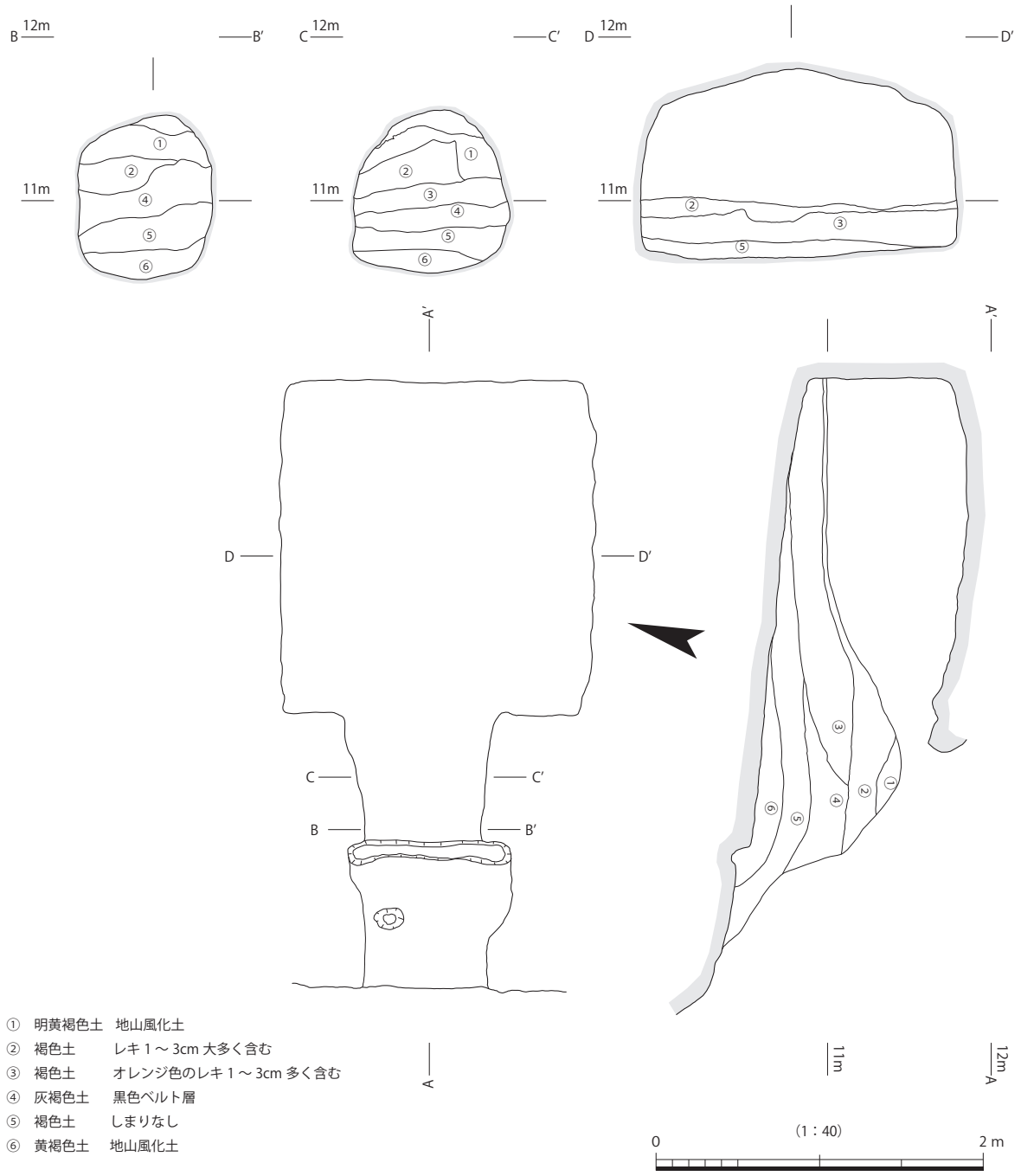
5 層が掻き出し土，5 層より上層は後世の流入土である。

遺物出土状況

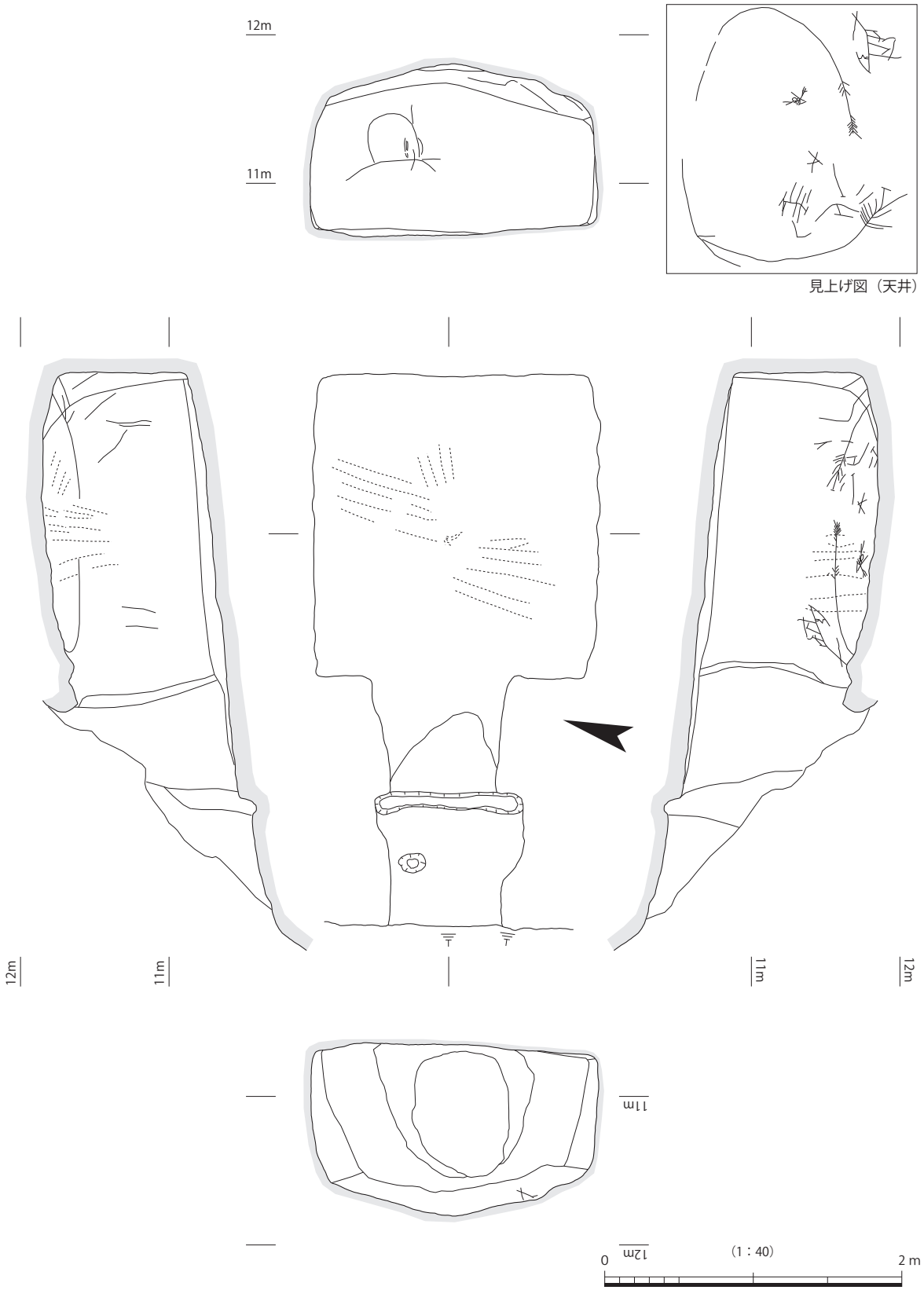
遺物は出土していない。盗掘を受けているのであろう。

時期

時期は不明である。また，線刻壁画の描かれた時期についても不明と言わざるを得ない。



第 29 図　J-4 号横穴墓①　遺構・土層図



第 30 図　J-4 号横穴墓②　遺構図

５　J-5 号横穴墓（第 31 ～ 34 図）

位置

床面玄室奥壁から前庭にかけてなだらかに下がる傾斜があり，奥壁が標高 11.75 m，前庭で 11.2 mである。Ｓ－ 51°－Ｗ方向に開口している。

前庭

前庭は，玄門の前面に長さ 91cm，幅 110cm ほどの平坦面があるが大部分が崩落しており，前庭の規模等不明である。玄門入口に立石が確認でき，閉塞石と考えられる。その大半が割られており，追葬もしくは盗掘の際に破壊されたと考えられる。

玄門

玄門は，長さ 85cm，高さ 85cm 前後で，天井アーチ形であるが，一部崩落している。

玄室

玄室は，長さ 214cm，前幅 174cm，奥幅 180cm，高さ 120cm で，平面形態は，縦長長方形のアーチ形である。

石床

玄室左側側壁沿いに組合せ式石床を設置している。床石には 4 枚の切石を並べており，それぞれの床石の右側には，Ｌ字状の高さ 2cm 程度の縁がある。石材は，礫岩である（第 4 章第 2 節）。リン分析等の分析の結果，リンの濃度分布等から 2 箇所に骨の集積が推定でき，追葬の可能性がある。（第４章第 1 節）　なお，石床の石材は，すべて持ち帰り保管している。

加工痕

棟から側壁に平行に削り落された肋骨状加工痕が天井中央部に一部残る。

土層堆積状況

４～６層については，掻き出し土。3 層から上層は，流入土である。

遺物出土状況

須恵器甕破片が玄室内の左，石床側に散乱している。須恵器杯身は，玄室中央部の 5 層直上から出土している。５層は，掻き出し土であり，かなり攪乱されているようである。また，石床と左側面の間にも甕破片が挟まっている。

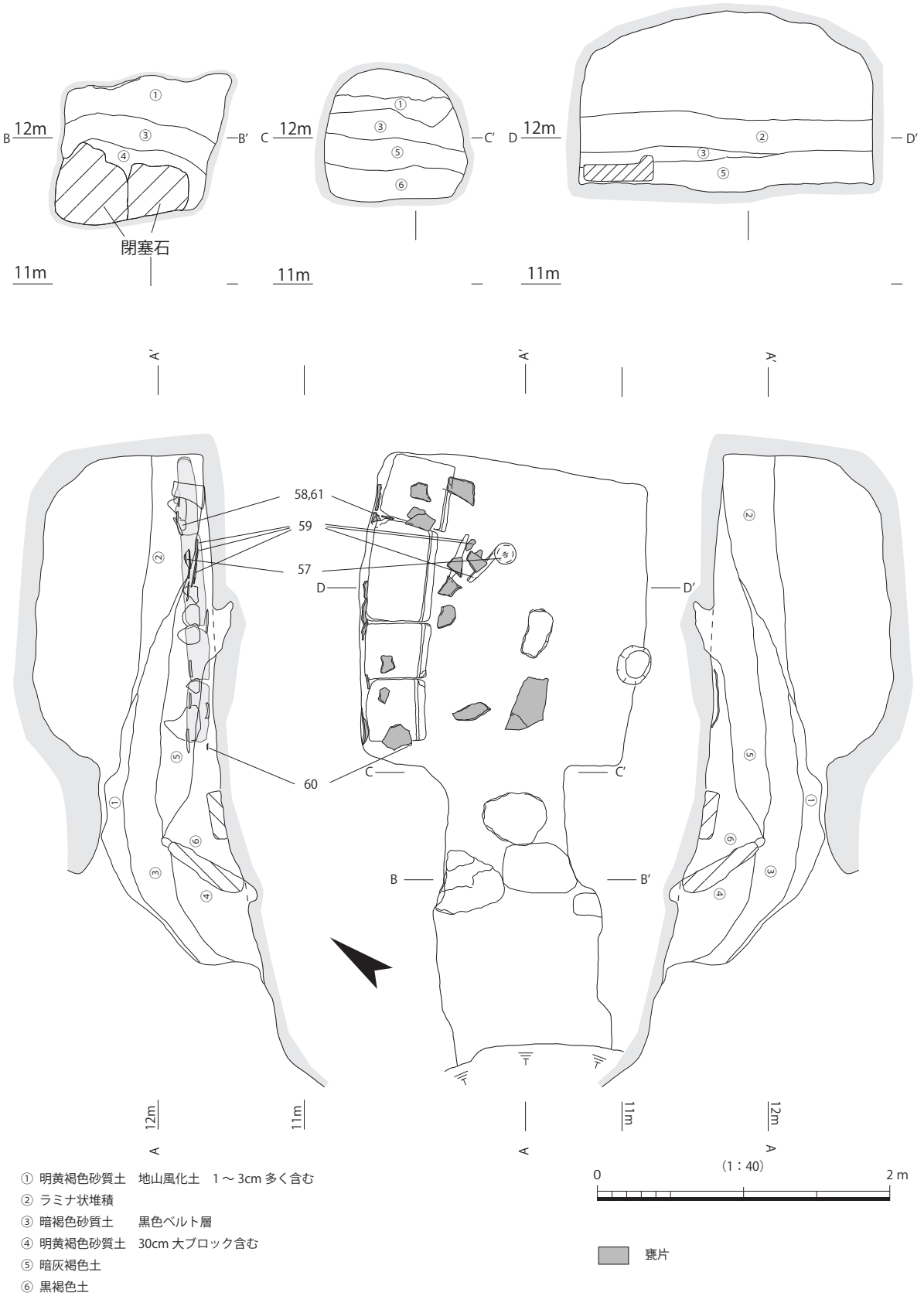
出土遺物

57 は，杯Ｈで，Ａ７型。58 は，甕の破片で，玄室内，床面や石床の直上から出土した。甕破片の接合作業を行ったが，口縁から胴部の破片で，底部の破片はなかった。

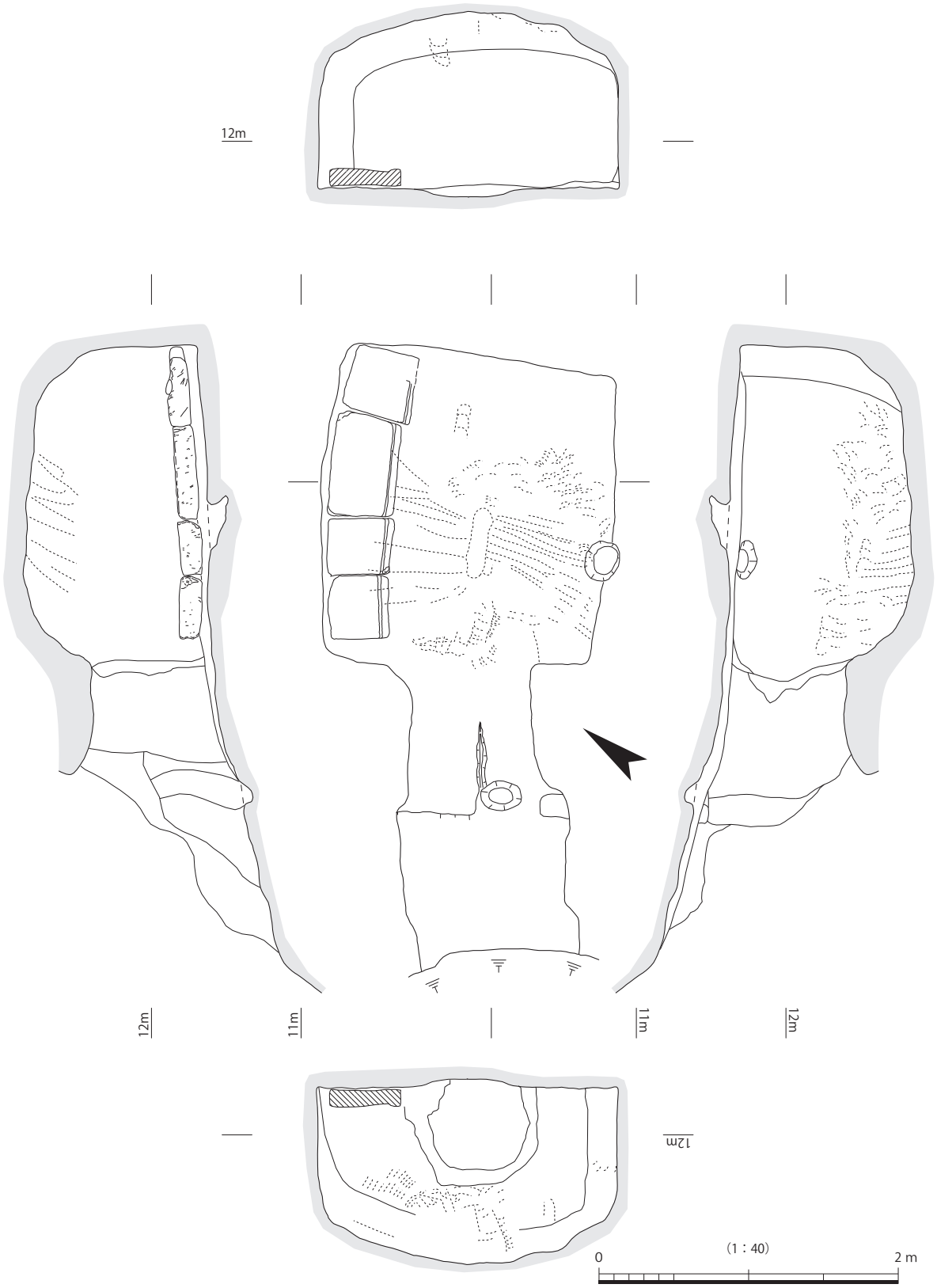
59 は大刀で，茎から切先まで 4 点の破片がある。茎の残存部端には目釘穴があけられており，関は両関となっている。60 は鉄製鍔で，倒卵形を呈しており，無窓である。端部を除いて表面が全体的に剝離しており，本来の厚みを保っている部分は少ない。61 は刀子で，峰・刃側ともにナデ関をもつ両関となっている。

時期

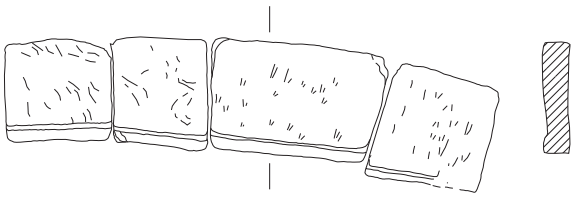
出土遺物から出雲５期と考えられる。



第 31 図　J-5 号横穴墓①　遺構・土層図



第 32 図　J-5 号横穴墓②　遺構図

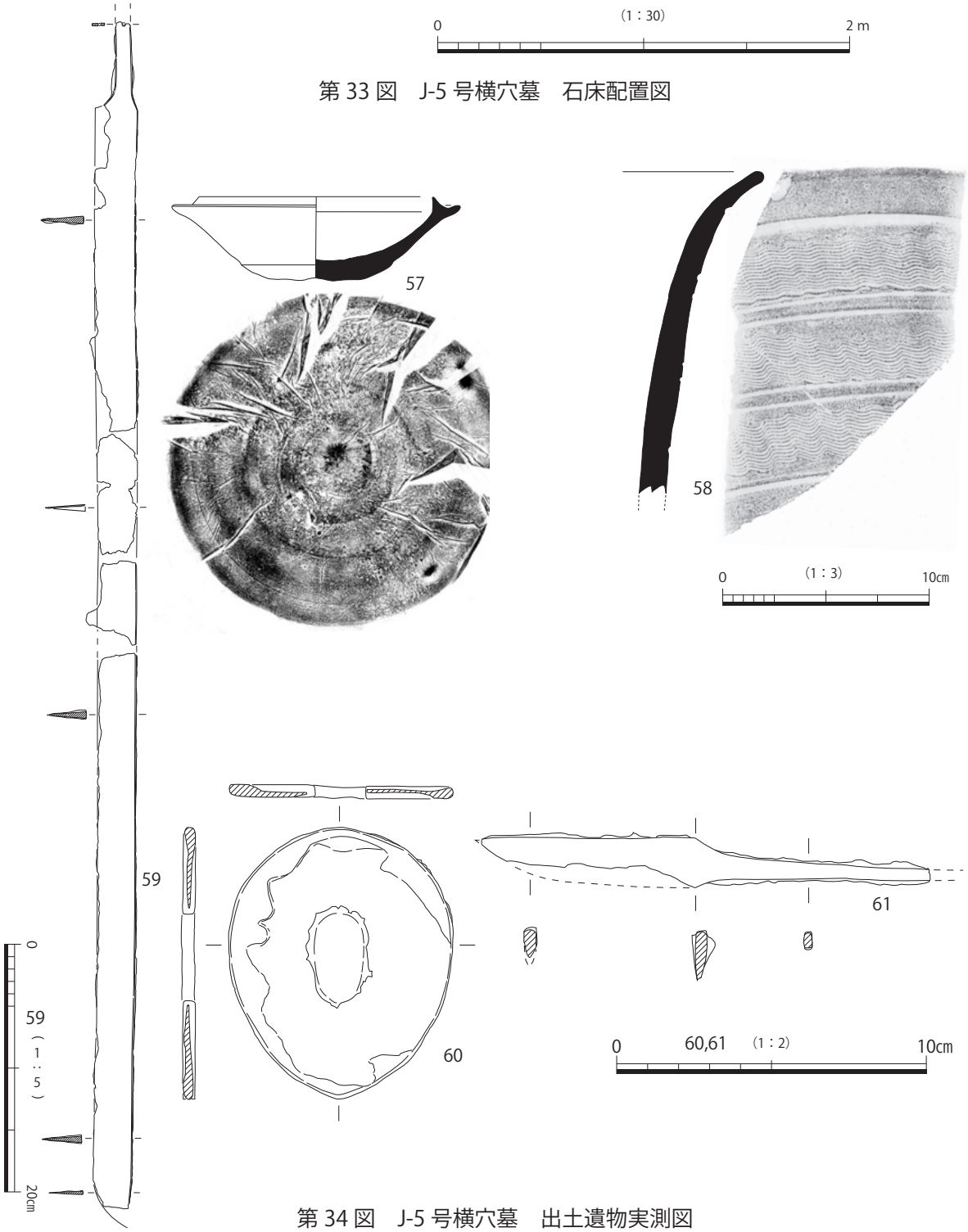


石床平面図

石床立面図

0　(1：30)　2 m

第 33 図　J-5 号横穴墓　石床配置図



第 34 図　J-5 号横穴墓　出土遺物実測図

６　J-6 号横穴墓（第 35 ～ 37 図）

位置

床面玄室奥壁から前庭にかけてなだらかに下がる傾斜があり，奥壁が標高 7.4 m，前庭で 7.15 m である。S － 60°－W方向に開口している。

前庭

前庭は，玄門の前面に長さ 115cm，幅 70cm ～ 110cm ほどの平坦面があるが大部分が崩落しており，前庭の規模等不明である。

玄門

玄門は，長さ 70 ｃｍあるが，天井は完全に崩落している。

玄室

玄室は，長さ 162cm，前幅 138cm，奥幅 136cm で，平面形態は，正方形（やや縦長）で妻入り家形である。天井は，中央部から左側が完全に崩落している。奥壁及び側壁にはやや丸みを帯びて垂直に立ち上がり，天井との境には軒を示す段を有する。天井は，肋骨状加工がされており，棟を造り出している。

加工痕

玄室右側の玄室が残存しているところでは，天井頂から軒の上まで右側壁に平行に削り落された肋骨状加工痕が残る。また，軒の下にも右側壁に肋骨状加工痕が一部みられるが，軒の上に比べ薄く残る。軒のラインは，先に段を造り，その後天井部の肋骨状加工を行っている。

土層堆積状況

天井が大きく落盤しており，５層までは，落盤に伴う堆積土と考えられる。落盤前に盗掘に入られたようであり，須恵器以外の遺物はない。

遺物出土状況

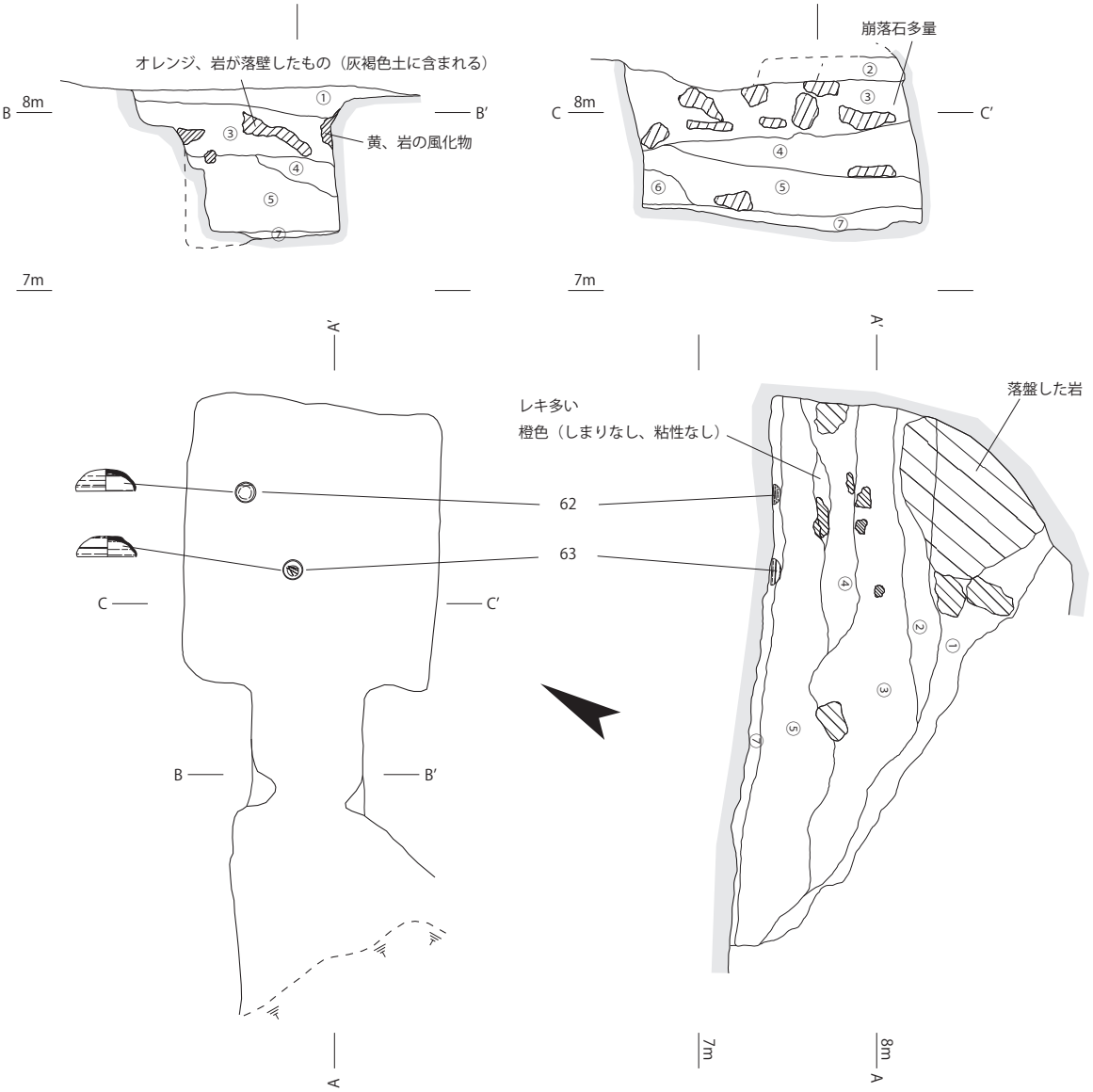
杯蓋２点が床面直上から出土している。床面直上に伏せてあり土器枕の可能性も考えられる。

出土遺物

62，63 は，玄室から出土している。どちらも床面直上で出土している。いずれも坏Ｈ蓋であり。口径１１．２㎝，Ａ７型である。J-6 号横穴墓から杯身は出土していない。

時期

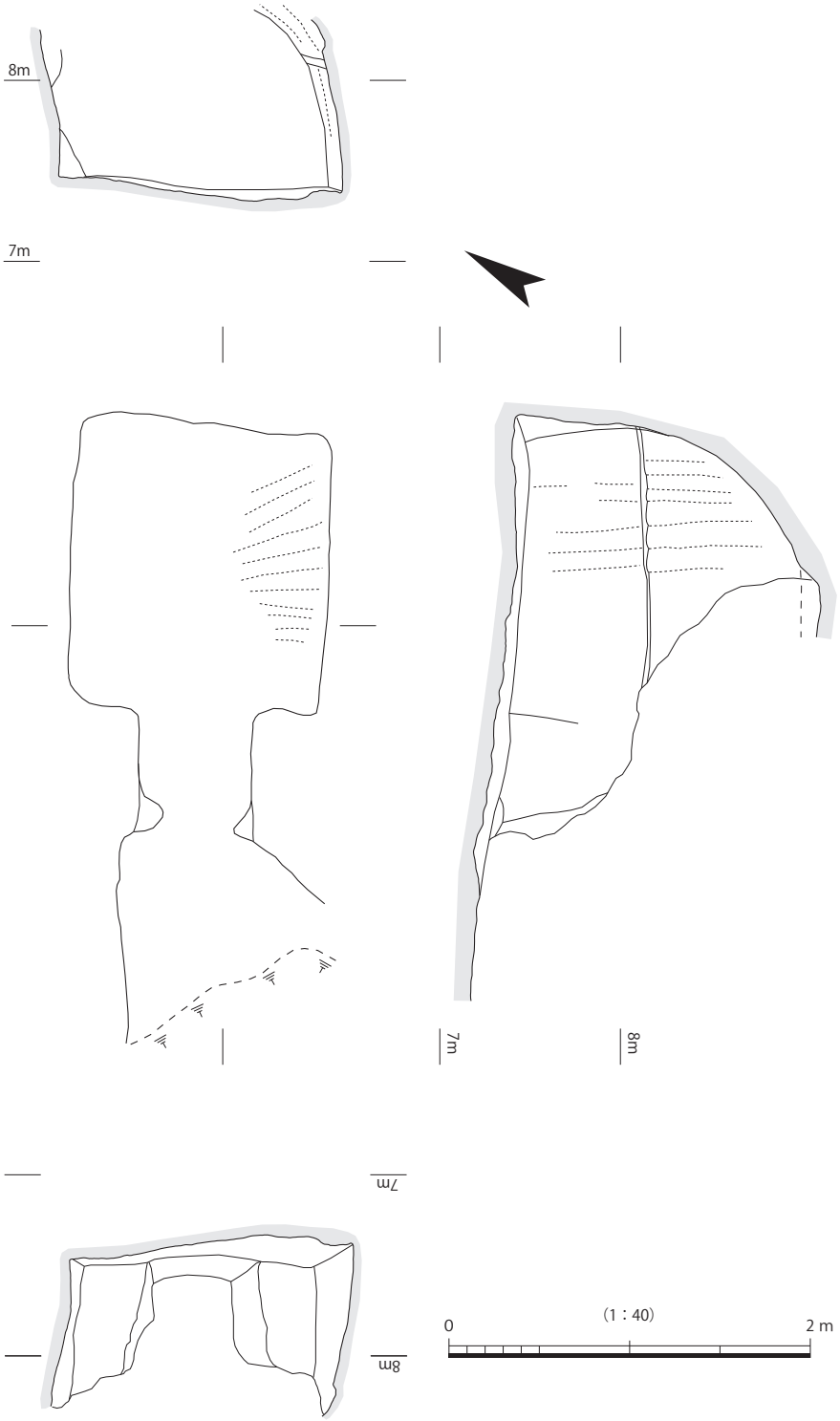
出土遺物から出雲５期と考えられる。



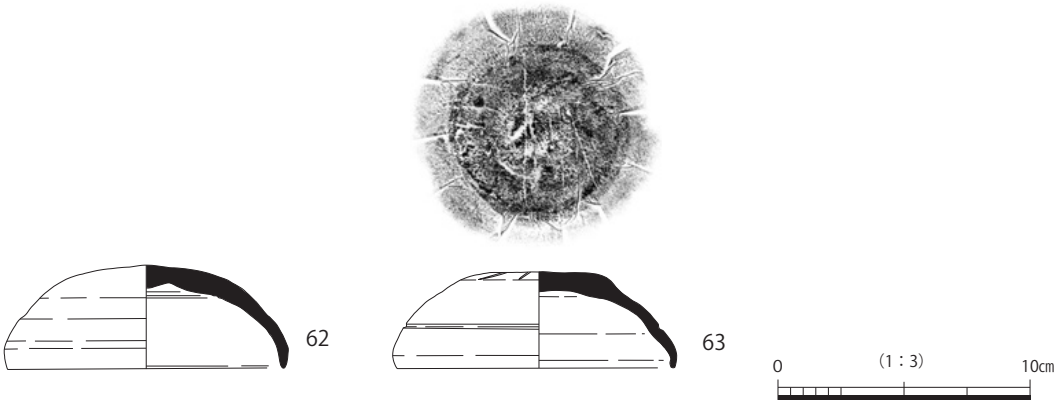
① 暗茶褐色土　しまりなし，粘性なし，崩落の石を多く含む，白色ブロック
② 黄褐色砂質土　岩質側面の堆積土
③ 灰褐色土　しまりあり，粘性なし，旧表土か？崩落石多量
④ 暗褐色土　しまりなし，粘性なし，黒色ブロック含む
⑤ 褐色土　しまりなし，粘性なし，崩落若干混じる
⑥ 黒褐色土　しまりなし，粘性なし
⑦ 青灰色土　しまりなし，粘性あり

0　（1：40）　2 m

第 35 図　J-6 号横穴墓①　遺構・土層図



第 36 図　J-6 号横穴墓②　遺構図



第 37 図　J-6 号横穴墓　出土遺物実測図

7　J-7 号横穴墓（第 38 ～ 40 図）

位置

床面玄室奥壁から玄門にかけてなだらかに下がる傾斜があり，奥壁が標高 9.5 m，前庭で 9.2 mである。Ｓ－ 50°－Ｗ方向に開口している。

前庭

完全に崩落している。

玄門

玄門の前壁は揃っておらず，造墓途中の可能性があるが，遺物が出土していることから埋葬は行われたと考えられる。長さは 90cm，幅は 80cm 前後である。

玄室

玄室左側の前壁は，造墓途中とみられる段状に残る部分がある。大きさは，左側壁側が長さ 125cm，右側壁が 85cm，幅 180cm，高さ 80cm で，不整横長長方形である。

加工痕

目立った加工痕は見られない。

土層堆積状況

４・５層は，掻き出し土。１～３層は流入土と考えられる。

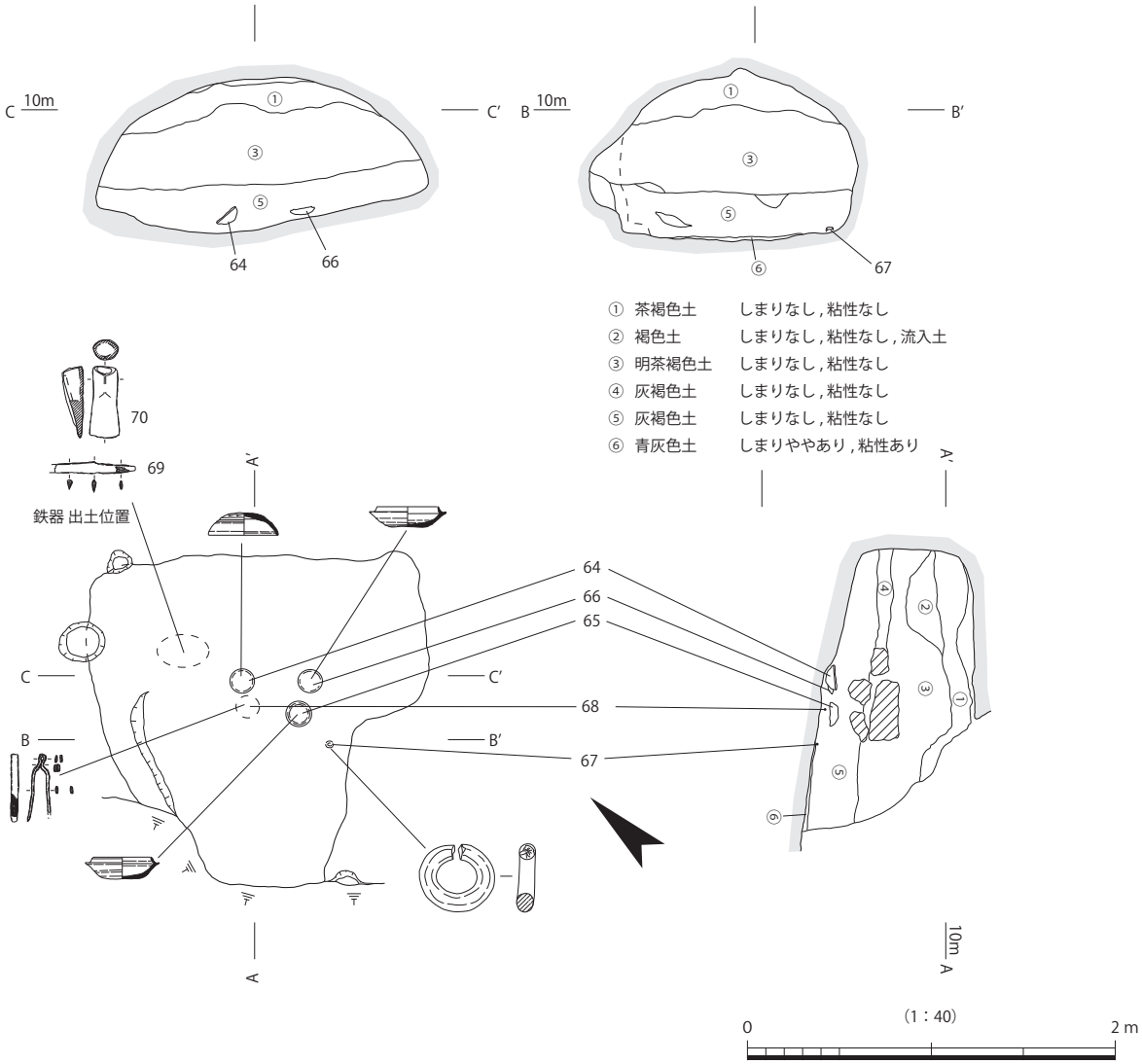
遺物出土状況

玄室中央部で，須恵器杯蓋・杯身，毛抜き状鉄器が出土している。いずれも５層中の出土である。また，６層直上からは，耳環１点が出土している。

出土遺物

64 は，杯Ｈ蓋，Ａ６型，65，66 は，杯Ｈであり，Ａ６型である。

67 は耳環である。銅芯に銀板を巻いたあと，鍍金を施して製作されたことが判明している（第４章第３節）。部分的に緑青が吹いて鍍金が剥がれている。小口はたたみ込んで仕上げている。68 は毛抜状鉄器（鑷子状鉄器）と呼ばれる鉄製品で，島根県内では本例のほかに３例の出土が知られている（第

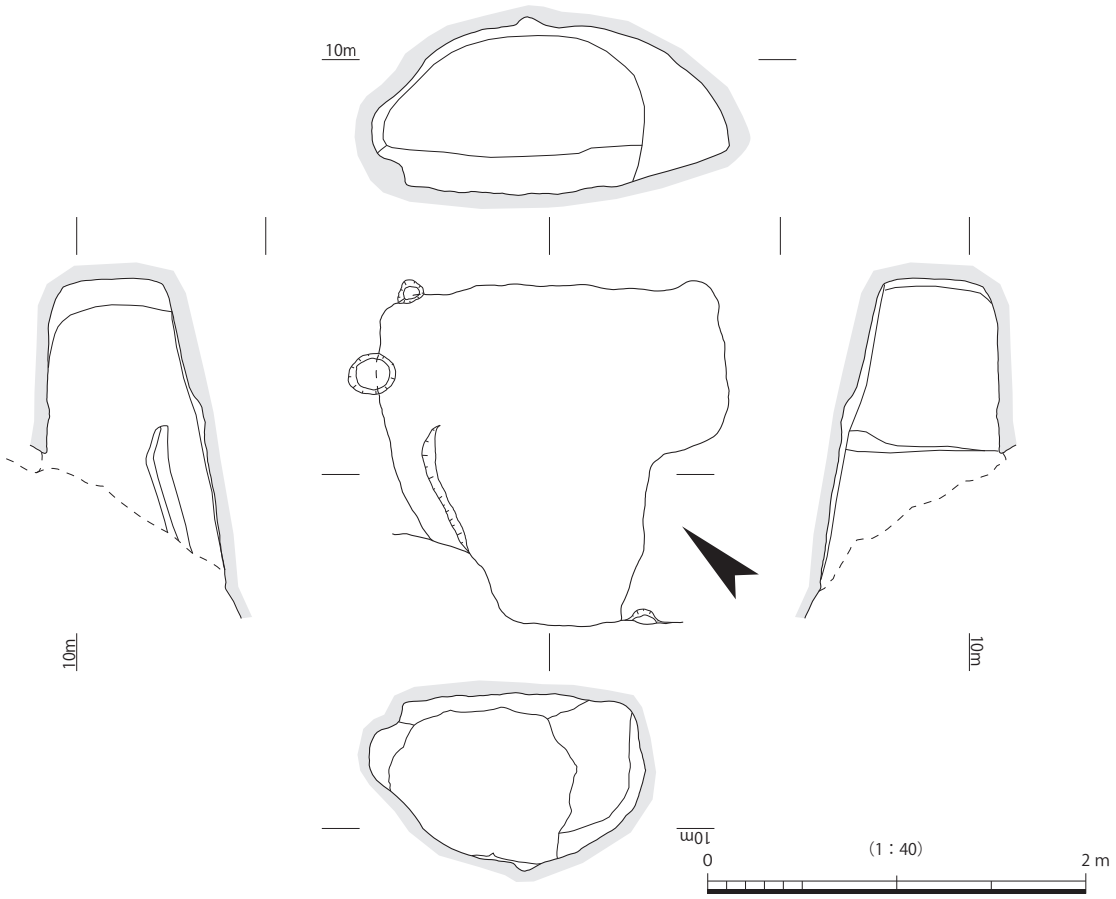


第 38 図　J-7 号横穴墓①　遺構・土層図

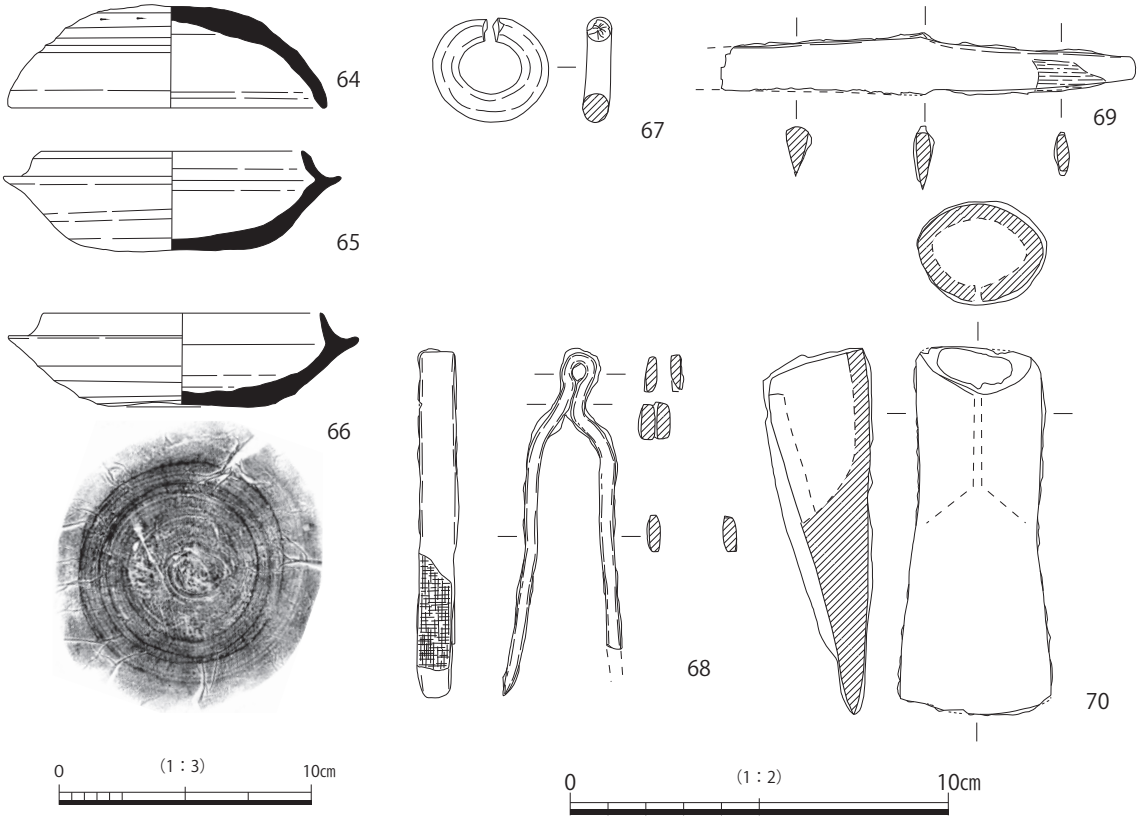
５章第３節)。１枚の細長い鉄板を折り曲げてつくっている。また，左側の外側面には布目痕が残っており，出雲市国富町上島古墳や雲南市三刀屋町六重城南１号墳の出土例と同じく，布を巻いていた可能性が高い。69 は刀子で，柄の木質が残存している。関については，わずかに湾曲する両関である。70 は袋状鉄斧である。内部に鉄錆等が詰まっており，詳しい内部構造は判別できないが，厚手のつくりから縦斧としての使用を想定できる（第５章第３節)。１枚の細長い鉄板を折り曲げてつくっている。また，左側の外側面には布目痕が残っており，出雲市国富町上島古墳や雲南市三刀屋町六重城南１号墳の出土例と同じく，布を巻いていた可能性が高い。69 は刀子で，柄の木質が残存している。関については，わずかに湾曲する両関である。70 は袋状鉄斧である。内部に鉄錆等が詰まっており，詳しい内部構造は判別できないが，厚手のつくりから縦斧としての使用を想定できる。

時期

出土遺物から，時期は出雲４期であろう。



第 39 図　J-7 号横穴墓②　遺構図



第 40 図　J-7 号横穴墓　出土遺物実測図

８　J-8 号横穴墓（第 41 ～ 43 図）

位置

床面玄室奥壁から前庭にかけてなだらかに下がり，奥壁が標高 9.4 m，前庭で 8.9 mである。Ｓ－55°－Ｗ方向に開口している。

前庭

前庭は，閉塞部の溝より前面に長さ 60cm のほどの平坦面があるが大部分が崩落しており，前庭の規模等不明である。

玄門

玄門は，長さ 125cm，高さ 85cm 前後で，平天井であるが，一部崩落している。

玄室

玄室は，長さ 182cm，前幅 140cm，奥幅 154cm，高さ 96cm で，平面形態は，縦長長方形のアーチ形である。

加工痕

床面の奥側及び左右両側壁に狭い穴状の痕跡，刺突痕が多数みられる。

土層堆積状況

５層は，掻き出し土。１～４層は流入土と考えられる。

遺物出土状況

須恵器の杯身が伏せた状態で６層直上から出土しているほか，５層中から杯蓋と短頸壺が出土しているほか，層位不明であるが刀子が１点出土している。

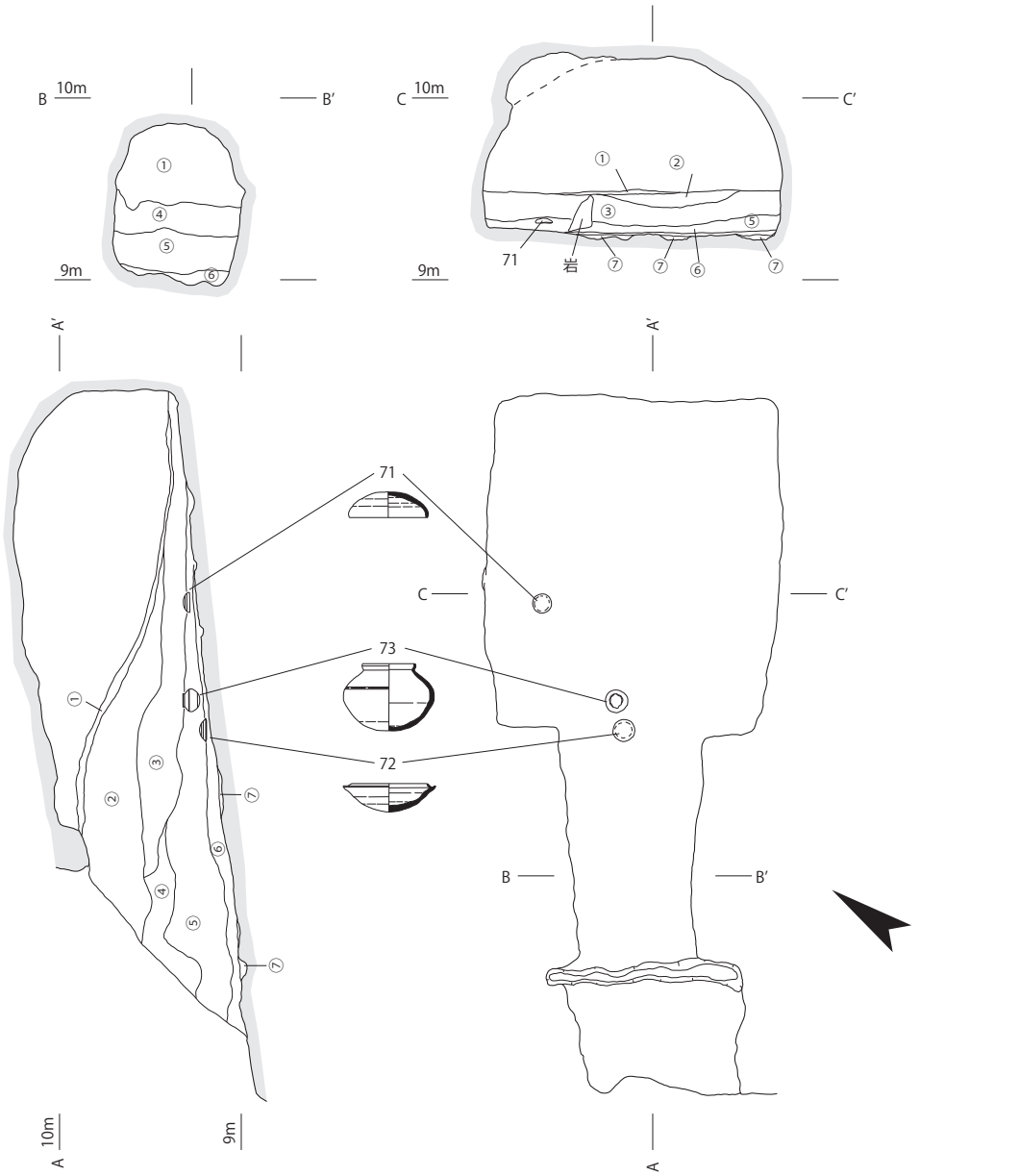
出土遺物

71 は，杯Ｈ蓋である。72 は，杯Ｈである。71，72 は，組合わない。73 は，短頸壺である。

74 は刀子で，柄の部分には木質が多く残存している。また，刃部には鞘口金具の一部が残存して銹着している。

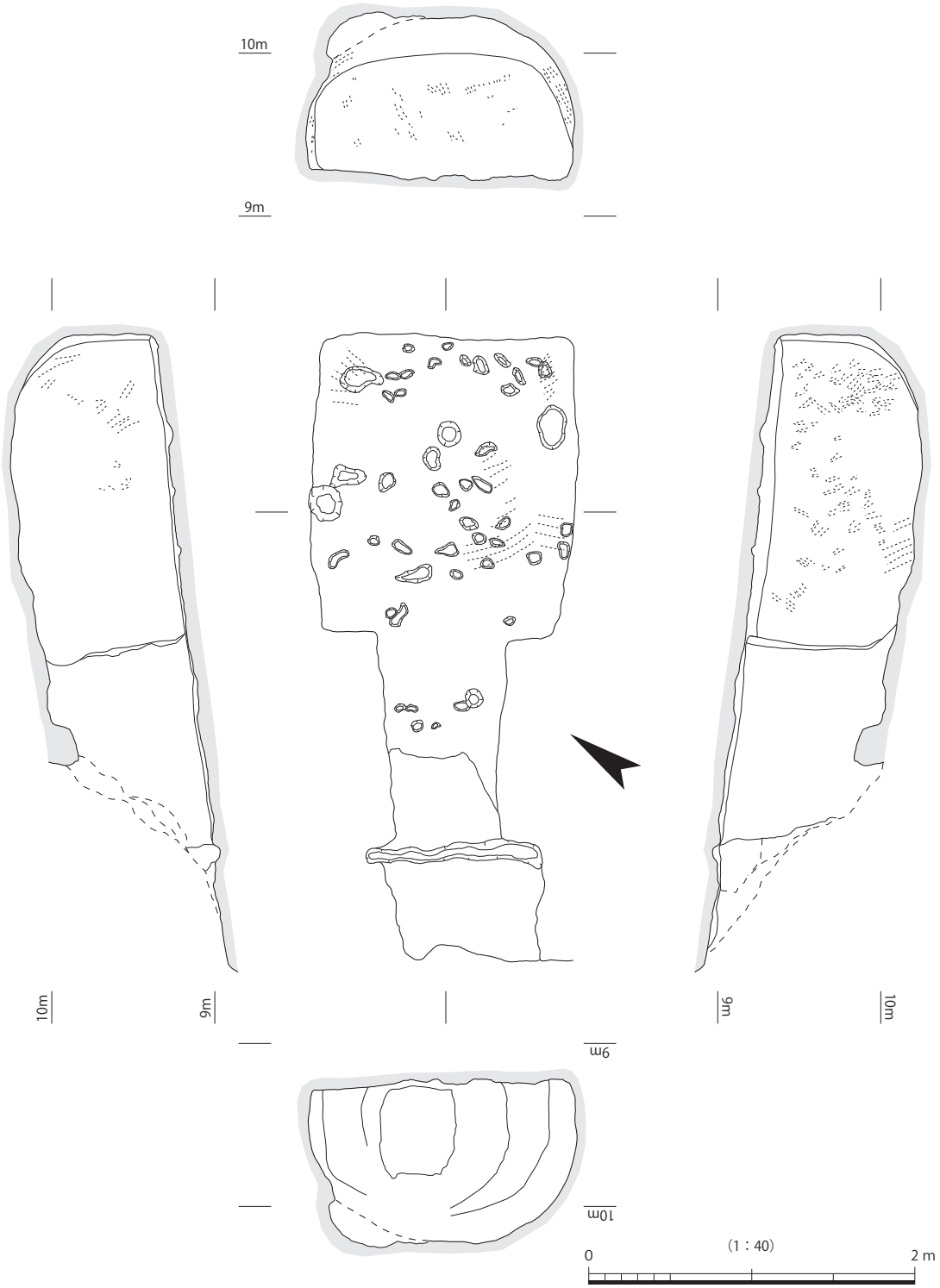
時期

出土遺物から時期は，出雲５期であろう。

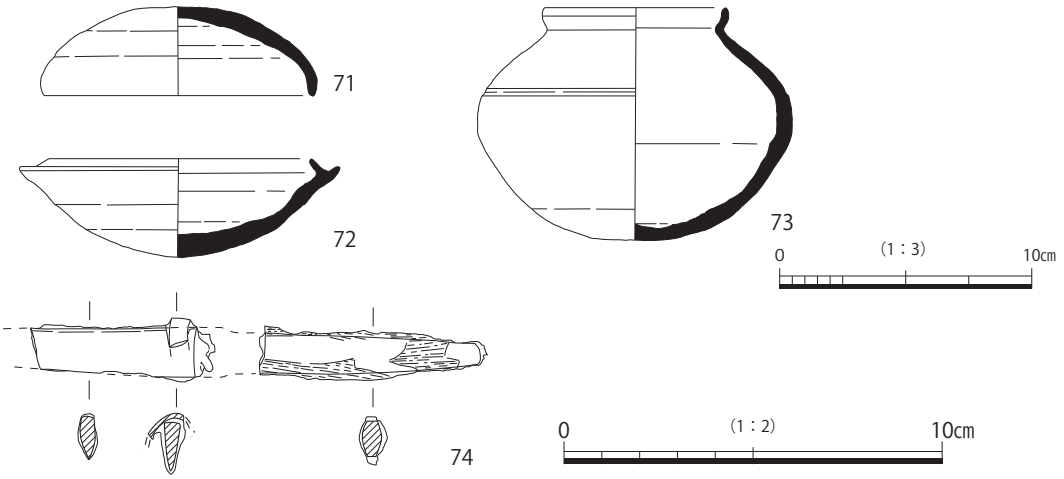


① 黄褐色土　崩落土，レキ層
② 暗灰褐色土　しまりあり，粘性なし，黄褐色レキ含む
③ 暗茶褐色土　しまりあり，粘性あり
④ 暗茶褐色土　しまりあり，粘性なし
⑤ 茶褐色土　しまりあり，粘性なし，茶褐色レキ含む
⑥ 灰茶褐色土　しまりあり，粘性なし
⑦ 青灰色土　しまりあり，粘性なし

第 41 図　J-8 号横穴墓①　遺構・土層図



第 42 図　J-8 号横穴墓②　遺構図



第 43 図　J-8 号横穴墓　出土遺物実測図

9　J-9 号横穴墓（第 44・45 図）

位置

玄室の主軸線は，Ｓ－ 70°－Ｗ方向である。標高は，7.8 m前後である。

前庭

調査範囲外であり，未調査である。

玄門・玄室

玄門は，調査範囲外であり，未調査である。玄室は，長さ不明，奥幅が 160cm，高さ 150cm で正方形（やや縦長），妻入り家形である。天井との境には軒を示す段を有する。天井は，肋骨状加工がされており，棟を造り出している。

加工痕

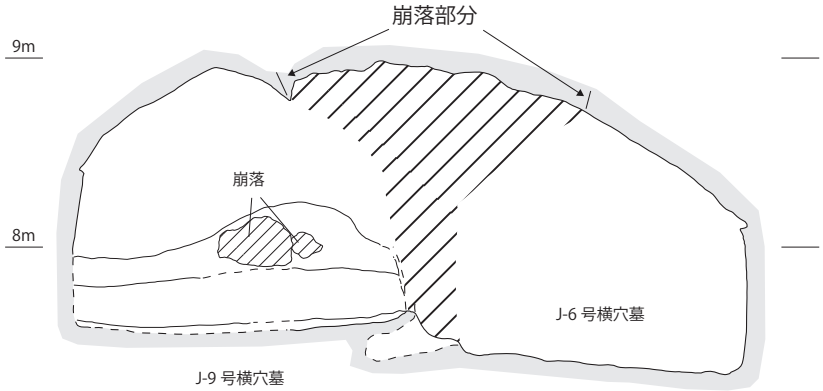
天井頂から軒の上まで左右及び奥壁側に平行に削り落された肋骨状加工痕が残る。軒のラインは，肋骨状加工を行い，その後軒のラインを付けている。

土層堆積状況

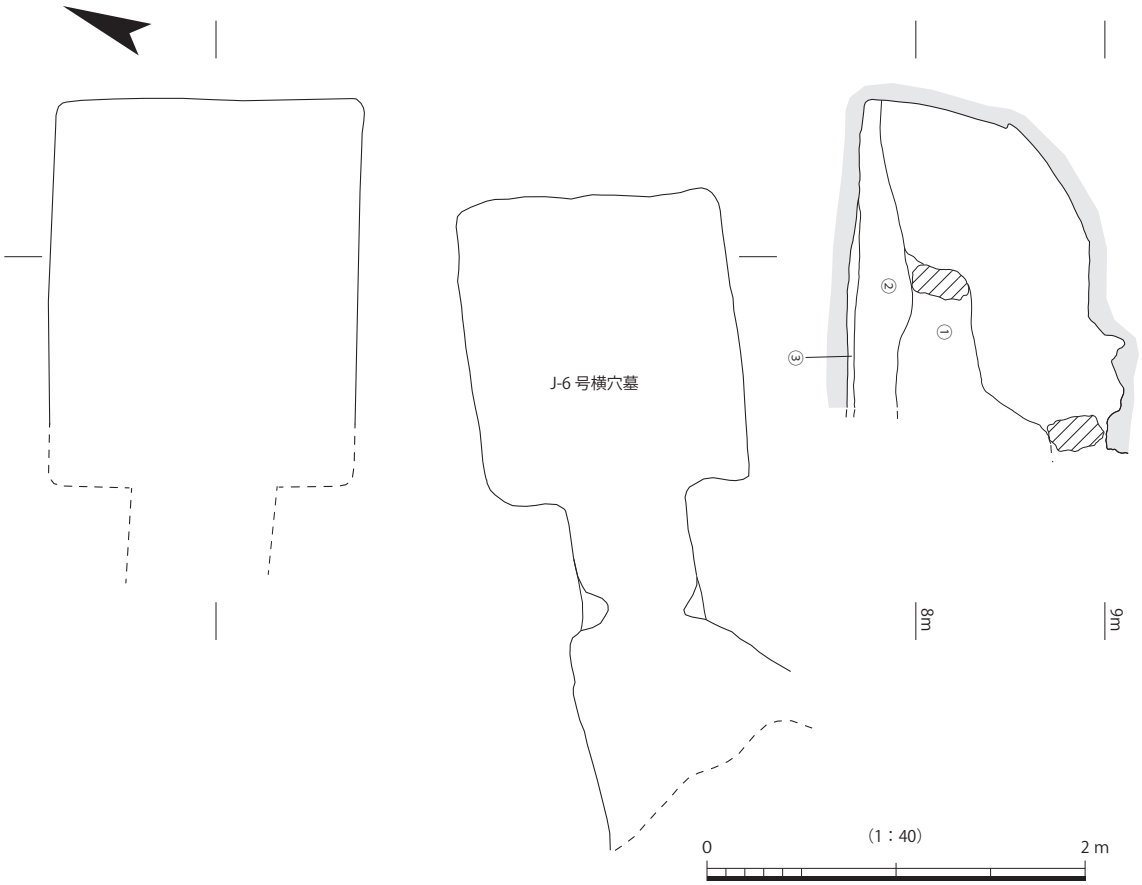
一部の土層のみの確認であるが，後の流入土である。

時期

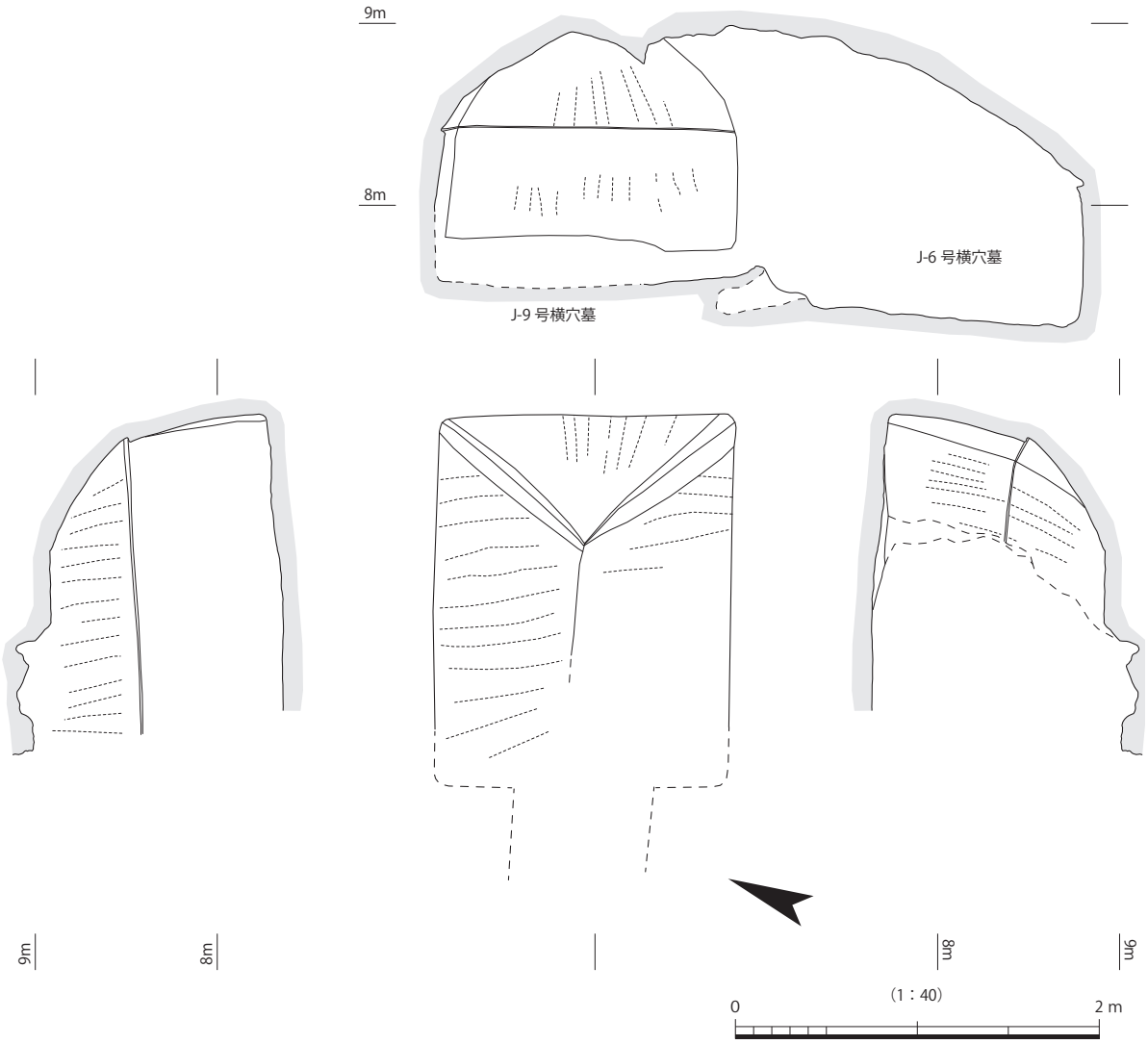
出土遺物がない為，不明である。



① 灰褐色土　しまりなし , 粘性なし , 黄褐色崩落物 , 多量に含む
② 暗灰褐色土　しまりなし , 粘性あり , 流入土か？
③ 黄褐色土　しまりあり , 粘性あり



第 44 図　J-9 号横穴墓①　遺構・土層図



第 45 図　J-9 号横穴墓②　遺構図

10　J-10 号横穴墓（第 46 図）

位置

小形の横穴である。J-1 号横穴墓の東側で確認しており，標高は 11.6 mである。Ｓ－ 65°－Ｗ方向に開口している。

前庭

玄室前に 40cm 程度の平坦面がある。

玄門

閉塞を意識したのか，開口部付近に長さ 40cm，幅 18cm の浅い溝がある。

玄室

玄室の大きさは，長さ 80cm，奥幅 20cm，前幅 52cm，高さ 34cm，玄室の床面中央部に幅 8cm，長さ 50cm の浅い溝がある。

加工痕

目立った加工痕はない。

土層堆積状況

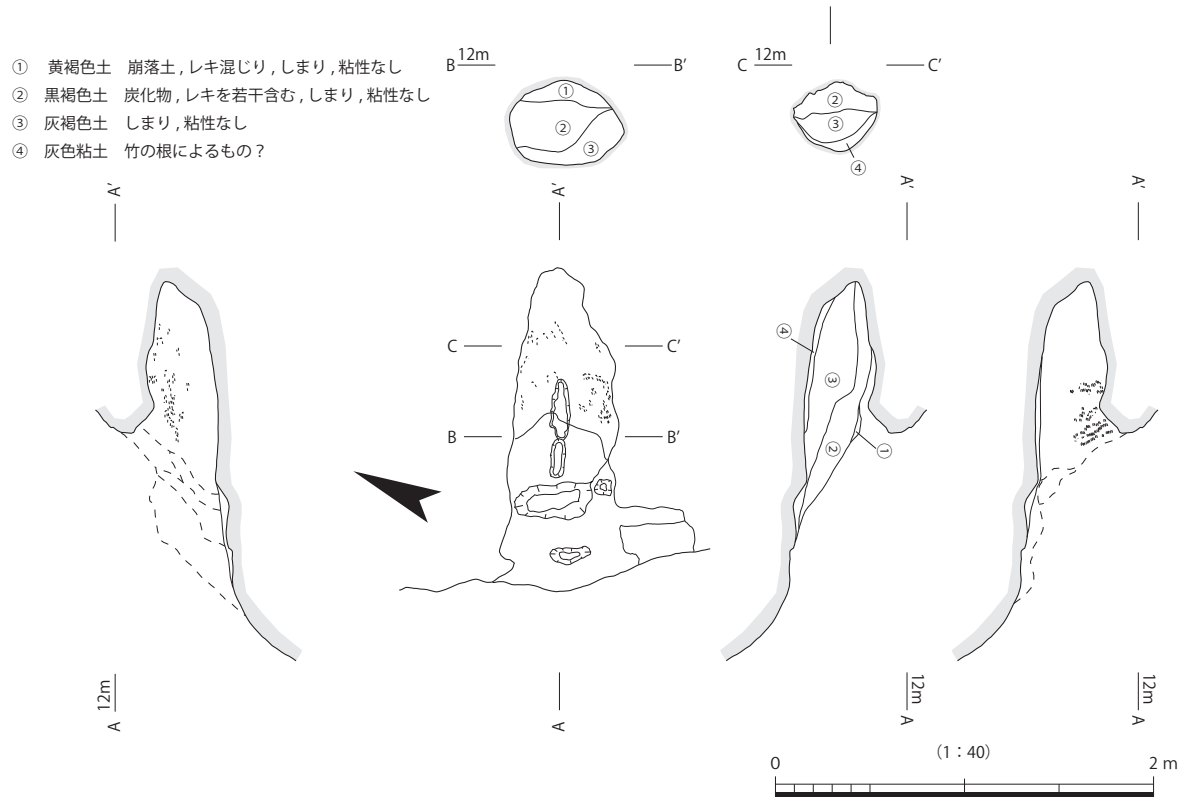
いずれの層も流入土と考えられる。

遺物出土状況

遺物は出土していない。

時期

出土遺物がなく不明である。



第 46 図　J-10 号横穴墓　遺構・土層図

11　（補足）H-1 号横穴墓（第 47 図）

位置

２次調査東側調査区外，H-2 号横穴墓の東側で以前より開口していた横穴墓である。標高は 16.5 m前後である。発掘調査は行っていないが，１次調査時の報告書に掲載している。

前庭

前庭は，玄門の前面に長さ 40㎝のほどの平坦面があるが大部分が崩落し，土砂が堆積しており，前庭の規模等不明である。

玄門

玄門は，長さ 80cm，高さ 40㎝前後で，天井アーチ形である。床面は土砂が堆積している。

玄室

玄室は，長さ 235㎝，前幅 145㎝，奥幅 210㎝，高さ 120㎝で，平面形態は，やや縦長長方形のアーチ形である。天井は，肋骨状加工がされており，棟を造り出している。

石棺

玄室奥壁沿いに組合せ式石棺を設置している。床石には４枚の切石を並べており，床石の左側には，高さ 2㎝程度のＬ字状の縁がある。蓋石があり，断面半円形の玄室には収まりきれず，蓋石が当たる部分のみ両側壁を外へ広げて棚状に造り出している。家形石棺の蓋石は頂部に約 10㎝幅の平坦面をもつ屋根形の１枚石を載せている。蓋石長 185㎝，蓋石幅 70㎝。

石床

玄室中央石棺と並行して石床を設置している。床石には２枚の切石を並べており，それぞれの床石の左側には，Ｌ字状の高さ 2㎝程度の縁がある。長さ 150㎝，幅 50 ～ 60㎝。

加工痕

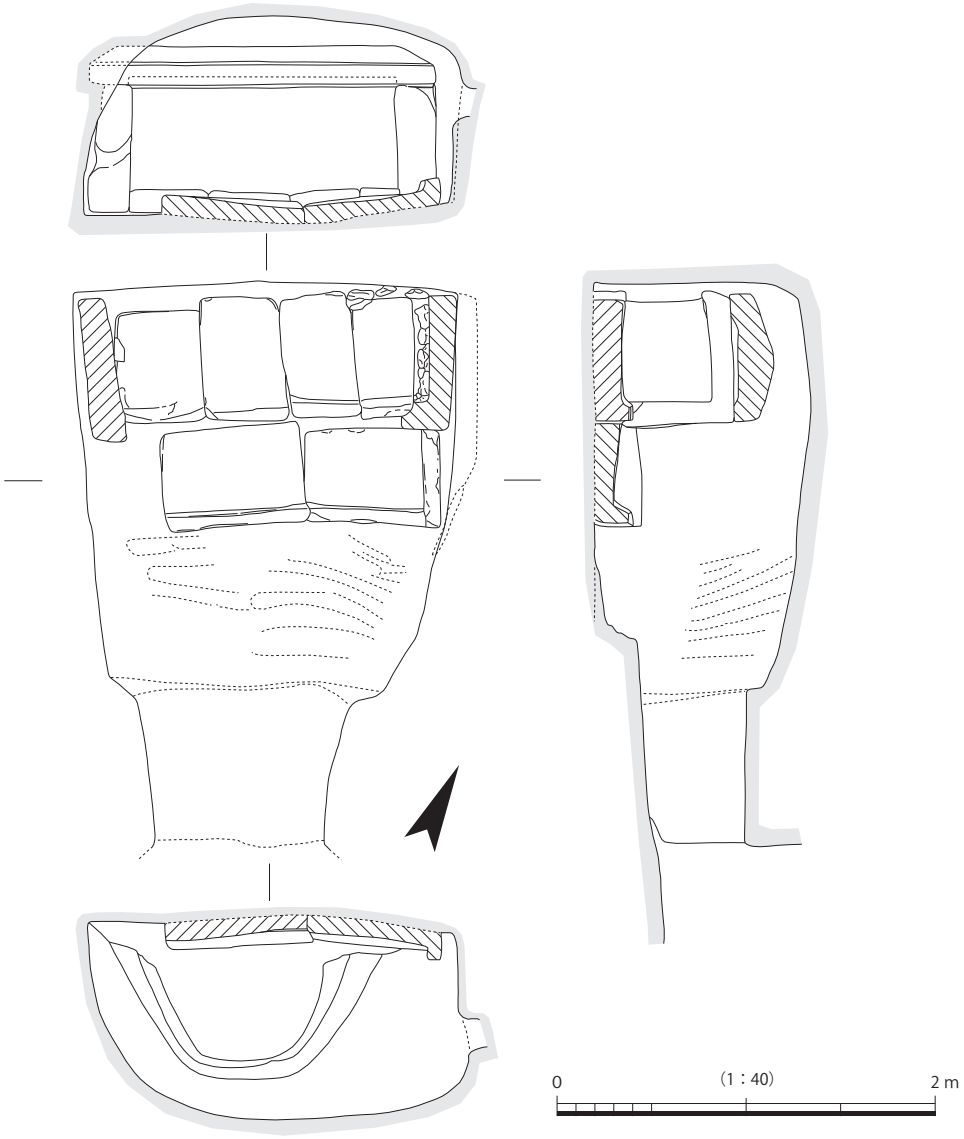
棟から軒の上まで左右の側壁に平行に削り落された肋骨状加工痕が残る。

土層堆積状況

土砂の流れ込みによる堆積がある。

遺物

出雲５期の須恵器蓋杯が出土している。



第 47 図　H-1 号横穴墓　遺構図

第 3 表　神門横穴墓群　第 10 支群　法量と玄室形態

横穴墓名	全長(m)	前庭(m)	玄門(m)	玄室(m)	玄室形態		
					平面形態	天井形態	特徴
K-1号横穴墓	5.8	2.2	0.56	2.28	縦長長方形	アーチ系	中央溝 加工痕あり
H-2号横穴墓	2.5		0.8	1	不明		製作途中 溝状掘削痕あり
H-3号横穴墓	1.7		0.85	1.6	不明		製作途中 溝状掘削痕あり
H-4号横穴墓	2.8		1.3	1.5	円形	アーチ系 丸天井形	加工痕あり 円刃系加工痕
H-5号横穴墓	4.7	1.5	1.2	2	縦長長方形	アーチ系	肋骨状加工 閉塞石一部残存
J-1号横穴墓	3.6		1.13	1.9	正方形 (やや横長)	アーチ系 寄棟家形	肋骨状加工
J-2号横穴墓	3.5		1.08	2	正方形	アーチ系 寄棟家形	肋骨状加工 石棺あり
J-3号横穴墓	2.8		1	1.7	縦長長方形	アーチ系	加工痕あり
J-4号横穴墓	3.5	0.7	0.75	2.05	正方形 (やや縦長)	アーチ系 切妻家形	肋骨状加工 線刻壁画
J-5号横穴墓	4.1	1.4	0.85	2.14	正方形	アーチ系 切妻家形	肋骨状加工 石床あり
J-6号横穴墓	3.02	0.7	0.7	1.62	縦長長方形	家形系 寄棟形	肋骨状加工
J-7号横穴墓	2.15		0.9	1.25	不整形	アーチ系	
J-8号横穴墓	3.67	0.6	1.25	1.82	正方形 (やや縦長)	アーチ系 寄棟家形	加工痕あり
J-9号横穴墓					縦長長方形	家形系 寄棟形	肋骨状加工
J-10号横穴墓	1.6	0.4	0.4	0.8	不明		製作途中 溝状掘削痕あり

第 4 表　神門横穴墓群　第 10 支群　出土遺物一覧表

横穴墓名	副葬品《土器》				
	蓋杯	高杯	甕	提瓶	その他
K-1号横穴墓	5点	破片1点 石見系1点	石見系1点	1点	有蓋低脚碗 1点
H-4号横穴墓	2点				平瓶1点
H-5号横穴墓	1点				
J-1号横穴墓					甕破片1点
J-2号横穴墓	2点				
J-3号横穴墓	2点				
J-5号横穴墓	1点				甕破片25点
J-6号横穴墓	2点				
J-7号横穴墓	3点				
J-8号横穴墓	2点				短頸壺1点

横穴墓名	副葬品《金属器》(個数)					
	大刀・鍔等	刀子	鉄鏃	鉄斧	耳環	その他
K-1号横穴墓	大刀1点，鍔1点 鞘口金具1点	鹿角装刀子1点 (その他1点)	柳葉系5点 有窓方頭鏃5点	袋状鉄斧１点		馬具6点
H-4号横穴墓	銀象嵌鍔1点				2点	
H-5号横穴墓	大刀1点，鍔1点 鞘口金具1点				2点	
J-1号横穴墓		1点	4点			
J-2号横穴墓	鍔1点					
J-3号横穴墓						
J-5号横穴墓	大刀1点 鍔1点	1点				
J-6号横穴墓						
J-7号横穴墓		1点		袋状鉄斧1点	1点	毛抜状鉄器1点
J-8号横穴墓		1点				

第５表　神門横穴墓群　第 10 支群　須恵器観察表

挿図番号	出土地点	器　種 残存率	計測値(cm)	焼成	層位	調整	色調	備考
1	K-1号横穴墓 玄室	杯蓋 完形	口　径　11.5 器　高　3.7	良好	８層 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ　ヘラキズ(中央)	外　灰白(7.5Y,7/1) 内　灰白(7.5Y,7/1)	出雲5期
2	K-1号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　11.2 最大径　13.7 器　高　3.8	良好	８層 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰白(N7/) 内　灰(N6/)	出雲5期
3	K-1号横穴墓 玄室	杯蓋 ほぼ完形	口　径　10.1 器　高　3.5	良好	８層 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ　ヘラキズ(中央)	外　灰(N5/) 内　灰(N5/)	出雲6期
4	K-1号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　9 最大径　11.1 器　高　3.7	良好	８層 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ　ヘラキズ(中央)	外　灰白(N7/) 内　灰白(N7/)	出雲6期
5	K-1号横穴墓 玄室	杯蓋 約1/2残存 反転復元	口　径　8.7 器　高　3.2	良好	８層 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰白(N7/) 内　灰白(N8/)	
6	K-1号横穴墓 玄室	高坏 脚部欠損	口　径　14.6 器　高　4.7	良好	床面 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰白(N,7/) 内　灰白(N,7/)	出雲3～4期
7	K-1号横穴墓 玄室	有蓋低脚碗 完形 蓋	口　径　9.7 宝珠径　2.6 器　高　2.9	良好	床面 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰白(N8/) 内　灰(N6/)	出雲5～6期
8	K-1号横穴墓 玄室	有蓋低脚碗 完形 碗	口　径　9.7 低　径　7.9 器　高　8.1	良好	7層中	外　ヘラ削り→ナデ 沈線 内　ナデ	外　暗灰(N,3/)～灰白 (7.5Y,7/1) 内　灰(N6/～N5/)	2.9cmに継ぎ目 出雲5～6期
9	K-1号横穴墓 玄室	高杯 ほぼ完形	口　径　15.2 器　高　16.1	良好	7層中	外　ナデ　カキメ　沈線 内　ナデ	外　灰白(5Y,7/1) 内　灰白(5Y,7/1)	出雲4期
10	K-1号横穴墓 玄室	ハソウ 完形	口　径　11.9 器　高　16.5	良好	7層中	外　カキメ 波状文 沈線 列点文　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰オリーブ(5Y,4/2) 内　灰白(7.5Y,7/1)	出雲4期　併行
11	K-1号横穴墓 玄室	提瓶 ほぼ完形	口　径　6.5 最大径　17.4 器　高　20.5	良好	7層中	外　カキメ　ヘラキズ ヘラ削り　ナデ 内　ナデ	外　灰(7.5Y,5/1) 内　灰(7.5Y,5/1)	出雲3～4期 併行
34	H-4号横穴墓 玄門 6層直上	杯蓋 完形	口　径　10.7 器　高　4	良好	6層 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ　ヘラキズ(中央)	外　灰白(5Y,7/1) 内　灰白(5Y,8/1)	出雲6期
35	H-4号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　9.6 最大径　20.5 器　高　3.5	良好	床面 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ　ヘラキズ	外　灰(5Y,6/1) 内　灰白(5Y,7/1)	平瓶に割り入れる 出雲6期
36	H-4号横穴墓 玄室	平瓶 ほぼ完形	器　高　15.1 低　径　6.5 最大径　20.5	良好	床面 直上	外　ヘラ削り 内　ヘラ削り　青海文	外　灰白(5Y,7/1)～ オリーブ黒(5Y,3/1) 内　灰(5Y,6/1)	口縁部欠損 出雲6期
40	H-5号横穴墓 玄室	杯蓋 約2/3残存 反転復元	口　径　11.8 器　高　3.8	良好	3層 ～ 4層	外　ヘラ削り→ナデ オサエ 内　ナデ	外　灰(7.5Y,6/1) 内　灰白(7.5Y,8/2)	出雲５期
46	J-1号横穴墓 玄門	壺破片 約1/5残存 反転復元	口　径　18 器　高　5	良好	4層	外　刺突文　ナデ 内　ナデ	外　灰(N4/) 内　灰(N5/)	口縁部のみ残存 刺突文をナデで消す
52	J-2号横穴墓 玄室	杯蓋 完形	口　径　11.4 器　高　3.9	良好	3層中	外　ヘラ削り→ナデ ヘラキズ 内　ナデ	外　灰(5Y,6/) 内　灰(5Y,6/1)	×印のヘラキズ 出雲５期
53	J-2号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　10.3 最大径　13.2 器　高　6	良好	3層中	外　ヘラ削り→ナデ ヘラキズ 内　ナデ	外　灰(5Y,5/1)～ 灰白(5Y,7/1) 内　灰(5Y,5/1)	底部から伸びる ヘラキズ 出雲５期
55	J-3号横穴墓	杯身 完形	口　径　8.9 最大径　12.4 器　高　3.7	良好	床面 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　暗灰 内　灰	出雲５期

第６表　神門横穴墓群　第 10 支群　須恵器観察表

挿図番号	出土地点	器　種 残存率	計測値(cm)	焼成	層位	調整	色調	備考
56	J-3号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　10.4 最大径　12.7 器　高　3.5	良好	床面 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰白(5Y,7/2) 内　灰白(5Y,7)	出雲５期
57	J-5号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　11.4 最大径　14 器　高　4	良好	5層 直上	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰(5Y,5/1)～ 灰白(5Y,8/1) 内　灰(5Y,6/1)	大きく変形している 出雲５期
58	J-5号横穴墓 玄室	甕破片 口縁部	器　高　15.7	良好	2層中 ～ 5層中	外　ナデ　沈線　ヘラ削り 波状文 内　ナデ	外　灰(7.5Y,5/1) 内　灰(7.5Y,5/1)	参考：口径(約45cm)
62	J-6号横穴墓 玄室	杯蓋 完形	口　径　11 器　高　4.1	良好	床面 直上	外　ナデ 内　ナデ	外　灰白(2.5Y,8/2) 内　灰(5Y,6/1)	出雲５期
63	J-6号横穴墓 玄室	杯蓋 完形	口　径　10.9 器　高　3.8	良好	床面 直上	外　沈線　ヘラキズ　ナデ 内　ナデ	外　灰(5Y,5/1) 内　灰(5Y,5/1)	天井部に4本の ヘラキズ 出雲５期
64	J-7号横穴墓 玄室	杯蓋 完形	口　径　12.4 器　高　4.1	良好	5層中	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　暗灰(3N) 内　灰(7.5Y,6/1)	出雲４期
65	J-7号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　10.4 最大径　13.4 器　高　4	良好	5層中	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰(5Y,5/1) 内　灰(5Y,5/1)	出雲４期
66	J-7号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　10.4 最大径　14 器　高　3.7	良好	5層中	外　ヘラ削り→ナデ ヘラキズ(底面) 内　ナデ	外　灰(5Y,4/1) 内　灰(5Y,4/1)	出雲４期
71	J-8号横穴墓 玄室	杯蓋 完形	口　径　10.7 器　高　3.6	良好	5層中	外　ナデ 内　ナデ	外　灰白(5Y,7/2) 内　灰(5Y,7/2)	出雲５期
72	J-8号横穴墓 玄室	杯身 完形	口　径　10.4 最大径　12.7 器　高　3.9	良好	6層 直上	外　ナデ 内　ナデ	外　灰(7.5Y,6/1) 内　灰(7.5Y,6/1)	出雲５期
73	J-8号横穴墓 玄室	短頸壺 ほぼ完形 反転復元	口　径　7.3 最大径　12.5 器　高　9.2	良好	5層中	外　ヘラ削り→ナデ 内　ナデ	外　灰白(2.5Y,8/2) 内　灰白(2.5Y,8/2)	

第７表　神門横穴墓群　第 10 支群　耳環観察表

挿図番号	出土地点	材質	径(縦×横)	断面	開き部	層位	状態・備考
37	H-4号横穴墓 玄室	芯銅合金 金貼	2.6×2.8	0.8	0.2	6層 直上	錆化が激しく、全体に緑青が吹く
38	H-4号横穴墓 玄室	芯銅合金 金貼	2.6×2.8	0.8	0.15	6層 直上	錆化が激しく、全体に緑青が吹く 一部欠損あり
41	H-5号横穴墓 玄門	芯銅合金 金貼	2.4×2.5	0.75	0.1	4層中	鍍金残存良好
42	H-5号横穴墓 玄門	芯銅合金 金貼	2.4×2.5	0.75	0.15	10層中	鍍金残存良好 やや色あせる
67	J-7号横穴墓 玄室	芯銅合金 金貼	2.75×3.1	0.7	0.15	6層 直上	鍍金部分がさけている 一部緑青が吹く

数値計測の単位はcm

第 8 表　神門横穴墓群　第 10 支群　金属製品観察表

挿図番号	出土地点	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	層位	備考
12	K-1号横穴墓 玄室	大刀	103.4	5.1	1.4	7 層中	大きく曲がる
13	K-1号横穴墓 玄室	鍔	5.9	2.9	0.2	7層 直上	
14	K-1号横穴墓 玄室	鞘口金具	2.1	1.7	0.2	10層中	内面に木質が 残存
15	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 柳葉系	9.1	1.9	0.5	床面 直上	
16	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 柳葉系	9.5	2.2	0.45	8層～ 床面直上	
17	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 柳葉系	8.7	1.9	0.5	床面 直上	
18	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 柳葉系	10.85	1.8	0.3	床面 直上	
19	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 柳葉系	10.95	2.3	0.5	床面 直上	
20	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 有窓方頭式	8.1	2.8	0.5	床面 直上	
21	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 有窓方頭式	2.4	4.4	0.5	床面 直上	
22	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 有窓方頭式	6.1	2.9	0.8	床面 直上	
23	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 有窓方頭式	8.3	4.5	0.7	床面 直上	
24	K-1号横穴墓 玄室	鉄鏃 有窓方頭式	9.4	4.3	0.5	床面 直上	
25	K-1号横穴墓 玄室	馬具 鈴具	5.7	3.2	0.6	床面 直上	
26	K-1号横穴墓 玄室	馬具 鈴具	8.4	6.1	1.2	床面 直上	
27	K-1号横穴墓 玄室	馬具	6.7	0.9	0.6	床面 直上	
28	K-1号横穴墓 玄室	馬具	8.4	0.6	0.5	床面 直上	
29	K-1号横穴墓 玄室	馬具	5.9	1.4	0.5	床面 直上	
30	K-1号横穴墓 玄室	馬具 鈴具	6	4.45	0.8	床面 直上	
31	K-1号横穴墓 玄室	刀子 鹿角装刀子	9.4	1.4	0.5	床面 直上	一部に鹿角残存
32	K-1号横穴墓 玄室	刀子	5	1.1	0.4	10層中	
33	K-1号横穴墓 玄室	袋状鉄斧	6.1	2.8	2	床面 直上	

第 9 表　神門横穴墓群　第 10 支群　金属製品観察表

挿図番号	出土地点	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	層位	備考
39	H-4号横穴墓 玄室	鍔	1.4	2.1	0.37	6層 直上	銀象嵌あり 平圏線C字文
43	H-5号横穴墓 玄門・玄室	大刀	37.6	3.3	0.6	4層中	
44	H-5号横穴墓 玄室	鍔	7.4	5.3	0.4	4層	
45	H-5号横名墓 玄室	鞘口金具	1.6	3.6	0.4	4層	内面に木質が 残存
47	J-1号横穴墓 玄室	鉄鏃	12.4	2.5	0.4	4層中	
48	J-1号横穴墓 玄室	鉄鏃	6.3	3.1	0.3	4層中	
49	J-1号横穴墓 玄室	鉄鏃	7.85	3.5	0.3	4層中	
50	J-1号横穴墓 玄室	鉄鏃	10.4	2.5	0.35	4層中	
51	J-1号横穴墓 玄室	刀子	6.75	1.2	0.4	3層～ 4層	
54	J-2号横穴墓 石棺上	鍔	10.7	8.6	0.8	石棺 直上	
59	J-5号横穴墓 玄室	大刀	94	3.3	0.5	5層中	
60	J-5号横穴墓 玄室石床下	鍔	8.8	7.3	0.4	6層中	ほぼ完形
61	J-5号横穴墓 石床と側壁の間	刀子	14.5	1.7	0.4	2層中	木質残る
68	J-7号横穴墓 玄室	毛抜状鉄器	9.2	2.9	1	5層中	
69	J-7号横穴墓 玄室	刀子	11	1.5	0.6		
70	J-7号横穴墓 玄室	袋状鉄斧	9.8	4	2.9		
74	J-8号横穴墓 玄室	刀子	10.9	1.3	0.5		鞘口金具と 木質が残存

第 4 章　自然科学的分析の結果

第 1 節　検出石棺・石床の遺骸痕跡

1　はじめに

神門横穴墓群 10 支群は島根県出雲市神西沖町に位置し，神西湖を遠望する丘陵崖面に掘られた横穴墓群の一部である。

本報では，神門横穴墓群 10 支群発掘調査に伴い J-2 号横穴墓の石棺，J-5 号横穴墓の石床を覆う堆積物を対象に，遺骸痕跡を確認する目的で実施した全リン分析，ＣＮ（Ｓ）分析，粒度分析について報告する。

実施諸分析のうち全リン分析は出雲市より委託を受け文化財調査コンサルタントが実施した。ＣＮ（Ｓ）分析，粒度分析は島根大学エスチュアリー研究センター瀬戸准教授の御協力の下，実施したものである。

2　分析試料について

各種図面は，出雲市より提供を受けた原図をもとに作成した。分析試料は，文化財調査コンサルタント（株）が該当横穴墓の石床，石棺内側に 10cm メッシュの区画を設定し，採取した。

第 48 図（神門横穴墓群 10 支群平面図）中に，試料を採取した横穴墓の位置を示す。第 49，50 図に J-2 号横穴墓の平面図及び C-C' 断面を，第 51 図に J-5 号横穴墓の平面図を示す。

各横穴墓内の石棺・石床内側に 10cm × 10cm のグリッドを設定し，試料を採取した。更に J-2 号横穴墓 C-C' 断面では上下左右 10cm 間隔で 12 試料を（C-C' 断面底部で，A10，B10，C10，D10 の 4 試料を採取している。）採取した。

3　分析方法

(1) 全リン分析方法

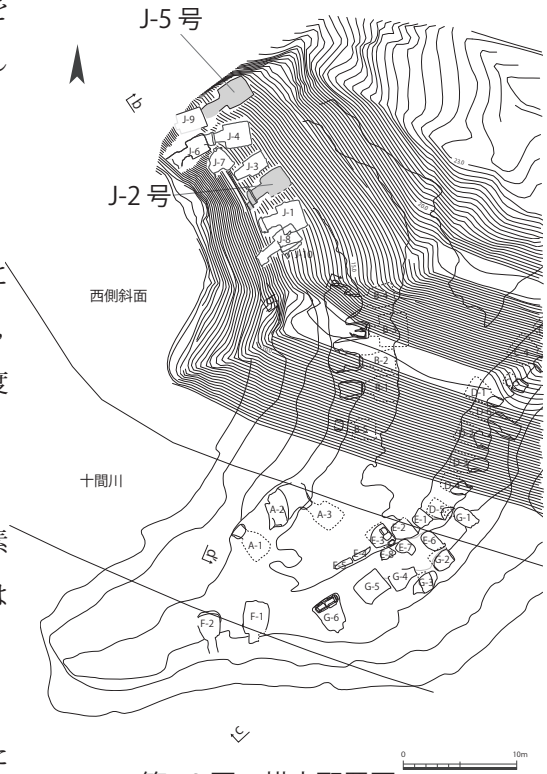
フッ化水素酸分解法（日本土上肥料学会監修，1997）に従い検液の調整を行い，モリブデン酸（日本薬学会編，2010）による定量に従い全（総）リン量を求めた。濃度測定には紫外可視分光光度計（V-670）を使用した。

(2) ＣＮ（Ｓ）分析方法

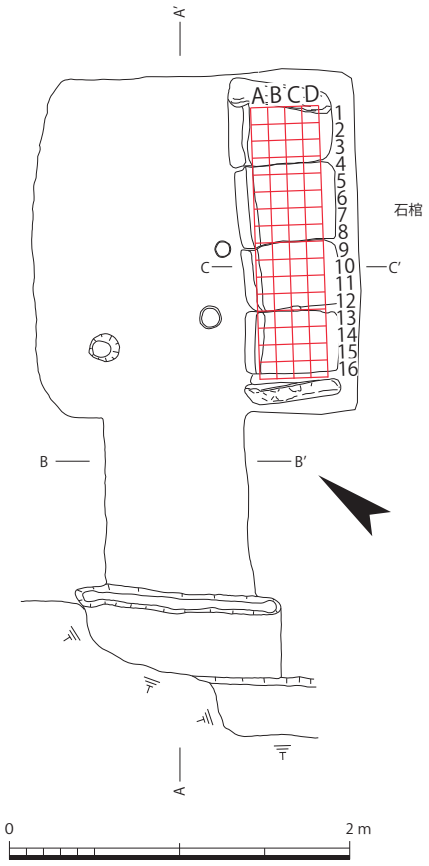
渡辺（2020）に従い前処理を行い，濃度測定には元素分析機 EA-1108 を使用した。また，標準準試料には BBOT を用いている。

(3) 粒度分析方法

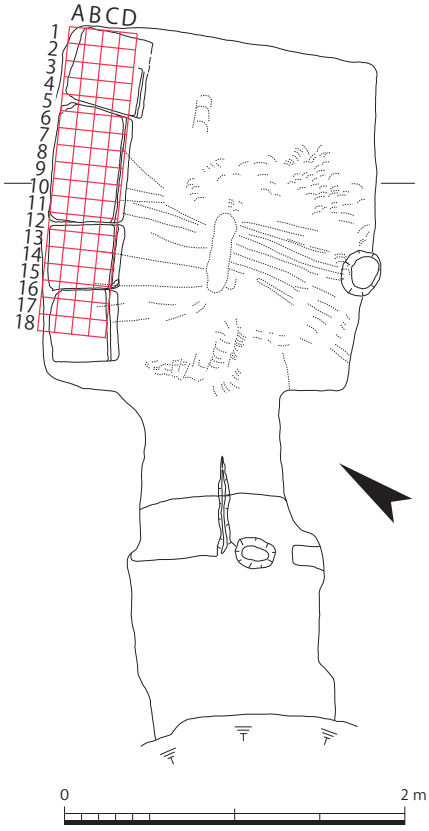
分析試料およそ 0.1g 程度を秤量，十分な水を加えた後，H_2O_2 をおよそ 0.3cc 加え分散。一昼夜静止後，水



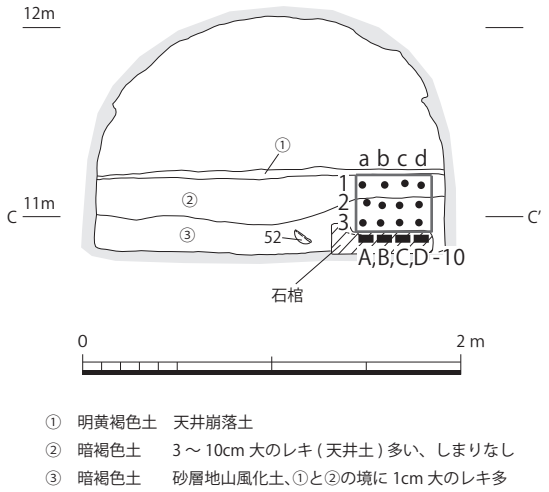
第 48 図　横穴配置図



第 49 図　J-2 号横穴墓平面図



第 51 図　J-5 号横穴墓平面図



第 50 図　J-2 号横穴墓 C-C' 断面図

を加え 25cc として分析試料とした。分析には SALD-2300 を使用した。

4 分析結果

(1) 全リン分析及びＣＮ（Ｓ）分析結果

採取した 148 試料のうち，石棺，石床上下端の 16 試料を除く 132 試料について全リン分析及びＣＮ（Ｓ）分析結果を実施した。分析結果を第 52 ～ 56 図，第 10 表に示す（第 10 表には，S，C/N，C/S も示した。）。また，濃度分布の特徴を以下に示す。

① J-2 号横穴墓

各平面分布図の左下側に玄門が位置する。

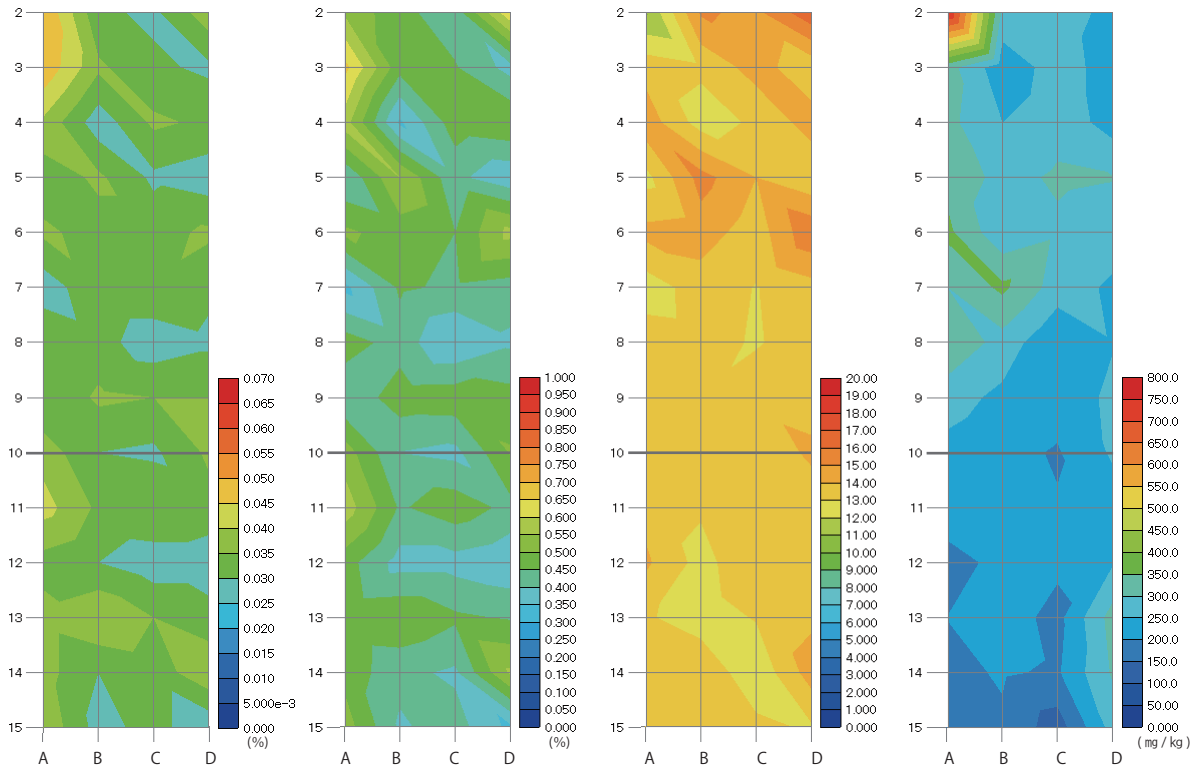
各元素の平面分布では，Ｎ（窒素），Ｃ（炭素），Ｐ（リン）共に A2，3 で高濃度を示す。Ｎ，Ｃの分布はランダムで分布に傾向が認められないが，それぞれの値は良い相関関係を示し，よく似た分布傾向を示す。一方Ｐは A2 をピークに拡散するように分布する。また，Ｃ / Ｎは A2 で 10.90 と最も低い値を示す。

C-C' 断面での分布では，Ｎ，Ｃ，Ｐともに，上部ほど濃度が薄くなる傾向にあった。

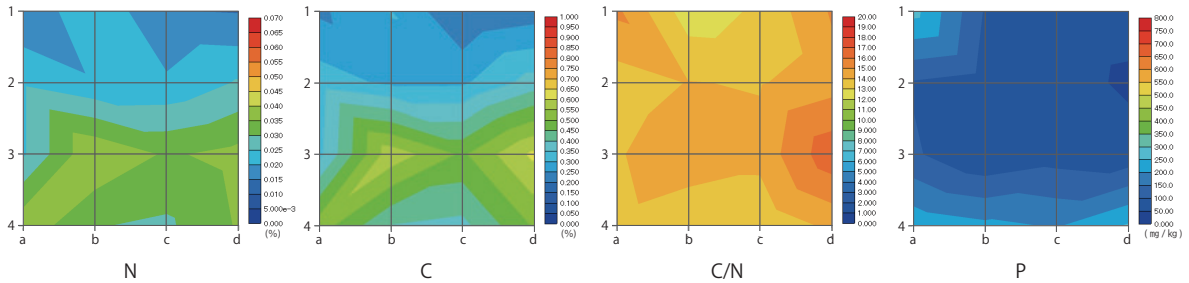
② J-5 号横穴墓

各平面分布図の右下側に玄門が位置する。

各元素の平面分布では，Ｎ，Ｃは 2，3 ラインで高濃度を示す。一方で，およそ 5 ラインより下方では，ＮはＡ，Ｂラインが低濃度，Ｃ，Ｄが高濃度を，ＣはＡ，Ｂラインが高濃度，Ｃ，Ｄが低濃度と全く異なる濃度分布を示す。Ｐは A8，9，B14 で高濃度を示し，拡散するように分布する。一方，Ｎ，Ｃが高濃度を示す 2，3 ラインではＰの濃度は低い。



第 52 図　J-2 号横穴墓の C, N, C/N, P の分布



第 53 図　J-2 号横穴墓 C-C7 断面の C, N, C/N, P の分布

(2) 粒度分析結果

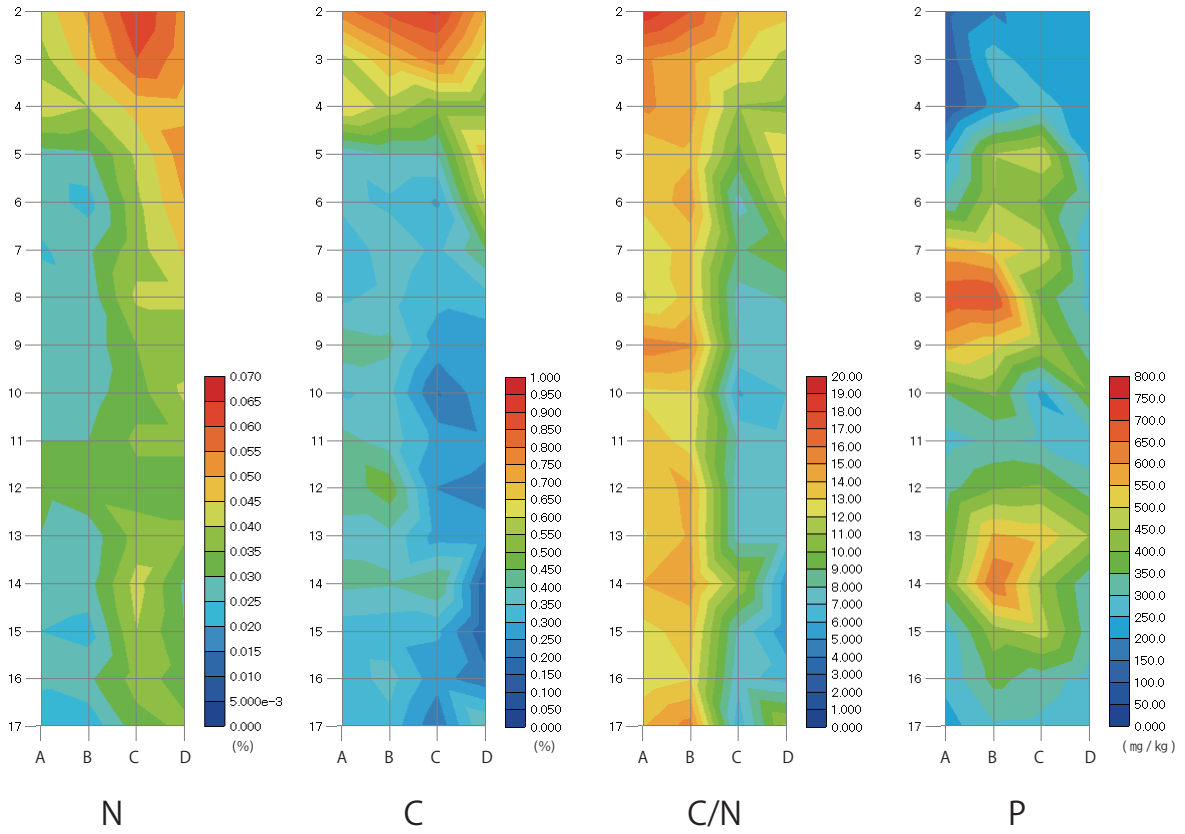
全リン，ＣＮ分析の残試料を対象として，粒度分析を行った。このため，残試料がなかった試料について，測定結果に抜けが生じている。粒度分析結果として第 11，12 表に各横穴墓の 95，84，75，50，25，16，5 積算％粒径と粒度係数，第 57 図に 50 積算％の粒径分布を示す。粒度分布の特徴を以下に示す。

① J-2 号横穴墓

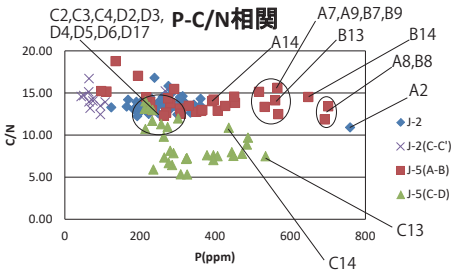
50 積算％が 3 φに集中する傾向にあるが，分級度（標準偏差σ）は 1.69 ～ 2.53 とバラツキが大きい。また，J-5 に比べ粗粒である。

② J-5 号横穴墓

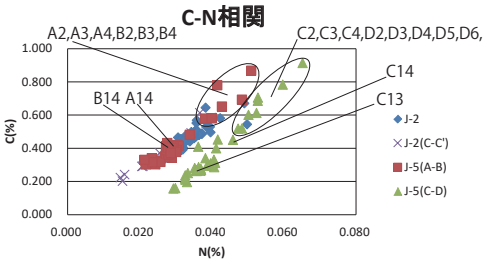
50 積算％は 2.99 ～ 6.09 φと試料間に差が生じているが，分級度（標準偏差σ）は 2.08 ～ 2.62 と



第 54 図　J-5 号横穴墓の C, N, C/N, P の分布



第 55 図　P-C 相関図



第 56 図　C-N 相関図

ややバラツキが小さい。

図面上方が細粒，下方が粗粒の傾向を示すが，A3，A10，C14 など小粒径のピークも幾つか認められる。

5 遺骸の配置について

J-2 号横穴墓，J-5 号横穴墓でそれぞれ特徴的な P の分布を示した。

(1) J-2 号横穴墓

P 濃度は 15 ラインから 2 ラインに向かい徐々に高くなり，A2 で最も高率を示す。また，粒度分析結果では P 濃度分布と対応するように細粒化が認められる。

羨道方向（15 ライン）から奥方向（2 ライン）に向かって細粒化することは，横穴墓内の堆積物が羨道から流れ込んだことと一致する。また，奥に位置する A2 で P 濃度が最も高かったことは，羨道方向からの堆積物の移動とともに遺骸（骨）が移動した可能性を示唆する。このことは，C / N が石

第 10 表　PCN 測定結果

地区	地点	試料	Nitrogen (%)	Carbon (%)	Hydrogen (%)	Sulphur (%)	C/N	C/S	Phosphorus ppm(mg/kg)
J-2号横穴	A	2	0.050	0.543	0.000	0.021	10.90	25.99	760
		3	0.049	0.669	0.000	0.016	13.65	42.95	321
		4	0.039	0.576	0.000	0.016	14.61	36.37	314
		5	0.032	0.404	0.000	0.007	12.65	59.96	335
		6	0.036	0.511	0.000	0.024	14.30	20.96	362
		7	0.027	0.336	0.000	0.032	12.44	10.43	300
		8	0.035	0.478	0.000	0.022	13.59	22.10	344
		9	0.030	0.406	0.000	0.012	13.50	35.05	271
		10	0.038	0.527	0.000	0.022	13.70	24.02	235
		11	0.042	0.580	0.000	0.011	13.70	54.01	247
		12	0.033	0.474	0.000	0.017	14.19	27.55	169
		13	0.037	0.488	0.000	0.025	13.13	19.61	201
		14	0.037	0.485	0.000	0.037	13.01	13.24	184
		15	0.039	0.527	0.000	0.010	13.36	50.51	165
	B	2	0.031	0.464	0.000	0.004	15.14	108.63	289
		3	0.036	0.468	0.000	0.007	13.18	69.17	216
		4	0.027	0.341	0.000	0.013	12.55	26.83	250
		5	0.036	0.551	0.000	0.031	15.39	17.57	284
		6	0.033	0.476	0.000	0.012	14.51	39.17	261
		7	0.034	0.458	0.000	0.006	13.50	83.12	361
		8	0.032	0.426	0.000	0.027	13.43	15.77	280
		9	0.036	0.479	0.000	0.007	13.14	73.55	238
		10	0.030	0.399	0.000	0.025	13.20	15.75	213
		11	0.034	0.444	0.000	0.020	13.13	21.87	217
		12	0.030	0.379	0.000	0.006	12.63	64.70	223
		13	0.040	0.495	0.000	0.009	12.48	57.89	224
		14	0.030	0.413	0.000	0.024	13.82	17.42	206
		15	0.028	0.393	0.000	0.039	13.94	10.05	191
	C	2	0.029	0.422	0.000	0.018	14.76	24.01	268
		3	0.031	0.454	0.000	0.007	14.44	62.01	274
		4	0.036	0.480	0.000	0.019	13.16	24.65	283
		5	0.029	0.413	0.000	0.021	14.00	19.72	307
		6	0.033	0.450	0.000	0.009	13.44	47.43	291
		7	0.034	0.440	0.000	0.011	12.96	39.76	276
		8	0.027	0.349	0.000	0.013	12.88	26.73	204
		9	0.035	0.483	0.000	0.009	13.79	51.46	218
		10	0.029	0.385	0.000	0.013	13.21	29.33	196
		11	0.035	0.481	0.000	0.040	13.89	12.03	203
		12	0.027	0.380	0.000	0.016	13.86	24.09	210
		13	0.035	0.459	0.000	0.013	13.08	34.13	184
		14	0.032	0.391	0.000	0.016	12.23	24.79	193
		15	0.032	0.422	0.000	0.014	13.28	30.09	124
	D	2	0.038	0.643	0.000	0.006	16.79	100.74	239
		3	0.029	0.381	0.000	0.008	13.27	48.53	227
		4	0.034	0.496	0.000	0.009	14.46	54.13	228
		5	0.027	0.360	0.000	0.013	13.15	28.28	302
		6	0.036	0.567	0.000	0.020	15.81	28.51	276
		7	0.031	0.424	0.000	0.010	13.62	42.34	241
		8	0.029	0.391	0.000	0.019	13.69	20.29	247
		9	0.035	0.469	0.000	0.016	13.52	29.72	261
		10	0.036	0.505	0.000	0.007	14.22	75.53	257
		11	0.033	0.435	0.000	0.013	13.34	34.50	225
		12	0.027	0.359	0.000	0.013	13.32	28.13	245
		13	0.032	0.445	0.000	0.037	13.81	12.12	321
		14	0.039	0.559	0.000	0.006	14.49	86.94	307
		15	0.026	0.337	0.000	0.009	12.87	39.49	269
	a	1	0.016	0.241	0.000	0.010	15.22	23.53	268
		2	0.024	0.326	0.000	0.009	13.46	37.03	95
		3	0.024	0.337	0.000	0.009	13.90	35.65	108
	b	1	0.024	0.301	0.000	0.011	12.44	27.20	95
		2	0.021	0.289	0.000	0.010	14.04	29.23	75
		3	0.040	0.583	0.000	0.016	14.68	37.05	51
	c	1	0.015	0.201	0.000	0.014	13.17	14.27	68
		2	0.021	0.291	0.000	0.044	13.93	6.68	65
		3	0.034	0.492	0.000	0.078	14.33	6.32	76
	d	1	0.015	0.222	0.000	0.016	15.12	13.69	64
		2	0.026	0.372	0.000	0.033	14.56	11.11	44
		3	0.037	0.613	0.000	0.016	16.69	38.45	65

地区	地点	試料	Nitrogen (%)	Carbon (%)	Hydrogen (%)	Sulphur (%)	C/N	C/S	Phosphorus ppm(mg/kg)
J-5号横穴	A	2	0.042	0.779	0.000	0.037	18.77	21.32	135
		3	0.038	0.579	0.000	0.015	15.15	39.05	111
		4	0.043	0.651	0.000	0.014	15.21	45.21	97
		5	0.028	0.361	0.000	0.013	12.95	27.97	232
		6	0.028	0.364	0.000	0.012	13.15	29.71	307
		7	0.024	0.304	0.000	0.013	12.47	23.80	568
		8	0.029	0.342	0.000	0.012	11.84	27.50	692
		9	0.028	0.432	0.000	0.015	15.59	27.85	566
		10	0.027	0.345	0.000	0.033	12.75	10.41	350
		11	0.030	0.419	0.000	0.015	13.76	28.18	281
		12	0.031	0.415	0.000	0.014	13.45	30.50	330
		13	0.030	0.389	0.000	0.006	12.86	66.63	363
		14	0.029	0.412	0.000	0.030	14.01	13.62	392
		15	0.025	0.322	0.000	0.013	12.64	25.04	270
		16	0.026	0.317	0.000	0.006	12.31	51.66	264
		17	0.022	0.302	0.000	0.016	13.92	18.77	227
	B	2	0.051	0.867	0.000	0.010	17.02	88.48	195
		3	0.048	0.693	0.000	0.015	14.33	45.42	275
		4	0.040	0.579	0.000	0.010	14.49	59.04	217
		5	0.029	0.401	0.000	0.014	13.81	29.73	453
		6	0.023	0.340	0.000	0.014	14.54	25.16	451
		7	0.029	0.383	0.000	0.014	13.33	26.54	532
		8	0.027	0.366	0.000	0.019	13.40	19.21	701
		9	0.027	0.413	0.000	0.019	15.12	21.63	517
		10	0.028	0.361	0.000	0.010	12.90	35.93	407
		11	0.030	0.377	0.000	0.013	12.52	28.22	309
		12	0.034	0.481	0.000	0.009	14.20	51.68	396
		13	0.027	0.387	0.000	0.019	14.11	20.79	560
		14	0.028	0.405	0.000	0.014	14.50	28.55	648
		15	0.023	0.316	0.000	0.088	13.44	3.58	427
		16	0.029	0.370	0.000	0.010	12.96	36.80	366
		17	0.021	0.330	0.000	0.009	15.46	37.88	291
	C	2	0.065	0.912	0.000	0.012	13.98	75.90	215
		3	0.060	0.783	0.000	0.005	13.10	168.56	213
		4	0.047	0.517	0.000	0.005	10.93	96.96	274
		5	0.041	0.399	0.000	0.012	9.67	32.21	488
		6	0.039	0.293	0.000	0.011	7.58	27.37	396
		7	0.038	0.339	0.000	0.009	8.86	36.28	485
		8	0.041	0.311	0.000	0.010	7.58	30.53	379
		9	0.035	0.280	0.000	0.015	7.95	19.15	445
		10	0.033	0.195	0.000	0.014	5.88	14.06	236
		11	0.036	0.284	0.000	0.006	7.82	48.84	290
		12	0.033	0.249	0.000	0.002	7.47	162.68	407
		13	0.037	0.276	0.000	0.004	7.48	64.74	535
		14	0.042	0.452	0.000	0.006	10.85	71.37	437
		15	0.040	0.308	0.000	0.015	7.76	20.09	472
		16	0.037	0.268	0.000	0.013	7.24	20.11	325
		17	0.033	0.210	0.000	0.003	6.42	71.56	286
	D	2	0.053	0.704	0.000	0.005	13.33	144.09	225
		3	0.052	0.612	0.000	0.006	11.67	94.23	233
		4	0.048	0.518	0.000	0.006	10.71	87.08	215
		5	0.053	0.685	0.000	0.004	12.98	173.57	234
		6	0.050	0.600	0.000	0.008	11.96	73.82	302
		7	0.046	0.450	0.000	0.007	9.79	67.87	264
		8	0.041	0.330	0.000	0.010	8.12	33.28	281
		9	0.037	0.264	0.000	0.010	7.16	26.80	323
		10	0.041	0.285	0.000	0.004	7.01	81.28	396
		11	0.036	0.262	0.000	0.000	7.31	-	265
		12	0.033	0.235	0.000	0.002	7.21	102.22	325
		13	0.036	0.268	0.000	0.006	7.51	44.43	449
		14	0.029	0.156	0.000	0.013	5.32	12.46	309
		15	0.030	0.158	0.000	0.012	5.30	12.89	326
		16	0.033	0.217	0.000	0.006	6.66	33.64	277
		17	0.036	0.408	0.000	0.011	11.27	38.82	257

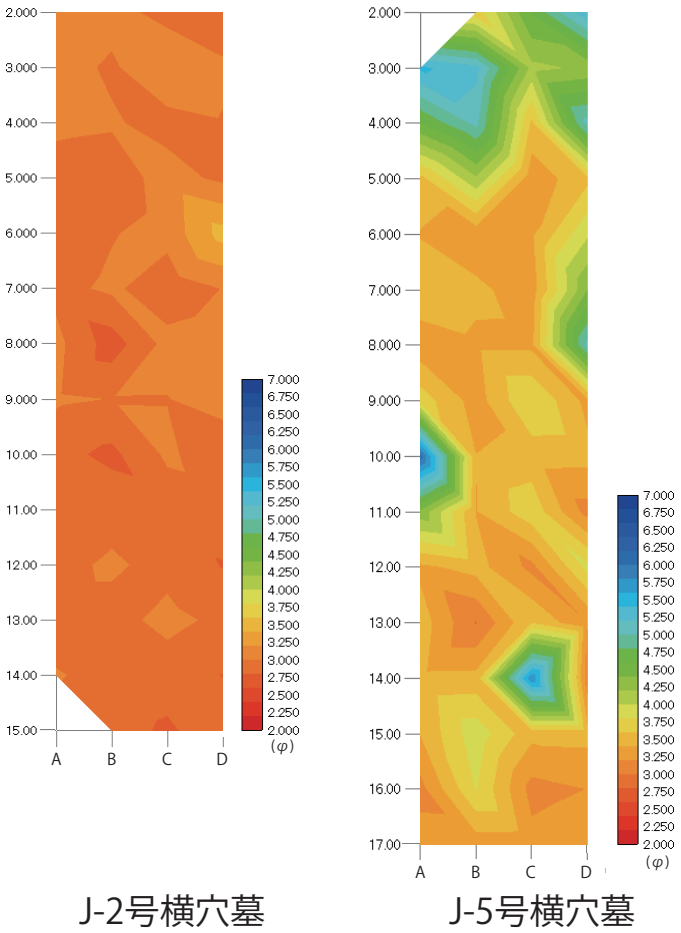
棺内のほとんどの位置で 12.00 を上回り，A2 で 10.90 と飛び抜けて低いこととからも示唆される（図 52 参照）。

一方骨のＣ／Ｎは 8.4 程度とされるが，A2 では 10.90 とやや高い。このことは，流れ込んだ堆積物に含まれた今回の測定値で最高 16.79 に至る有機物のＣ／Ｎが，骨のＣ／Ｎとブレンドされた結果と考えられる。

また今回 C-C' 断面（10 ライン）の垂直濃度分布も確認した。Ｐ濃度は相対的に底面が高く，上部が低い傾向にあった。一方Ｃ／Ｎは逆の傾向にあり，微量ながら遺骸（骨）の痕跡を示している可能性が指摘できる。

(2) J-5 号横穴墓

Ｃ／Ｎの分布が特徴的で，A，B ライン及び 2，3 ラインが高く C，D ラインが低い。また，Ｐ濃度には A8 と B14 の 2 つのピークが認められ，それぞれ同心円状に分布する。また，2，3 ラインでは



第 57 図　J-2, 5 号横穴墓の 50%粒径分布

Ｐ濃度は低い。

A，Ｂラインは石床の壁側（J-5 号横穴墓そのものの壁に接する）であり，採取時に壁面に沿って根が認められていたことから，根の影響がＣ／Ｎに強く表れていると考えられる。

また，A8 のＰ濃度のピーク（同心円状の分布）に対応してＣ／Ｎが低くなっている（第 54 図参照）。また，Ｃ濃度も周囲に比べ低い（第 54 図参照）。これらのことから A8 付近に遺骸（骨）が集められていたために，Ｃ／Ｎを下げていた可能性が指摘できる。

一方，B14 のＰ濃度のピークでもＰ濃度の拡散が認められる（同心円状の分布）が，A14，B14，C14 ではＣ／Ｎが周囲に比べ高い（第 54 図参照）。A14，B14，C14 ではＣ濃度も周囲に比べ高い（第 54 図参照）ことから，これらの位置でも，Ｃ／Ｎに根の影響が強く表れていることが示唆される。したがって，B14 付近にも遺骸（骨）が集められていたが，根の影響でＣ／Ｎが周囲に比べ高い値を示したものと考えられる。

一方，J-5 号横穴墓でも J-2 号横穴墓同様に，羨道方向から奥方向に向かって細粒化する傾向が認められる。しかし J-2 号横穴墓に比べ細粒で，遺骸（骨）が移動するほどの流れ（営力）ではなかったと考えられる。

6 まとめ

神門横穴墓群 10 支群 J-2 号横穴墓，J-5 号横穴墓に置いて，Ｐ分析，ＣＮ（Ｓ）分析，粒度分析を行った。この結果，以下の事柄が推定できた。

(1) J-2 号横穴墓では，流れ込んだ堆積物とともに遺骸（骨）が移動し（流れ），石棺の奥に集まったと考えられた。

(2) J-5 号横穴墓では，２箇所に遺骸（骨）の集積が推定できた。追葬の可能性も指摘できるが，詳細は不明である。

（渡邉正巳）

引用文献

日本薬学会編（2010）12）総リン (1) モリブデン酸による定量．衛生試験法・註解 2010，947-948.

土壌環境分析法編集委員会編(1997)．28 全量分析分会方法 B フッ化水素酸分会法．土壌環境分析法，

第 11 表　粒度分析結果（J-2）

地点名	試料名	積算%							積率（モーメント）法に基づく粒度係数計算結果			
		95	84	75	50	25	16	5	平均粒径（Dφ）	分級度（標準偏σ）	歪度（Sk）	尖度（K）
J-2	A2	1.94	2.37	2.60	3.20	6.10	7.45	8.60	4.00	2.26	0.90	2.33
	A3	1.64	2.19	2.47	3.09	5.74	7.45	8.61	3.83	2.31	0.95	2.48
	A4	1.89	2.29	2.51	3.04	4.87	7.00	8.59	3.73	2.19	1.17	2.96
	A5	1.99	2.30	2.49	2.91	3.56	6.79	8.22	3.47	2.03	1.45	3.56
	A6	1.94	2.27	2.46	2.86	3.46	6.54	7.89	3.35	1.93	1.47	3.63
	A7	1.78	2.21	2.43	2.94	3.90	6.61	7.89	3.45	1.98	1.22	3.10
	A8	2.00	2.36	2.56	3.06	4.54	7.11	8.58	3.74	2.16	1.23	3.04
	A9	1.97	2.35	2.55	3.03	4.42	7.03	8.57	3.70	2.16	1.25	3.11
	A10	1.85	2.21	2.40	2.86	3.71	7.01	7.92	3.45	2.02	1.26	3.03
	A11	1.81	2.18	2.37	2.84	3.59	6.17	7.84	3.31	1.92	1.42	3.61
	A12	1.91	2.28	2.48	2.95	3.87	6.74	7.89	3.51	1.97	1.23	3.01
	A13	1.71	2.18	2.41	2.93	4.04	6.90	7.91	3.48	2.03	1.15	2.91
	A14	1.98	2.34	2.54	3.01	4.01	7.11	8.58	3.67	2.17	1.30	3.19
	B2	1.70	2.18	2.45	3.08	5.35	7.12	7.91	3.68	2.07	0.90	2.42
	B3	1.65	2.17	2.41	2.97	4.34	6.72	7.89	3.50	2.02	1.09	2.82
	B4	1.83	2.24	2.47	3.02	5.11	7.00	7.92	3.63	2.03	1.02	2.59
	B5	1.46	2.01	2.28	2.88	3.99	6.37	7.85	3.35	2.01	1.14	3.03
	B6	1.67	2.17	2.42	2.99	4.41	6.76	7.86	3.50	2.00	1.10	2.88
	B7	1.86	2.28	2.51	3.04	4.31	6.46	8.49	3.60	2.07	1.30	3.42
	B8	1.54	2.03	2.24	2.70	3.24	3.61	7.69	2.90	1.69	1.93	5.87
	B9	1.88	2.26	2.47	3.00	4.89	7.22	7.94	3.63	2.05	1.06	2.61
	B10	1.52	2.02	2.24	2.75	3.44	5.80	7.79	3.14	1.90	1.46	3.93
	B11	1.84	2.22	2.43	2.93	3.83	6.64	7.89	3.46	1.97	1.25	3.12
	B12	2.01	2.35	2.54	3.03	4.10	7.12	8.59	3.70	2.17	1.30	3.17
	B13	1.98	2.30	2.49	2.93	3.68	6.61	7.88	3.44	1.91	1.40	3.46
	B14	1.88	2.29	2.49	2.96	3.73	6.24	7.85	3.41	1.89	1.36	3.51
	B15	1.55	2.12	2.35	2.90	3.76	5.95	7.80	3.29	1.90	1.29	3.51
	C2	1.76	2.20	2.42	2.93	3.86	6.99	7.91	3.48	2.03	1.17	2.93
	C3	2.01	2.40	2.61	3.18	6.19	7.95	8.68	4.04	2.31	0.92	2.28
	C4	1.52	2.10	2.34	2.92	4.72	7.00	7.92	3.50	2.10	1.02	2.65
	C5	1.83	2.27	2.51	3.09	5.57	7.25	7.94	3.75	2.07	0.90	2.36
	C6	1.88	2.30	2.53	3.07	5.77	7.69	8.63	3.87	2.30	1.03	2.52
	C7	1.93	2.25	2.44	2.87	3.60	7.09	7.93	3.45	2.01	1.31	3.12
	C8	1.71	2.21	2.47	3.07	5.41	7.12	8.56	3.77	2.24	1.02	2.66
	C9	1.82	2.24	2.47	2.99	4.22	6.39	7.85	3.49	1.93	1.19	3.09
	C10	1.94	2.31	2.52	3.04	5.37	7.50	8.62	3.81	2.25	1.10	2.69
	C11	1.71	2.16	2.37	2.87	3.80	6.50	7.87	3.40	1.99	1.23	3.13
	C12	1.68	2.18	2.41	2.94	3.92	6.49	7.87	3.43	1.98	1.20	3.10
	C13	1.73	2.22	2.48	3.06	4.94	7.05	8.57	3.71	2.21	1.11	2.87
	C14	1.86	2.25	2.45	2.90	3.62	5.89	8.51	3.40	2.04	1.57	4.15
	C15	1.52	2.05	2.27	2.76	3.43	6.04	7.83	3.18	1.94	1.43	3.77
	D2	1.54	2.06	2.29	2.80	3.54	6.13	7.85	3.24	1.96	1.37	3.58
	D3	1.85	2.27	2.50	3.05	5.39	7.46	8.26	3.76	2.17	1.02	2.54
	D4	2.03	2.34	2.53	2.98	4.01	7.54	8.60	3.68	2.19	1.31	3.16
	D5	1.70	2.15	2.38	2.95	4.43	6.84	7.88	3.49	2.01	1.11	2.85
	D6	1.90	2.34	2.61	3.48	6.21	7.66	9.68	4.33	2.53	0.95	2.81
	D7	1.96	2.30	2.50	3.01	5.88	7.85	8.66	3.87	2.32	1.03	2.47
	D8	2.11	2.44	2.62	3.13	5.82	7.74	8.64	3.96	2.26	1.03	2.51
	D9	1.87	2.30	2.53	3.08	5.89	7.66	8.63	3.90	2.30	0.97	2.43
	D10	1.46	1.98	2.26	2.87	4.05	6.34	7.84	3.34	2.01	1.15	3.06
	D11	1.61	2.08	2.32	2.92	5.07	7.07	7.90	3.54	2.09	0.99	2.55
	D12	1.50	2.04	2.28	2.79	3.45	5.11	7.77	3.13	1.86	1.50	4.13
	D13	1.82	2.23	2.44	2.96	3.94	6.39	7.86	3.45	1.94	1.24	3.20
	D14	1.74	2.14	2.33	2.79	3.43	4.58	7.79	3.15	1.83	1.60	4.37
	D15	1.77	2.18	2.40	2.94	3.99	6.12	7.83	3.40	1.91	1.26	3.31

171-174.

渡辺正巳（2012）中村 1 号墳の前室石棺内埋土のリン濃度分布．中村 1 号墳本文編（第 1 分冊）　出雲市の文化財報告，15，177-182.

第 12 表　粒度分析結果（J-5）

地点名	試料名	積算%							積率（モーメント）法に基づく粒度係数計算結果			
		95	84	75	50	25	16	5	平均粒径（Dφ）	分級度（標準偏σ）	歪度（Sk）	尖度（K）
J-5	A2											
	A3	2.49	3.34	4.18	5.44	6.87	7.72	9.39	5.36	2.09	0.49	2.93
	A4	1.88	2.32	2.63	4.60	6.39	7.33	9.07	4.53	2.36	0.60	2.56
	A5	1.87	2.32	2.60	3.53	6.23	7.33	9.44	4.30	2.46	0.90	2.82
	A6	2.07	2.47	2.69	3.39	6.10	7.24	9.61	4.25	2.43	1.09	3.19
	A7	2.01	2.43	2.68	3.55	6.60	7.72	9.77	4.48	2.56	0.85	2.60
	A8	1.90	2.32	2.56	3.27	6.16	7.40	9.64	4.19	2.52	1.04	3.00
	A9	1.99	2.44	2.70	3.71	6.95	8.07	9.81	4.61	2.62	0.75	2.34
	A10	2.64	3.56	4.30	6.09	8.01	8.72	10.04	5.95	2.33	0.18	2.18
	A11	2.12	2.47	2.71	4.34	7.18	8.12	9.60	4.78	2.61	0.61	2.21
	A12	2.05	2.43	2.65	3.35	6.15	7.74	10.19	4.29	2.60	1.12	3.07
	A13	2.26	2.60	2.82	3.51	6.18	7.44	8.97	4.30	2.23	0.90	2.52
	A14	2.16	2.54	2.77	3.46	5.88	7.09	8.80	4.15	2.16	0.96	2.74
	A15	2.13	2.50	2.72	3.41	6.37	7.64	9.74	4.61	2.51	1.02	2.89
	A16	2.00	2.38	2.59	3.13	5.27	6.95	8.55	3.83	2.14	1.10	2.83
	A17	2.07	2.46	2.66	3.30	5.83	7.22	9.59	4.14	2.42	1.21	3.43
	B2	1.95	2.37	2.63	3.66	6.34	7.26	8.90	4.32	2.30	0.68	2.32
	B3	2.17	2.63	3.03	5.27	7.11	7.99	9.55	5.11	2.42	0.42	2.32
	B4	2.05	2.51	2.86	5.06	6.75	7.62	9.24	4.86	2.36	0.46	2.42
	B5											
	B6	2.08	2.43	2.63	3.26	6.01	7.04	8.52	4.04	2.16	0.85	2.34
	B7	2.12	2.49	2.71	3.45	6.30	7.43	9.62	4.35	2.46	0.99	2.94
	B8	2.08	2.47	2.68	3.36	6.03	7.18	9.45	4.20	2.40	1.12	3.25
	B9	1.91	2.37	2.61	3.31	6.09	7.51	9.83	4.20	2.54	1.11	3.11
	B10	1.99	2.41	2.66	3.40	6.46	7.79	9.85	4.36	2.58	0.98	2.77
	B11	2.06	2.47	2.69	3.39	6.47	7.93	10.13	4.39	2.62	1.02	2.81
	B12	2.10	2.50	2.73	3.48	6.63	7.89	9.91	4.47	2.58	0.93	2.66
	B13	1.89	2.28	2.49	2.99	4.52	7.13	8.59	3.69	2.21	1.21	2.99
	B14	2.11	2.49	2.72	3.47	6.75	7.89	9.76	4.49	2.57	0.87	2.54
	B15	1.95	2.50	2.83	3.93	6.73	7.77	9.26	4.55	2.40	0.64	2.22
	B16	2.07	2.50	2.78	3.81	6.78	7.83	9.32	4.56	2.45	0.69	2.27
	B17	2.15	2.50	2.69	3.28	5.74	7.27	8.59	4.03	2.16	0.98	2.53
	C2	1.90	2.35	2.67	4.62	6.27	7.19	9.01	4.52	2.32	0.63	2.70
	C3	2.15	2.57	2.84	4.14	6.34	7.21	8.89	4.49	2.22	0.68	2.53
	C4	2.05	2.45	2.69	3.56	6.08	6.98	8.69	4.21	2.18	0.80	2.57
	C5	1.90	2.31	2.56	3.27	6.01	7.03	9.43	4.12	2.43	1.08	3.23
	C6	1.96	2.40	2.64	3.37	5.98	6.96	9.24	4.16	2.35	1.07	3.27
	C7	2.07	2.42	2.64	3.29	5.90	7.00	8.80	4.13	2.38	1.18	3.47
	C8	2.13	2.50	2.71	3.36	6.00	7.03	9.20	4.17	2.32	1.12	3.32
	C9	1.71	2.23	2.57	3.80	6.51	7.48	8.93	4.35	2.39	0.56	2.11
	C10	1.95	2.40	2.65	3.48	6.73	7.87	9.83	4.48	2.61	0.83	2.50
	C11	2.13	2.53	2.78	3.74	6.72	7.82	9.34	4.53	2.44	0.76	2.38
	C12	2.00	2.36	2.57	3.14	6.42	8.00	8.70	4.10	2.36	0.84	2.13
	C13	2.11	2.51	2.75	3.59	6.92	8.03	9.79	4.58	2.60	0.80	2.40
	C14	2.46	3.02	3.59	5.77	7.74	8.50	9.84	5.59	2.42	0.26	2.10
	C15	2.12	2.51	2.74	3.46	6.57	7.80	9.86	4.45	2.56	0.95	2.72
	C16	1.80	2.25	2.51	3.13	5.78	7.18	7.91	3.79	2.08	0.81	2.21
	C17	1.88	2.32	2.57	3.27	6.13	7.45	9.69	4.17	2.53	1.07	3.04
	D2	2.48	3.39	4.18	5.36	6.77	7.66	9.41	5.32	2.08	0.56	3.08
	D3	2.12	2.54	2.82	4.24	6.37	7.20	8.89	4.51	2.23	0.66	2.54
	D4	2.15	2.63	3.05	5.09	6.68	7.60	9.39	4.95	2.33	0.55	2.69
	D5	2.08	2.47	2.70	3.55	6.08	6.98	8.77	4.23	2.19	0.82	2.64
	D6											
	D7	1.90	2.33	2.61	4.40	6.40	7.36	9.10	4.49	2.39	0.66	2.56
	D8	2.19	2.60	2.93	5.07	6.99	7.86	9.40	4.96	2.42	0.49	2.33
	D9	2.08	2.45	2.66	3.34	6.14	7.25	8.57	4.12	2.20	0.81	2.24
	D10	2.08	2.47	2.70	3.47	6.33	7.60	9.77	4.37	2.51	1.00	2.89
	D11	1.77	2.31	2.54	3.12	5.19	6.63	8.49	3.75	2.12	1.04	2.90
	D12	2.14	2.57	2.85	3.86	6.74	7.92	9.60	4.62	2.52	0.85	2.66
	D13	2.14	2.48	2.66	3.21	6.09	7.73	8.64	4.06	2.25	0.94	2.35
	D14	1.98	2.36	2.57	3.08	5.01	7.04	8.56	3.78	2.16	1.16	2.91
	D15	2.08	2.47	2.70	3.47	6.58	7.78	9.93	4.45	2.58	0.93	2.69
	D16	2.16	2.50	2.68	3.20	5.58	7.43	8.61	3.96	2.18	1.07	2.65
	D17	2.03	2.42	2.64	3.36	6.30	7.58	9.80	4.30	2.53	1.03	2.93

第２節　出土石棺石材の化学分析

１はじめに

神門横穴墓群第 10 支群出土の石棺石材について岩石記載，帯磁率測定，および全岩化学分析を実施し，原産地推定に関する考察を行った。その結果を以下に報告する。

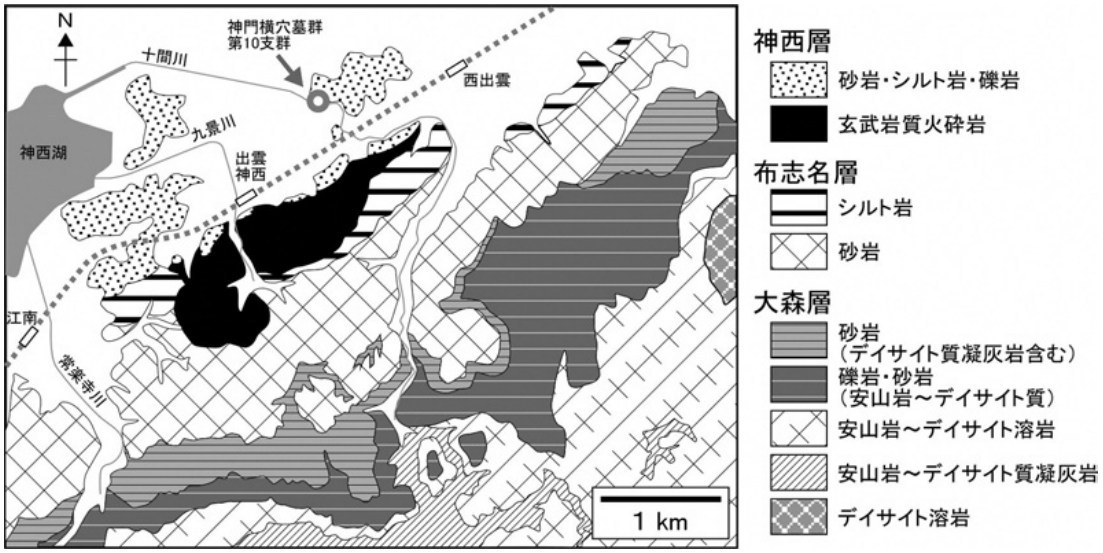
２周辺地質

神門横穴墓群第 10 支群はＪＲ山陰本線の西出雲駅と出雲神西駅との中間地点を流れる十間川沿いにあり，横穴墓は神西層の堆積岩に胚胎している。このあたりの地質概略図を第 58 図に示す。地層は大まかに北東－南西方向の帯状配列をなして南に向かって時代が古くなる。古い方から，大森層，布志名層，神西層となっており，主に中期中新世に堆積したものである（鹿野ほか 1998）。以下に，鹿野ほか（1998）に基づいて地質概略を述べる。

神門横穴墓群第 10 支群の南方に分布する大森層は安山岩～デイサイト [1] と呼ばれる火山岩が主な起源物質となって形成している。大森層は下部から上部に向けて，デイサイト溶岩，安山岩～デイサイト質凝灰岩，安山岩～デイサイト溶岩，礫岩・砂岩 [2]，および砂岩で構成される。布志名層は大森層の上位にあって岩相の違いにより下部層と上部層に区分される。下部層は細～粗粒砂を主体とする砂岩であり，その中に細～中礫で構成される礫岩がレンズ状に挟まることがある。上部層はシルト岩および泥岩で構成され，塊状で平行層理が発達する。神西層は布志名層の上位で玄武岩質火砕岩および玄武岩貫入岩を基底として，さらに砂岩，シルト岩，および礫岩が重なる。神門横穴墓群第 10 支群は，この砂岩，シルト岩，および礫岩の地層に横穴墓が掘り込まれたものである。これらの地層は数 10㎝～数ｍで各岩相が互層をなし，砂岩やシルト岩には平行葉理が発達している（第 58 図）。

３石棺石材の岩石記載

ここでは神門横穴墓群第 10 支群の J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓から産した石棺石材について



第 58 図　神門横穴墓群第 10 支群周辺の地質図（鹿野ほか　1998 をもとに作図）

記述する。

J-2 号横穴墓　石材はデイサイト質の砕屑粒子を主体とする凝灰質砂岩もしくは砂質凝灰岩である（第 60 図）。ただし，大きさ 5.0 ～ 20㎜程度のデイサイト質ないし流紋岩質の軽石様風化礫を含む。基質は砂質～シルト質の黄褐色粒子を主体として風化している。初生鉱物としては石英が視認できる

第 59 図　神門横穴墓群第 10 支群周辺の発掘現場における神西層の砂岩・泥岩の産状

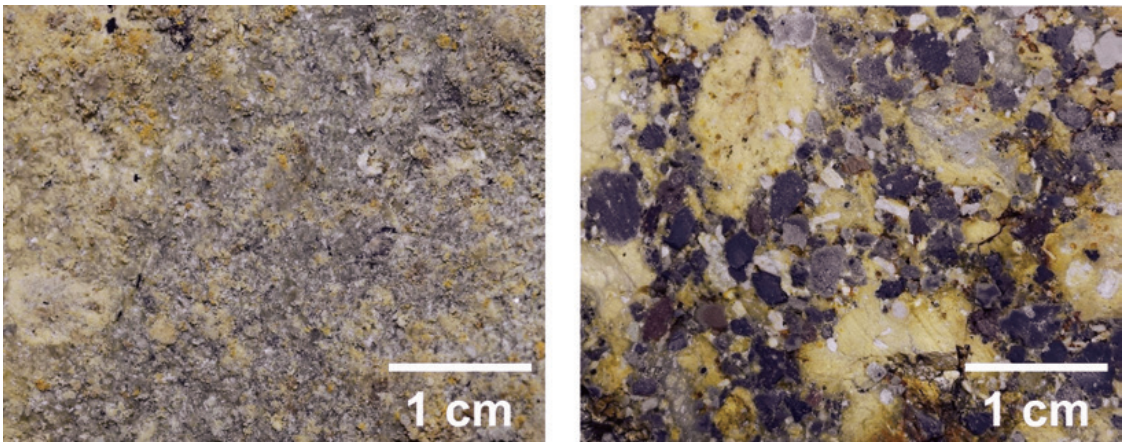
程度で，しばしば有色鉱物（恐らくは普通角閃石ないし黒雲母）の風化粒子が認められる。

J-5 号横穴墓　石材は大きさ 2.0 ～ 15㎜程度の細～中礫を主体として微粒子ほとんど含まない礫岩である（第 60 図）。構成粒子は黒灰色～赤褐色を呈する安山岩，および灰色～乳白色を呈するデイサイトがほとんどで，風化した軽石様の発泡岩片も認められる。礫の形状は亜角礫から亜円礫が多く，火山砕屑岩というよりは幾分かの摩耗作用を被った礫岩とするほうがよい。また，淡白色長柱状をなして大きさ数㎜の斜長石粒子も認められる。

J-2 号横穴墓と J-5 号横穴墓の石棺は明らかに岩相の異なる石材を用いている。これらの岩相は横穴墓が形成されている現地の神西層の岩石とも異なる。

4 石棺石材の帯磁率

J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓から産出した石棺石材の全てに対してカナダ Exploranium 社製 Kappameter KT-9 を用いた帯磁率測定を行った。測定値はそれぞれの横穴墓の石材で比較的均一で



第 60 図　石棺石材の切断面の岩相写真　左：J-2 号横穴墓　右：J-5 号横穴墓

あったため，それぞれを平均して値を示している。帯磁率の単位は SI unit である。3.0×10^{-3} SI unit は，およそ 100×10^{-6} emu/g に相当する（上野 1987；Ishihara 1990）。

測定の結果，J-2 号横穴墓からの凝灰質砂岩石材は平均値で約 0.2×10^{-3} SI unit の帯磁率を示した。一方，J-5 号横穴墓からの礫岩石材は平均値で約 2.5×10^{-3}SI unit の帯磁率を示した。両石材の帯磁率の差は岩石として有意である。J-2 号横穴墓の砂岩と J-5 号横穴墓の礫岩は単なる構成物の粒径の差だけではなく，構成物の種類や量比にも違いがあることが示唆される。

５全岩化学分析の手法

試料は岩石カッターを用いて大きさ１～２㎝の幾つかの小片に切断した。小片は蒸留水による洗浄の後に風乾し，タングステンカーバイト製ポッドを用いた粉砕機（SCOTT 社製 Rock Labs）で微粉末化した。強熱減量（loss on ignition: LOI）の測定では約３ g の岩石粉末を磁性るつぼに秤量し，電気マッフル炉（ISUZU 社製 ETR-11K）にて 1,050℃で２時間の加熱を行った。強熱減量は加熱前後の質量比によって求めた。岩石の主・微量成分の定量分析は島根大学総合理工学部地球科学科に設置の波長分散型蛍光 X 線分析装置（RIGAKU 社製 RIX2000）にて行った。分析では強熱減量を測定した後の岩石粉末とアルカリフラックス（$LiBO_2$：$Li_2B_4O_7$ ＝１：４で作成）とを１：２の割合で混合し，これを白金るつぼに入れて高周波ビードサンプラー（東京科学社製 NT-2000）でガラスビードに加工したものを用いた。定量分析には地質調査総合センターのスタンダード試料を用いて作成した検量線法を採用した。ガラスビードの作成法や XRF の分析法は Kimura and Yamada（1996）および Kamei（2016）に従った。

６全岩化学分析の結果

分析結果を第 13 表に示す。主成分組成は重量％で示しており，LOI を除いて 100％換算した値も示した。微量成分元素は ppm で示している。J-2 号横穴墓と J-5 号横穴墓の試料とでは 100％換算した主成分組成の Na_2O 濃度において２倍程度の組成差があるが，その他については微量元素組成も含めておおよそ類似した傾向を示す。

第 13 表　石材の分析結果

	SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	T Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5	LOI	Total
主成分組成（wt％）												
J-2	57.31	1.03	17.54	7.66	0.05	2.31	2.37	0.99	0.58	0.13	10.11	100.09
100% 換算	63.69	1.14	19.49	8.51	0.05	2.57	2.64	1.10	0.65	0.15		100.00
J-5	60.29	0.64	15.85	8.93	0.06	1.66	3.65	2.11	0.76	0.25	6.46	100.66
100% 換算	64.01	0.68	16.83	9.48	0.06	1.76	3.87	2.24	0.80	0.27		100.00

微量成分組成（ppm）	Ba	Ce	Cr	Ga	Nb	Ni	Pb	Rb	Sc	Sr	Th	V	Y	Zr
J-2	157	34	2	21	4	4	20	20	29	243	6	109	65	141
J-5	266	47	9	16	4	5	14	24	27	263	6	143	29	129

T Fe_2O_3: 全鉄を Fe_2O_3 で表示。LOI: 強熱減量。100％換算 : 強熱減量を除いて 100％換算した。

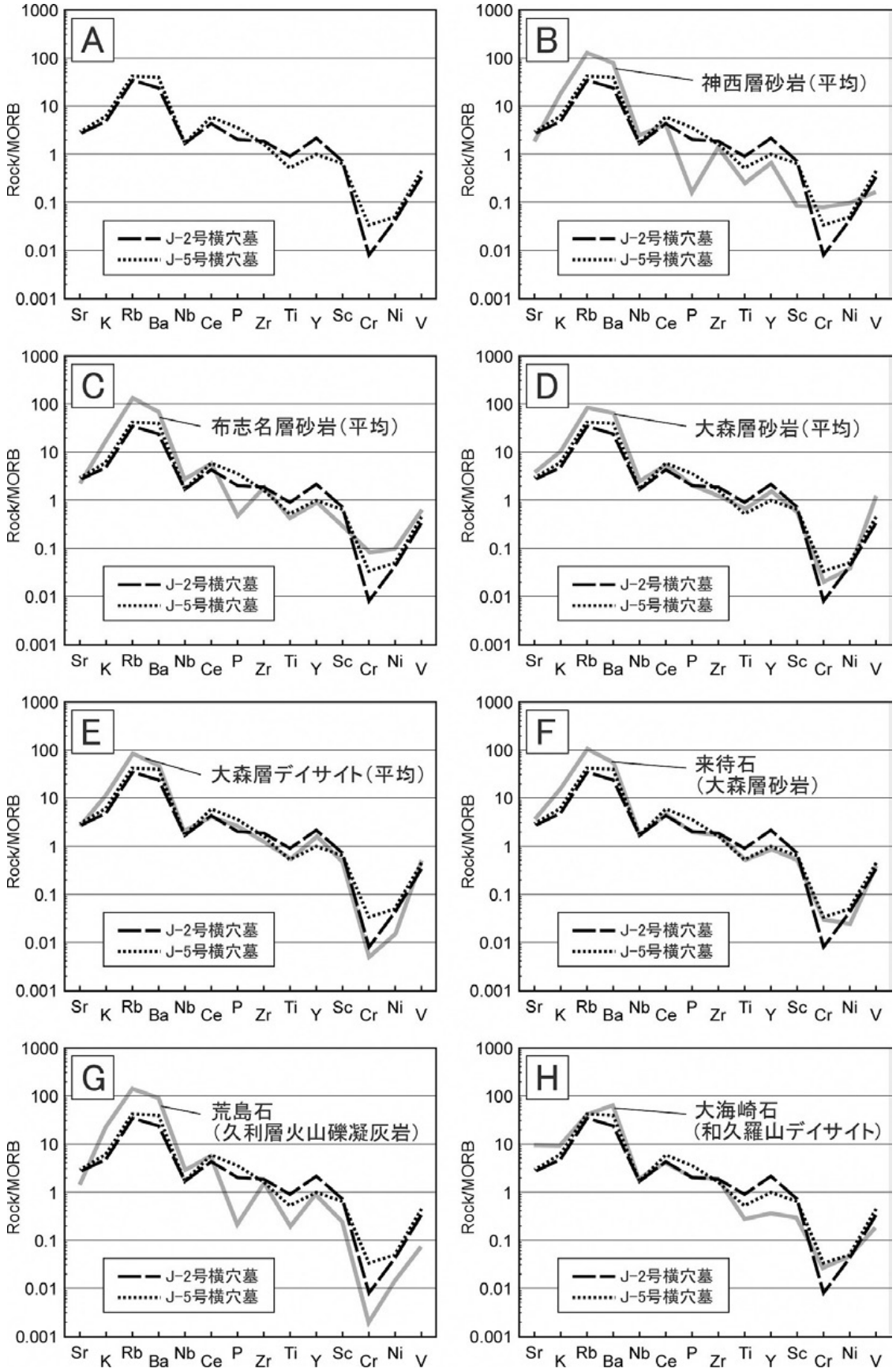
J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓の石材分析値に関して主に微量元素組成を用いた規格化図（スパーダ―図）[3] を作成した（第 61A 図）。規格化には中央海嶺玄武岩（Mid-Ocean Ridge Basalt: MORB）の化学組成（Pearce and Parkinson 1993）を用いた。J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓は岩相がそれぞれ凝灰質砂岩および礫岩と異なっているが，スパーダ―図では互いに近似したパターンを示す。すなわち，Sr，K，Rb，Ba などの Large Ion Lithophile 元素と呼ばれるイオン半径が大きめで電荷が低いことにより造岩鉱物に入りにくいとされる元素に富み，さらに Nb，Zr，Ti，Y などの High Field Strength 元素と呼ばれるイオン半径が小さめで電荷が高いことにより造岩鉱物に入りにくいとされる元素は MORB よりもわずかに富む程度となっている（第 61A 図）。また Cr，Ni，V といった造岩鉱物に比較的に入りやすい（特に苦鉄質鉱物と呼ばれる Mg や Fe を含む鉱物に入りやすい）元素には大きな枯渇か認められる。

7 石棺石材が採取された地層

Roser et al.（2001）は，神門横穴墓群第 10 支群を含む第 58 図の範囲内において各地層より泥岩，砂岩，および溶岩を採取し，それらの化学分析値を報告している。J-2 号横穴墓の石材は凝灰質砂岩で構成され，J-5 号横穴墓の石材は安山岩やデイサイトなどの粒子を主体とする礫岩で構成される。そこで Roser et al.（2001）が報告した神西層砂岩，布志名層砂岩，大森層砂岩および大森層デイサイト溶岩のそれぞれのデータについて平均組成を求め，スパイダー図によって J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓の石材と比較した（第 61B，C，D，E 図）。また，出雲市斐川町から松江市宍道町にかけては来待石と呼称される大森層砂岩が古墳石材として頻出することが知られている。さらに松江市大橋川流域や嵩山周辺においては荒島石と呼称される久利層流紋岩質火山礫凝灰岩や大海崎石と呼称される和久羅山デイサイト溶岩が古墳石材として認められる。久利層は安来市から出雲市を経て大田市まで繋がる狭長な分布域を持ち，和久羅山デイサイトは三瓶山や大山と同じ成因により形成された火山噴出物である。そこで，これらからも試料を採取して化学組成を比較した（第 61F，G，H 図）。

まず初めに J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓の石棺石材と第 58 図の範囲内の各地層とを比べる。神門横穴墓群第 10 支群を胚胎する神西層とその南部に拡がる布志名層の砂岩は，石棺石材に比べて P に大きな枯渇があること，さらに Cr の濃度が高いことで化学組成が合致しない（第 61B，C 図）。このことは，神西層と布志名層の砂岩が形成された際の成因（砂岩の形成環境や砂の基となる後背地の岩石など）が石棺石材となった岩石を形成したときの成因と異なることを示唆する。一方，大森層の砂岩およびデイサイト溶岩とは，石棺石材の各元素の挙動が極めて近似している。このことは，それぞれの岩石の形成時における成因がほぼ同一であったことを示唆する（第 61D，E 図）。

次に，来待石，荒島石，および大海崎石と石棺石材とを比べる。荒島石は P，Ti，Sc，Cr，Ni，および V が石棺石材に比して枯渇しており，両者は一致しない（第 61G 図）。大海崎石は石棺石材よりも Sr に富んで，Y に枯渇しており，これも両者は一致しない（第 61H 図）。一方，来待石と石棺石材は各元素の挙動が極めて類似している（第 61F 図）。調査地域の南部に分布する大森層（第 58 図）は松江市宍道町にも所々途切れながら連続する。大森層の凝灰質砂岩で特に松江市宍道町付近に産する



第 61 図　J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓の石棺石材と各地層岩石のスパーダー図比較

ものを来待石と呼称している。したがって，神門横穴墓群第 10 支群の南に分布する大森層凝灰質砂岩と松江市宍道町の大森層凝灰質砂岩とは成因的に共通することになる。このことから石棺石材の岩石は成因的には来待石とも関連すると言える。

ここで岩石記載の結果も踏まえながら J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓の石棺石材が得られた原産地について考察する。全岩化学分析の結果より，J-2 号横穴墓の凝灰質砂岩は大森層から採取されたものと判断される。石材には細粒～極細粒サイズのデイサイト質粒子が主要構成物として認められ，不均一に軽石様の風化礫が伴われている。したがって，記載的にも大森層の構成岩石として矛盾しない。ただし，来待石（塊状凝灰質砂岩）と比較すると基質が細かく火山岩礫を伴う。このことから松江市宍道町付近から石材を運搬してきた可能性は低そうである。J-5 号横穴墓の礫岩も全岩化学分析の結果から大森層の産物と判断される。石材には安山岩ないしデイサイト溶岩の亜角礫・亜円礫が普遍的に含まれており，この記載的特徴からも大森層の構成岩石としてよい。

ところで J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓の各石棺石材が大森層のどの地点から得られたものかについては，岩石記載，帯磁率測定，および全岩化学分析の結果のみでは特定困難である。この点については今回明らかとなった石材の特徴をもとにした大森層の詳細な現地調査が必要となる。

８おわりに

J-2 号横穴墓および J-5 号横穴墓の石棺石材に関する岩石記載，帯磁率測定，および全岩化学分析を実施した。その結果から次のことが得られた。① J-2 号横穴墓の石棺石材は軽石様の礫を少量含むデイサイト質の凝灰質砂岩ないしは砂質凝灰岩であり，約 0.2×10^{-3} SI unit の帯磁率を有する。② J-5 号横穴墓の石棺石材は安山岩ないしはデイサイトの亜角礫から亜円礫を主体とする礫岩であり，約 2.5×10^{-3} SI unit の帯磁率を有する。③両横穴墓の石棺石材は岩石記載および全岩化学分析により大森層の岩石と判別された。④両横穴墓の石棺石材は大森層のどの地点から得られたものかは定かではない。横穴墓から大森層への距離は最も近い場所で保知石川を遡って約２～３㎞の距離がある。このことから石棺用に石材を遠方から切り出してきたことが伺える。⑤ J-2 号横穴墓と J-5 号横穴墓の石棺石材は記載岩石学的特徴と帯磁率が異なり，それぞれが大森層の異なる地点（露岩）より切り出されてきたことが伺える。ただし，④と⑤については，もしも近隣河川の河床や土石流堆積物などに大森層の砂岩・礫岩の巨礫が多産する場所があるならば，必ずしも遠方の異なる露岩から直接切り出したと断定する必要も無いかも知れない。

（亀井淳志・小林莉菜）

註

1）地下より地表に噴出したマグマが固まる岩石を火山岩と呼び，これは構成物や化学組成によって玄武岩，安山岩，デイサイト，流紋岩の４種に区分される。玄武岩ほど一般に黒色で SiO_2 量が 52 重量％以下となり，一方でデイサイト・流紋岩ほど一般に白色を帯びて SiO_2 量が 63 重量％以上となる。

2）泥岩は砕屑粒子の大きさが 1/16㎜以下の堆積岩，砂岩は砕屑粒子の大きさが 1/16 ～ 2.0㎜の堆積岩，礫岩は砕屑粒子の大きさが 2.0㎜以上の堆積岩である。泥岩はさらに 1/256 ～ 1/16㎜をシルト，1/256㎜以下を粘土とする。

3）岩石に含まれる種々の元素含有量を基準値で規格化した折れ線グラフ。基準値には始原マントル，コンドライト隕石，もしくは中央海嶺玄武岩（MORB）などの化学組成が用いられる。例えば，一般的な岩石では P_2O_5 で 0.1 ～ 1 の桁が分析値となり，Ba で 1000 ～ 100 の桁が分析値となる。各試料の分析値の差を同一基準で評価することが難しい（P_2O_5 では 0.5 は大差であるが，Ba では大差ではない）。そこで規格化岩石を用いた「分析値÷規格化岩石組成（本論の MORB は P_2O_5 が 0.072 で Ba が 6.3）」の操作を行うことによって各元素の組成差を認識しやすくなり，かつ全元素を 1 枚の図で同時に表現できる。また，天然の元素存在度比の影響（一般に原子番号が偶数かつ質量数が偶数のものは存在度が大きく，その逆は小さい）を相殺する効果もある。

９文献

Ishihara, S. 1990「The Inner zone batholith vs. the Outer zone batholith of Japan: evaluation from their magnetic susceptibility」『Univ. Mus. Univ. Tokyo, Nature and Culture』Vol 2，21 ～ 24 ページ

上野宏共　1987「岩石の磁気的諸量の国際単位系（SI）と CGS 系間の換算」『岩石鉱物鉱床学雑誌』82 巻　441 ～ 444 ページ

鹿野和彦　松浦浩久　沢田順弘　竹内圭史　1998『石見大田及び大浦地域の地質』地域地質研究報告（5 万分の 1 地質図幅）地質調査所

Kamei, A. 2016「Determination of trace element abundances in GSJ reference rock samples using lithium metaborate–lithium tetraborate fused solutions and inductively coupled plasma mass spectrometry」『Geoscience Rept. Shimane Univ.』Vol.34，41 ～ 49 ページ

Kimura, J-I.　Yamada, Y.　1996「Evaluation of major and trace element XRF analyses using a flux to sample ratio of two to one glass beads」『J. Min. Petr. Econ. Geol.』Vol.91，62 ～ 72 ページ

Roser, B.　Tateishi, Y.　Nakayama, K.　2001「Whole-rock geochemical compositions of Miocene sedimentary and volcanic rocks from the Izumo-Matsue districts and Shimane Peninsula, SW Japan」『Geoscience Rept. Shimane Univ.』Vol.20，69 ～ 82 ページ

Pearce, J.A.　Parkinson, I.J.　1993「Trace element models for mantle melting: application to volcanic arc petrogenesis」『Magmatic processes and Plate Tectonics』In: Prichard, H.M., Albaster, T., Harris, N.B.W., Neary, C.R. (Eds.)，Geological Society Special Publication Vol.76，373 ～ 403 ページ

第３節　出土耳環の蛍光Ｘ線分析結果

1．はじめに

耳環の材質と製作技法を確認することを目的として，蛍光Ｘ線分析による化学組成の測定とデジタルマイクロスコープによる表面状態の観察を行ったので結果を報告する。

2．分析対象資料

対象資料は５点である。肉眼観察とＸ線透過撮影から，５点ともに銅芯に金貼が施されている耳環であると考えられる。第 14 表に分析対象資料を示す。

第 14 表．分析対象資料

資料No.	遺物名	出土遺構
37	耳環（銅芯合金・金貼）	横穴墓番号　H-4
38	耳環（銅芯合金・金貼）	横穴墓番号　H-4
41	耳環（銅芯合金・金貼）	横穴墓番号　H-5
42	耳環（銅芯合金・金貼）	横穴墓番号　H-5
67	耳環（銅芯合金・金貼）	横穴墓番号　J-7

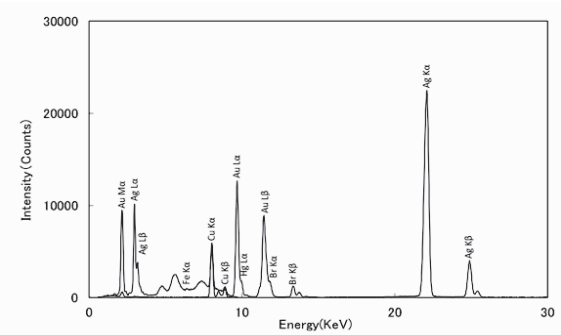
3．分析方法

調査は可搬型蛍光Ｘ線分析装置（Innov-X Systems DELTA PREMIUM DP-4000）を使用し，非破壊で行った。分析モードは 2 Beam Mining Plus を使用し，タンタル管球の電圧を自動で 40kV と 15kV に切り替えて測定することにより塩素，硫黄，カルシウムなどの軽元素の分析も可能である。また，ファンダメンタルパラメーター法により簡易的ではあるが，各元素の半定量値を算出することが可能である。分析時間は 90［sec］とし，Ｘ線の照射範囲は直径約 10mm である。蛍光Ｘ線分析は表面分析であるが金貼が薄いので，金貼を透過したＸ線により銅芯の化学組成が分析結果に反映される可能性が高い。

デジタルマイクロスコープによる資料表面の観察には HIROX 製 RH-2000 を使用した。

4．分析結果と考察

蛍光Ｘ線分析により全ての資料から Au（金），Ag（銀），Cu（銅），Hg（水銀），Fe（鉄），Br（臭素）を検出した。代表的な蛍光Ｘ線スペクトルを第 62 図に示す。検出元素のうち，金と水銀は表面の鍍金，銀は鍍金層の下の中間層，銅は銅芯に由来すると考えられる。鉄は埋蔵環境下で資料表面に付着した土に由来するものであり，臭素についても埋蔵環境に



第 62 図 代表的な蛍光Ｘ線スペクトル（資料 No.41）

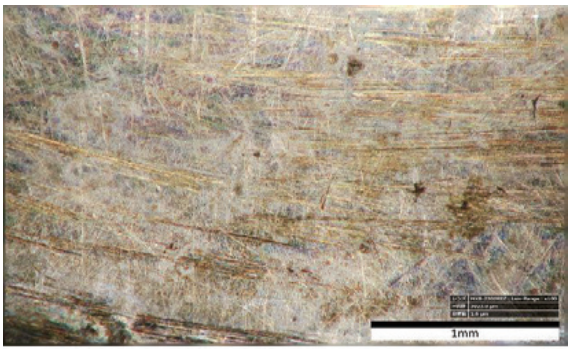
由来していると推測できる。資料 No.38 からは上記の 6 元素の他に As（ヒ素）も検出した。ヒ素は銅芯に含まれる銅の不純物であるとみられる。

水銀を検出したことから，表面は鍍金加工がなされていると考えられる。水銀を接着剤として金箔を銀板の上に貼り付けて加工する方法もあるが，デジタルマイクロスコープによる観察では金箔は確認できなかった。また，鍍金に使用した金には不純物として銀が含まれていると考えられるが，鍍金層は薄く，表面分析法である蛍光 X 線分析でも鍍金層の下層の化学組成が一緒に検出されてしまうため，鍍金部分のみの化学組成を把握することは困難である。

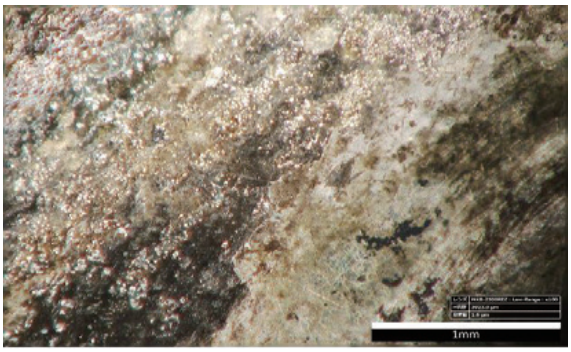
分析の対象となった 5 点の資料は，渡辺智恵美氏による耳環の分類で全て銅芯銀板巻鍍金にあたり(1)，銅芯銀板巻鍍金は古墳時代後期を通して最も一般的な耳環の製作技法である(2)。

耳環はセットで製作されると考えられるため，横穴墓番号 H-4 と H-5 で出土した耳環についてセット関係についても考察する。横穴墓番号 H-4 で出土した資料 No.37 と資料 No.38 は肉眼観察において非常に似た形状で劣化の状況も類似していることからセットの可能性があるとみられた。しかし，銅芯の化学組成では資料 No.38 にのみヒ素が含まれていることからセット関係では無い，又は異なる材料を利用して同じ形状の製品を製作した可能性がある。横穴墓番号 H-5 で出土した資料 No.41 と資料 No.42 は形状が類似しているものの，肉眼観察では資料 No.41 は鍍金が良好に残存している一方，資料 No.42 は鍍金が銀灰色に変色した状態であり，劣化状態が異なっていることから，セットにはみえなかった。しかし，蛍光 X 線分析で検出された元素は同一であり，セットの可能性もある。銅芯銀板巻鍍金技法で製作された耳環において，現在でも金色を呈しているものはごくわずかであり，埋蔵環境や腐食の影響で金色が消失しているとの指摘がある(3)。よって資料 No.42 も元々は資料 No.41 と同様の色味であった可能性がある。

デジタルマイクロスコープによる観察では，鍍金が比較的健全に残存している部分に関しては資料表面が平滑であることが確認できた一方で，鍍金が銀灰色に変化している部分は資料表面に細かな凹凸が多数あることがわかった（第 63 図）。劣化部分の細かな凹凸が，鍍金層が浮いたものなのか，銀板の劣化によるものなのか，銅芯からの影響なのかは，判断するに至らなかったが，銅芯銀板巻鍍金



健全な表層　資料 No.41



銀灰色の表層　資料 No.67

第 63 図　劣化状態による表層の違い

の技法で製作された耳環の表層が劣化する過程で表面に多数の凹凸が出現する様子を確認することができた。

5．おわりに

本調査の対象となった耳環５点は銅芯に銀板を巻きその上に鍍金を施した銅芯銀板巻鍍金であることが判明した。現在は鍍金層の劣化により，金色を呈している箇所は部分的ではあるものの，製作当初は５点ともに金環であったとみられる。しかし，鍍金層の劣化が進行しており，かつ非常に薄いことから，鍍金の化学組成を把握することはできず，製作当初の金色の色味を復元することは難しい。

（フジテクノ有限会社）

※蛍光Ｘ線分析の測定位置と蛍光Ｘ線スペクトル，デジタルマイクロスコープでの観察位置と画像を報告の末尾に示す。

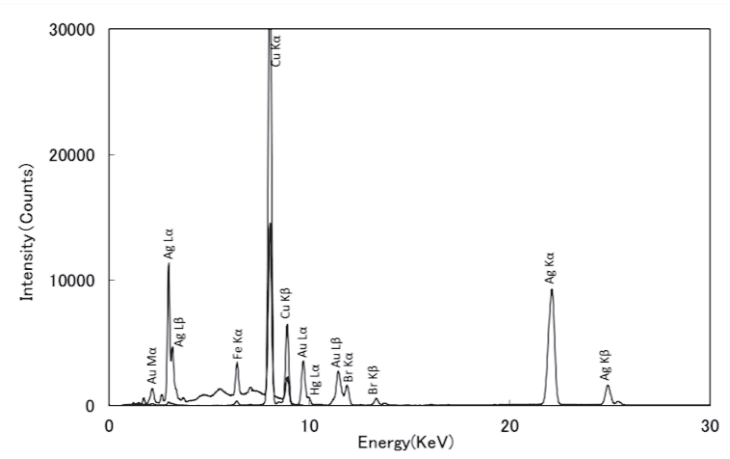
【参考文献】

(1) 渡辺智恵美「Ｘ線 CT スキャンと三次元データを利用した耳環の調査―セット関係特定のための新手法の試み―」『史学論叢』No.48 別府大学史学研究会　pp.1-9　2018 年
(2) 渡辺智恵美「耳環小考」『創立三十年記念誌』財団法人元興寺文化財研究所　pp.73-83　1997 年
(3) 永嶋正春「月ノ輪山１号墳出土〝耳環〟の材質」『月ノ輪山１号墳』福島市教育委員会　pp.147-153　1988 年

資料 No.37

蛍光 X 線分析

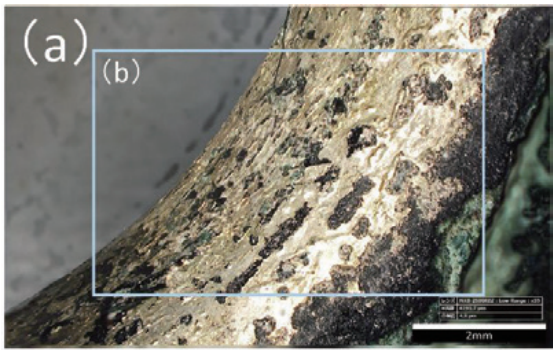
測定位置

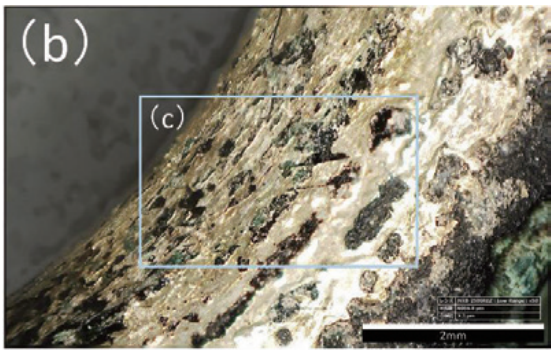


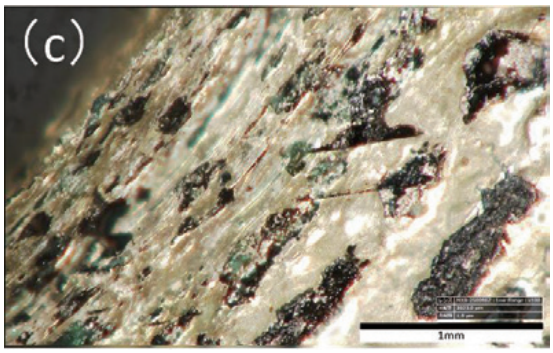
蛍光 X 線スペクトル

デジタルマイクロスコープ画像

観察位置





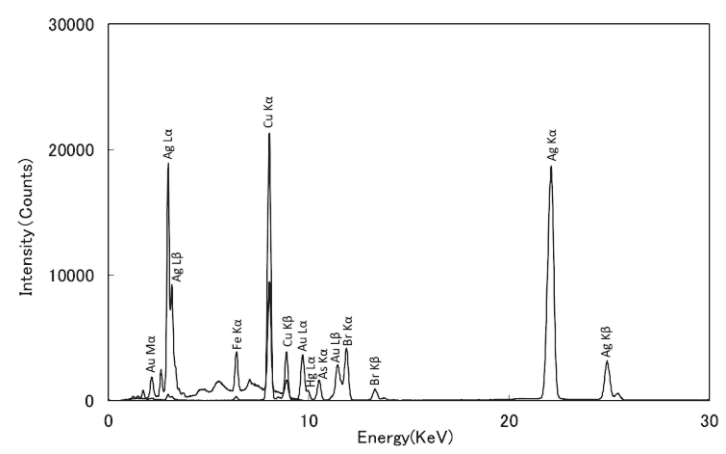


第 64 図　H-4 号横穴墓出土耳環

資料 No.38

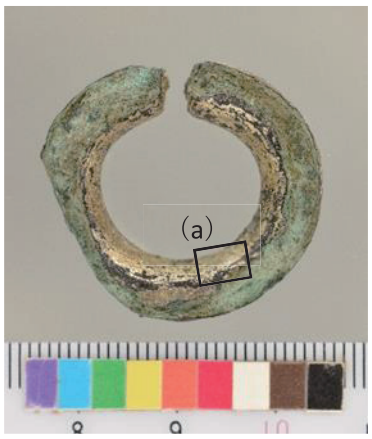
蛍光Ｘ線分析

測定位置

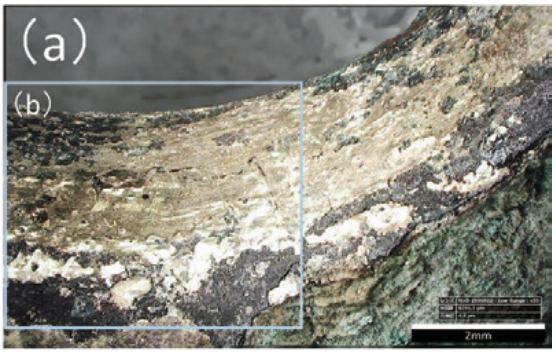


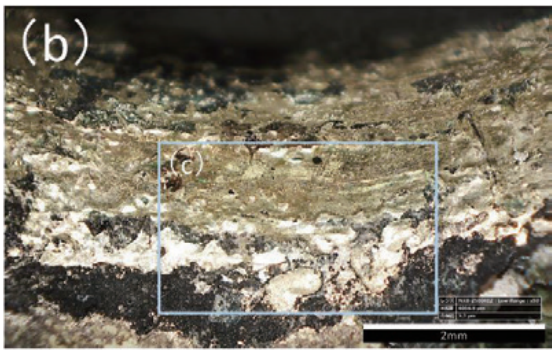
蛍光Ｘ線スペクトル

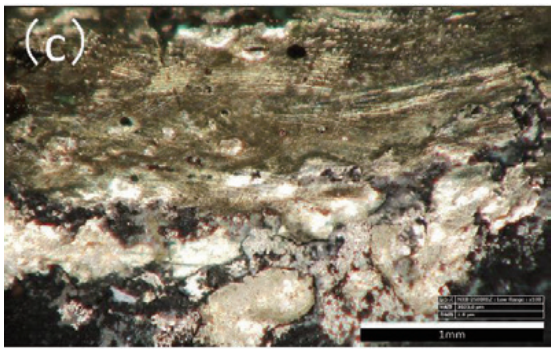
デジタルマイクロスコープ画像



観察位置





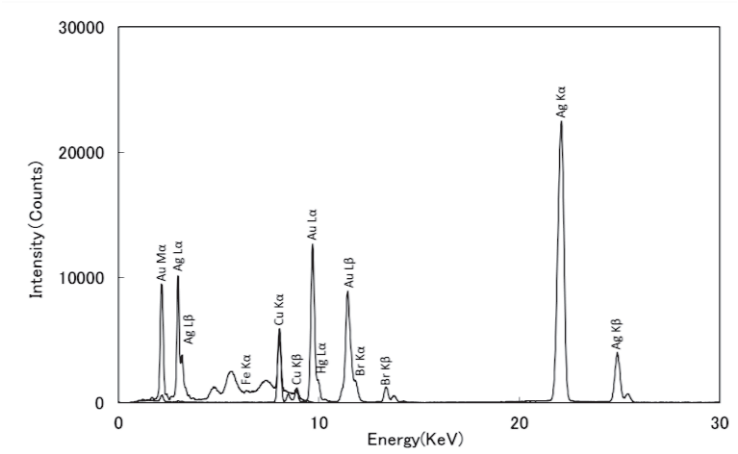


第 65 図　H-4 号横穴墓出土耳環

資料 No.41

蛍光 X 線分析

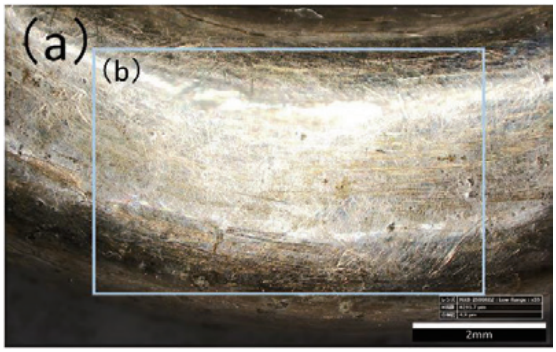
測定位置

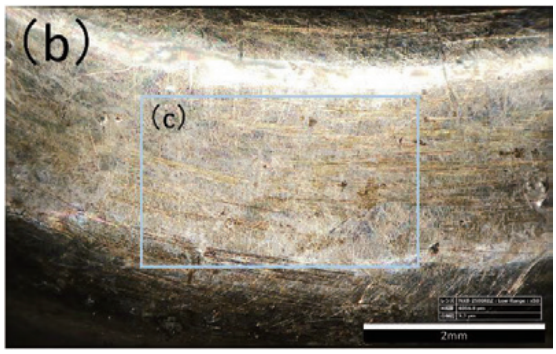


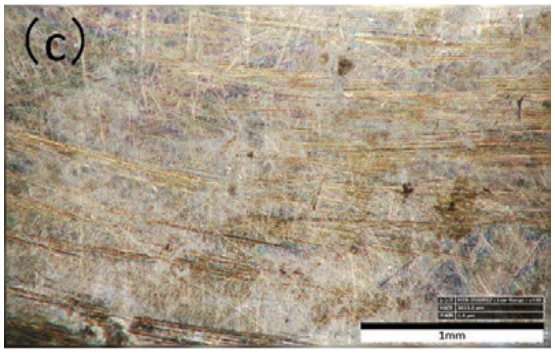
蛍光 X 線スペクトル

デジタルマイクロスコープ画像

観察位置





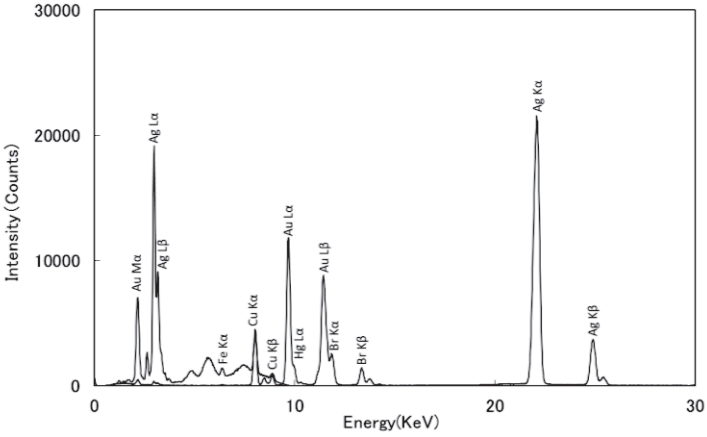


第 66 図　H-5 号横穴墓出土耳環

資料 No.42

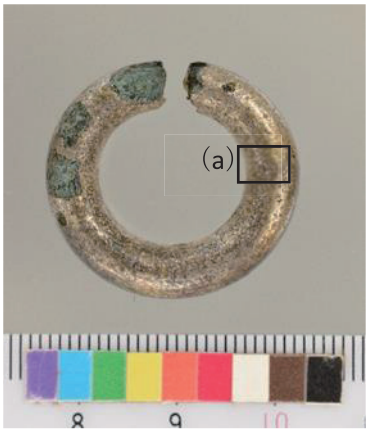
蛍光Ｘ線分析

測定位置

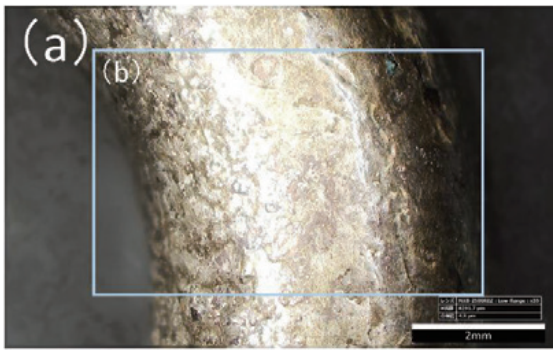


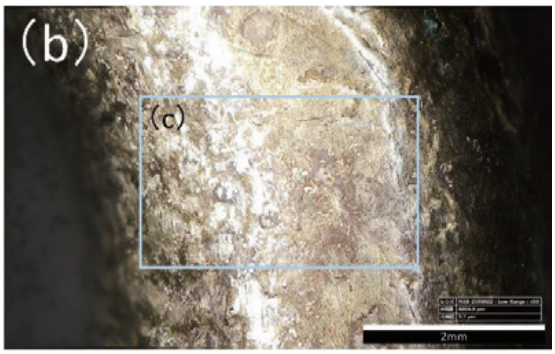
蛍光Ｘ線スペクトル

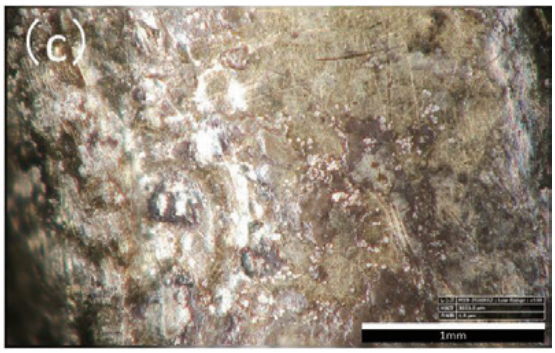
デジタルマイクロスコープ画像



観察位置





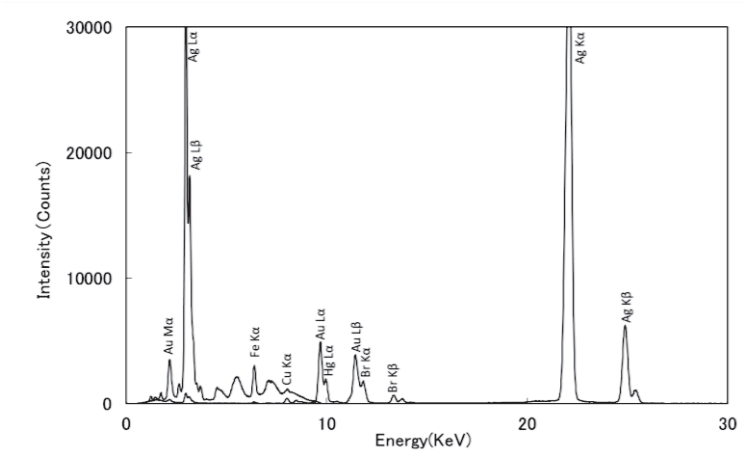


第 67 図　H-5 号横穴墓出土耳環

資料 No.67

蛍光 X 線分析

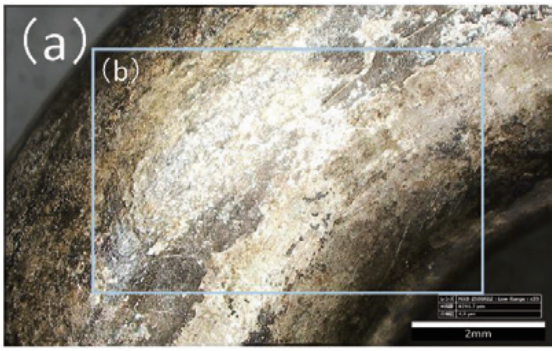
測定位置

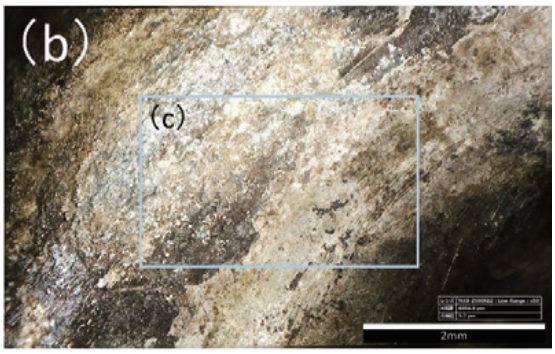


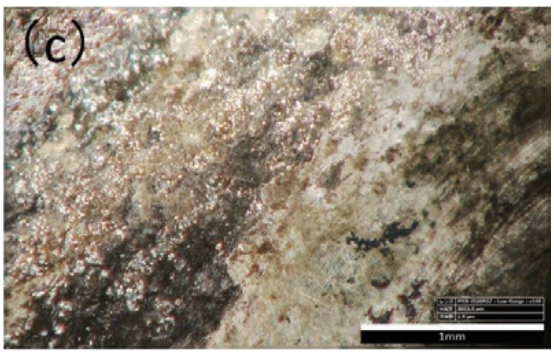
蛍光 X 線スペクトル

デジタルマイクロスコープ画像

観察位置







第 68 図　J-7 号横穴墓出土耳環

第 5 章　総括

第 1 節　神門横穴墓群出土須恵器と出雲西部における須恵器の様相

はじめに

島根県東部（以下，出雲と呼ぶ）に横穴墓が造営され須恵器も大量に消費される 7 世紀代には，出雲における須恵器の生産は出雲東部に所在する大井窯跡群に集約されると考えられている（柳浦 1986，丹羽野・平石 2010）。そういった状況にあって出雲西部においては従来「石見型」須恵器（大谷 1998，榊原 2008・2013）と呼称されてきた島根県西部（以下，石見と呼ぶ）の須恵器が出土することも知られている（内田 1984，花谷 2019）。筆者は石見平野部の須恵器を検討した際，大田市から江津市にかけての地域（以下，石東と呼ぶ）と浜田市から益田市にかけての地域（以下，石西と呼ぶ）で須恵器の様相が異なることを指摘し，前者を石東型，後者を石西型とした（岩本 2019）。

今回，出雲市に所在する神門横穴墓群の須恵器を詳細に観察した結果，所謂大井産とされてきた出雲の須恵器の他に，石東型や石西型，それらのいずれかに分類することが困難な須恵器がみいだせると考えた。また，一部の横穴墓では出土する須恵器の系統に偏りがある状況も確認できた。そのような状況から，出雲には所謂大井産の須恵器のほかにも複数の系統の須恵器が存在している複雑な状況が想定される。そこで，本稿では神門横穴墓群の須恵器を中心に，出雲西部の須恵器に認められるいくつかの系統を整理し，須恵器の流通や横穴墓の系譜に関する今後の詳細な研究に備えたい。

1　神門横穴墓群で出土した須恵器坏Ｈ蓋にみる諸系統

神門横穴墓群の須恵器を観察した結果，所謂出雲の須恵器だけではなく複数の系統の須恵器が存在することが予測された。ここではそれらを比較検討するため，資料数が多く特徴を把握しやすい坏Ｈの蓋に着目し，天井部と口縁部の境界（以下，口縁部界と呼ぶ）の様相や天井部ヘラケズリの有無，口径といった属性を整理し，いくつかに区分したい。まず地域性が非常に強いと考えられている出雲の坏Ｈ蓋と，それとは異なる特徴を示す石東型とした石見東部の坏Ｈ蓋の特徴をこれまでの研究によって確認し，それらに属さないその他の坏Ｈ蓋も抽出したい。

（１）出雲東部系坏Ｈ蓋の特徴

出雲の須恵器は，横穴墓が爆発的に増加し須恵器が大量に生産されるようになる出雲 4 期 (1) に地域性が特に強まることで知られている（大谷 1994）。その地域的特徴は複数の器種に認められるが，ここでは大谷晃二によって示された出雲 4 期から 6 期の坏Ｈ蓋の特徴を確認したい（大谷 1994・2001）。最も特徴的な要素は口縁部界に施される 1 条ないし 2 条の沈線である。畿内では陶邑須恵器編年 TK43 型式の段階には坏Ｈ蓋の天井部と口縁部の境界は不明瞭となるが，出雲では口縁部界を 1 状あるいは 2 条の沈線で強調する坏Ｈ蓋が TK209 型式に併行すると考えられる大谷 4 期にも盛行している。口縁端部には段の名残として沈線を施すものも大谷 4 期に多く認められ，口縁部界や口縁

端部に古相を残すことが出雲の地域色となっている。他の属性をみると，出雲４期には天井部の回転ヘラケズリは粗く，渦状にケズリ残すものや中心部をケズリ残すものが非常に多い。大谷分類では出雲４期の型式であるＡ４・Ａ５・Ａ６型の口径は 13 ～ 11㎝代におさまる。つづく出雲５期には天井部回転ヘラケズリを省略するＡ７型が登場する。この型式には口縁部界の沈線が省略されるものが多いが，沈線を施すものもある。口径は 12㎝前後である。出雲６期にはＡ７型に加えて，口径が 10㎝前後にまで縮小したＡ８型が出現する。この段階には口縁部界には沈線が施されない。

このような特徴は古墳や横穴墓といった消費地で出土した須恵器の分析に基づいているが，生産地とされる大井窯跡群でも同様の須恵器が大量に出土している。この時期出雲における須恵器の生産が大井窯跡群に集約されていたという認識は，大井窯跡群が大規模な操業をおこなう一方で他の窯跡が明確に認められない状況から指摘されているが（柳浦 1986，丹羽野・平石 2010），近年では出雲西部における須恵器生産の可能性も示唆されている（花谷 2008，坂本 2012，白石 2012）。また，消費地遺跡での状況をみると出雲の特徴をもつ須恵器は松江市域を中心に最も濃密に分布すると思われる。したがって本稿ではこれまで出雲の須恵器とされてきた大井産須恵器とされるものを，出雲東部系須恵器としておきたい（第 69 図７～ 12）。

（２）石東系坏Ｈ蓋の特徴

石見平野部の須恵器は石東と石西で様相が異なり，そのいずれもが出雲東部系須恵器とは異なる特徴を示す（岩本 2019）。神門横穴墓群では K-1 号横穴墓で出土した瓿以外に石西型須恵器は確認できていないため，ここでは石東型坏Ｈ蓋の様相を確認したい。その大きな特徴は口径の縮小傾向が鈍いまま口縁部界の稜や沈線，天井部の回転ヘラケズリの省略が進行することと言える。出雲４期に併行すると考えられる時期には口径は 14.5 ～ 13.5㎝ほどあり，一部には口縁部界に沈線が施されるものもあるが多くは口縁部界が強調されなくなる。天井部の回転ヘラケズリは省略されるものとされないものが認められる。つづく時期は出雲５期と大略併行し，口径は 13 ～ 11㎝代のものが認められ，天井部の回転ヘラケズリは省略される。口径が 10㎝前後の坏Ｈ蓋は少量存在するものの石東では良好な出土状況の土器群が少なく明確な特徴は把握できていない。あるいはその状況自体が石東の特徴なのかもしれないが，現状では出雲６期に併行する時期の須恵器の様相は坏Ｇによっている。

石東の坏Ｈ蓋は天井部に丸みを帯びるものが多く，口縁部界が強調されない傾向とあいまって全体が丸形を呈する。これは天井部が非常に平坦で扁平な器形である石西型坏Ｈ蓋（第 71 図１・２）と異なるだけではなく，私見では出雲４期の出雲東部系坏Ｈ蓋に多いと思われる天井部がやや平坦なものとも異なる形態的特徴である。

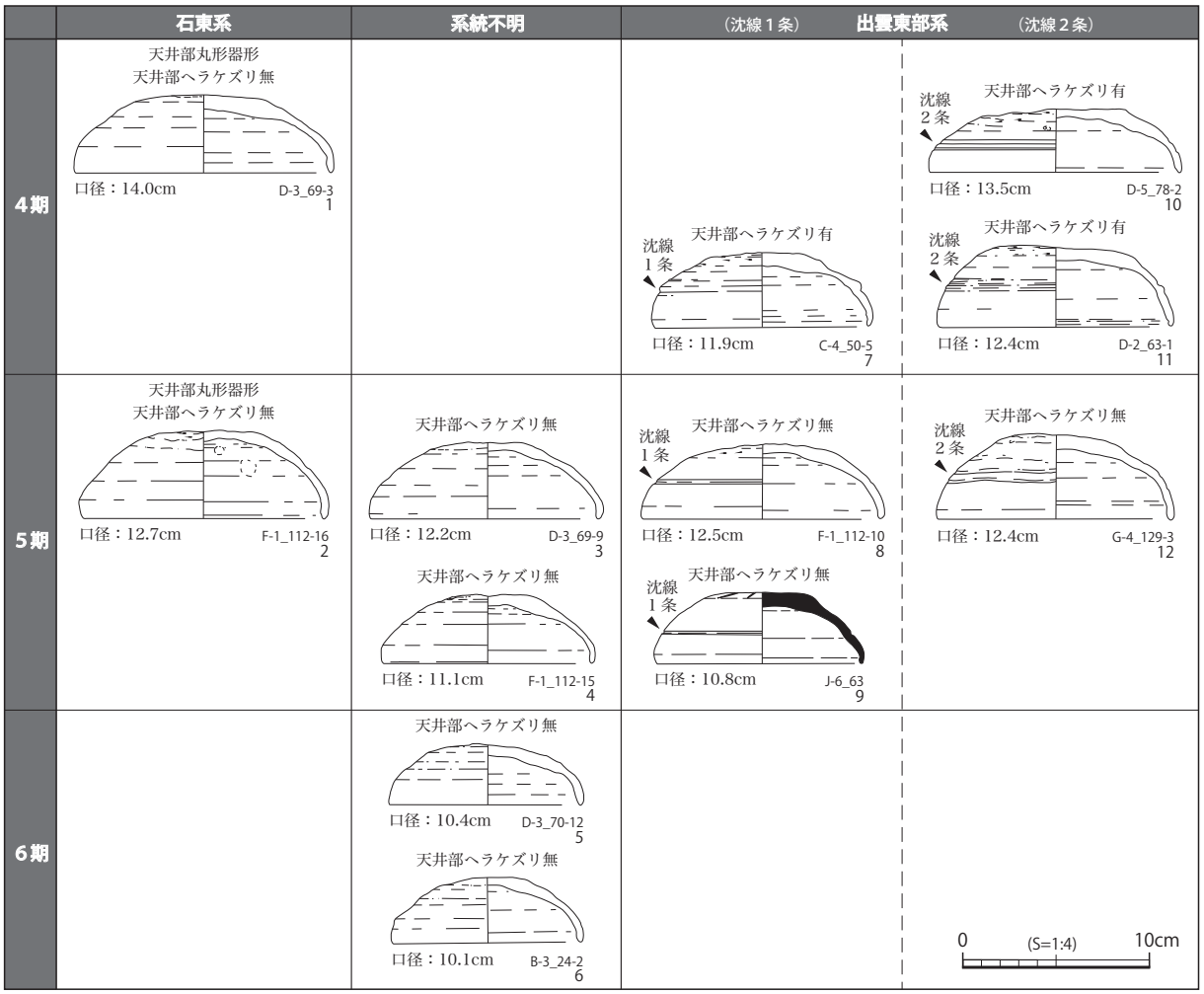
ただし，石東型は出雲東部系や石西型とは異なる特徴をもつ蓋坏が石東に偏在することから把握されるが，より巨視的にみればその地域性は弱いと思われる。また，蓋坏と瓿以外の器種で石東に集中する型式が現状では認められない。さらに，出雲東部や石西とは異なり窯跡が判明していないこと，出雲・石見両地域の山間部の様相が不明瞭なこともあり，生産地の限定には至っていない。こういった現状では，際だって特徴的とは言えないこれらの石東型蓋坏に類する出雲西部で出土した須恵器をそのまま石東型とするにはやや躊躇を覚える。そこで本稿では石東型蓋坏と特徴を共有するこれらの

坏Ｈ蓋を石東系としておきたい（第 69 図１・２）。

（３）系統が明確にできない坏Ｈ蓋

出雲東部系坏Ｈ蓋の口縁部界に表現される１条あるいは２条沈線や，丸形器形で口径が大きいにもかかわらず天井部回転ヘラケズリや口縁部界の強調を省略する石東系坏Ｈ蓋は，その特徴から出雲での抽出が容易である。しかし，口径が 12㎝前後を下回る坏Ｈ蓋のほとんどは天井部回転ヘラケズリが施されず口縁部界も強調されなくなるため没個性的となり，出雲東部系や石東系といった区別が困難である [(2)]。当然，出雲東部系にも石東系にも属さない全く別の系統の坏Ｈ蓋である可能性もあるが，現状では出雲で出土した坏Ｈ蓋という状況から出雲の須恵器とされていると思われる。しかし出雲においても石西型や石東系の須恵器が出土する以上，本稿では定義をやや厳密化し，口径 12㎝前後を下回り天井部に回転ヘラケズリを施さず口縁部界を沈線で強調しない坏Ｈ蓋は系統不明としておきたい。結果として，系統不明の坏Ｈ蓋に出雲東部系や石東系が含まれることは容易に予測されるが，出雲東部系坏Ｈ蓋は口縁部界に１条あるいは２条の沈線を施すものに限定され，石東系坏Ｈ蓋は口径が 12.5㎝を上回るが口縁部界を強調せず丸形の器形を呈するものとなる（第 69 図３～６）。

以上の属性にしたがって神門横穴墓群で出土した坏Ｈ蓋を系統ごとに整理したのが第69図である。



第 69 図　神門横穴墓群出土須恵器の諸系統

系統不明の坏Ｈ蓋の時期に関しては，安易な時期区分には問題があるものの便宜的に大谷編年に準じ，天井部回転ヘラケズリのあるものは４期，ないものは５期以降とし，口径が 12 ～ 11㎝程度のものは５期，10㎝程度のものは６期とした。系統を判別できる坏Ｈ蓋は出雲４期に集中し，出雲５期以降は系統不明の資料が増加してしまう結果となるため，今後の更なる詳細な検討が必要である。

２　神門横穴墓群における横穴ごとの須恵器の系統とその傾向

上記の坏Ｈ蓋の区分に従い，蓋坏以外の器種も含めて神門横穴墓群で出土した須恵器を横穴墓ごとに整理し第 15 表に示した。それを視覚的に図示したものが第 70 図である。これをみると，系統を判別できる器種のみからの判断ではあるが，神門横穴墓群には出雲東部系須恵器で構成されている資料群と出雲東部系を含まない資料群が存在する可能性がある。

例えば C-2 号横穴墓では坏Ｈ蓋と坏身が各６点，長脚無蓋高坏と長頸壺が各１点，瑳が２点出土しているが，系統を判別する根拠に乏しい坏身以外は全て出雲東部系である。坏Ｈ蓋は６点全て口縁部界に沈線が２条施されている。長脚無蓋高坏は坏部列点文が沈線や稜よりも下位の坏底部に施されており出雲東部系の特徴を備えている（赤井 2002）。長頸壺もなで肩で小振りな胴部の肩に刺突文を施し脚部は屈曲せず，出雲東部系としても違和感はない。また瑳は２点ともに底部にやや丸みをもつものの回転ヘラケズリにより平底を志向しており，出雲東部系の特徴を示している（大谷 1994，花

第 15 表　神門横穴墓群の横穴墓ごとにみる須恵器の系統

横穴墓番号	石西系	石東系		系統不明					出雲東部系		
	他器種	坏蓋		坏蓋				他器種	坏蓋		他器種
		4 期	5 期	4 期	5 期	6 期	坏 G		4 期	5 期	
A-3					1(1)						長頸壺 (5 期)
B-1							1(1)				
B-3					1(6)	2(1,2)					
B-4							2(1,3)				
C-2									6(1,3,5,7,9,10)		無蓋高坏・瑳・長頸壺 (4 期)
C-4									4(1,3,5,7)		
C-5									1(1)		
D-2									6(1,2,3,7,8,14)		
D-3		1(3)			2(8,9)	2(10,12)			1(13)	1(5)	
D-4					1(1、出雲東部系か)				1(2)		提瓶 (4 ～ 5 期)
D-5				1(1)					1(2)		
D-6											瑳 (5 ～ 6 期)
E-1									1(1)		
E-2					1(1)						
E-2,3					1(1)						
E-3					1(3)						
E-6									4(1 ～ 4)		
F-1			2(16,18)	1(9)	5(7,12,14,15,20)	1(22)	1(3)	低脚無蓋高坏		2(5,10)	
F-2			1(3)		1(1)						
G-3											提瓶 (4 ～ 5 期)
G-4									2(1,2)	1(3)	
K-1	瑳 (4 期)				1(1)	1(3)		長脚無蓋高坏 (4 期)、低脚無蓋高坏 (5 ～ 6 期)、提瓶 (3 ～ 4 期)			
H-4						1(34)					
H-5					1(40)						
J-2					1(52)						
J-6					1(62)					1(63)	
J-7				1(64)							
J-8					1(71)						

（　）内の数字は報告書挿図番号

系統が判明する資料 3 点以上が出雲東部系のみで構成されるもの、あるいは系統不明もふくめて多数出土するなかに出雲東部系を含まないもの

出雲東部系と石東系、系統不明を含むもの

第 70 図　神門横穴墓群出土須恵器の諸系統

谷 2017）。

一方，K-1 号横穴墓では坏Ｈ蓋は小型で系統不明の２点しか出土していないが蓋坏以外の器種が複数出土している。そのなかで瓻は口縁部から頸部にかけて多段に波状文とカキメが施されており，口縁部は強く屈曲して上方へ伸展し頸部がやや短頸化している。浜田市森ヶ曽根古墳（浜田市教育委員会 1986）や益田市西平原窯跡群（田中 1982）で出土した瓻と共通することから，石西型瓻と考えられる。脚部を残す長脚無蓋高坏は坏部が非常に大径の椀形で脚部には上下のバランスが崩れているが２段のスカシが配される。低脚無蓋高坏の脚部は短いが裾部が強く屈曲して段をなしている。いずれも出雲東部系の無蓋高坏の特徴とは異なる資料である。

こういった例から，出雲東部系須恵器のみで構成される横穴墓とそれ以外の系統の須恵器で構成される横穴墓が存在した可能性がある。とはいえ，出雲東部系も石東系ももつ横穴墓もある。例えば F-1 号横穴墓は蓋坏が多数出土しているが，口縁部界に沈線が 1 条施される出雲東部系だけでなく，口径が 12.5cm 以上あるが天井部回転ヘラ削りや口縁部界の強調を省略する石東系が含まれる。系統不明としたものも口径が比較的大きい資料は丸形器形を呈するため，厳密に定義できないが出雲東部系ではなく石東系に近い資料が含まれる。低脚無蓋高坏も椀形ではなく坏形で脚基部がしっかりと太くスカシも幅をもって貫通しており，出雲東部系で主流である低脚無蓋高坏の該期の特徴とはやや異なる。出雲東部系も石東系も含む横穴墓があることにも留意する必要があろう。

神門横穴墓群では須恵器が豊富に出土した横穴墓が限られ，坏身も含めて坏蓋でも系統を明確に出来ない資料も多いため，これらは偶発的な状況である可能性も考慮しなければならない。そこで，以下では神門横穴墓群以外にも出雲の横穴墓で出土須恵器の系統に偏在性が認められるかを確認してみたい。

３　出雲の東西における須恵器の系統とその様相

（１）上塩冶横穴墓群で出土する須恵器の系統とその様相

神門横穴墓群での須恵器の系統のあり方を検証するため，出雲西部に存在する多くの横穴墓群のなかでも代表的な横穴墓群である上塩冶横穴墓群の須恵器の系統を確認した[(3)]。

系統を判別できる須恵器では出雲東部系が最も多く出土点数が少ない場合は出雲東部系のみの傾向はあるが，一定量が出土している場合でも出雲東部系で構成される例もある。第３支群 14 号横穴墓では坏Ｈ蓋が土器枕として３点，集積された状況で７点出土しており，全てが出雲東部系である。組み合わされて出土した坏身もおそらく出雲東部系と考えられる。一方，第８支群５号穴では口径 13 ㎝を超える蓋坏３点全てが回転ヘラケズリを省略しており，全体の器形も丸形を呈していることから石東系と考えられる。しかしながらこの横穴墓は大半が失われ，須恵器の出土点数も少ないため安定的な傾向とは言い難い。出土した須恵器の全てが出雲東部系以外の系統で構成される例はあったとしても非常に少なく，石東系が含まれる場合は出雲東部系とともに出土する例が多いと思われる。

その他の系統としては，石西型も確認できる。例えば第 40 支群 33 号横穴墓では提瓶と大甕が出土しているが，提瓶の把手は口縁基部に接するように貼付けられ石西型提瓶の特徴をよく示している。

頸部に刺突文が施された大甕は波状文を施す出雲東部系とは異なる石西型の特徴と思われる。ただし波状文を施す大甕も出土しており石西型単純組成ではない。非常に特徴的な組み合わせとしては第40支群４号横穴墓で出土した６点の坏Ｈ蓋があり，出雲東部系２点，石東系２点，石西型２点から構成されている(4)。このように石西型須恵器も少数ながら出土しているが，現状では石西型のみで構成された資料群は確認できない。また，系統を明確に出来ない須恵器も多く出土している。

以上のように，遺物出土量が比較的多い上塩冶横穴墓群の須恵器の系統と横穴墓ごとのその偏りを検証すると，出雲東部系が出土須恵器の大半を占め，系統に偏りがある例のほとんどは出雲東部系須恵器で構成されることがわかる。そのなかで出雲東部系以外の須恵器を複数個体もつ横穴墓も存在するが，異系統の須恵器のみで構成される横穴墓は非常に少ない可能性がある。

（２）出雲東部の横穴墓群で出土する須恵器の系統とその様相

出雲西部の須恵器の様相を位置づけるためには出雲東部と比較する必要があるが，出雲東部に極めて多く存在する横穴墓の須恵器を全て確認することは筆者の力量を超えるため，ここでは代表的な横穴墓群で確認できた事例から，出雲東部における系統のあり方の一部を例示しておきたい。

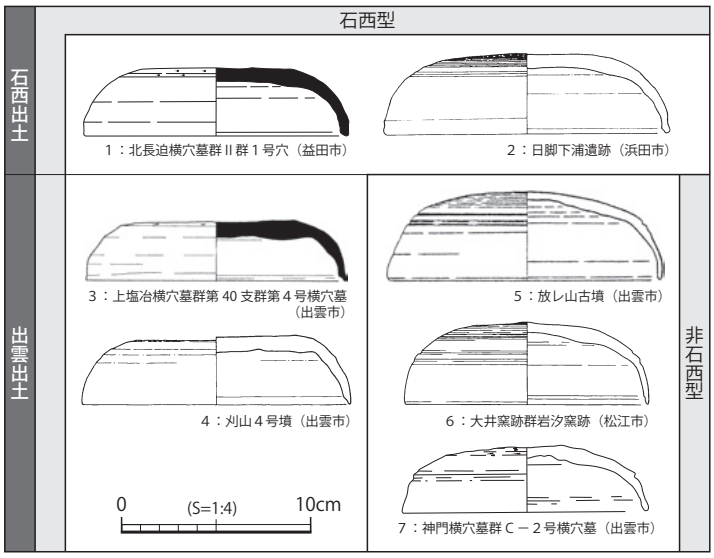
出雲東部ではやはり出雲東部系の須恵器がそのほとんどを占める。概観した限りでは出雲西部よりもその比率は高く，出雲東部系須恵器のみで構成される横穴墓が非常に多いようだ。そのなかにあって，例えば島田池横穴墓群１区１号横穴墓では口径13㎝前後の丸形器形の坏Ｈ蓋で天井部回転ヘラケズリのないものが複数出土している。組み合わされる坏身の立ち上がりが低いことからも出雲５期に併行する時期のものと思われるが，出雲東部では異質であり本稿で石東系としたものと近い。穴神横穴墓群３号横穴墓では口縁部界を強調しない坏Ｈ蓋が複数出土しているが，器高が低く扁平な器形である。前庭部で出土した坏蓋には時期幅も想定されるが，口縁部界に沈線を２条施すものも出土しており，複数の系統が混在していたようだ。

概略ではあるが，出雲東部においては出雲東部系が出土須恵器の圧倒的多数を占め，横穴墓の多くが出雲東部系須恵器で構成され，一部にそれ以外の系統の須恵器を少量含む横穴墓があるようだ。また石東系に近い資料はあっても(5)，厳密に石西型と判断できる資料は現在のところ確認していない(6)。こういった様相を出雲西部と比較すると，出雲東部系須恵器の出土量や出雲東部系単純組成である比率が東高西低である点と，石西型を含むか否かが相違点だと考えられる。出雲東部系須恵器の生産地と想定される大井窯跡群から物理的に遠くなり石東と隣接するという出雲西部の地理的条件をふまえれば，自然な状況とも言えよう。

４　出雲西部における須恵器の実態把握に向けて

（１）出雲西部における「石西型」須恵器

先述のとおり出雲西部では出雲東部でほとんど出土しないと思われる石西型須恵器も出土する。神門横穴墓群K-1号横穴墓で出土した瓿や上塩冶横穴墓群出土例の他にも，刈山４号墳で出土した石西型蓋坏は従来から「石見型」須恵器として知られている（内田1984）（第71図３・４）。天井部は極端に平坦で，その内面は弱いオサエのような押圧痕により非常に平滑になっており外面には板状圧痕



第 71 図　神門横穴墓群出土須恵器の諸系統

が認められることから，石西型蓋坏の製作工程にもとづいてつくられた資料であることがわかる。口縁端部は所謂鑿刃状を呈しており，あらゆる面で石西型蓋坏の定義を備えている。しかし，出雲西部で「石見型」とされてきた須恵器のなかには厳密には「石見型」ではなく出雲東部系須恵器の特徴を兼ね備える資料もある。例えば放レ山古墳で出土した坏蓋（第 71 図５）は天井部にカキメが施され「石見型」である可能性が指摘されているが（内田 1984），口縁部界には２条の沈線が表現され天井部内面は不定方向の仕上げナデが施されるのみで渦状の凹凸が消えず，石西型蓋坏（第 71 図１・２）ほど平滑になっていない。これは石西型蓋坏とは異なる製作工程でつくられた資料であることを示す。その証左であるかのように，大井窯跡群の岩汐窯跡では放レ山古墳例と近似した坏蓋が出土している（第 71 図６）。したがって，神門横穴墓群や上塩冶横穴墓群，刈山４号墳のように石西型須恵器自体が副葬される横穴墓がある一方で，石西型とは似て非なる須恵器が出雲西部に副葬されている例があると考えられる。

「石見型」の可能性が指摘される傾向のある坏Ｈ蓋には他に，低平な器形を呈するものがある（花谷 2019）。神門横穴墓群出土土器のなかでも C-2 号横穴墓で出土した 39-5 は天井部がやや平坦で器高も低く，一見すると「石見型」蓋坏の器形と類似している（第 71 図７）。筆者もこれまで石西型と関連する可能性を模索していたが，今回，出雲と石見両地域を複合的に再考した結果，口縁部界に２条の沈線が施される点，天井部内外面の観察から石西型とは製作工程が異なる点を重視し，現段階では石西型やその系譜ではなく出雲東部系の範疇で捉えることとした。この低平な器形の蓋坏の分布範囲は未検討であるため，今後は大井窯跡群との詳細な比較なども含め，再検討する必要があろう。

（２）出雲西部における須恵器の系統と生産地の問題

出雲東部ではほとんど出土しない石西型須恵器が出雲西部では少量出土し，また出雲西部では東部より石東系須恵器の比率が高い。出雲西部に偏在する特定型式の須恵器を抽出できず生産地の存在を推定できない以上，現段階では出雲東部系と石東系の交わる境界地域というのが出雲西部の須恵器の様相としては穏当であるようにも思われる。その一方で，出雲型子持壺の胎土分析成果から出雲西部にも生産地があった可能性も指摘されている（白石 2012）。石東系須恵器の生産地が特定されていないことも考慮すれば，あらゆる可能性を排除しない詳細な須恵器の検討が求められる。

おわりに

神門横穴墓群出土須恵器を詳細に観察し出雲や石見の須恵器の様相とあわせて検討した結果，神門

横穴墓群が所在する出雲西部においては出雲東部系須恵器が最も多く出土するが，その比率は出雲東部よりも低く，石東系，石西型といった異系統の須恵器や現状ではいずれにも区分しがたい系統不明の須恵器といったさまざまな須恵器が存在することを示した。

こういった出雲西部の須恵器の様相からは，横穴墓が盛行する時期の出雲の須恵器生産が東部に所在する大井窯跡群に集約されていたという現在通有している認識は大局的には否定されるものではない。しかし，出雲型子持壺や石東系須恵器の生産地の問題を考慮すると，出雲西部において須恵器を生産していた可能性も追求する必要がある。それだけではなく，未だ様相が不明瞭な出雲・石見両地域山間部の須恵器についての実態解明も必須であろう。

また，横穴墓ごとに須恵器の系統を確認した結果，出雲西部では一部の横穴墓で石東系や石西型が出雲東部系とともに出土するが，異系統の須恵器のみで構成される横穴墓は少ない可能性も示した。そのなかにあって神門横穴墓群 K-1 号横穴墓は示唆的だと思われる。K-1 号横穴墓で出土した須恵器のなかでも甕は出雲４期，脚部を残す長脚無蓋高坏や提瓶は出雲３～４期に併行する時期のものと考えられ，系統不明の小径の坏Ｈ蓋より古く，初葬に伴うものと考えられる。小径の蓋坏は系統不明とはいえ出雲東部系である可能性も排除できないが，初葬に伴うと思われる土器は全て異系統と考えられる。この横穴墓は神門横穴墓群でも最高所を占地しており最も古い横穴墓である可能性がある。横穴墓群造営の契機となる横穴墓へ異系統の須恵器のみが副葬されているのだとすれば，被葬者の出自等とも関連して非常に興味深い事象である。

以上，系統不明な須恵器の存在を前提とし，神門横穴墓群以外の横穴墓に関しては概略のみを示す非常に雑駁な議論ではあるが，出雲西部に視点を据えて出雲・石見両地域にまたがる須恵器の様相を示した。筆者の力量不足により須恵器の生産地や流通，横穴墓の造営主体や系譜といった社会の様態を示すには至らなかった。今後の課題である。

最後になりましたが，神門横穴墓群出土須恵器の実見に際して多大なるご助力をいただき，本稿執筆の機会も下さいました出雲市文化財課の石原聡氏に感謝申し上げます。また，大谷晃二氏には出雲の須恵器に関して思いつくままに相談させていただき多岐にわたるご教示を得ました。出雲弥生の森博物館の花谷浩氏，坂本豊治氏からも出雲西部の須恵器に必要な視点についてご意見を賜りました。記して感謝申し上げます。

（岩本真実）

註

(1)　以下，出雲の須恵器にもとづく時期区分は大谷 1994 に準じ，大谷編年と呼称する。大谷による須恵器の分類は大谷分類と呼称する。

(2)　口縁部から天井部にかけての形態から系統が想定される資料もあるが客観的な分析にもとづいてはおらず，各系統の詳細な検討を重ね実態を把握する必要がある。

(3)　全ての資料を実見して系統を確認できたわけではなく報告書掲載の実測図と写真から判断し

たものも多いため，系統の判断は厳密なものではなく一覧表等としては提示しない。

(4)　出雲市教育委員会 2016 第 18 図に掲載されており，19･21 が出雲東部系，23･25 が石東系，27・29 が石西系である。報告書でも 27・29 は「石見型須恵器」，23・25 は石見地方の須恵器に似た特徴を示すとされている。

(5)　先述のとおり，石東型は出雲東部系とも石西型とも異る須恵器が石東に偏在することによって認識されるものである。際だった特徴をもたないことから，偏在する地域から離れた類似資料は全く別の系統である可能性も考慮される。

(6)　天井部や底部に板目状の痕跡が確認できる資料はあるが，製作工程から厳密に石西型と判断されるものはほとんどないと思われる。

参考文献

赤井和代 2002「隠岐島出土の須恵器－資料紹介－」『島根考古学会誌』第 19 集　島根考古学会

岩本真実 2019「石見地域における須恵器の編年と地域性―「石見型須恵器」再考―」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第 22 集　島根県古代文化センター

内田律雄 1984「出雲刈山 4 号墳と搬入須恵器」『ふい～るど・の～と』№6　本庄考古学研究室

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集　島根考古学会

大谷晃二 1998「原始・古代の石見」『八雲立つ風土記の丘』№147・148・149 合併号　島根県立八雲立つ風土記の丘

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市埋蔵文化財調査報告書第 8 集　平田市教育委員会

榊原博英 2008『蔵地宅後古墳』浜田市教育委員会

榊原博英 2013「山ノ内古墳群」『島根県浜田市遺跡地図Ⅴ（旭自治区）・浜田市治和町鰐石試掘調査』浜田市教育委員会

坂本豊治 2012「須恵器からみた中村 1 号墳」『中村 1 号墳』出雲市の文化財報告 15　出雲市教育委員会

白石　純 2012「中村 1 号墳ほか出土須恵器の胎土分析」『中村 1 号墳』出雲市の文化財報告 15　出雲市教育委員会

花谷　浩 2008「出土須恵器について」『出雲における県（あがた）の歴史考古学的研究』平成 19 年度科学研究費補助金（奨励研究）成果報告書　出雲市文化観光部文化財課・花谷　浩

花谷　浩 2017『はそう―須恵器の前方後円墳?!―』2016 年度出雲弥生の森博物館第 3 回ギャラリー展パンフレット　出雲弥生の森博物館

花谷　浩 2019「出雲市多伎町・湖陵町地域の須恵器について」『出雲弥生の森博物館研究紀要』第 7 集　出雲弥生の森博物館

丹羽野裕・平石　充 2010「出雲・大井窯跡群の様相と生産体制試論」『古代窯業の基礎研究―須恵器

窯の技術と系譜―』窯跡研究会
柳浦俊一 1986「出雲地方の須恵器生産」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会

遺跡文献

・大井窯跡群
松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興事業団 2009『岩汐窯跡発掘調査報告書』
・出雲市上塩冶横穴墓群
出雲市教育委員会 2003『上塩冶横穴墓群第 8 支群』出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第 13 集
出雲市教育委員会 2016『上塩冶横穴墓群第 40 支群』出雲市の文化財報告 32
出雲市教育委員会 2018『上塩冶横穴墓群第 3 支群』出雲市の文化財報告 36
島根県教育委員会 1998『上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群第 7 ・12・22・23・33・35・36・37 支群』
・刈山 4 号墳
内田律雄 1984「出雲刈山 4 号墳と搬入須恵器」『ふい～るど・の～と』№6　本庄考古学研究室
・放レ山古墳
角田徳幸・西尾克己 1989「出雲西部における後期古墳文化の検討―横穴式石室の構造と変遷を中心として―」『松江考古』第 7 号　松江考古学談話会
・神門横穴墓群
出雲市教育委員会 1995・1996『小浜山横穴墓群（神門横穴墓群第 10 支群）Ⅰ・Ⅱ』
出雲市教育委員会 2021『神門横穴墓群第 10 支群』出雲市の文化財報告 45（本書）
・浜田市日脚下浦遺跡（日脚御幸地のうしろ）
内田律雄 1984「出雲刈山 4 号墳と搬入須恵器」『ふい～るど・の～と』№6　本庄考古学研究室
浜田市教育委員会 2008『史跡　周布古墳・蔵地宅後古墳・市史跡　金田 1 号墳』
・浜田市森ヶ曽根古墳
浜田市教育委員会 1986『周布小建設予定地内埋蔵文化財（森ヶ曽根古墳）発掘調査報告書』
・益田市西平原窯址群
田中義昭 1982「益田市西平原窯址群の意義について」『ふい～るど・の～と』№3　本庄考古学研究室

第２節　H-4 号横穴墓出土象嵌鍔について

１　はじめに

H-4 号横穴墓からは，象嵌鍔が出土している。日本列島出土の象嵌遺物（刀剣・鉾・刀子）について集成した瀧瀬芳之氏によると列島内では，608 点の象嵌遺物が出土している（瀧瀬 2019）。島根県域では，これまで 14 例の出土があり（吉松 2019），本例は 15 例目である。以下に本資料の特徴と島根県内，特に出雲地域での位置付けについて検討したい。

２　H-4 号横穴墓出土象嵌鍔について

H-4 号横穴墓から出土した象嵌鍔は，３片の細片で出土している。これらの破片から復元を試みると八窓鍔になる可能性がある。八窓鍔として復元すると長径 9.6cm，短径 8.2cm，厚さ 0.8cm であると想定される。文様は鍔の平面に圏線Ｃ字文，耳部分にＣ字状文が施される。また，鍔の平面に象嵌線が抜けた箇所が見られ，1㎜内外のＶ字状の工具痕を観察できる。H-4 号横穴墓出土象嵌鍔は，平面に圏線Ｃ字文，耳部分にＣ字状文が施されている象嵌鍔で，島根県域では初めて出土した象嵌文様である。

第 72 図　Ｖ字状工具痕

いわゆる圏線Ｃ字文の検討はすでに橋本博文氏や大谷宏治氏の検討がある（橋本 1993・大谷 2011）。橋本氏によれば，Ｃ字状文系列に分類され，橋本第三段階から類例がみられる（橋本 1993）。大谷氏の編年観では，Ⅱ段階以降に登場する（大谷 2011）。両氏の年代観では橋本第三段階が６世紀末，大谷Ⅱ段階が TK43 ～ TK209 型式に併行する。大谷氏は柄頭や鞘尻金具などとの組み合わせについても検討しており，本資料と類似する圏線Ｃ字文鍔は象嵌円頭Ⅱ系列（筑波山古墳例），象嵌頭椎Ⅱ系列（宮ノ脇２号墳例）に採用されるとし，それらを TK209 型式期に位置付けている。これらのことから本資料は，６世紀末（TK209）以降に位置付けられる。

３　島根県域における H-4 号横穴墓出土象嵌鍔の位置付け

島根県域では，現在まで 15 例の象嵌装大刀の出土がある。旧国単位では，出雲で 12 例，石見で１例，隠岐で２例である。このうち鍔に象嵌を施したものは，９例（岡田山１号墳例を含む）で，石見を除く地域で出土している。県内での分布の傾向として，出雲地域に分布の中心があるといえる。出雲地域では，東西で装飾付大刀の形式に差異があることが分布から指摘されている（大谷 1999）。さらにⅠ段階（TK43 型式期・出雲３期），Ⅱ段階（TK209 型式期以降・出雲４期以降）と２時期に分けて検討がされており（大谷 1999・松尾 2005），本稿でも先学の成果に従って，島根県域，特に出雲地域における象嵌装大刀について，整理してみたい。(1)

第73図　島根県内象嵌装大刀出土古墳・横穴墓

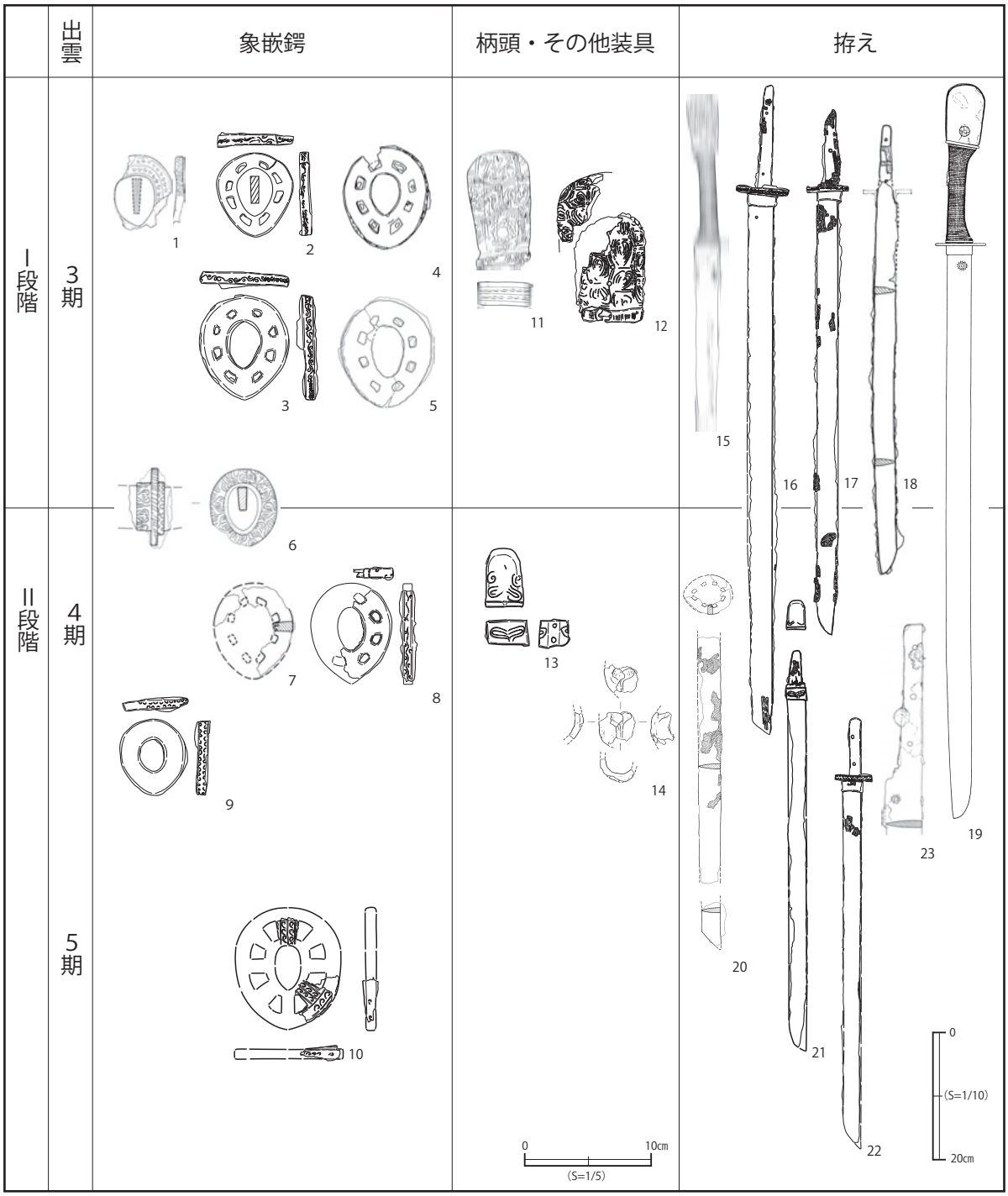
１小汐手横穴墓群　２宮内遺跡Ⅱ区1号横穴墓　３島田池遺跡1区2号横穴墓　４古天神古墳　５岡田山1号墳
６奥山遺跡B-Ⅱ号横穴墓　７上塩冶築山古墳　８上塩冶横穴墓群第8支群3号横穴墓　９放レ山古墳　10妙蓮寺山古墳
11神門第10支群H-4号横穴墓　12大西大師山遺跡17号横穴墓　13唯山古墳　14大座西遺跡2号墳

（1）Ⅰ段階（TK43 型式期・出雲３期）

出雲地域で装飾付大刀の形式差が東西で明瞭に現れる時期である（大谷 1999・松尾 2005）。出雲東部では半島系装飾付大刀，西部では捩り環頭大刀などの倭風大刀が分布し，東西で大刀の偏在性がみられる。

象嵌装大刀は，出雲西部では，妙蓮寺山古墳や上塩冶築山古墳，東部では岡田山１号墳，古天神古墳，宮内遺跡Ⅱ区１号横穴墓のほか，隠岐でも唯山古墳や大座西２号墳でみられる。

当該期は，象嵌装大刀の副葬は古墳を中心にみられ，横穴墓への副葬は稀である。また，上塩冶築山古墳や岡田山１号墳，古天神古墳などでは，象嵌装大刀を含む複数振の装飾付大刀が副葬される。古墳と横穴墓で装飾付大刀の副葬数に差異がみられる点は注目される。



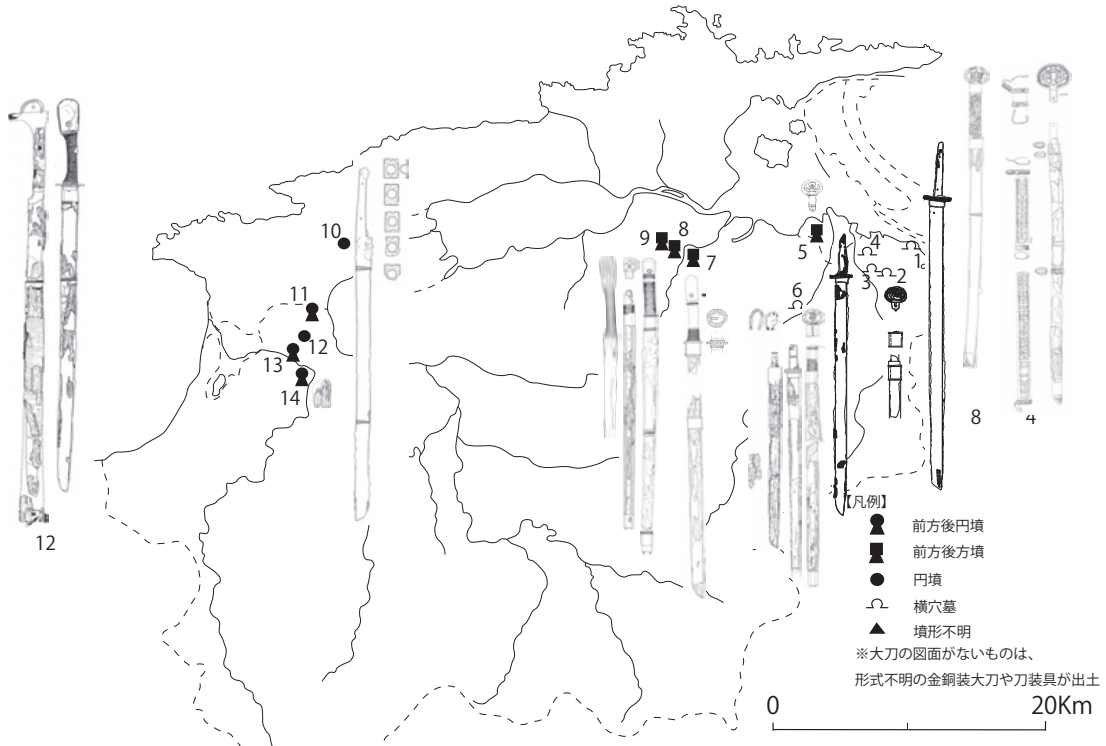
1・11・15 岡田山１号墳　2・17 宮内遺跡Ⅱ区１号横穴墓　3・16 小汐手 a　4・18 唯山古墳　5 大座西２号墳６古天神古墳
7・20 放レ山古墳　8 上塩冶横穴墓群第８支群３号横穴墓９・22 小汐手 b　101 神門第 10 支群 H-4 号横穴墓　12 妙蓮寺山古墳
13・21 島田池遺跡１区２号横穴墓　14 大西大師山遺跡 17 号横穴墓　19 上塩冶築山古墳　23 奥山遺跡 B-Ⅱ号横穴墓

第74図　島根県域の象嵌装大刀編年案

（2）Ⅱ段階（TK209 型式期以降・出雲４期以降）

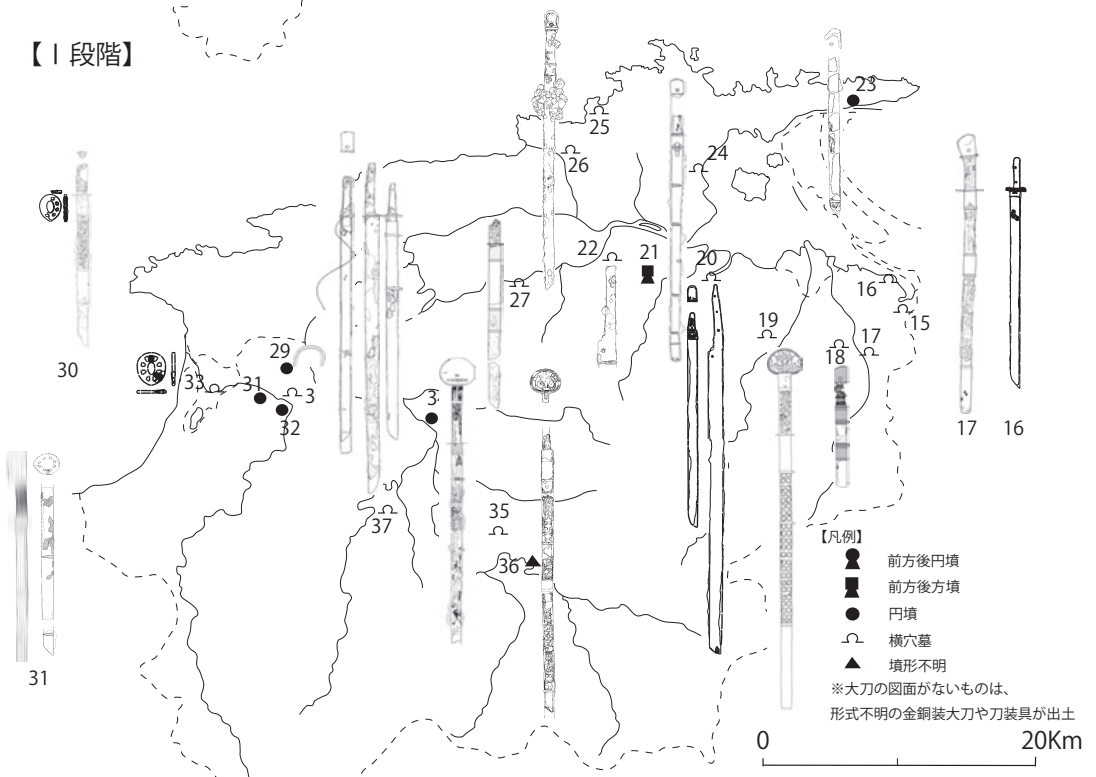
Ⅰ段階の東西出雲でみられた装飾付大刀の偏在性が解消され，東西で同様の形式の大刀が分布する時期である（大谷 1999・松尾 2005）。また，装飾付大刀の副葬が横穴墓や山間部の古墳にも拡大している。

象嵌装大刀は，出雲西部では放レ山古墳や上塩冶横穴墓群第８支群３号横穴墓，H-4 号横穴墓，東



1 小汐手 a　2 臼コクリ S-2 号横穴墓　3 宮内遺跡 II 区 1 号横穴墓　4 高広IV区 1 号横穴墓
5 仏山古墳　6 鷺ノ湯病院跡横穴墓　7 古天神古墳　8 御崎山古墳　9 岡田山 1 号墳
10 上島古墳　11 大念寺古墳　12 上塩冶築山古墳　13 半分古墳　14 妙蓮寺山古墳

【Ⅰ段階】



15 穴神 2 号横穴墓　16 小汐手 b　17 中山横穴墓　18 鳥木横穴墓　19 かわらけ谷横穴墓
20 島田池 1 区 2 号横穴墓　21 向山 1 号墳　22 奥山遺跡 B-II 号横穴墓　23 福浦法田峠 2 号墳
24 連行 1 号横穴墓　25 宮尾 C 区 II 号横穴墓　26 高田尾横穴墓　27 松石横穴墓　28 中村 1 号墳
29 築山 1・3 号墳　30 上塩冶横穴墓群　31 放レ山古墳　32 刈山 5 号墳
33 小浜山 G-6 号横穴墓・神門第 10 支群 H-4 号横穴横穴墓　34 三代古墳　35 下布施 1 号横穴墓
36 原田古墳　37 東下谷 4 号横穴墓

【II段階】

第75図　出雲地域の金銀装装飾付大刀・象嵌装大刀分布

部では，奥山遺跡 B-Ⅱ号横穴墓 (2) や島田池１区２号横穴墓から出土しているほか，石見においても大西大師山遺跡 17 号横穴墓から出土している。

当該期は，Ⅰ段階からの変化として，象嵌装大刀の副葬が横穴墓へも拡大している点があげられる。これは装飾付大刀の副葬状況とも一致しており，これらの大刀の佩用者層が拡大していることを示すものであろう。また，Ⅰ段階には古墳で複数振の装飾付大刀副葬がみられたが，これはⅡ段階にも引き継がれており，放レ山古墳で圭頭大刀，金銅装小刀，銀装大刀などとともに象嵌装大刀が出土している。一方で長 20m の前方後方形の後背墳丘をもつ島田池遺跡１区２号横穴墓は，象嵌円頭大刀とともに水晶製三輪玉を携えた倭風大刀が出土している。当該期は，Ⅰ段階のあり方が引き継がれるとともに象嵌装大刀や装飾付大刀の佩用者層が拡大している時期と位置付けられよう。H-4 号横穴墓でも同様に，Ⅱ段階になり象嵌装大刀や装飾付大刀の佩用者層拡大によりもたらされたものと考えられる。

４　おわりに

これまで H-4 号横穴墓出土象嵌鍔の特徴を整理し，Ⅰ段階，Ⅱ段階の島根県域での象嵌装大刀の展開について概観した。Ⅰ段階は装飾付大刀では東西出雲での大刀の偏在性，象嵌装大刀では，古墳に複数振の装飾付大刀が副葬され，一部階層上位と考えられる横穴墓に副葬される。Ⅱ段階は装飾付大刀では，Ⅰ段階にみられた東西出雲の大刀分布の偏在性が解消され，横穴墓被葬者などにも佩用者層が拡大する時期である。象嵌装大刀についても装飾付大刀と同様の状況をみせる。H-4 号横穴墓で出土した象嵌鍔は，Ⅱ段階に位置づけられる。Ⅱ段階にみられる佩用者層の拡大の中で，もたらされたものと考えられる。

象嵌文様についてはあまり検討できなかったが，島根県域では耳に波状 C 字状文を施す鍔が多い。日本列島出土の象嵌遺物について集成した瀧瀬氏によると平面に圏線 C 字文を施す象嵌鍔は全国で 26 例出土しており，分布の中心は東国にある（瀧瀬 2019）。このような分布状況を示す象嵌鍔が神門横穴墓群で出土している意味などについて検討する必要があるが，今後の課題としたい。

（吉松優希）

註

(1) ここでの年代は先学の成果（大谷 1999・松尾 2005）を参照したほか，その他の資料については，共伴する須恵器のうち，もっとも古相を示すものを副葬年代とした。須恵器の編年については，大谷編年（大谷 1994）を参照した。

(2) 奥山遺跡 B- Ⅱ号横穴墓出土資料は，刀身関部分に花形象嵌を持つ資料である。この資料を巡っては，100 年の伝世期間をもつとする評価もあるが（三宅 1985），今回は横穴墓の年代からⅡ段階に位置付けた。花形象嵌は地域の首長墳出土資料に施されている場合が多い（西山 1986・齊藤 2009 など）。その中で横穴墓からの出土，また，共伴する遺物についても少ない中でどのような評価をするべきか，より検討が必要である。

参考・引用文献

石原　聡 2020「神門横穴墓群第 10 支群の調査について」『島根考古だより』106 島根考古学会

出雲市教育委員会 1995『小浜山横穴墓群』

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集 島根考古学会

大谷晃二 1999「上塩冶築山古墳をめぐる諸問題」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター

大谷宏治 2011「象嵌装大刀の変遷～円頭・頭椎・圭頭大刀を中心に～」『考古学ジャーナル』616 ニューサイエンス社

齊藤大輔 2009「鏁本孔鉄刀の基礎的研究」『第 3 回東アジア考古学会・中原文化財研究院研究交流会予稿集』東アジア考古学会・中原文化財研究院

瀧瀬芳之 2019「日本列島内出土象嵌遺物集成（刀剣・鉾・刀子編）」『文化財と技術』第 9 号特定非営利活動法人工芸文化研究所

西山要一 1986「古墳時代の象嵌－刀装具について－」『考古学雑誌』72-1 日本考古學會

橋本博文 1993「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会

松尾充晶 2005「総括：装飾付大刀と地域社会の首長権構造」『装飾付大刀と後期古墳―出雲・上野・東海地域の比較研究―』島根県教育庁古代文化センター・島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

三宅博士 1985「奥山 B- Ⅱ号横穴出土大刀について」『季刊文化財』61 島根県文化財愛護協会

吉松優希 2019「島根県域出土の象嵌装大刀の諸様相」『島根考古学会誌』第 36 集 島根考古学会

第 16 表　象嵌装大刀集成

	遺跡名	所在地	墳丘	主体部（長・幅・高【m】）	棺	大刀	象嵌の種類	副葬品	その他の遺物	時期	備考	文献
1-1	小汐手 a	安来市黒井田町	横穴	－	－	象嵌装大刀	波状 C 字状文				象嵌は八窓鐔の耳部分	吉松 2019
1-2	小汐手 b	安来市黒井田町	横穴	－	－	象嵌装大刀	交互半円文				象嵌は無窓鐔の耳部分	吉松 2019
※	小汐手 A-2 号横穴	安来市黒井田町	横穴	－	－	象嵌装大刀	－	鉄刀、鉄鏃 4、臼玉、刀子 5、須恵器		3 ～ 5 期		大谷・松尾 2004
※	小汐手 B-4 号横穴	安来市黒井田町	横穴	－	－	象嵌装大刀	－	鉄刀、耳環 2、須恵器、土師器		3 ～ 5 期		大谷・松尾 2004
2	宮内遺跡Ⅱ区 1 号横穴	安来市宮内町・佐久保町	横穴	ドーム・方形（玄室 :3・2.6・1.4）	組合せ式家形石棺	象嵌装大刀	波状 C 字状文	鉄鏃 11、方形立聞付素環鏡板付轡、鉄地金銅張磯金具、木製壺鐙、鞍金具 2、飾金具 2		3 期	象嵌は八窓鐔の耳部分、鏁本孔	宮本・山尾（編）1993
3	島田池遺跡 1 区 2 号横穴	松江市東出雲町出雲郷字岸尾、揖屋字島田地	横穴（前方後方形の後背墳丘 20m 前後）	平入家形・正方形（玄室 : 2.15・2.45・1.6）	右袖 : 須恵器床	象嵌円頭大刀、倭風大刀（水晶製三輪玉）	心葉形文	鉸具 3、木芯鐙吊金具 3、鉸具連環状鏡板付轡、瑪瑙製勾玉 5、碧玉製管玉 3、水晶製切小玉 5、小玉 7、鉄鏃 9、刀子、鉄斧、耳環 3		4 期	象嵌は柄頭、鏁　倭風大刀は鏁本孔	原田ほか 1997
4	古天神古墳	松江市大草町	方方・27m	両袖横穴式石室（玄室 :1.65・2.1・1.5）	屍床	銀装円頭大刀、金銅装大刀 1 以上、象嵌装大刀	心葉形文	旋回式獣像鏡系倭鏡、金環 3、銀環 3、鉄刀 6、鉄剣、短刀 10 以上、鉄鏃 26 以上、刀子 8 以上、砥石、素環鏡板付轡 2、鉄地金銅張半球状鉢多脚系雲珠、鉄地金銅張半球形鉢辻金具 3	円筒埴輪	3 ～ 4 期	象嵌は鐔、鏁、柄縁責金具	岩本（編）2018
5	岡田山 1 号墳	松江市大草町	方方・24m	両袖横穴式石室（玄室 :2.8・1.8・2.2）	家形石棺	象嵌円頭大刀、三葉環頭大刀、金銀装円頭大刀	亀甲繋文	刀子 3、鉄鏃、弓飾金具、内行花文鏡、金銅製丸玉、耳環 2、鞍金具、鉄地金銅張心葉形十字文鏡板付轡、雲珠 2、辻金具 4、馬鈴 6、環状繋絡金具、須恵器	円筒埴輪	3 期	「額田部」臣銘文、鐔、鏁にも象嵌	松本（編）1987
6	奥山遺跡 B- Ⅱ号横穴	松江市浜乃木町 2751 番地ほか	横穴	方形（玄室 :2.1・1.8）	－	象嵌装大刀	花形	須恵器		7 世紀前半？	鏁本に花形象嵌・　天井部崩壊	三宅・北脇・萩（編）1988、丹羽野 2012
7	上塩冶築山古墳	出雲市上塩冶町築山	円・45m	両袖横穴式石室（玄室 :6.6・2.8・2.9）	家形石棺（大小 2）	金銀装円頭大刀・捩り環頭大刀	花形（円頭大刀鏁本）	金銅製冠、銀環 2、勾玉 7、瑪瑙製棗玉、ガラス管玉、水晶製算盤玉、水晶製丸玉 6、ガラス小玉 60、ガラス丸玉 5、粟玉 17、大刀 2、銀装鞘金具、鉄鏃 32、矛 13（三角穂・鍛造り）、石突、【A セット】鉄地金銀装十字文透心葉形鏡板付轡、鉄地金銅装心葉形杏葉 7、鉄地金銀装 8 脚雲珠、鉄地金銀装 6 脚辻金具 4、鉄地金銅装 4 脚辻金具 8、鉄地金銀装磯金具・覆輪、木芯鉄装壺鐙、鉸子 2、青銅製鈴 5、鉸具類 4、障泥吊り金具　【B セット】銜・引手片、鉄地銀装心葉杏葉、鉄地銀装 8 脚雲珠、鉄地銀装 4 脚辻金具、鞍輪金、鞍座金具、木装大形刀子、鹿角装刀子 7、鉄斧、鉤状鉄器 11	円筒埴輪・子持壺	3 期	円頭大刀は大石棺、捩り環頭大刀は小石棺	松本（編）1999
8	上塩冶第 8 支群 3 号横穴	出雲市上塩冶町	横穴	家形？（1.31 以上・2.27）	－	象嵌装大刀	波状 C 字状文	鉄刀 2（うち 1 は象嵌装大刀）、刀子 3		6 世紀末？	象嵌装大刀は八窓鐔の耳部分	遠藤（編）2003
9	放レ山古墳	出雲市	円・13m	横穴式石室（玄室 :1.7・3.27・2.05）	3 体分の有縁屍床	金銅装圭頭大刀・金銅装小刀・銀装大刀・銀象嵌大刀	－	鉄刀（1 本以上、鏁元孔鉄刀）、鉄製鞘尻金具、金銅装刀子、刀子、鉄地金銅張棘葉形鏡板付轡、鉄地金銅張棘葉杏葉 3、鉄地金銅張 8 脚雲珠、鉄地金銅張辻金具 2、鉄製矩形立聞素環鏡板付轡（片側の立聞孔には革帯残存）		4 期	大正時代に開口、象嵌は八窓鐔の耳部分	勝部・西尾（編）1980、大谷・松尾 1999
10	妙蓮寺山古墳	出雲市下古志	方方・49m	両袖横穴式石室（玄室 :4.4・1.9・2.2）	家形石棺	象嵌円頭大刀	亀甲繋文	ガラス丸玉、金銅鈴鏁、刀子、鉄斧 3、鉄鏃、轡、鞍磯金具、木芯鉄張壺鐙、鉄地金銅張雲珠（十脚、六脚）、鉄地金銅張辻金具 4、鉄地金銅張心葉形三葉文杏葉、鉄地金銅張無文心葉形杏葉 3、鉄製鉸具 3、金銅方形金具、須恵器	円筒埴輪	3 期	玄門観音開き	山本 1964
11	神門第 10 支群 H-4 号横穴	出雲市神門町	－	アーチ・精円形（玄室 :1.5・1.6）		象嵌装大刀	圏線 C 字状文 / C 字状文	耳環 2、須恵器		出雲 5 期	耳・平面に象嵌	
12	大西大師山遺跡 17 号横穴	大田市久手町波根西	横穴	ドーム or アーチ・縦長長方形（2.3・2.1・1.0）	屍床（玄室右側）	象嵌円頭 or 鞘尻	心葉形文	鉄刀、鉄鏃 3 以上、刀子		3 ～ 4 期	屍床のない玄室左側から遺物出土	宮本（編）2016
13	唯山古墳	隠岐郡海士町福井	円	横穴式石室	－	象嵌装大刀	波状 C 字状文	瑪瑙製勾玉 12、水晶製切子玉 4、瑪瑙製小玉、ガラス小玉 351、臼玉 23、大刀 2、六窓鐔、八窓鐔（象嵌）、刀子 2、鉄鏃 4or5		3 期、4 期	象嵌は八窓鐔の耳部分	高橋 2004
14	大座西遺跡 2 号墳	隠岐郡隠岐の島町下西	－	横穴式石室	棺台あり	象嵌装大刀	波状 C 字状文	鉄刀 4（うち 1 は鏁元孔鉄刀？）、鉄製鏁、有窓鐔片 2、鉄矛、両頭金具、鉄鏃 45、刀子 5、鹿角装刀子、鉄斧 4、耳環 5、銅碗、銅製帯金具（鉸具、巡方 3or4、丸鞆 3、鉈尾）、瑪瑙製勾玉 6、碧玉製勾玉 3、水晶製勾玉、水晶製切子玉、ガラス丸玉、土製小玉、須恵器、土師器、暗文土師器		6 世紀後半	象嵌は八窓鐔の耳部分	横田・野津 2006

（紙面の都合上参考文献は割愛、吉松 2019 を参照のこと）

第３節　まとめ

調査の結果得た情報を基に神門横穴墓群10支群とその周辺遺跡との関連について検討してみたい。

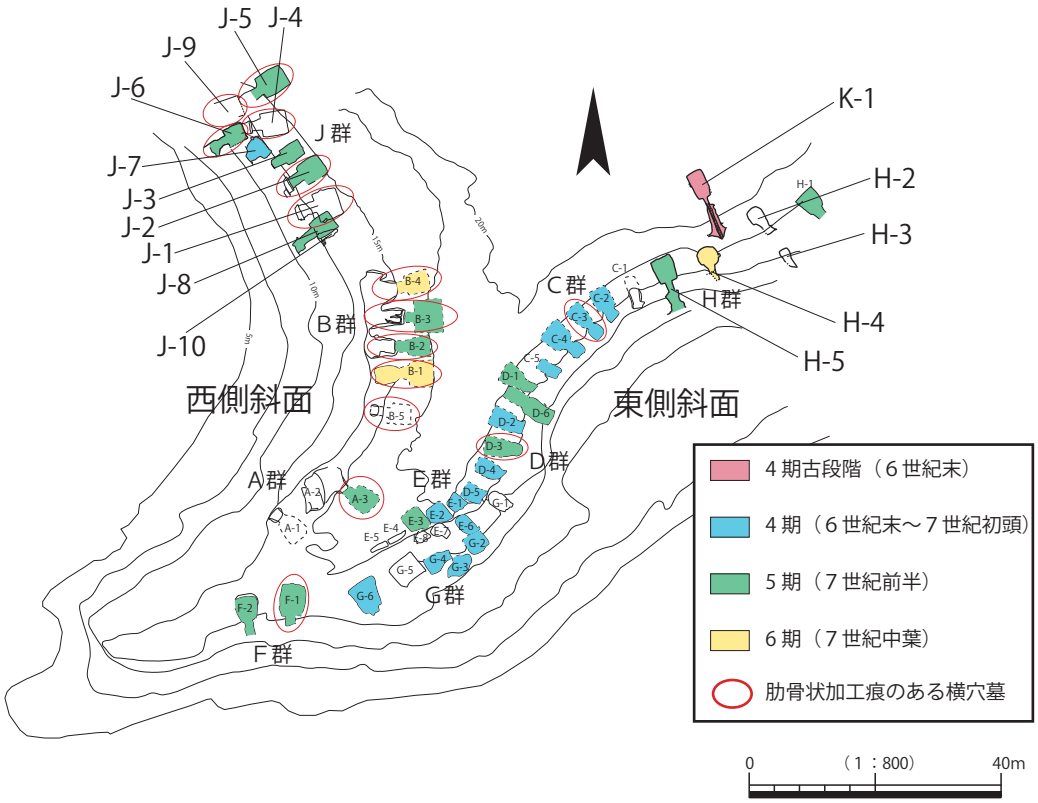
１　神門横穴墓群第 10 支群の時期的変遷（第 76 図）

神門横穴墓群第 10 支群のもっとも初期段階には，東側斜面最高所の K-1 号横穴墓が造墓される。その時期は，出雲４期でも古い段階で，玄室の平面形態が縦長長方形であり，鉄製馬具や有窓方頭式鉄鏃が出土している。その後，出雲４期は，東側斜面のＣ群・Ｄ群・Ｅ群・Ｇ群を中心に展開し，横穴墓の平面形態は，正方形に近づく。出雲５期の横穴墓は，東側斜面からさらに西側斜面に移る。西側斜面では，出雲５期の横穴墓のほか，出雲６期の横穴墓がＢ群に２基造墓される。

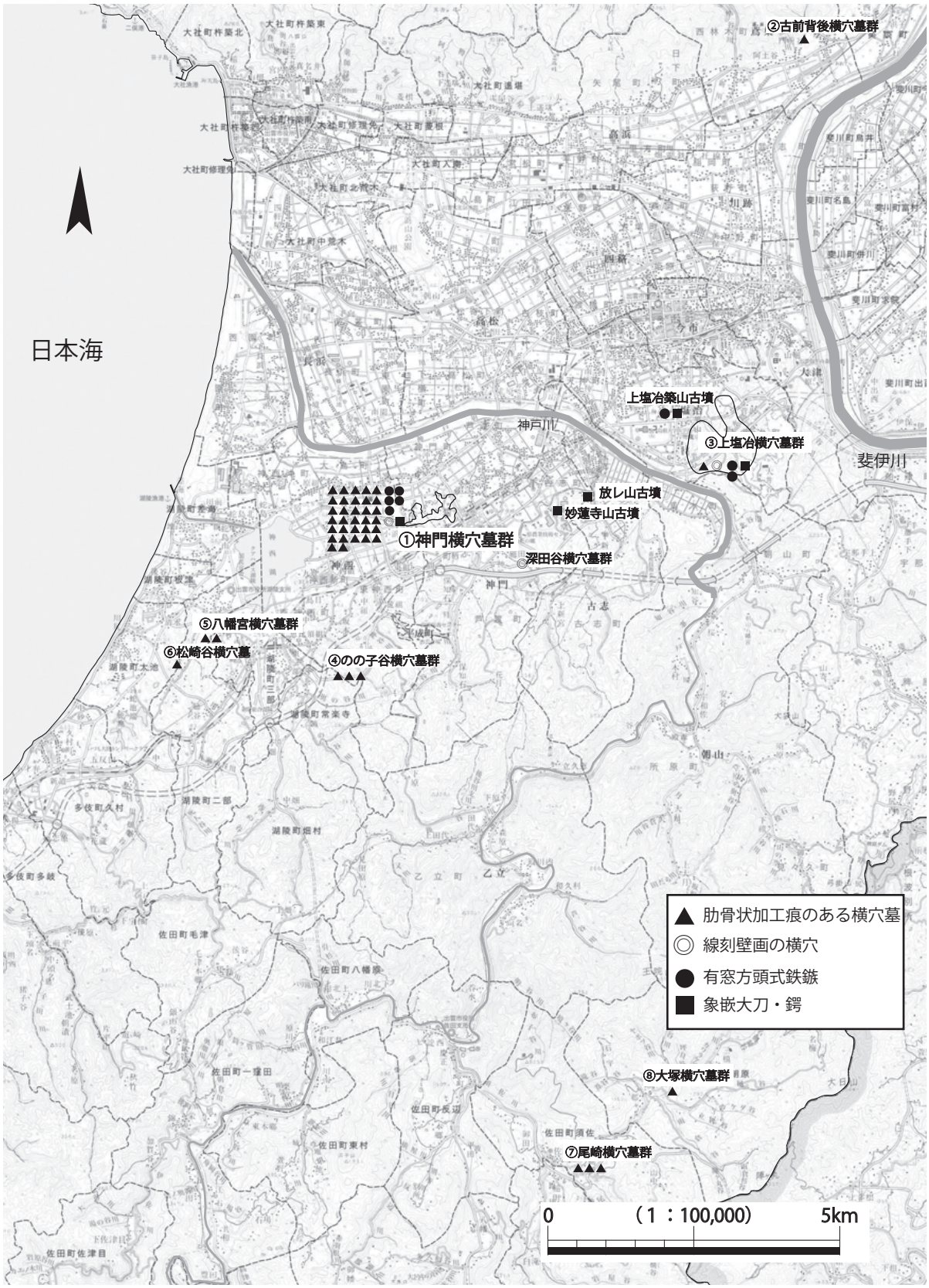
２　肋骨状加工痕の分布（第 76 ～ 80 図）

出雲西部地域に多く確認できるのが，玄室の天井や側壁に残る肋骨状加工痕である。現在，神門横穴墓群で最も古い段階で確認できるのは，第 10 支群１次調査時の C-3 号横穴墓である。時期は，出土した須恵器から出雲４期とされる。（1 次報告書 P137）。C-3 号では，非常に丁寧な肋骨状加工痕が確認できる。第 10 支群の肋骨状加工痕の残る横穴墓は，出雲５期の段階で多くみられ，出雲６期で数が減少する（第 17 表）。

市内の横穴墓は，約 90 ヶ所の横穴墓群があり，横穴墓の数は，660 基以上確認されているが，肋骨状加工痕の残る横穴墓は，８遺跡 43 基である。分布は，神戸川左岸の神門横穴墓群を中心に集中

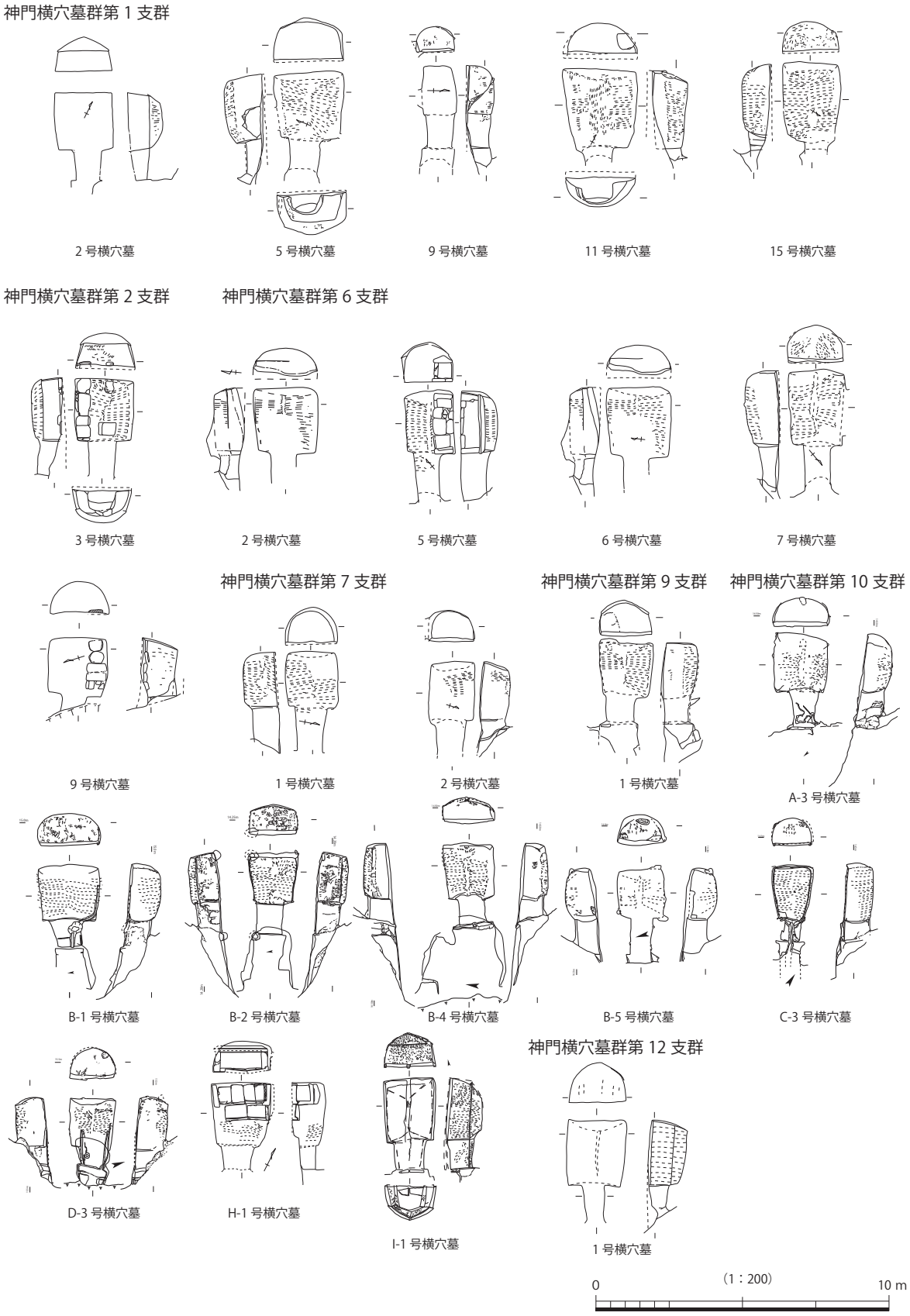


第 76 図　神門横穴墓群第 10 支群の時期的分布

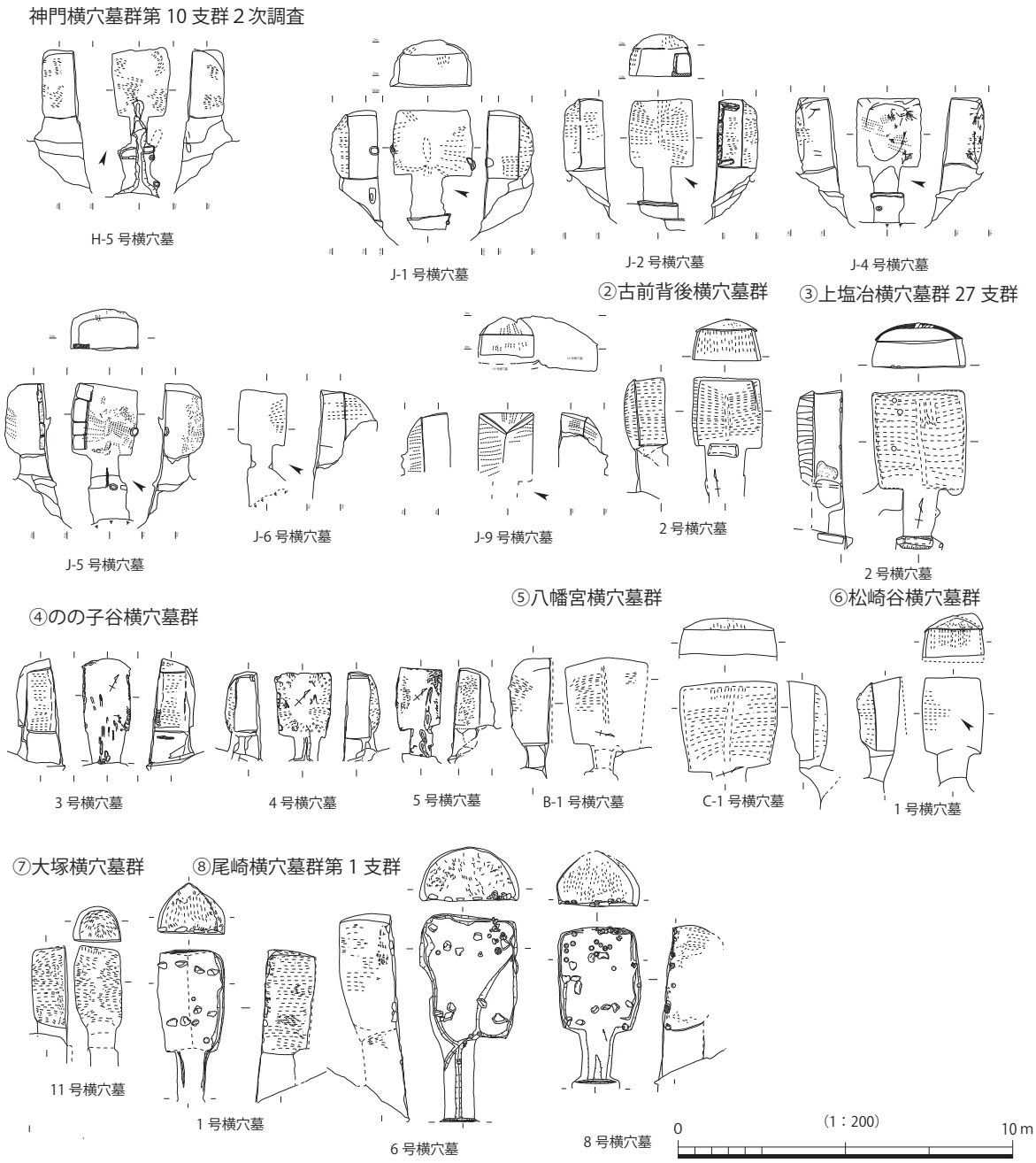


第 77 図　出雲市内古墳・横穴墓の特徴的遺物の分布

①神門横穴墓群



第 78 図　出雲市内の肋骨状加工痕のある横穴墓１

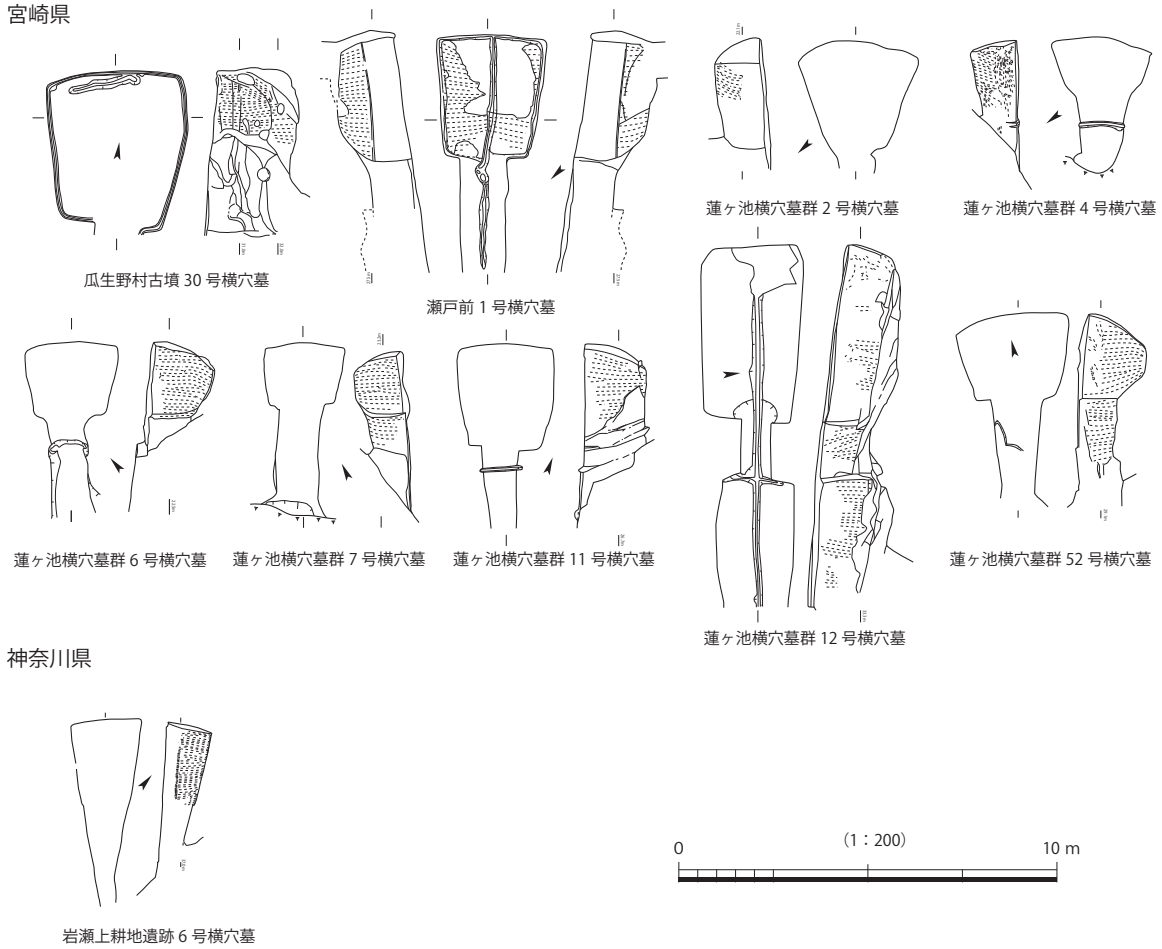


第 79 図　出雲市内の肋骨状加工痕のある横穴墓 2

する傾向がみられる（第 77 図）。

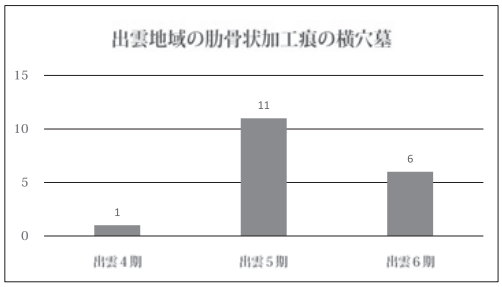
出雲市内の肋骨状加工痕のある横穴墓 43 基のうち、アーチ形が 25 基、アーチ系切妻家形が 15 基、アーチ系寄棟家形が 3 基である。神門横穴墓群では全ての形態の横穴墓があり、アーチ系寄棟家形は神門横穴墓群でのみ確認できる。そのほか、のの子谷横穴墓群では 3 基全てがアーチ系切妻家形、佐田町周辺の尾崎横穴墓群 3 基、大塚横穴墓群 1 基は全てアーチ形と地域により違いがある。

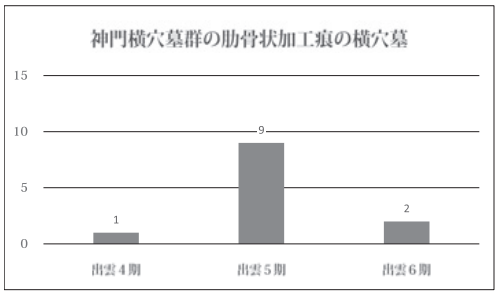
加工痕については，大谷晃二氏が「出雲西部は，まず玄室を奥に掘りすすめ，その後，天井から側壁にかけて仕上げを行い，軒線や棟線を施すものがある。」としている（大谷 2019）。今回 2 次調査時には，未完成の横穴墓 H-2 号と H-3 号横穴墓 2 基を確認している。2 基とも玄室を奥に掘り進める段階で，側壁や天井を主軸方向に削っており，成形段階を示す資料となる。



第 80 図　全国の肋骨状加工痕のある横穴墓

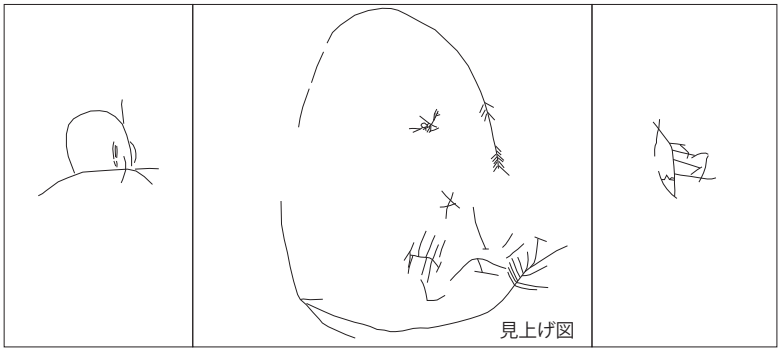
第 17 表　出雲地域と神門横穴墓群の肋骨状加工痕のある横穴墓の時期的変化

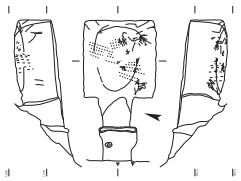




肋骨状加工痕の他地域での事例では，宮崎市国史跡蓮ヶ池横穴墓群及びその周辺，石川県加賀市法皇山横穴墓群，神奈川県鎌倉市岩瀬上耕地遺跡の横穴墓でもみられる。宮崎県ではアーチ形３基、出雲東部地域でみられるテント形４基のほか、関東でみられる撥形２基が確認できる。石川県では、アーチ形１基、神奈川県では、羽子板形１基で肋骨状加工痕が確認できる（田村 2004）。

家の屋根や壁を表現しているとの考えもあり，肋骨状加工痕を残す地域は，限られている（柏木 2020）。

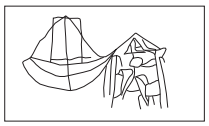




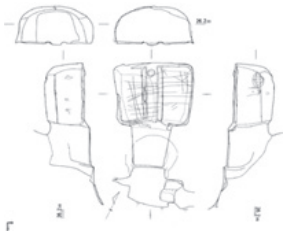
J-4 号横穴墓

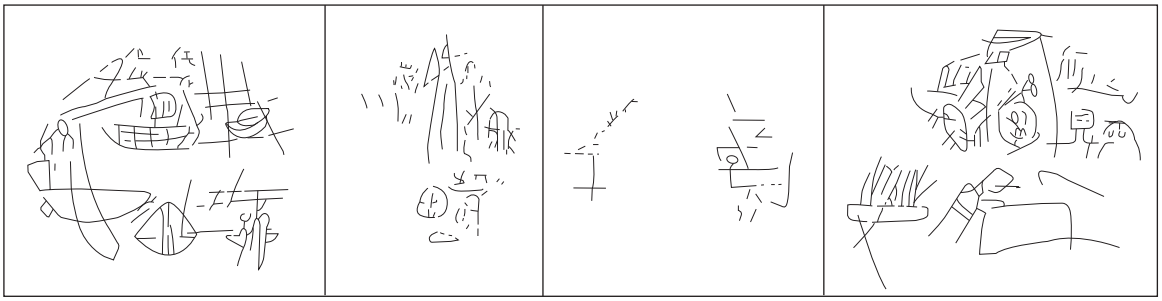
神門横穴墓群第 10 支群 J-4 号横穴墓

深田谷横穴墓群 1 号横穴墓

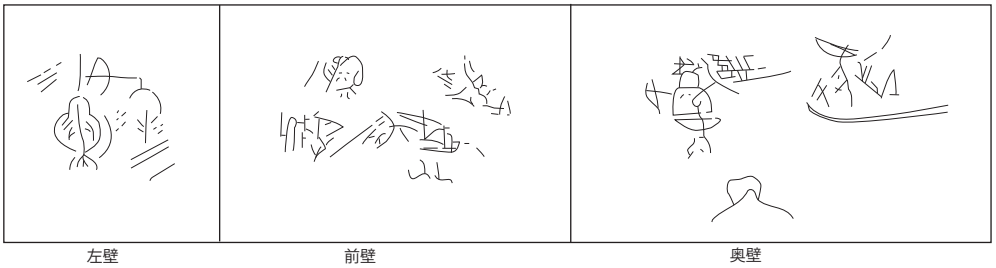


上塩冶横穴墓群 23 支群 7 号墓

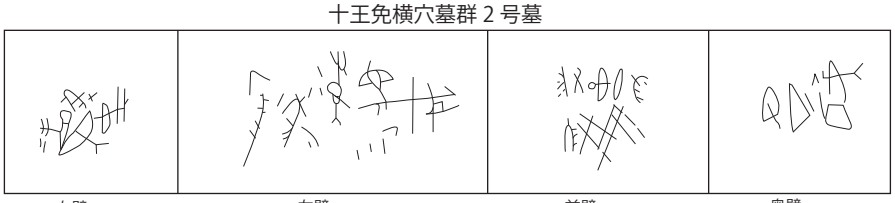




十王免横穴墓群 1 号墓



十王免横穴墓群 2 号墓



十王免横穴墓群 7 号墓

十王免横穴墓群 (松江市)

0　(1：40)　2 m

第 81 図　出雲地域の線刻壁画

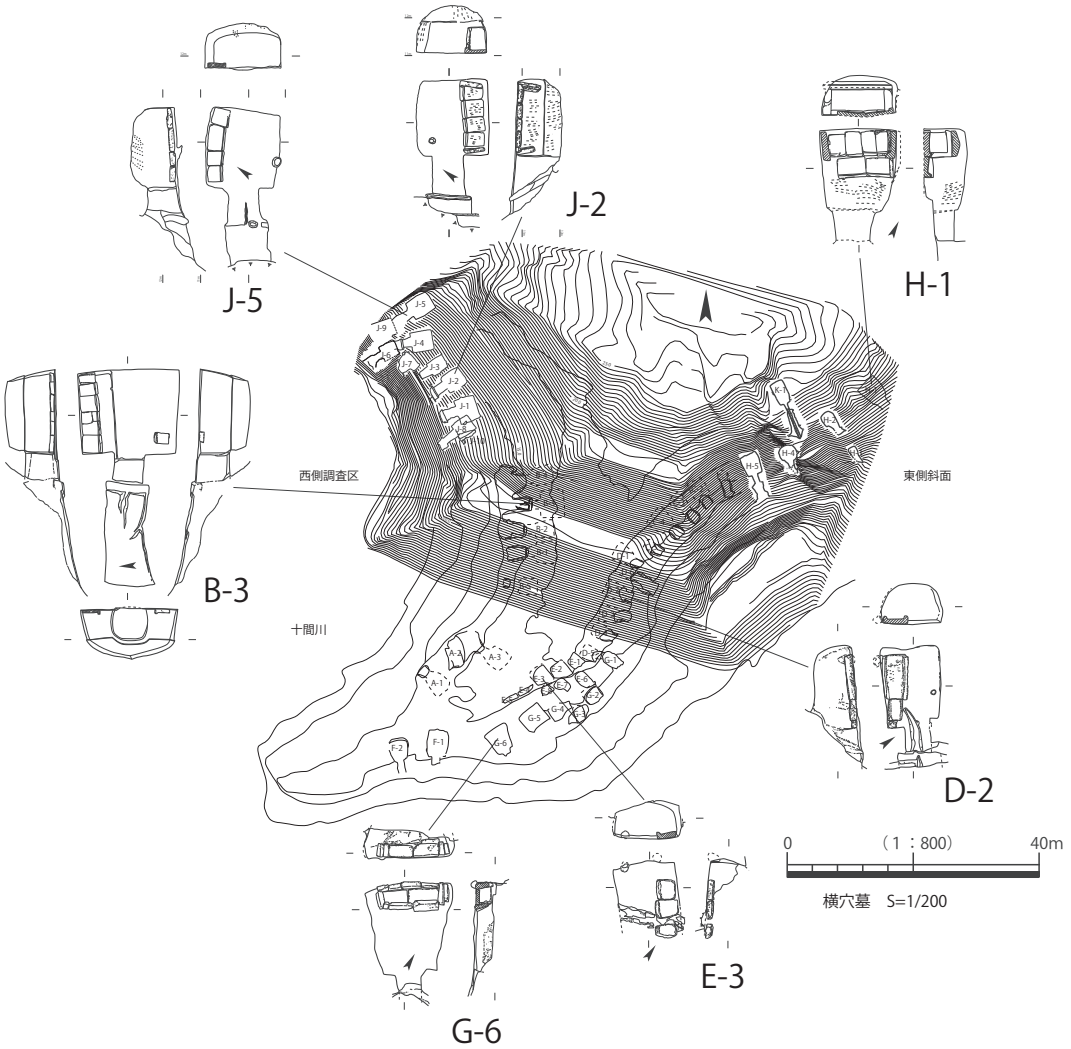
３　線刻壁画の分布（第 81 図）

島根県内の線刻壁画のある横穴墓について，東部を中心に８例が確認できる。出雲市内においては，神門横穴墓群 10 支群の J-4 号横穴墓，深田谷横穴墓群 1 号横穴墓，上塩冶横穴墓群第 23 支群 7 号横穴墓の３ヶ所で確認されている。いずれの横穴墓もすでに開口しており，壁画の描かれた詳細な時期については，不明と言わざるを得ない。しかしながら，松江市の十王免横穴墓群や鳥取県東部の線刻壁画でみられる弓，矢，舟，人物など共通点もあることから，検討の余地がある（熊本県立装飾古墳館 1999）。

壁画のある横穴は，奥壁が垂直に立ち上がる傾向があり，壁画用に奥壁を仕上げている可能性がある。２次調査で新たに確認した J-4 号横穴墓は奥壁がほぼ垂直に立ち上がる。

４　石棺・石床について（第 82 図）

第 10 支群の１次・２次調査で石棺・石床を有する横穴墓は，７基である（第 82 図）。出雲４期の



第 82 図　神門横穴墓群第 10 支群の石棺・石床配置図

石棺は，G-6 号横穴墓で奥壁沿いに組合せ式の箱式石棺を置いている。蓋石は確認されていない。また，同じく出雲４期の石床が D-2 号横穴墓で確認されている。石床は，玄室奥から入口に向かって右側の配置である。石床は，断面Ｕ字状に加工された大小２枚の石を並べている。

出雲５期の石棺は，H-1 号と J-2 号横穴墓の２基である。いずれも床石の縁がＬ字状になっている。長さ 50cm 前後，幅 40cm 前後の板石を４枚並べ，側石を置く。H-1 は，１枚の天井石が載り，奥壁沿いに置かれる。さらに前面に石床が置かれる。J-2 号横穴墓の石棺は，天井石がなく，左配置となる。木の蓋があった可能性も考えられる（須賀編 2016）。

出雲５期の石床は，３基あり，石床の配置は，J-5 号横穴墓が右側，B-3 号横穴墓が右側，E-3 号横穴墓が左側の配置になっている。小支群ごとに石棺・石床を用いる有力者が埋葬された可能性がある。

２次調査で確認した横穴墓の石棺・石床での遺骸痕跡についてリン分析等を行っている（第４章第１節）ほか，石床・石棺の石材採取場所についても分析している（第４章第２節）。遺骸痕跡について，J-2 号横穴墓の石棺内の遺骸については，リン濃度分布から流れ込んだ堆積物とともに骨が移動し石棺の奥に集まったとの結果であった。また，J-5 号横穴墓の石床上は２箇所に骨の集積が推定できたとの結果であった。J-5 号墓では，集骨・追葬の可能性もあるが，層位から追葬面を確認することはできなかった。

また，石棺・石床の石材分析では J-2 横穴墓の石棺石材は，凝灰質砂岩ないしは砂質凝灰岩，J-5 号の石材は安山岩ないしは礫岩であり，両横穴墓の石棺・石床に使用された石材は大森層の岩石との結果であった。横穴墓から大森層への距離は最も近い場所で真幸ケ丘丘陵の東側を南北に流れる保知石川を遡って約２～３㎞の距離にあり，遠方から切り出してきたことが伺えるとの結果を得た。

５　出土遺物

（１）須恵器

出土須恵器は，出雲４期の古段階から出雲６期までの須恵器が出土している。出雲４期の古段階では，「K-1 号横穴墓出土の須恵器の初葬に伴う土器がすべて異系統と考えられる点は興味深い。」とある（本章第１節）。K-1 号は，東側調査区の最高所に１基のみ所在し，横穴墓の平面形状が縦長長方形であることも古い形態であることを示している。また，鉄製馬具や有窓方頭式鉄鏃が出土するなど神門横穴墓群内でも特異な遺物が出土している。

出雲西部においては，出雲東部系須恵器が最も多く出土するが，その比率は出雲東部よりも低く，石東系，石西型といった異系統の須恵器や石西型の模倣品，現状ではいずれにも区分しがたい系統不明の須恵器といったさまざまな須恵器が存在する（本章第１節）。

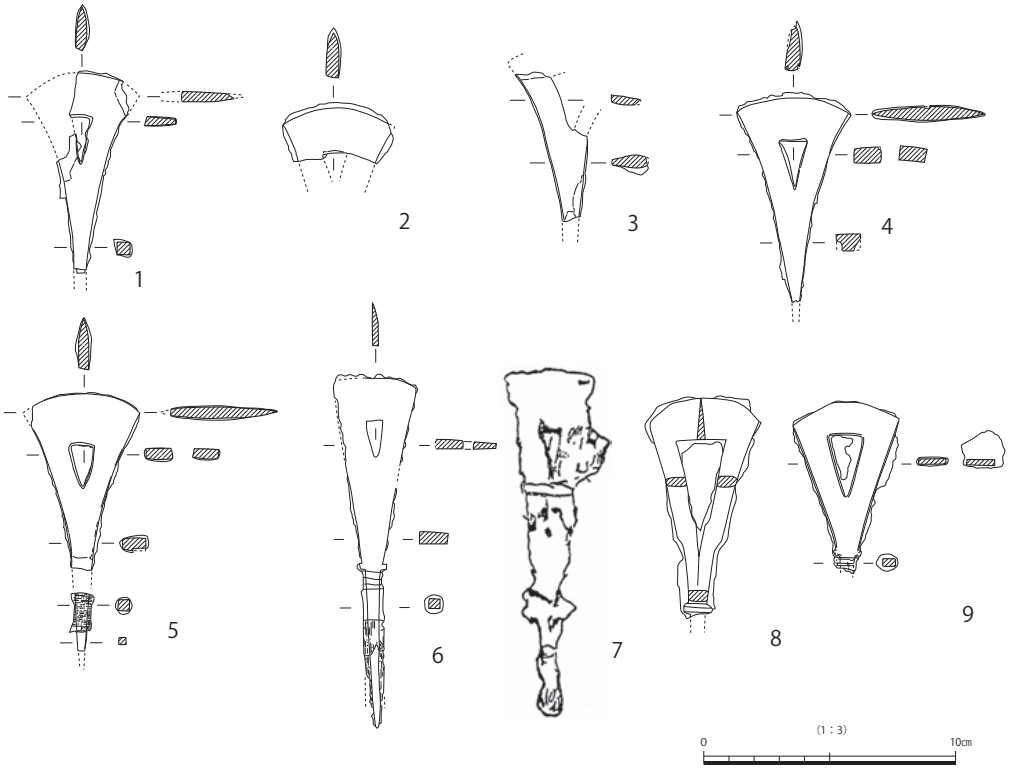
（２）象嵌鉄製品

H-4 号横穴墓出土の鉄製鍔に象嵌がある。この遺物は，神門横穴墓群で H-4 号の鉄製鍔のみで確認できる装飾である。平面に圏線Ｃ字文，耳部分にＣ字状文が施されている象嵌鍔で島根県域では初めて出土した象嵌文様である（本章第２節）。「象嵌装大刀の生産と配布については，装飾付大刀と

同様に，畿内の限定された工房で一元的に生産・配布されたことが想定されている。」とあり，畿内との関連性を示唆している（吉松 2019）。

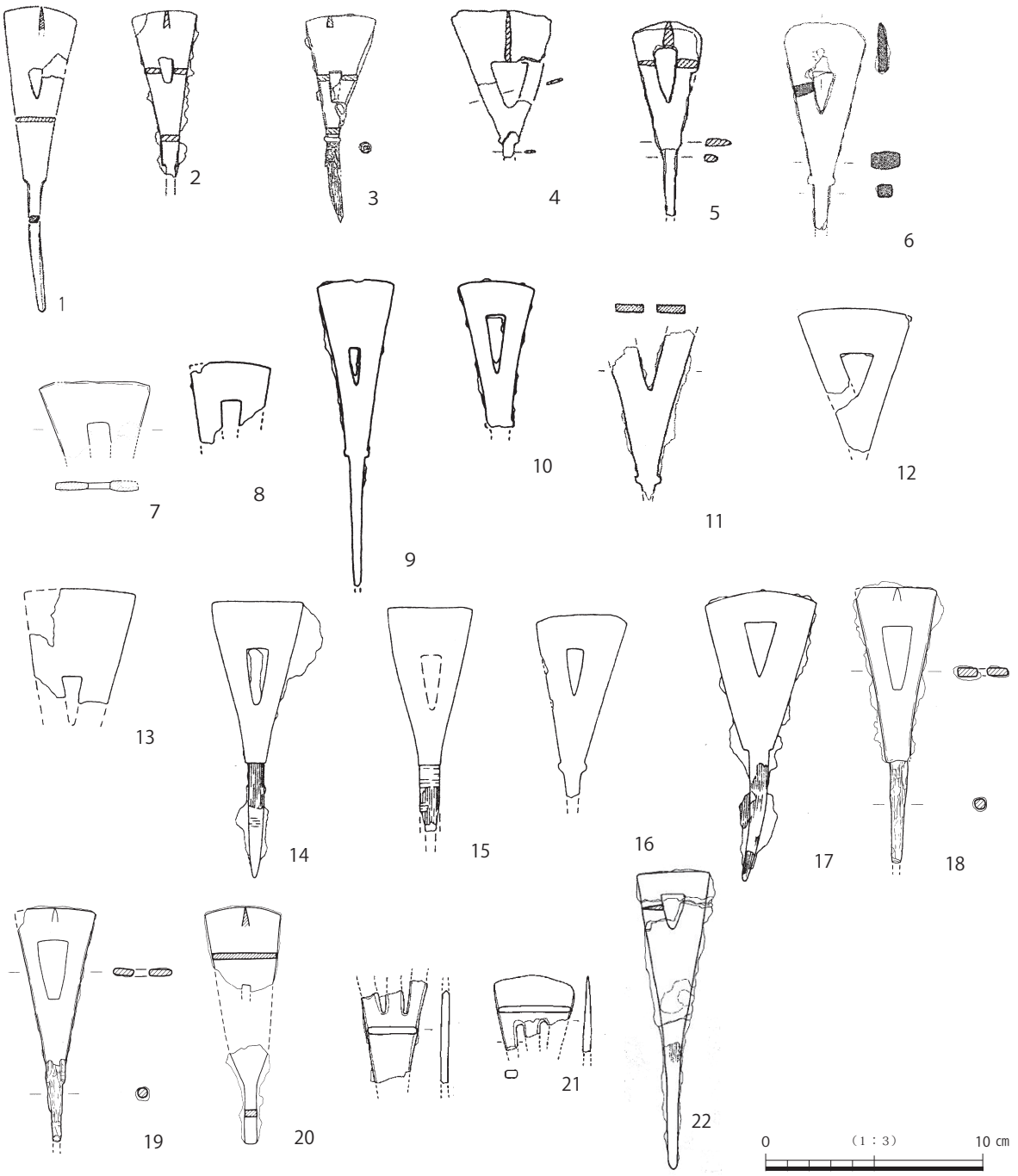
（３）有窓方頭式鉄鏃（第 83・84 図）

K-1 号横穴墓では，平根系の有窓方頭式鉄鏃が５点まとまって出土している。有窓方頭式鉄鏃は岡山県を中心に近畿・瀬戸内・九州北部に分布し 40 例弱の出土例がある（坂本編 2018）。島根県内の出土例としては，出雲市上塩冶築山古墳，上塩冶横穴墓群第３支群５号横穴墓，同６支群，松江市古天神古墳から１点ずつ出土している（第 83 図）。方頭式鉄鏃について，尾上元規は「６世紀前半代におそらく新羅地域からまず北部九州地域にもたらされ，それが瀬戸内海沿岸地域に東へ分布を広げている（中略）さらに，岡山平野地域では，独自の慣習に基づいて透し穴をあけているのである。」と述べており（尾上 1993），吉備との関連が想定できる。



1,2,3,4,5　神門横穴墓群第 10 支群 K-1 号横穴墓
6　上塩冶横穴墓群第 3 支群 15 号横穴墓
7　上塩冶横穴墓群第 6 支群
8　上塩冶築山古墳　9　古天神古墳 (松江市)

第 83 図　出雲地域の有窓方頭式鏃



兵庫県　１奥豊部１号墳　２奥豊部１号墳
鳥取県　３日下５号横穴墓
岡山県　４畑ノ平１号墳　５畑ノ平５号墳　６乙佐塚古墳　７塚段古墳第１号石室
　　８金浜古墳　９・10 芝浦２号墳　11 湾戸７号墳
香川県　12 喜兵衛島４号墳　13・14・15 喜兵衛島５号墳　16 喜兵衛島６号墳
　　17 喜兵衛島８号墳
愛媛県　18・19 高橋岡寺１号墳
福岡県　20 新延大塚古墳　21 夫婦塚２号墳
宮崎県　22 池内横穴墓群 D7 号横穴墓

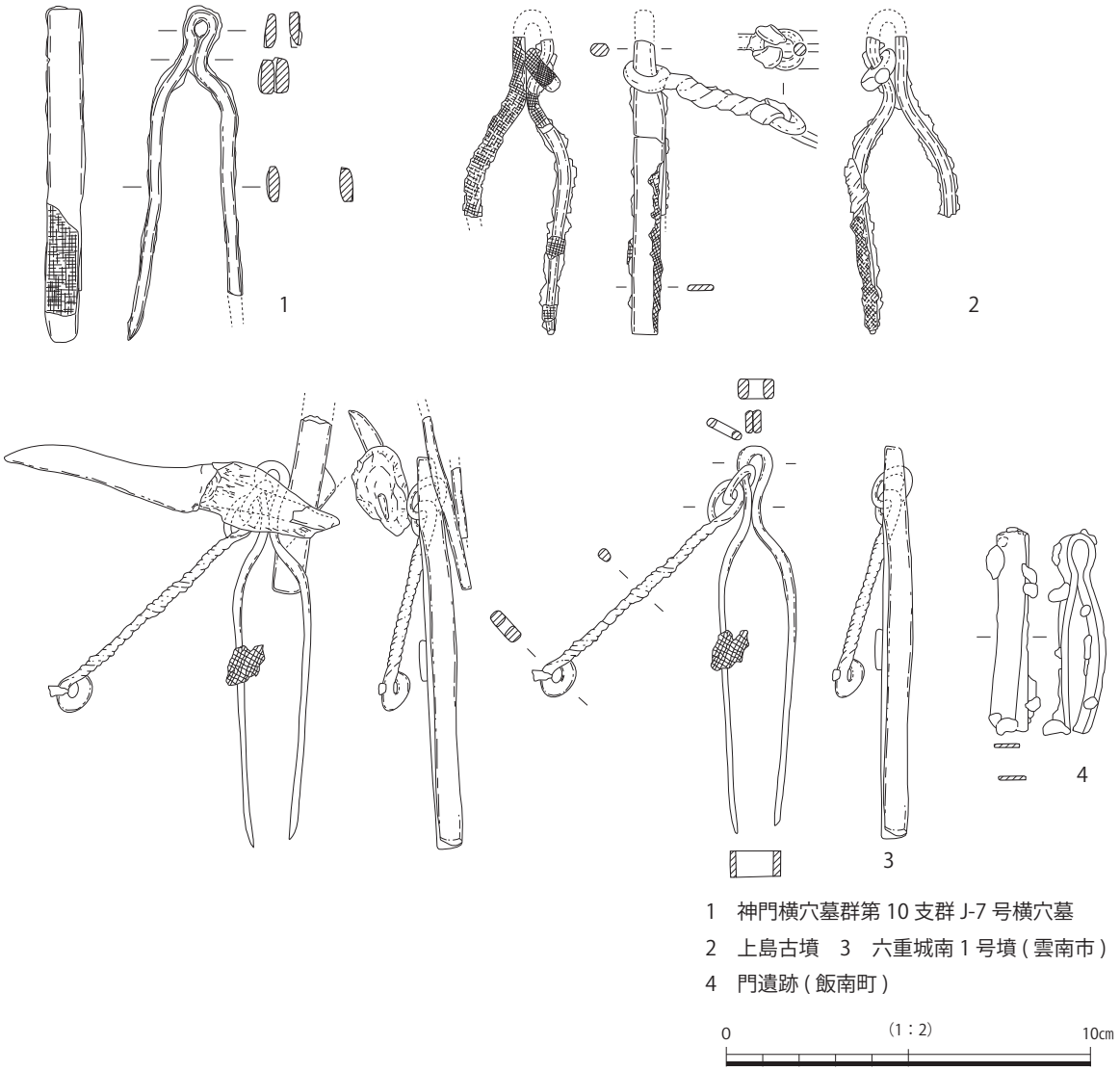
第 84 図　全国の有窓方頭式鏃

（４）毛抜き状鉄器（鑷子状鉄器）（第 85 図）

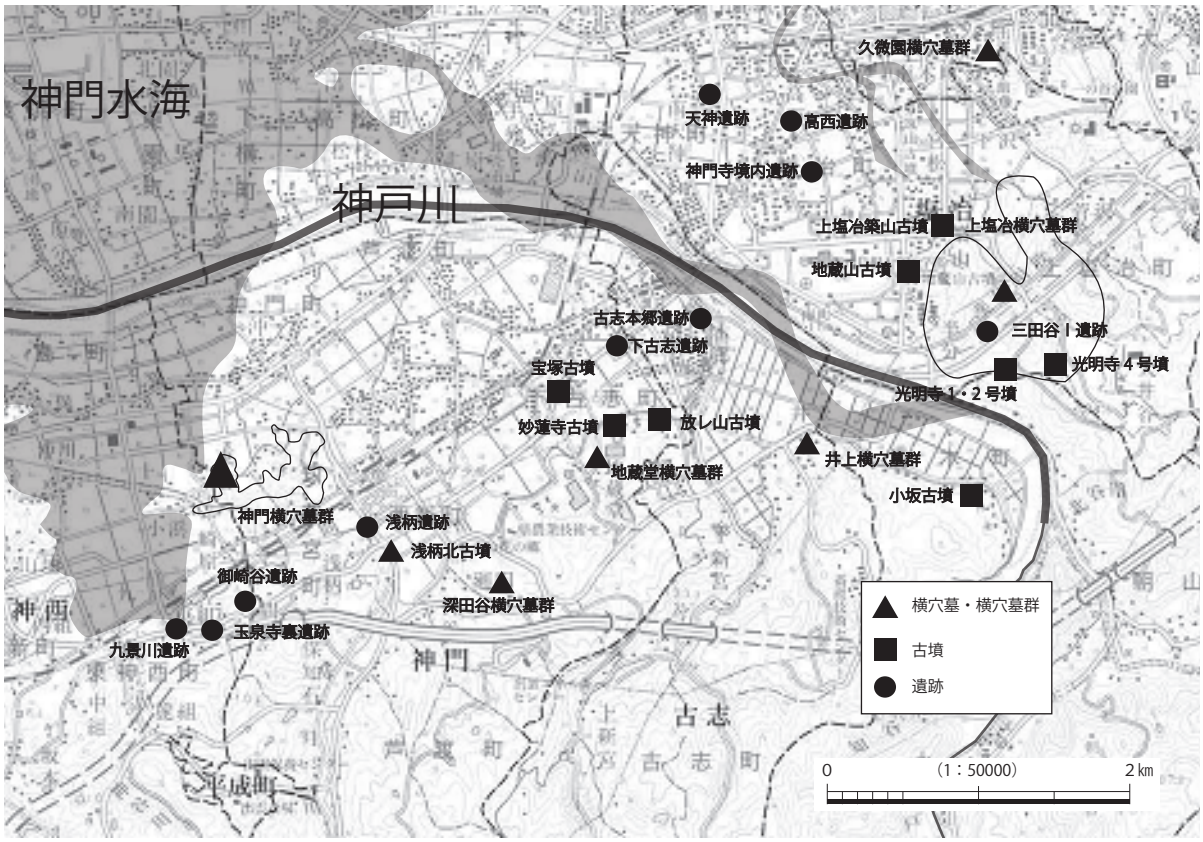
J-7 号横穴墓では，毛抜き状鉄器が 1 点出土している。出雲 4 期の須恵器や刀子とともに出土している。毛抜状鉄器については，「鑷子状鉄製品」とも呼ばれており，出雲市国富町上島古墳や雲南市三刀屋町六重城南 1 号墳からも 1 点ずつ出土している（第 85 図）。また，外側面に布を巻きつけた痕跡も確認できる。毛抜き状鉄器についての用途については，鑷子（毛抜き），馬具，刀剣や刀子の吊金具など様々な意見がある（諫早 2008）。島根県域の毛抜き状鉄器は，刀子や大刀とともに出土する事例が多い。

（５）鉄製馬具

馬具は，１次調査時に出土しなかった遺物である。今回，２次調査では，K-1 号横穴墓から鉄製馬具の鉸具や轡が出土した。特に注目すべきは，神門横穴墓群のなかでも古い段階に位置付けられる K-1 号横穴墓のみで出土していることである。



第 85 図　出雲地域の毛抜き状鉄器



第 86 図　神門横穴墓群周辺の古墳時代後期から古代の遺跡分布

また，上塩冶横穴墓群においては，最古段階に位置付けられる第 40 支群 25 号横穴墓においても，馬具の轡や石見産の須恵器が出土するなど共通した特徴がみられる（須賀編 2016）。

6　横穴墓群としての位置

神門横穴墓群は，12 支群 120 基以上の横穴墓が確認されている。発掘調査を行った横穴墓は，第 10 支群の 1 次調査で 35 基，今回の 2 次調査で 15 基，合計 50 基を調査している。周辺では，浅柄北古墳下方の横穴墓群（知井宮町）８基, のの子谷横穴墓群（湖陵町）６基, 地蔵堂横穴墓群（下古志町）５基，井上横穴墓群（古志町）24 基，深田谷横穴墓群（芦渡町）２基など神戸川左岸の横穴墓が確認されている（第 86 図）。

神戸川左岸の横穴墓は，現在のところ出雲４期まで遡ることができるが，明らかな出雲３期の横穴墓は確認できない。

今回調査の 10 支群 K-1 号横穴墓が際立って高所に所在し，しかも，出雲４期古段階と神門横穴墓群のなかでは，最古段階の横穴墓であり，徐々に高所から低所に移っていくことがわかる。

神戸川右岸横穴墓の様相は，北山周辺，西谷墳墓群周辺などにも横穴墓が確認できるが，大多数が上塩冶横穴墓群に集中しており，上塩冶横穴墓群は，41 支群 236 基以上の横穴墓が確認されている。近年の 40 支群及び３支群の調査により，出雲３期にまで遡る可能性の高い横穴墓が確認されている。上塩冶築山古墳を盟主墳とした築山古墳群が造営されはじめた時期に上塩冶横穴墓群第 40 支群も造営が始まっており，上塩冶築山古墳，築山古墳群，上塩冶横穴墓群第 40 支群周辺が一体的な古墳群

として築造された可能性がある（須賀編 2016）。

現在までの見解としては，横穴墓の造墓は，神戸川右岸（現在の出雲市今市・塩冶地域）が一歩先行して造墓しており，やや遅れて左岸（現在の出雲市古志・神門地域）で造墓が開始されるという様相である。

７　周辺の古墳との関連性

古志古墳群と横穴墓群の関連では，古墳の造営時期との関連を示す横穴墓は，地蔵堂横穴墓群（出雲４期）とともに神門横穴墓群が，地理的にも近い。また，造営の時期は，放レ山古墳（古志町，円墳，40 m，ＴＫ 209 出雲４期）と時期を同じくする。

二大横穴墓集中地帯として，神門横穴墓群と上塩冶横穴墓群があり，神戸川の右岸，左岸に展開しており，古墳，横穴墓で階層構造が認められる。

「出雲西部でも，TK43 期以降，最高首長墳は，大念寺古墳（前方後円墳 91 m）→上塩冶築山古墳（円墳 40 m）→地蔵山古墳（不明），最高首長を輩出した一族の有力者の古墳は，妙蓮寺山古墳（前方後円墳，50 m），放レ山古墳（円墳，13m），宝塚古墳（墳形不明），大梶古墳（墳形不明）（中略）群集墳が，築山古墳，刈山古墳，神門横穴墓群，上塩冶横穴墓群などである。」（大谷晃二 2019）としている。

池淵俊一は，「６世紀末の画期に関してはこれまでも当地における横穴墓の爆発的普及から言及されてきた」ことを挙げ，「古墳築造階層拡大など単なる墓制上変革ではなく（中略）６世紀末における集落増加現象は前代に比べて極めて急激であり，単純な人口の自然増とは考えにくい」とし，「日置郷や古志郷について，吉備など各地から多くの移住者が居住していた」ことを指摘している（池淵 2019）。仁木聡は，「吉備から出雲への集団移入」があった可能性を指摘している（仁木　2019）。

上記の論文を踏まえ，有窓方頭式鉄鏃が瀬戸内地方特に吉備を中心に出土していることを考えると，K-1 号横穴墓の５点の有窓方頭式鉄鏃の出土は被葬者が吉備から移住した人であったことを想像させる。

８　今回調査の意義

10 支群における横穴墓造営初期段階の状況がわかる遺物が出土した。出雲４期古段階の K-1 号墓では，これまでの調査で確認していない異系統の須恵器群，鉄製馬具が出土している。全国的に出土例の少ない有窓方頭式鉄鏃の出土も特徴的で吉備との交流が伺える資料である。出雲４期には，毛抜状鉄器が刀子とともに出土した J-7 号墓がある。玄室の平面形態も不整横長長方形であり，異質である。出雲５期には，神門横穴墓群を中心とした肋骨状加工痕の残る横穴墓が増える。これは，神門横穴墓群を中心とした広がりとも考えられ（第 77 図），出雲西部地域を中心とした横穴墓造墓集団が想定できよう。また，宮崎県，石川県や神奈川県においても同様に肋骨状加工痕を残す横穴墓があり，技術的な交流も考えられる。H-4 号墓で出土した象嵌鍔については，畿内産である可能性が指摘できる。

今後，全国的視野に立って神門横穴墓群を含む出雲西部地域の横穴墓を検討する必要がある。

（石原　聡）

参考文献

池上悟　2004 「第三章　横穴墓の様相」『日本横穴墓の形成と展開』雄山閣

池淵俊一　2019 「出雲平野における６・７世紀の水利開発とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第 22 集　島根県古代文化センター

諫早直人　2008 「第７章　鑷子状鉄製品と初期の轡」『大隅串良　岡崎古墳群の研究』 鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No.　3　鹿児島大学総合博物館

尾上基樹　1993 「古墳時代鉄鏃の地域性－長頸式鉄鏃出現以降の西日本を中心として－」『考古学研究』第 40 巻第１号　考古学研究会

大谷晃二　2019 「出雲地方の横穴式石室・石棺・横穴墓の諸形態とその評価」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第 22 集　古代文化センター

柏木善治　2020「家屋模倣横穴墓の原点―家屋横穴墓の日本列島における様相と遡源の検討」『芙蓉峰の考古学Ⅱ－池上悟先生古希記念論文集－』 六一書房

熊本県立装飾古墳館　1999　全国の装飾古墳シリーズ　5 『中国・四国地方の装飾古墳』 熊本県立装飾古墳館展示図録第 13 集　熊本県文化財保護協会

坂本豊治編　2018『上塩冶築山古墳の再検討』出雲弥生の森博物館研究紀要第６集　出雲弥生の森博物館

須賀照隆編　2016『上塩冶横穴墓群第 40 支群』県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

田村良照　2004「相模の横穴墓」『考古論叢神奈河』第 12 集　神奈川県考古学会

仁木聡　2019 「継体・欽明朝における出雲の画期」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター研究論集第 22 集　島根県古代文化センター

西尾克己他　1992「出雲西部における横穴墓の様相」『湖陵町誌研究』 1 湖陵町教育委員会

吉松優希　2019「島根県域出土の象嵌装大刀の諸様相」『島根考古学会誌』第 36 集　島根考古学会

遺跡引用文献

【肋骨状加工痕のある横穴墓群】

古前背後横穴墓群・大塚横穴墓群

山陰横穴墓研究会　1997 『出雲の横穴墓－その型式・変遷・地域性－』第７回山陰横穴墓調査検討会資料

上塩冶横穴墓群第 27 支群

西尾克己編　1979 『半分城跡横穴群発掘調査報告』出雲市教育委員会

のの子谷横穴墓群

守岡正司編　2017 『のの子谷横穴墓群　京田遺跡３区』一般国道９号（出雲湖陵道路）改築工事に

伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３　島根県教育委員会
八幡宮横穴墓群
西尾克己　野坂俊之　2000「第一章　原始古代の湖陵町」『湖陵町誌』湖陵町
松崎谷横穴墓群
西尾克己　原田敏照　守岡正司　1992「出雲西部における横穴墓の様相」『湖陵町誌研究』１　湖陵町教育委員会
尾崎横穴墓群
田中迪亮編　1988『尾崎横穴群発掘調査報告書』佐田町教育委員会
瓜生野村古墳・瀬戸前１号横穴墓
吉本正典編　2003『瀬戸前１号横穴墓　瓜生野村古墳 30 号（横穴墓）』宮崎県埋蔵文化財センター
蓮ヶ池横穴墓群
宮崎市教育委員会　1986『蓮ヶ池横穴墓群』保存整備事業概報Ⅰ（昭和 60 年度計測調査概報）
岩瀬上耕地遺跡
継　実「鎌倉市内の横穴墓」『スライドによる入門考古学講座－横穴墓とは何か－』神奈川県考古学会　川崎市市民ミュージアム

【線刻壁画】
深田谷横穴墓
池田満雄　1960「六．芦渡町深田谷横穴」『出雲市の文化財－出雲市文化財調査報告第二集』出雲市教育委員会
上塩冶横穴墓群第２３支群７号墓
守岡正司編　1998『上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群第７、12、22、23、33、35、36、37 支群』斐伊川放水路予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　島根県教育委員会
十王免横穴墓群
島根大学考古学研究会　1968『十王免横穴群発掘調査報告』菅田考古第 10 号
【有窓方頭式鉄鏃】
島根
上塩冶横穴墓群第３支群
須賀照隆編　2018『上塩冶横穴墓群第３支群』県道出雲三刀屋線上塩冶工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財報告書２　出雲市の文化財報告 36 号　出雲市教育委員会
古天神古墳
岩本崇編　2018『古天神古墳の研究』島根大学考古学研究室第 17 冊　島根大学法文学部考古学研究室・古天神古墳研究会

兵庫

奥豊部１号墳

安平勝利編　1999 『奥豊部１号墳』加美町文化財報告３　加美町教育委員会

岡山

畑ノ平５号墳

弘田和司他編　1996 『西大沢　畑ノ平古墳群　黒土中世墓　虫尾遺跡　茂平古墓　茂平城』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 111　岡山県教育委員会

乙佐塚古墳

岡本寛久編　1986 『乙佐塚古墳発掘調査報告書』瀬戸内市教育委員会

塚段古墳

草原孝典他編　2016 『塚段古墳・坂口古墳』岡山市教育委員会

香川

喜兵衛島古墳群

近藤義郎編　1999 『喜兵衛島－師楽式土器製塩遺跡群の研究－』喜兵衛島刊行会

福岡

新延大塚古墳

鞍手町教育委員会　1985 『新延大塚古墳　福岡県鞍手郡鞍手町所在古墳の調査』 鞍手町文化財調査報告書第３集

夫婦塚古墳

福岡市教育委員会　2006 『夫婦塚古墳２－金武古墳群７次調査報告－』 福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第 908 号

宮崎

池内横穴墓群

宮崎県教育委員会　1997 『池内横穴墓群発掘調査整理報告書』

【毛抜き状鉄器】

上島古墳

花谷浩　2007「上島古墳出土遺物の再調査報告」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 17 集　出雲市教育委員会

六重城南遺跡

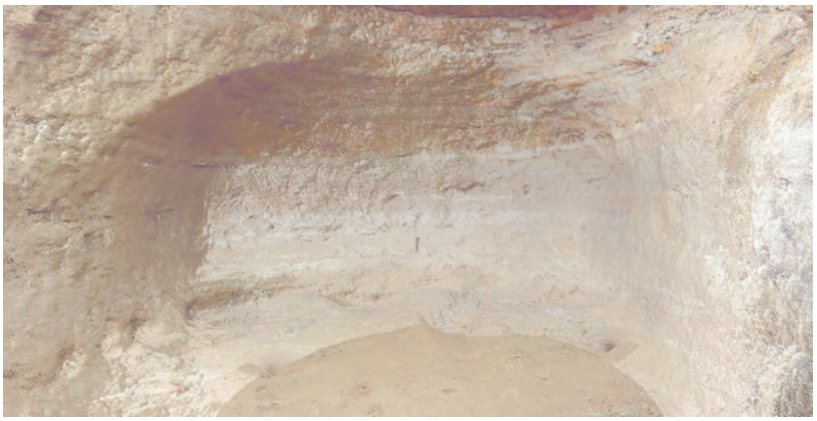
米田克彦編　2009 『六重城南遺跡　瀧坂遺跡　鉄穴内遺跡』中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 16　島根県教育委員会

門遺跡

内田律雄編　1996 『門遺跡』志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告３　島根県教育委員会

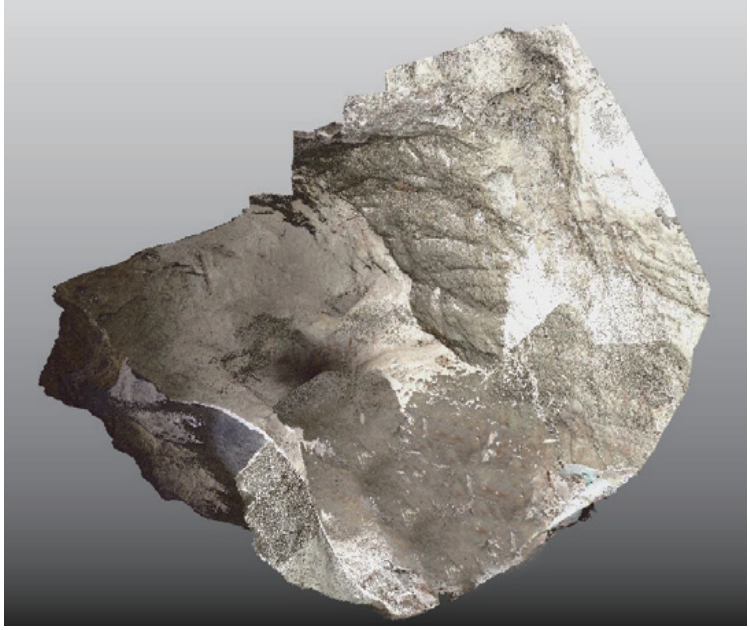
3D データ

南東上から



奥壁

第 87 図　3D データ　K-1 号横穴墓

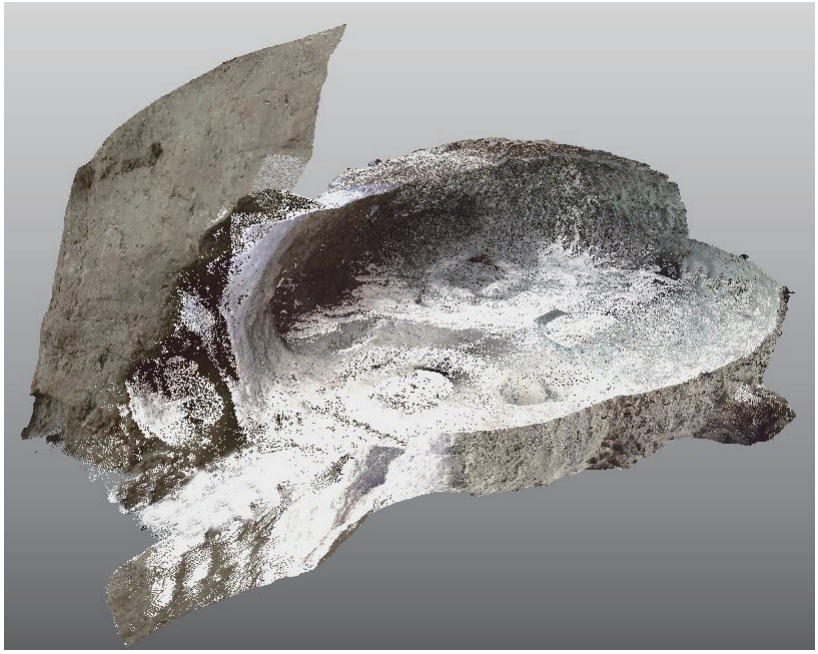


南西から

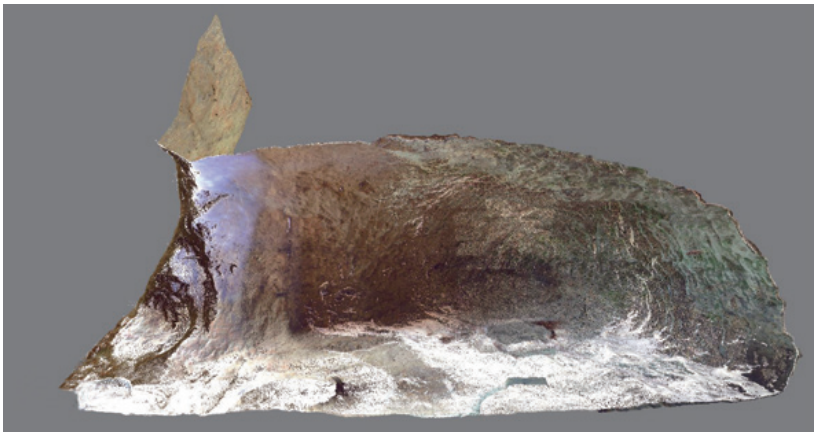
右側壁

奥から外

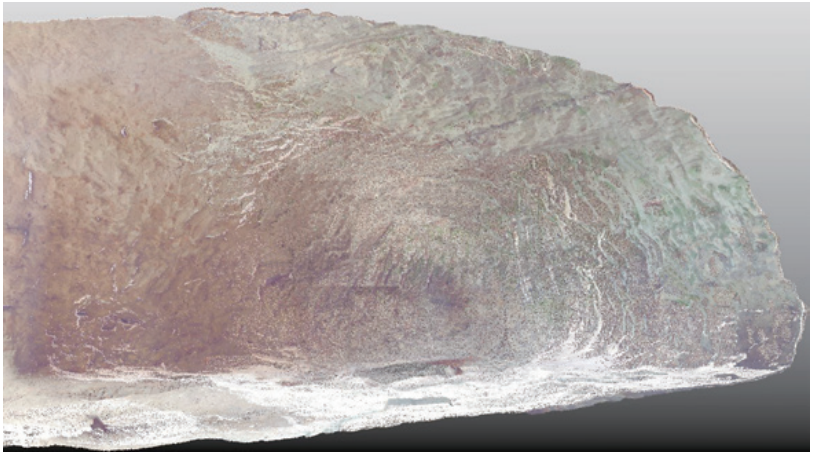
第 88 図　3D データ　H-3 号横穴墓



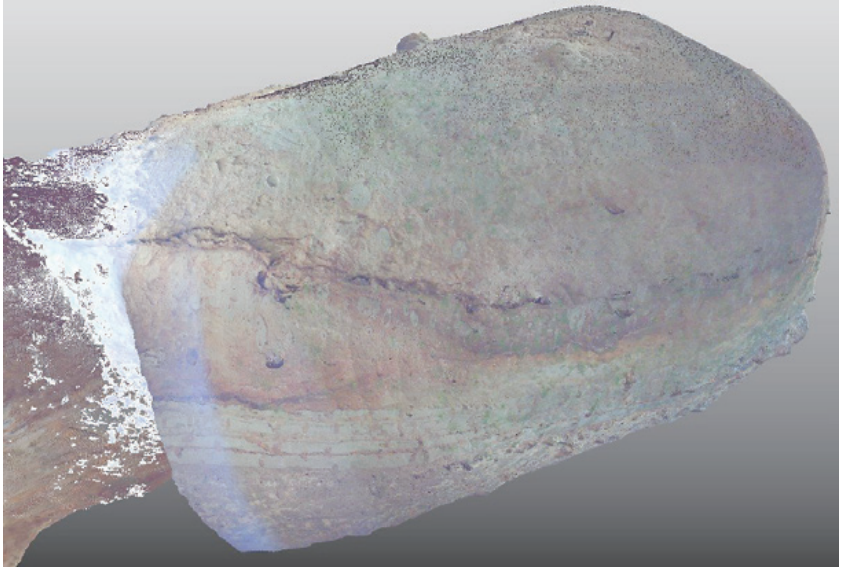
南東上から



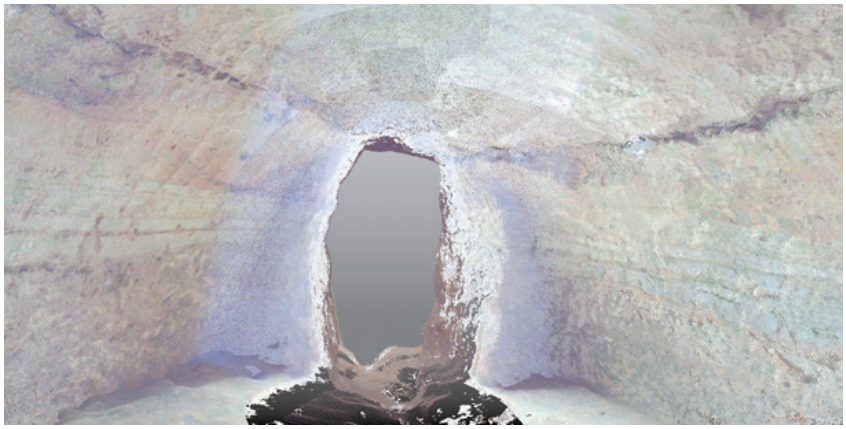
左側壁



第 89 図　3D データ　H-4 号横穴墓



南東　外側から



奥から外

第 90 図　3D データ　H-5 号横穴墓

天井

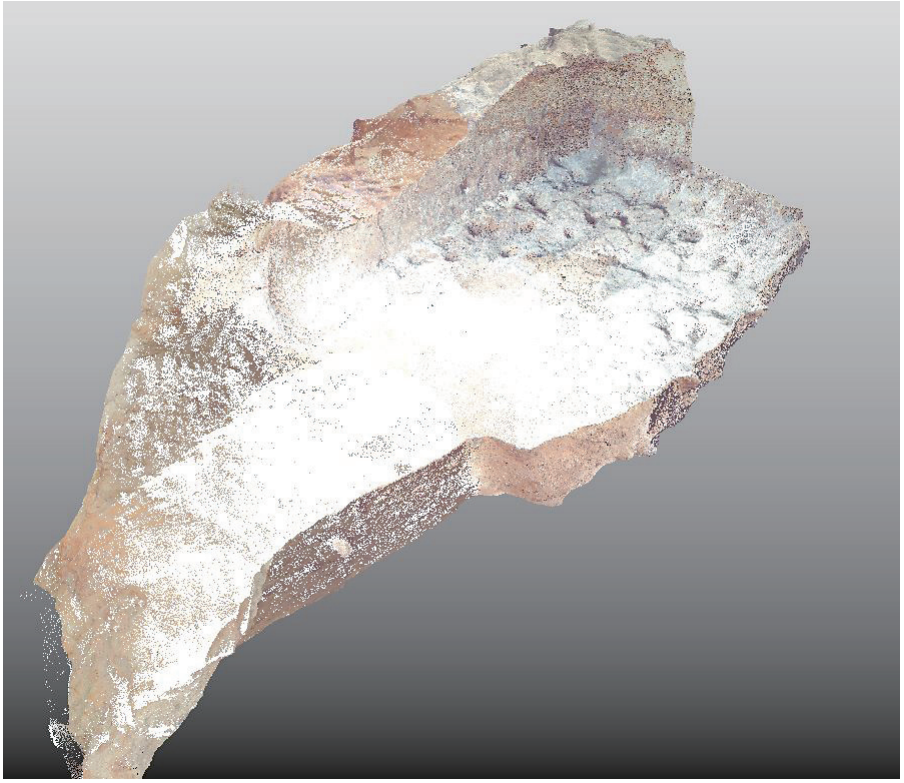
右側壁

第 91 図　3D データ　J-1 号横穴墓

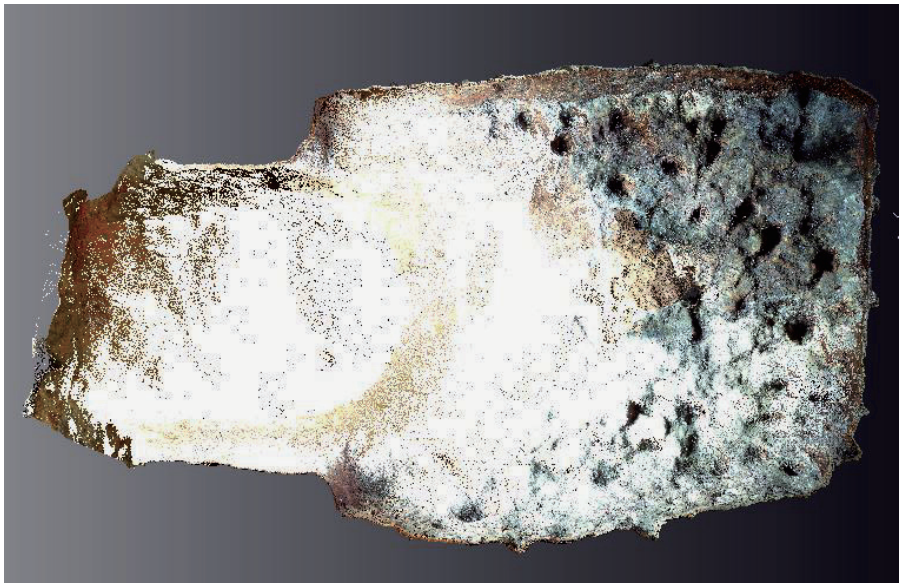
西側上から

右側壁

第 92 図　3D データ　J-2 号横穴墓



南上から



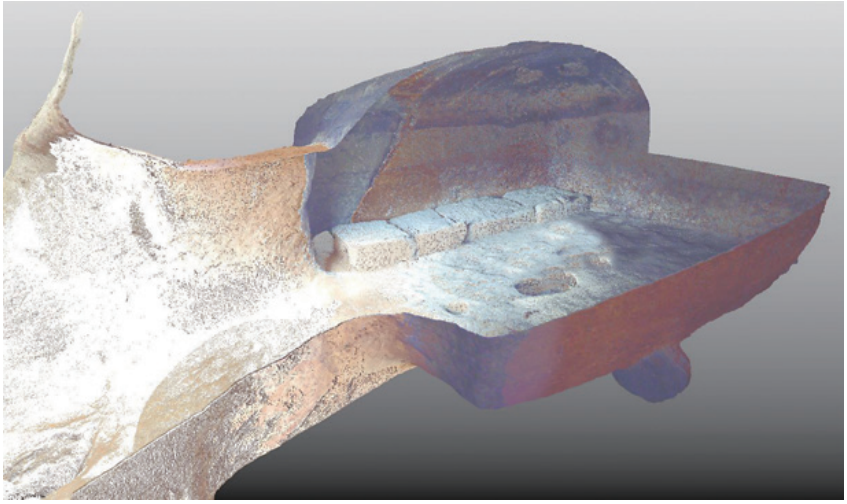
床面

第 93 図　3D データ　J-3 号横穴墓

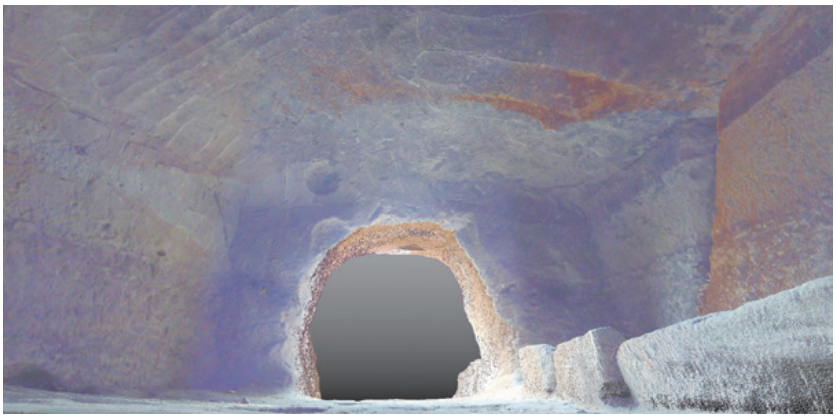
天井

奥から外

第 94 図　3D データ　J-4 号横穴墓



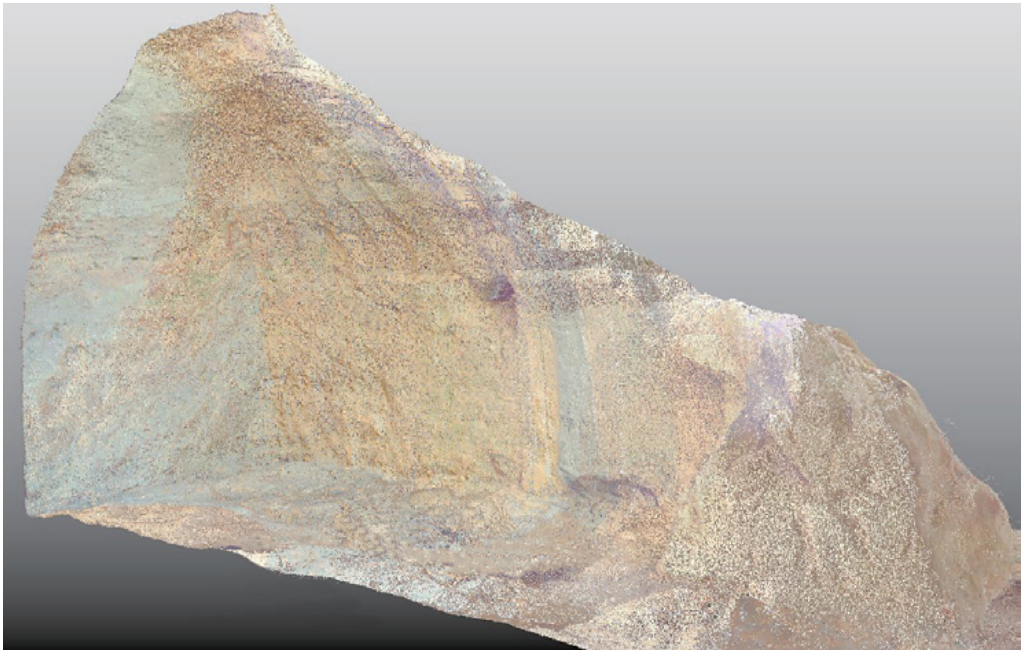
南から



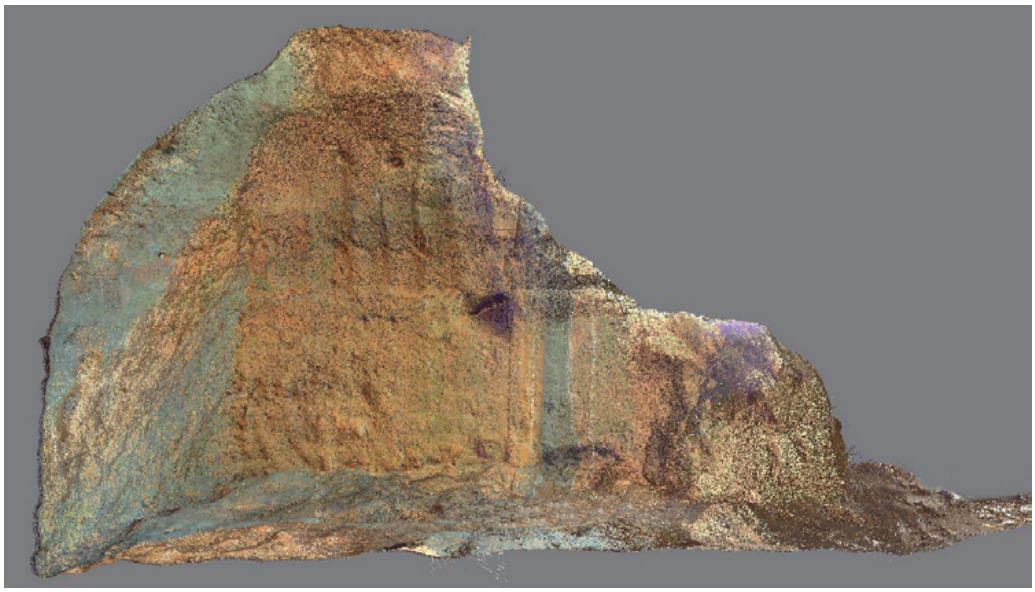
左側壁

奥から外

第 95 図　3D データ　J-5 号横穴墓

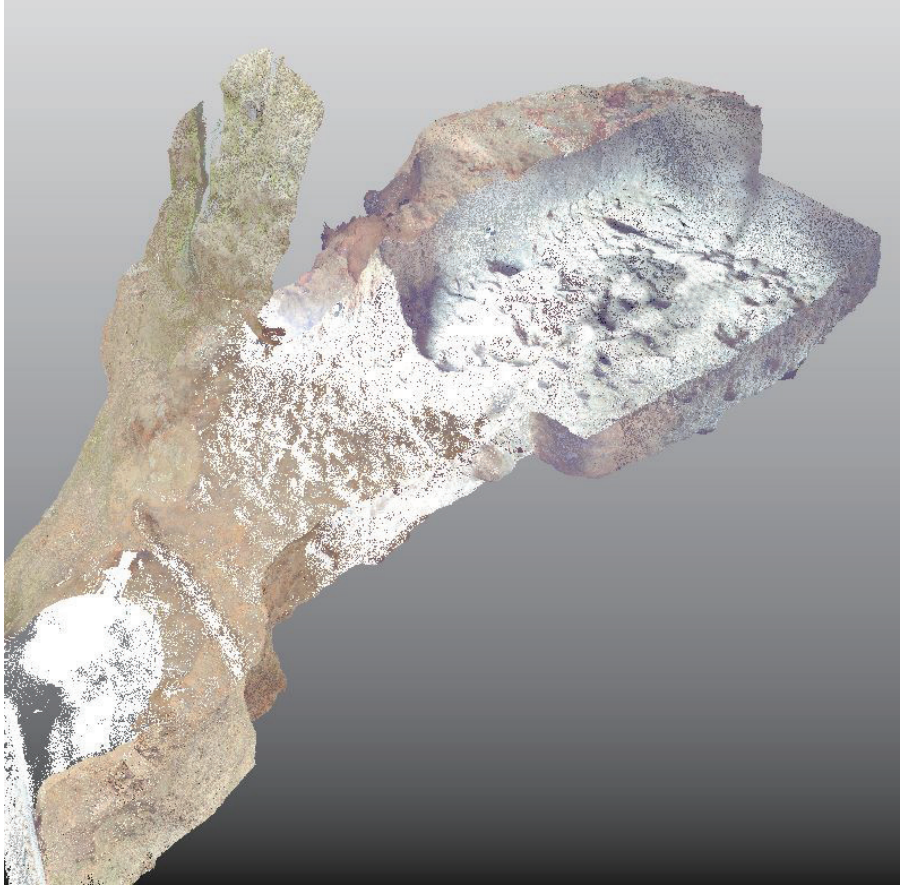


西から

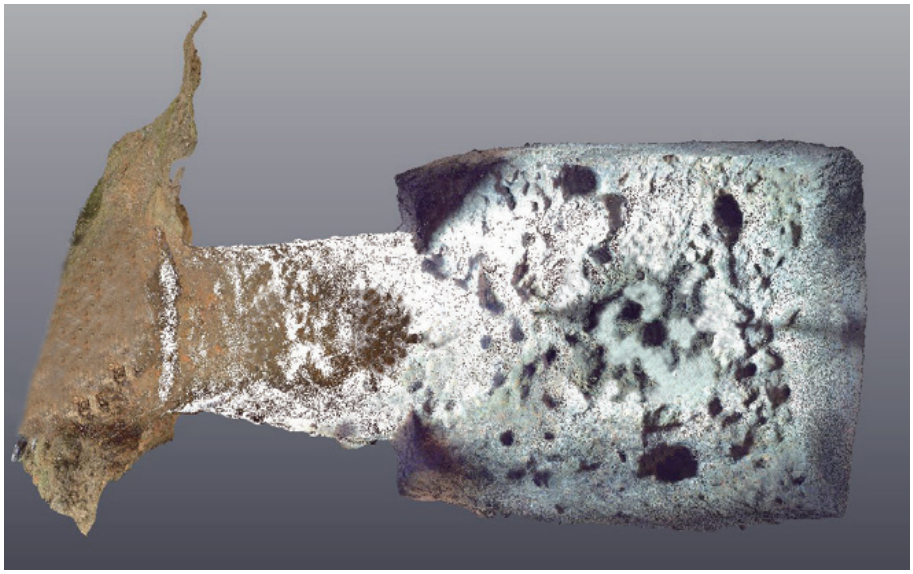


右側壁

第 96 図　3D データ　J-6 号横穴墓

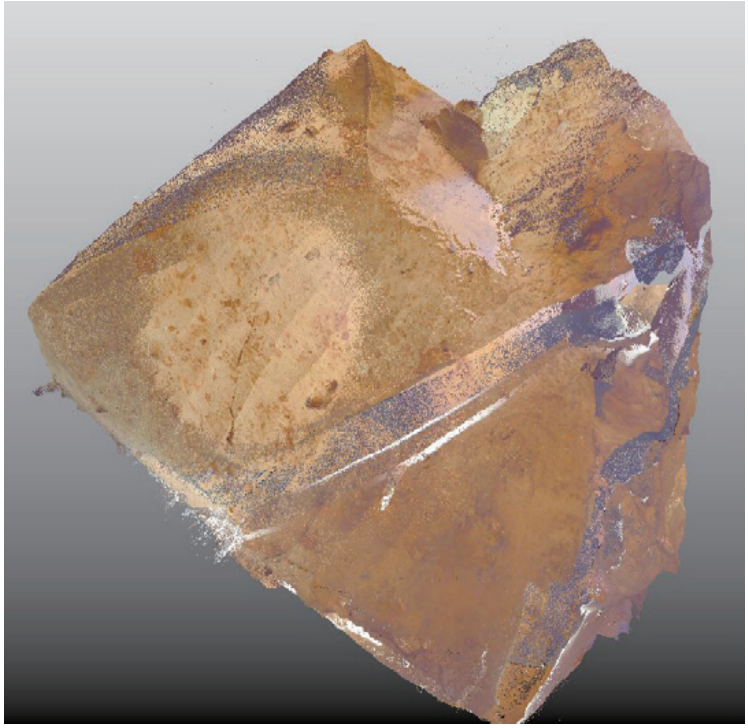


南から

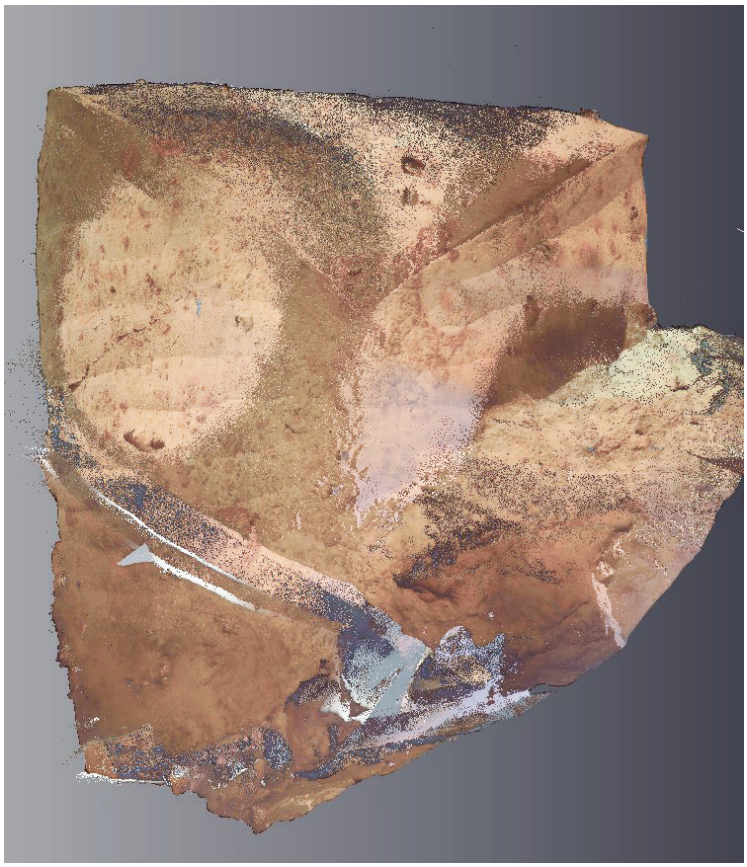


床面

第 97 図　3D データ　J-8 号横穴墓

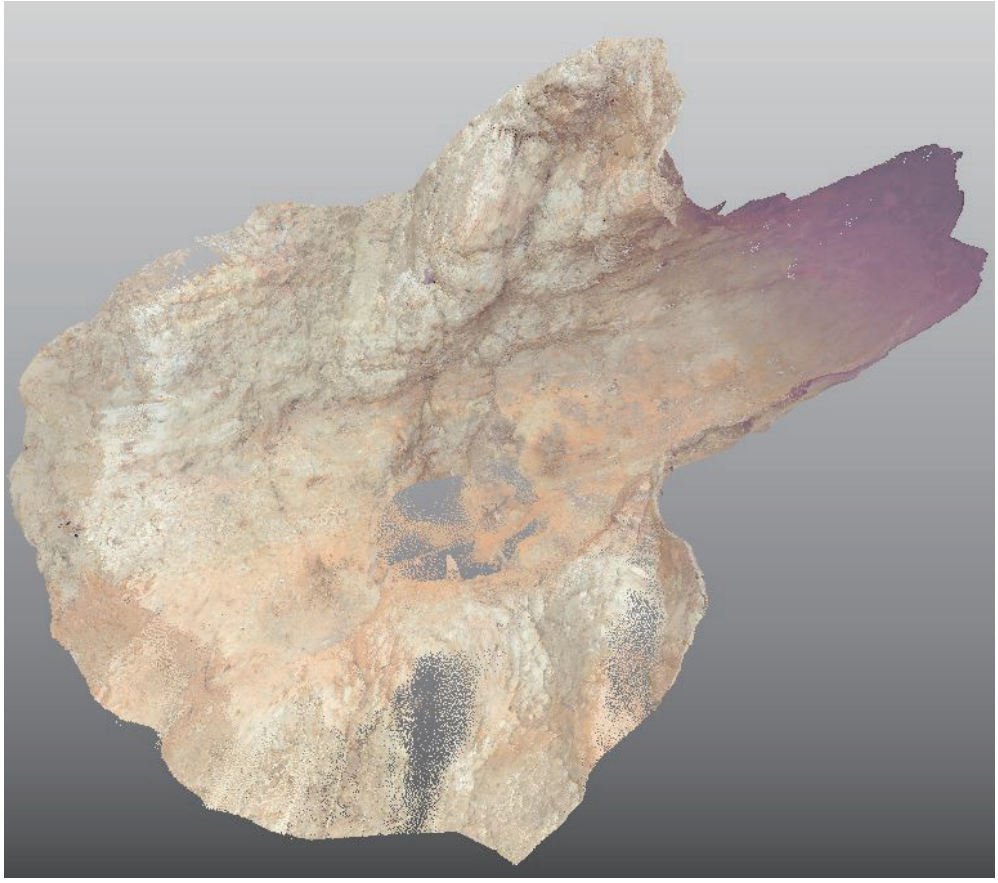


西側，外側から

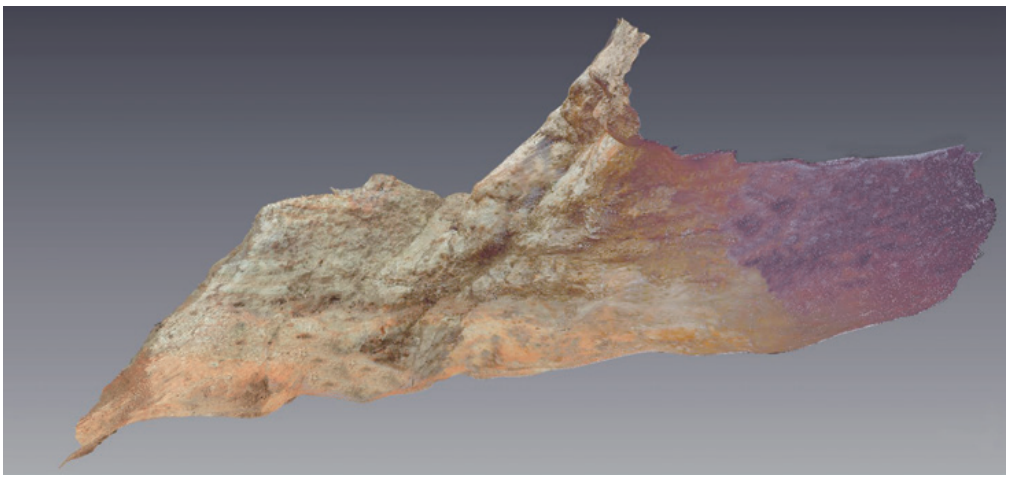


天井，外側から

第 98 図　3D データ　J-9 号横穴墓



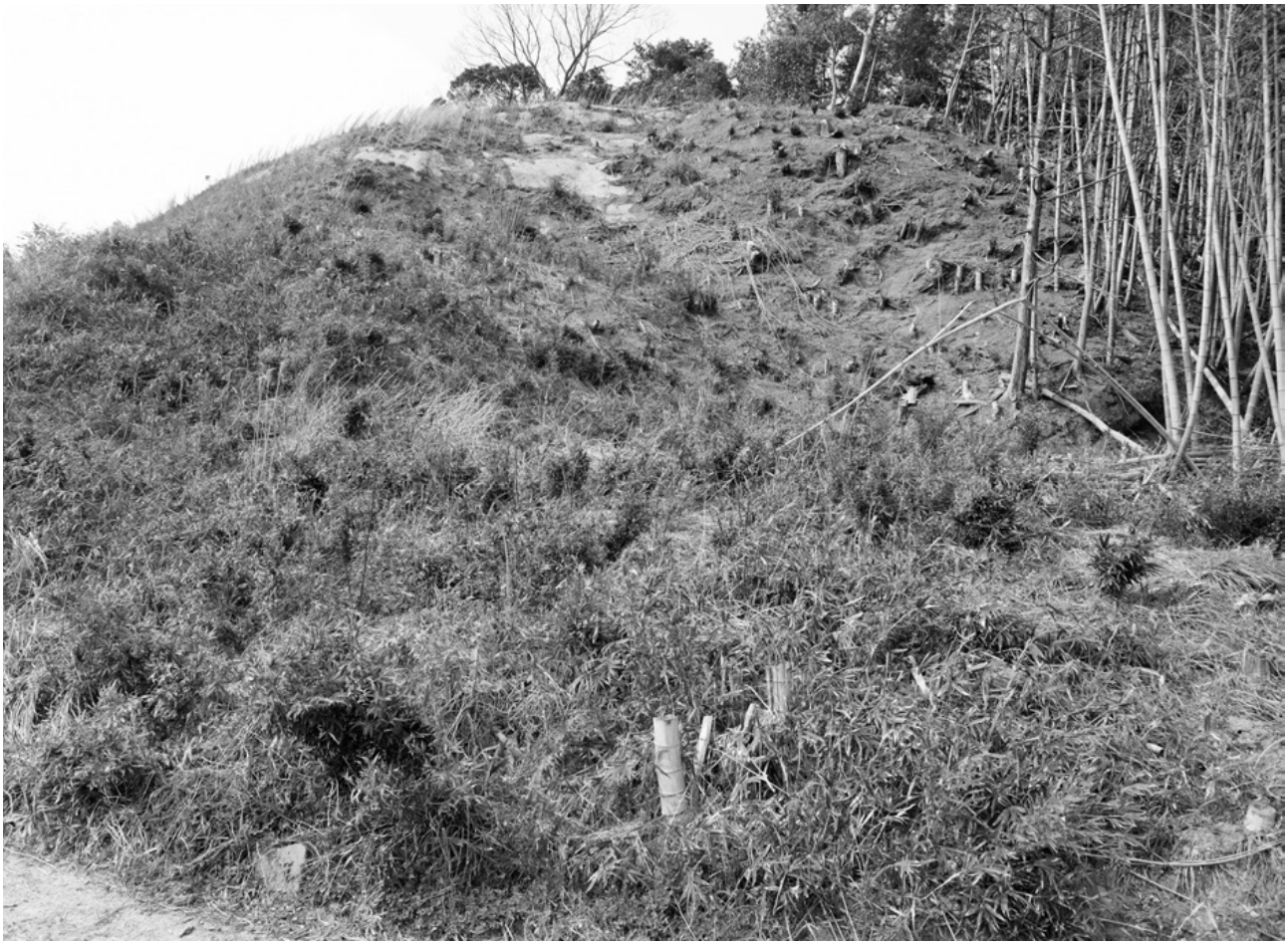
南側から



左側壁

第 99 図　3D データ　J-10 号横穴墓

写真図版



東側調査区　調査前の状況（南東から）

東側調査区　調査後の状況（南東から）

図版 2

K-1 号横穴墓　確認状況（南から）

K-1 号横穴墓　確認状況（南から）

K-1 号横穴墓　玄門土層堆積状況（南から）

K-1 号横穴墓　完掘状況（南から）

図版４

H-2 号横穴墓　確認状況（南から）

H-2 号横穴墓　完掘状況（南から）

H-3 号横穴墓　確認状況（南から）

H-3 号横穴墓　土層堆積状況（南から）

図版 6

H-3 号横穴墓　完掘状況（南から）

H-4 号横穴墓　土層堆積状況（南から）

H-4 号横穴墓　土層堆積状況（南から）

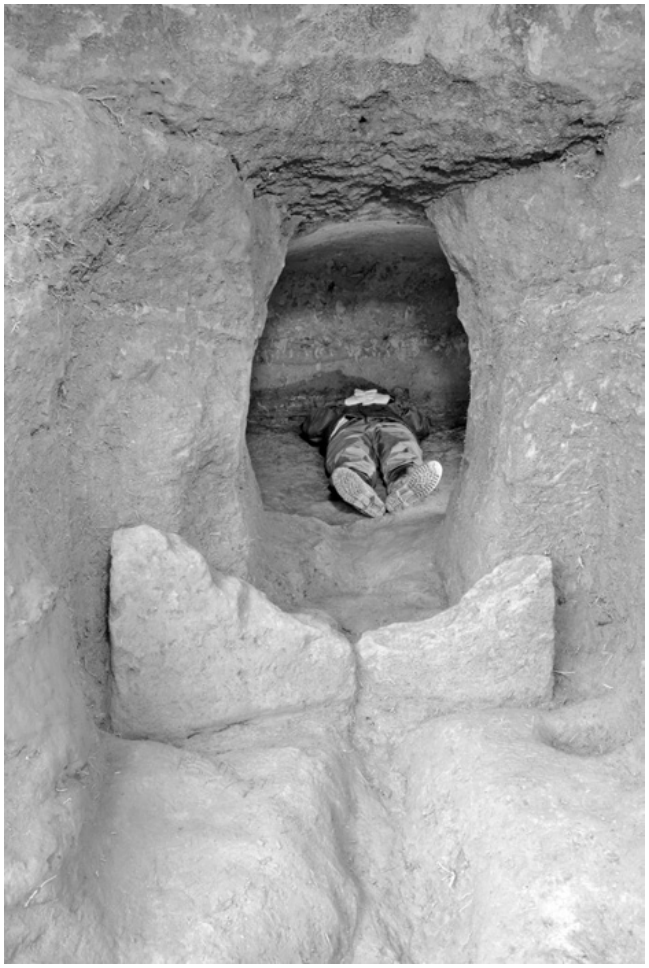
H-4 号横穴墓　遺物出土状況（南から）

図版８

H-4 号横穴墓　完掘状況（南から）

H-4 号横穴墓　玄室壁面加工痕（南から）

H-5 号横穴墓　土層堆積状況（南から）



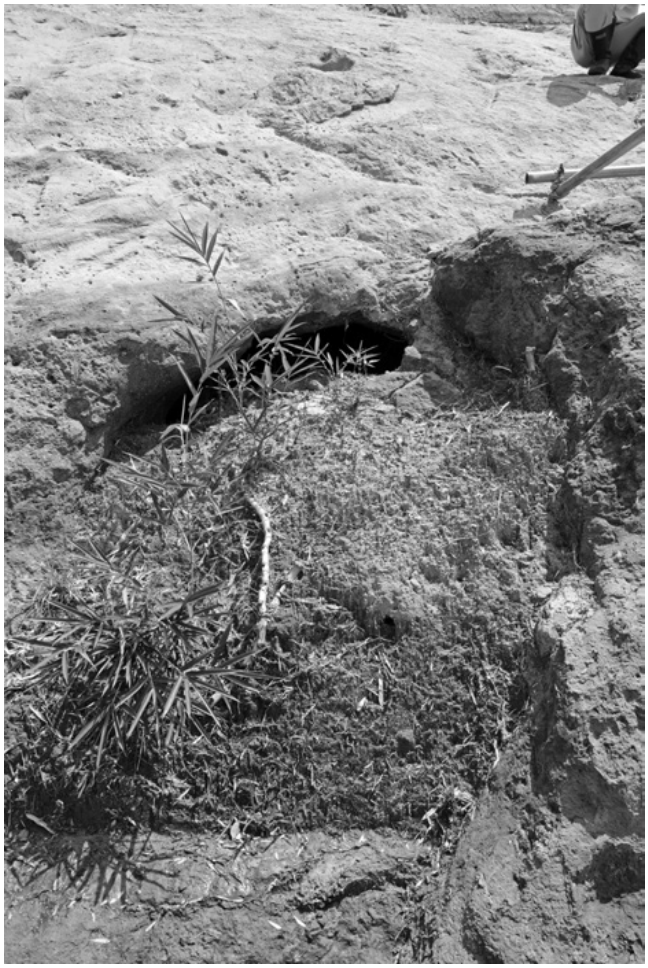
H-5 号横穴墓　閉塞石確認状況（南から）

H-5 号横穴墓　玄室完掘状況（南から）

図版 10

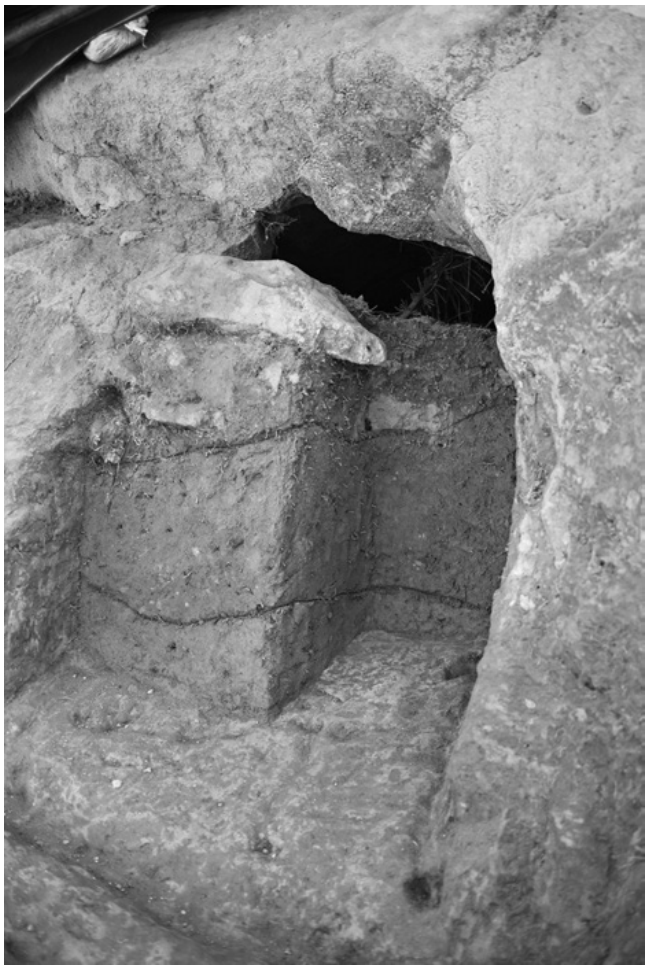
西側調査区　調査前の状況（西から）

西側調査区　調査後の状況（南から）

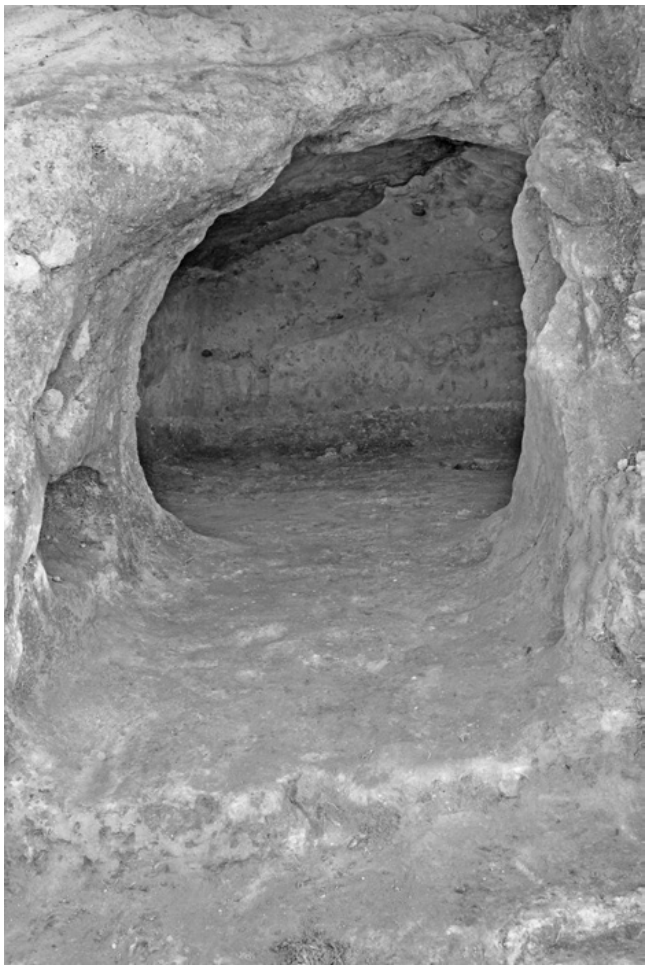


J-1 号横穴墓　確認状況（清掃前・西から）

J-1 号横穴墓　確認状況（清掃後・西から）

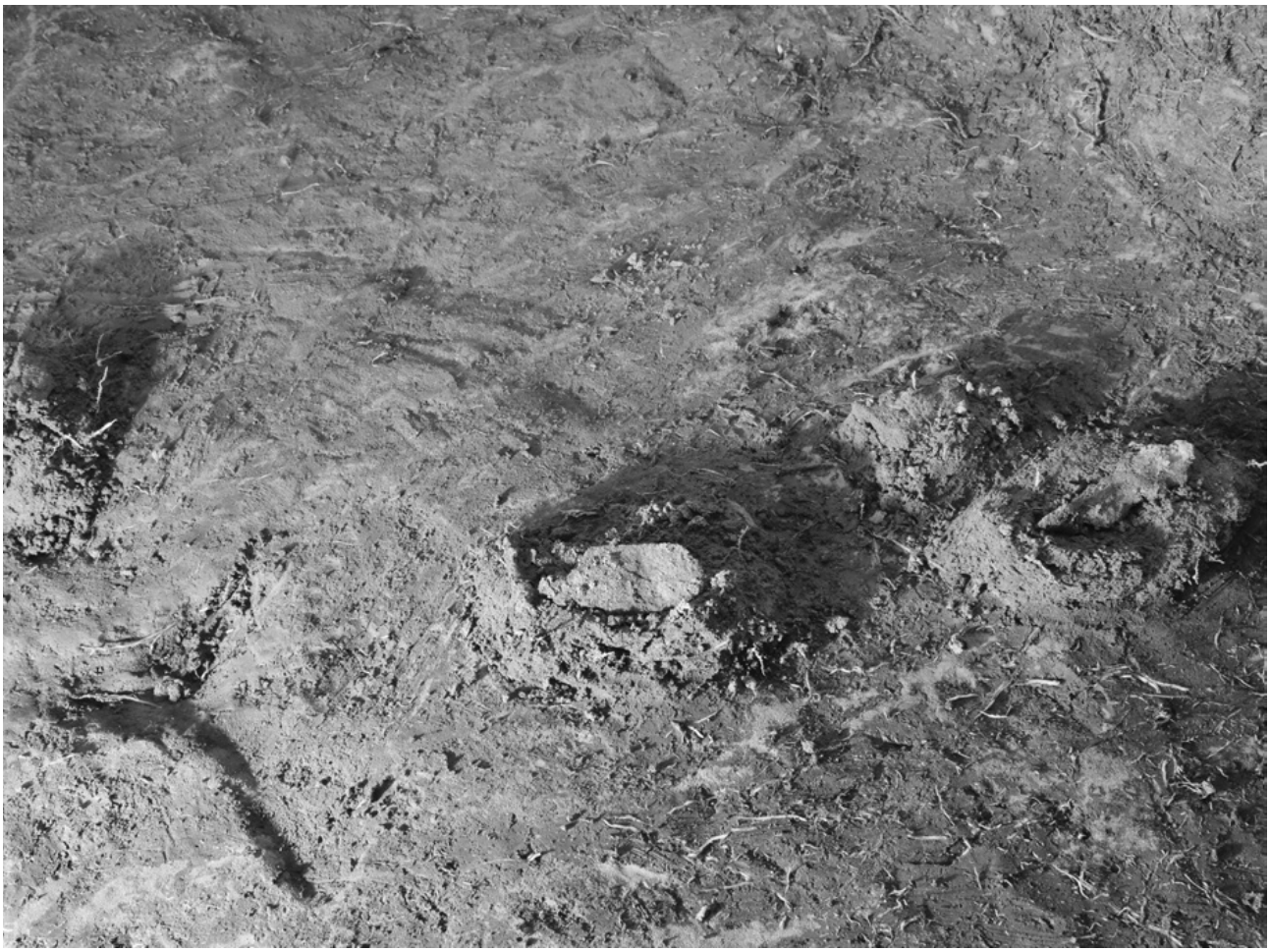


J-1 号横穴墓　土層堆積状況（南西から）

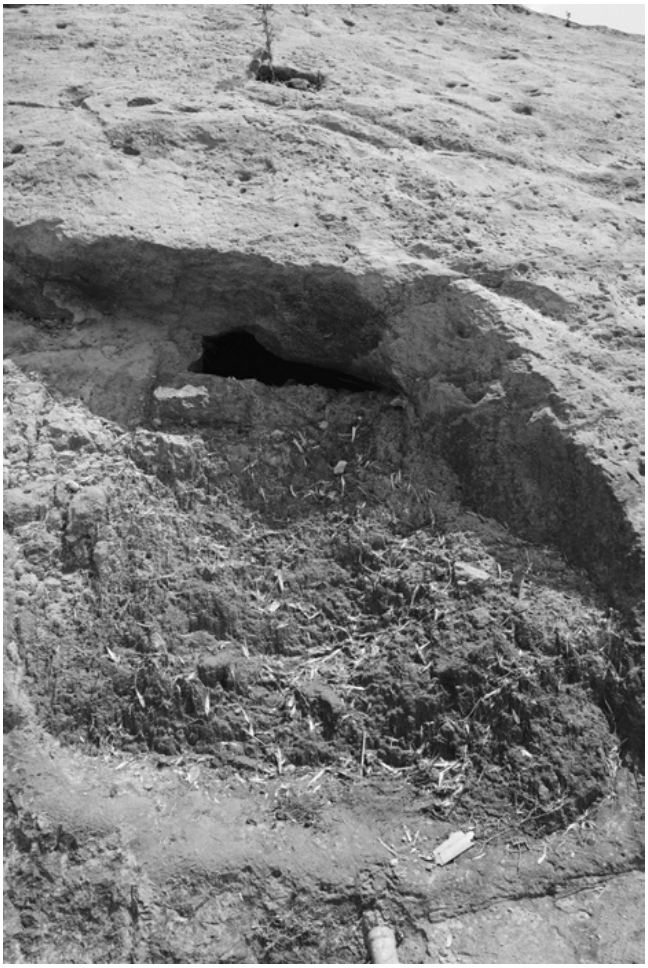


J-1 号横穴墓　完掘状況（西から）

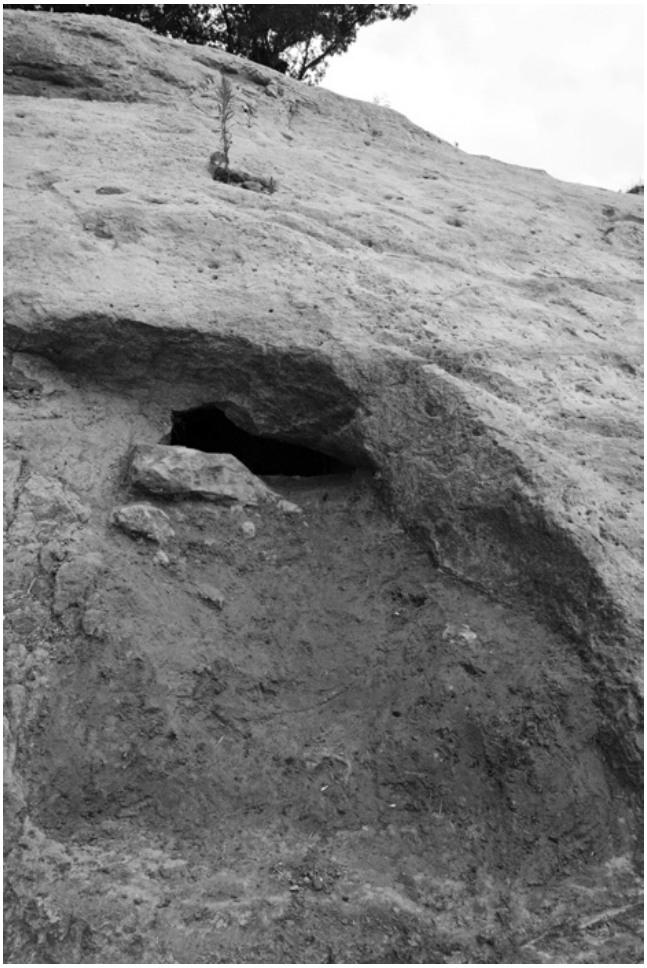
J-1 号横穴墓　天井肋骨状加工痕



J-1 号横穴墓　鉄鏃出土状況



J-2 号横穴墓　確認状況（清掃前・西から）



J-2 号横穴墓　確認状況（清掃後・西から）

J-2 号横穴墓　土層堆積状況（南西から）

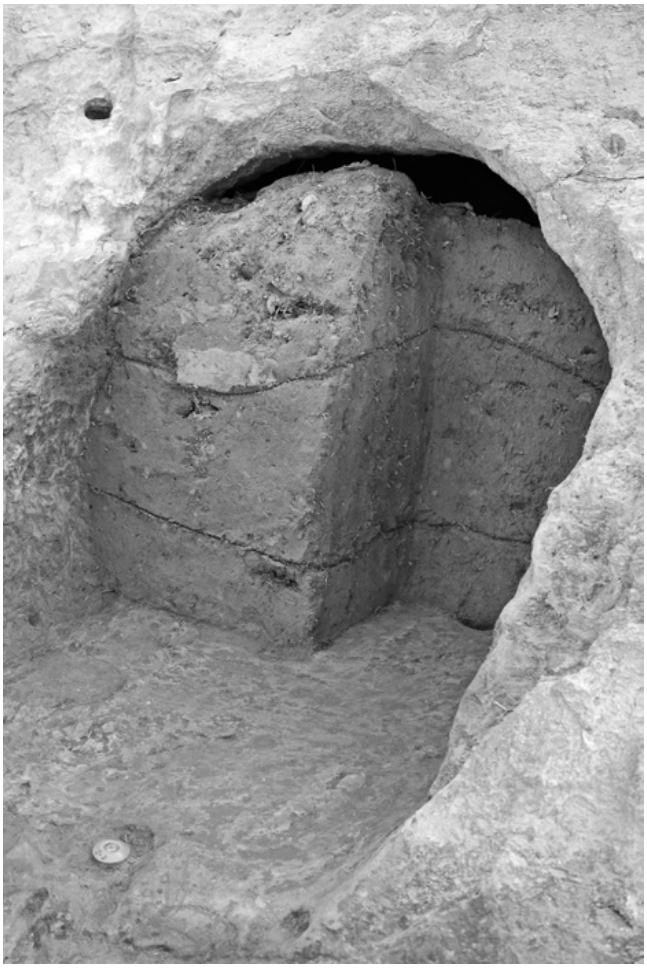
J-2 号横穴墓　土層堆積状況（西から）

図版 14

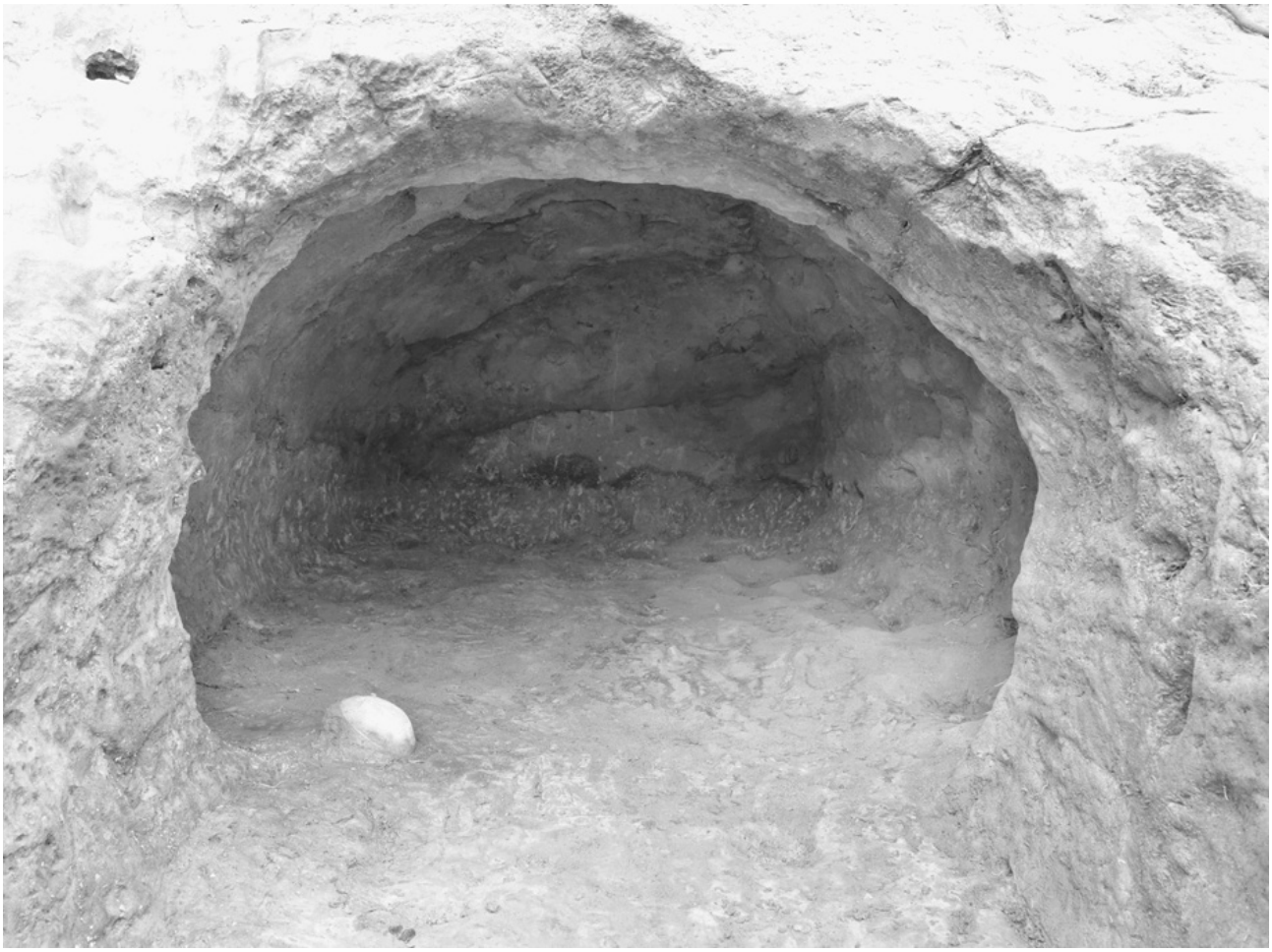
J-2 号横穴墓　天井の肋骨状加工痕

J-2 号横穴墓　石棺撤去後の状況

J-3 号横穴墓　確認状況（清掃前・西から）

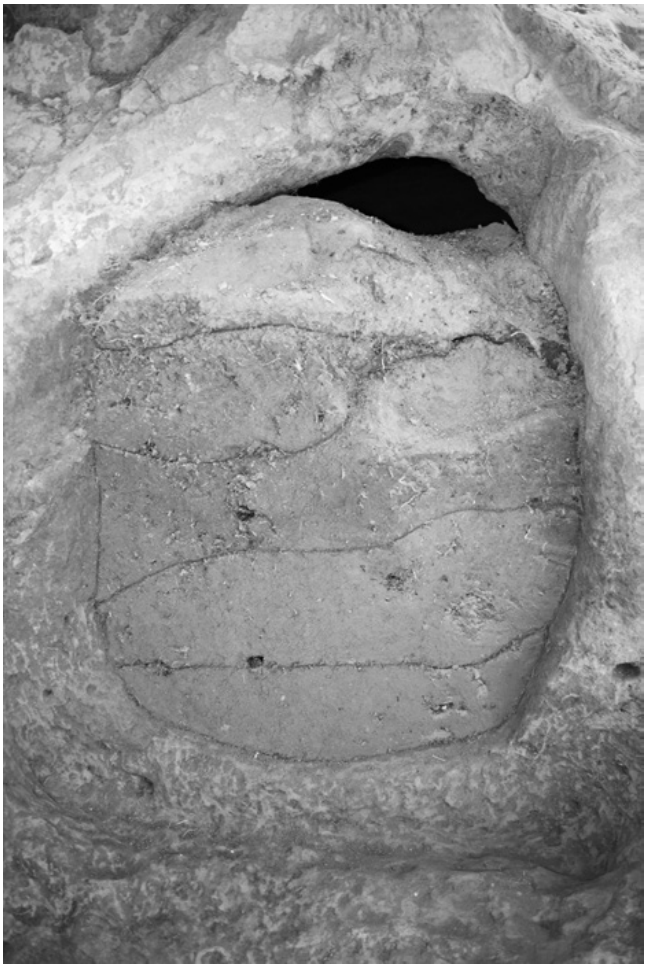


J-3 号横穴墓　土層堆積状況（清掃後・南から）

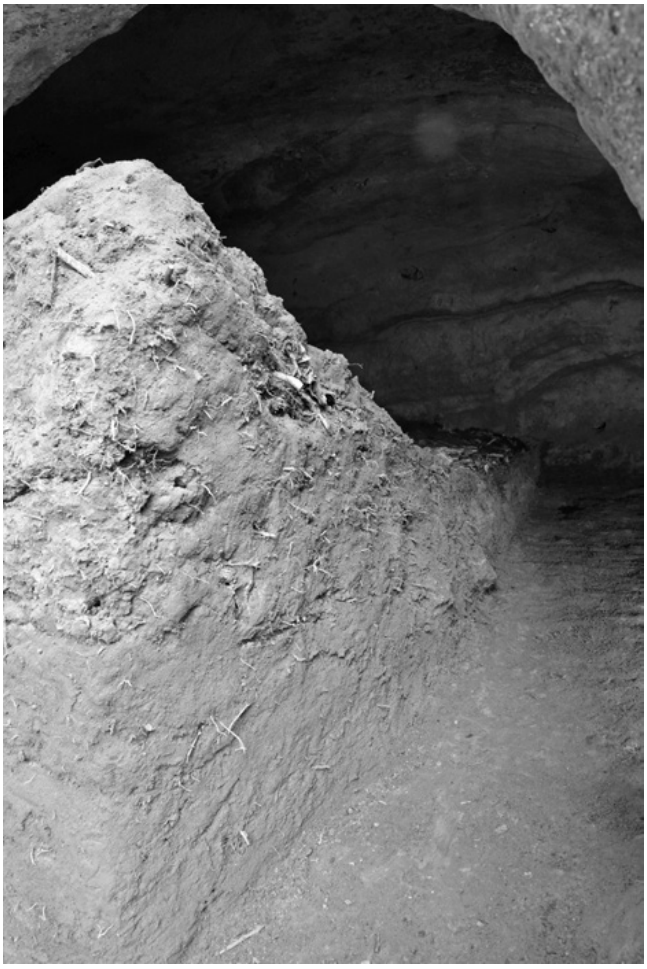


J-3 号横穴墓　完掘状況

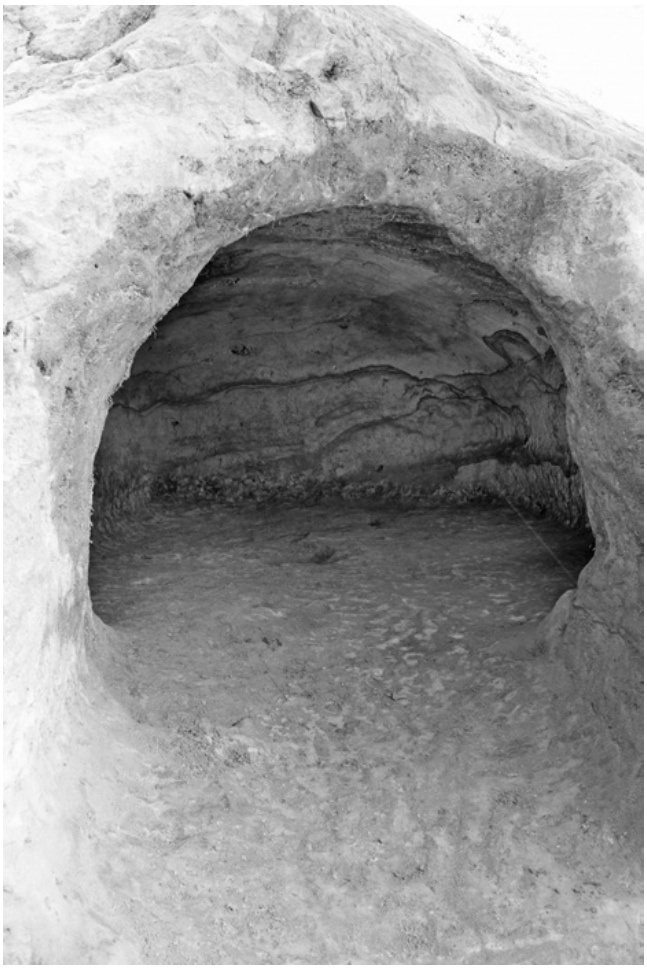
J-4 号横穴墓　確認状況（清掃前・西から）



J-4 号横穴墓　土層堆積状況（清掃後・西から）



J-4 号横穴墓　土層確認状況（西から）

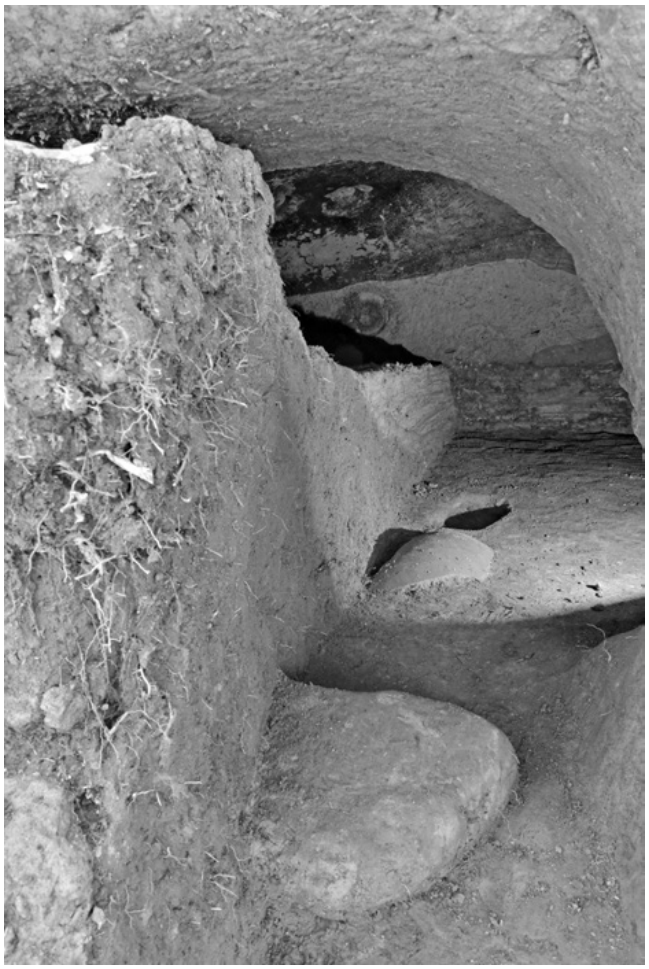


J-4 号横穴墓　完掘状況（西から）

J-5 号横穴墓　確認状況（西から）

J-5 号横穴墓　土層堆積状況（西から）

J-5 号横穴墓　閉塞石確認状況（西から）

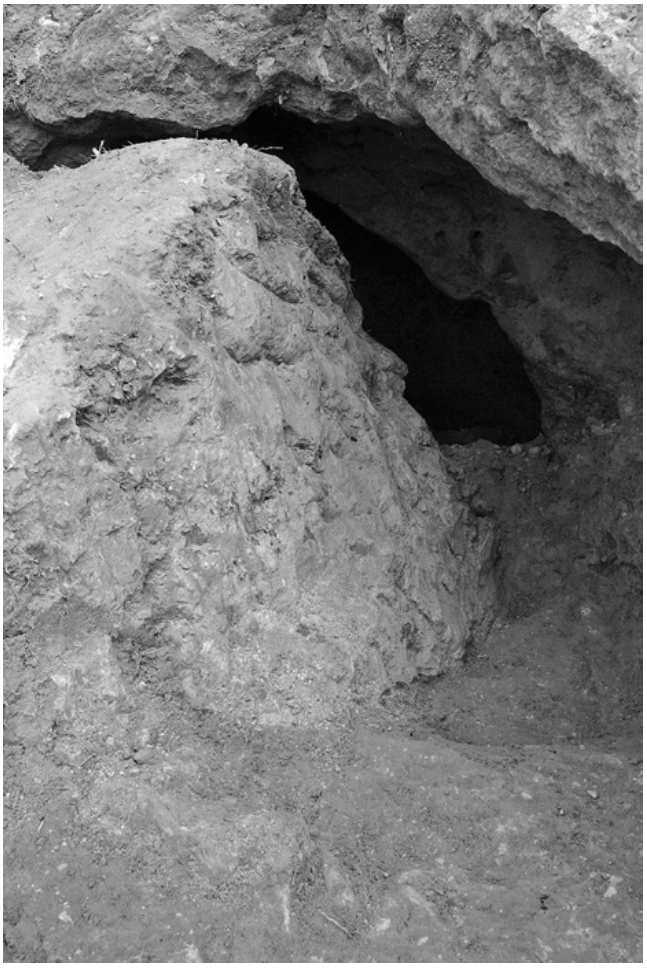


J-5 号横穴墓　土層堆積状況（西から）

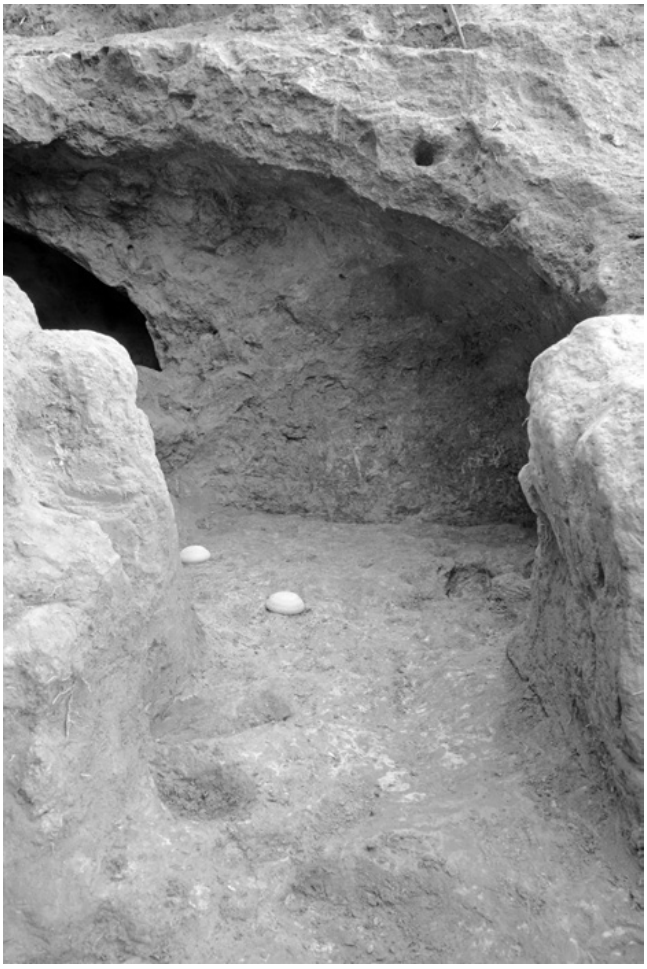
J-5 号横穴墓　石床（西から）

J-5 号横穴墓　石床撤去後（西から）

J-6 号横穴墓　確認状況（西から）



J-6 号横穴墓　土層堆積状況（西から）



J-6 号横穴墓　完掘状況（西から）

J-6 号横穴墓　肋骨状加工痕（西から）

J-7 号横穴墓　確認状況（西から）

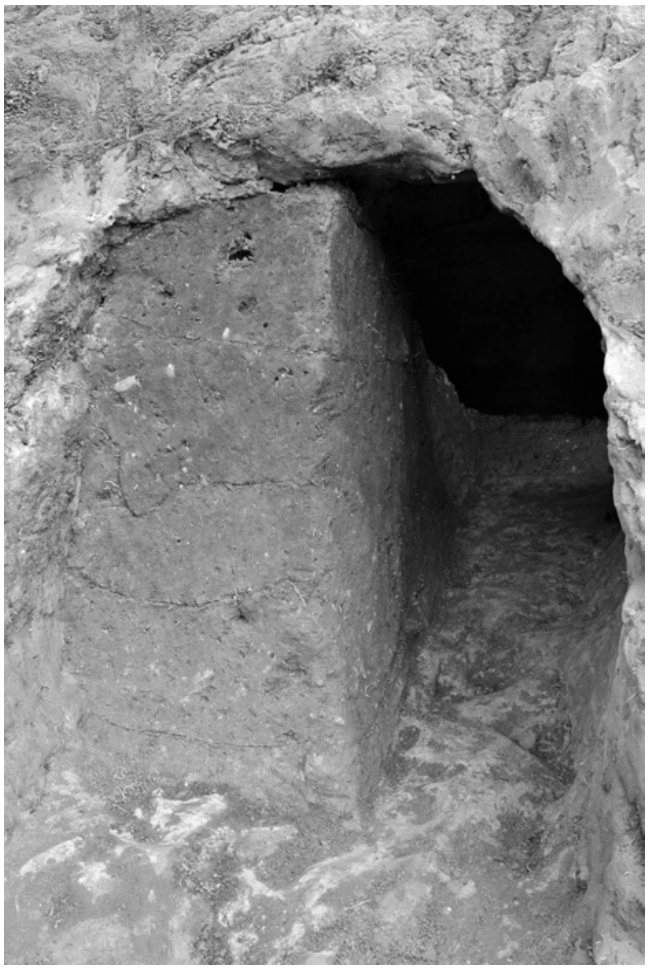
J-7 号横穴墓　土層堆積状況（西から）

J-7 号横穴墓　土層堆積状況（西から）

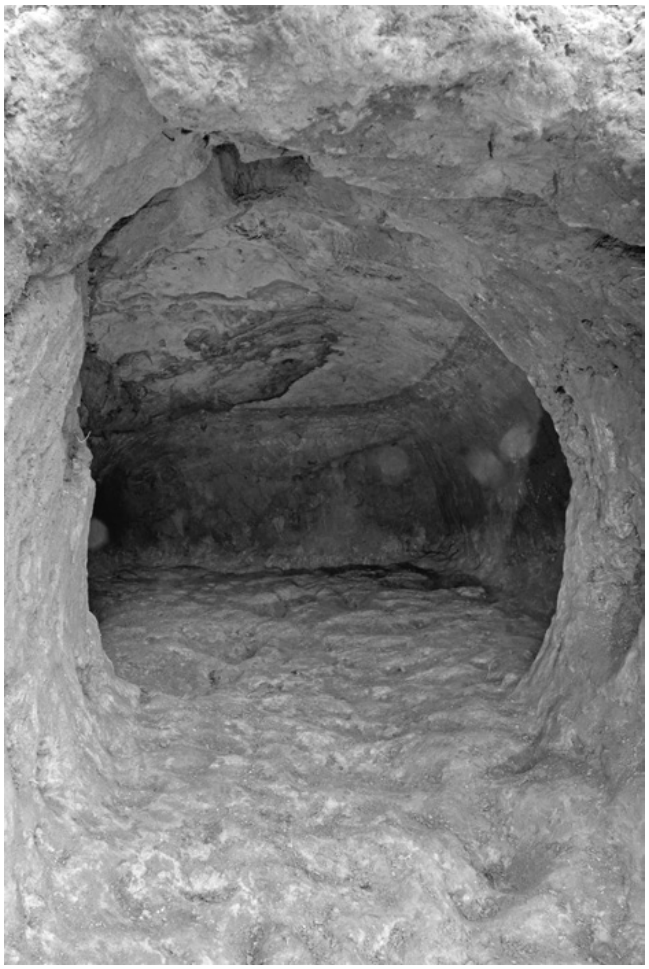
J-7 号横穴墓　完掘状況（西から）

J-8 号横穴墓　確認状況（西から）

J-8 号横穴墓　土層堆積状況（西から）



J-8 号横穴墓　土層堆積状況（西から）



J-8 号横穴墓　完掘状況（西から）

J-8 号横穴墓　遺物出土状況（西から）

J-8 号横穴墓　完掘状況（西から）

J-10 号横穴墓　確認状況（南西から）

J-10 号横穴墓　土層堆積状況（南西ら）

J-10 号横穴墓　完掘状況（南西から）

J-10 号横穴墓　完掘状況（南から）

1

2

5

7

8

10

3

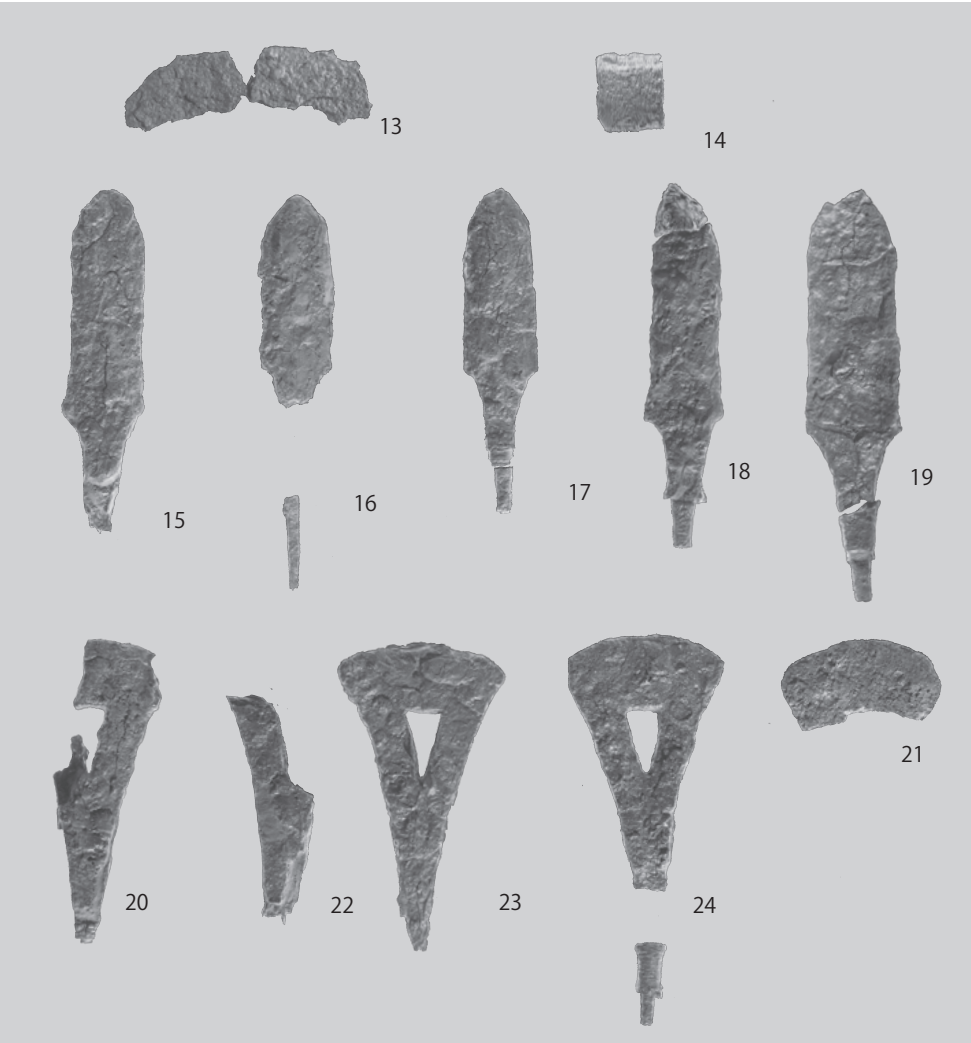
4

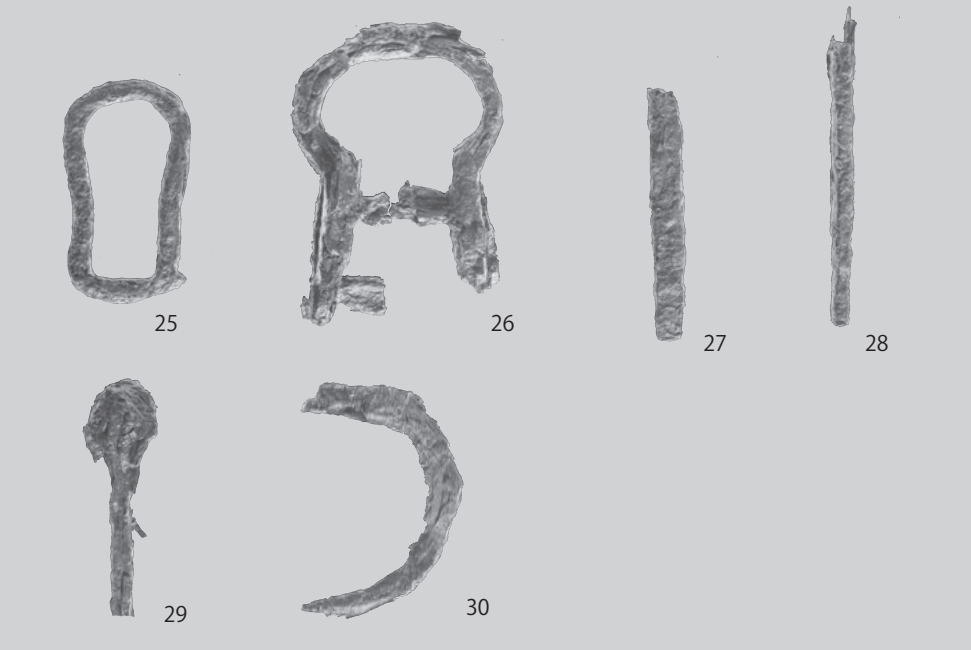
6

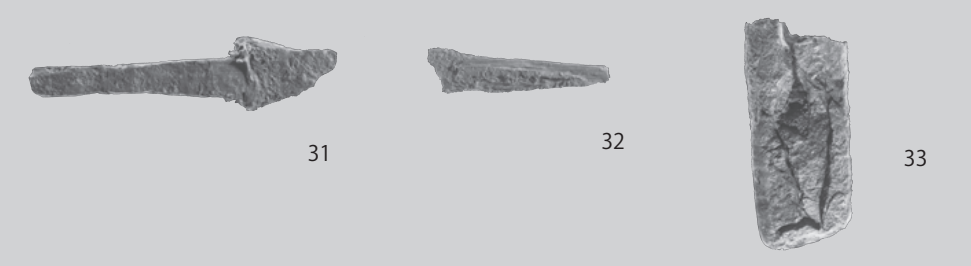
9

11

K-1 号横穴墓出土須恵器







K-1 号横穴墓出土金属製品

H-4　34

H-4　35

H-5　40

J-2　52

J-2　53

J-5　57

H-4　36

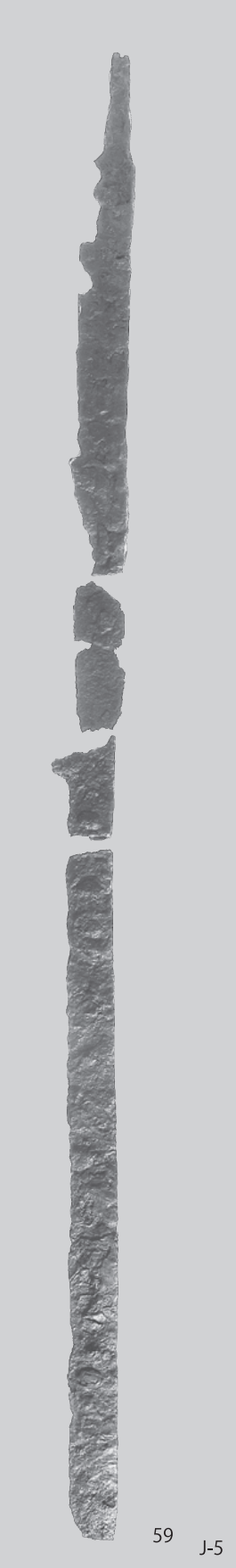
J-1　46

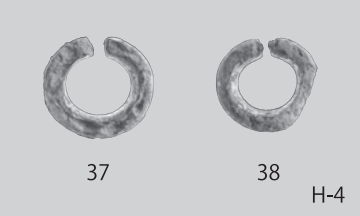
J-3　55

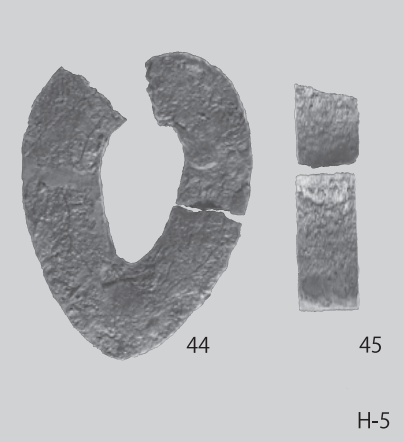
J-3　56

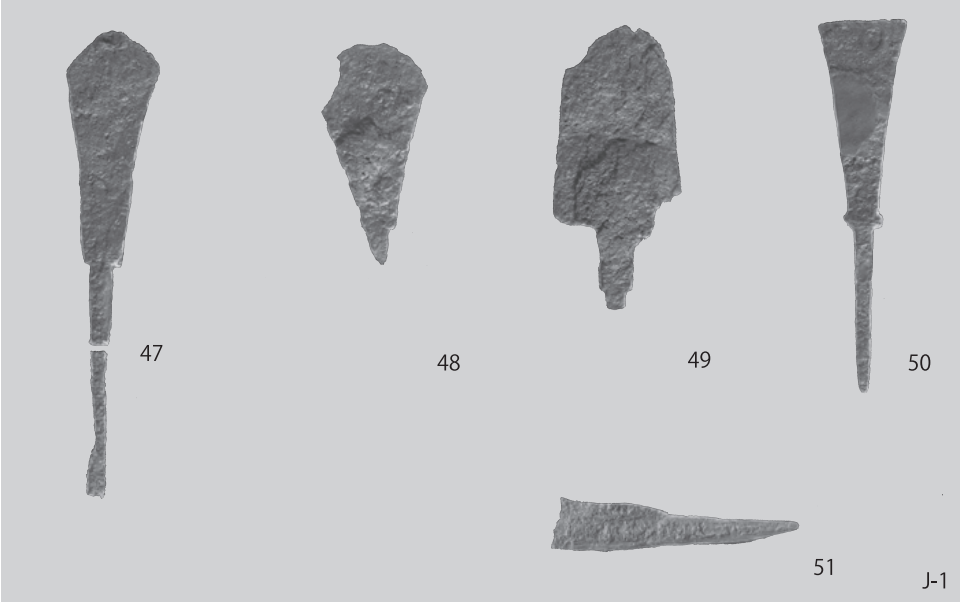
J-5　58

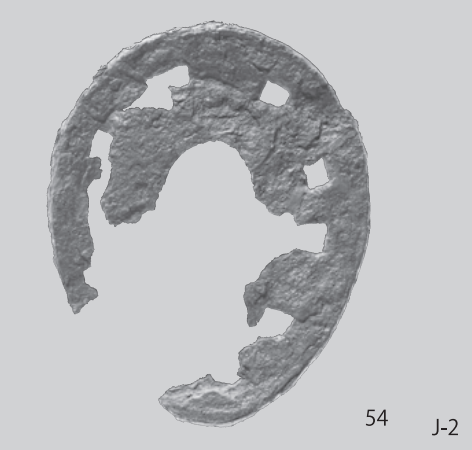
H-4 号～ J-5 号横穴墓出土須恵器

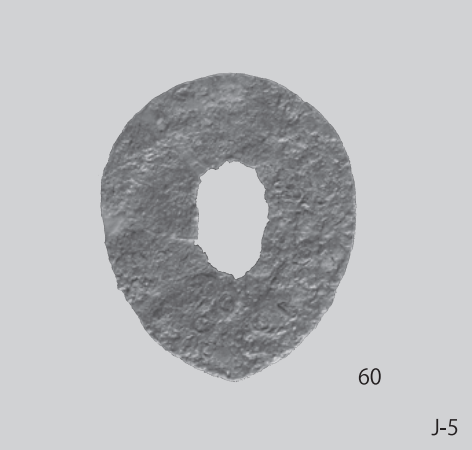


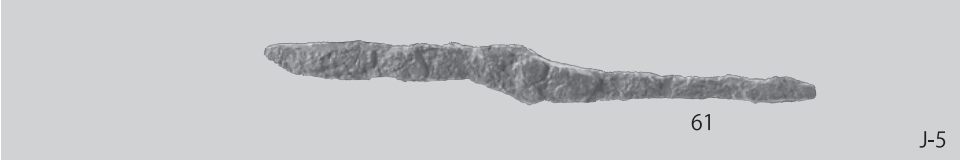




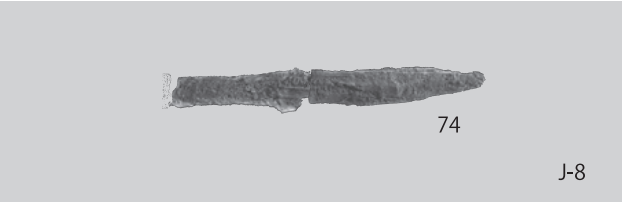


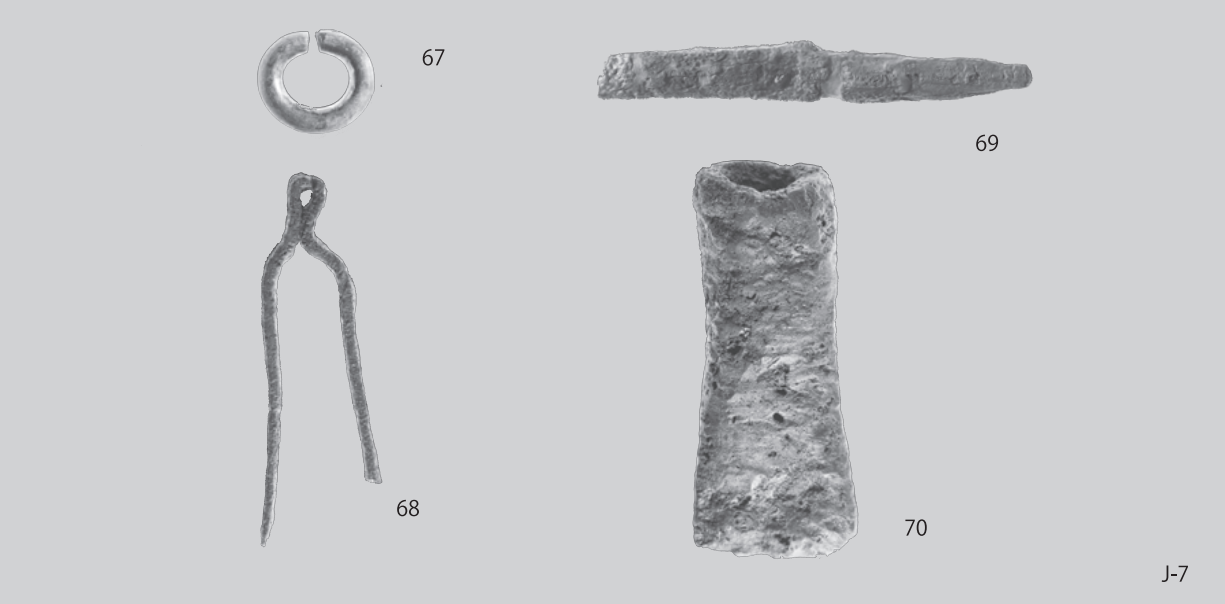






H-4 号～ J-5 号横穴墓出土金属製品





J-6 ～ 8 号横穴墓出土須恵器・金属製品

報告書抄録

ふりがな	かんどよこあなぼぐん　だい 10 しぐん
書　名	神門横穴墓群　第 10 支群
副書名	十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	出雲市の文化財報告
シリーズ番号	45
編著者名	石原　聡(編)・岩本真実・亀井淳志・黒田祐介・小林莉菜・下江裕貴・吉松優希・渡邉正巳・フジテクノ有限会社
編集機関	出雲市市民文化部文化財課
所在地	〒699-0011　島根県出雲市大津町 2760　TEL（0853）21-6618
発行年月日	令和３年（2021）３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北　緯	東　経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
かんどよこあなぼぐん 神門横穴墓群 第 10 支群	しまねけんいずもしじんざいおきちょう 島根県出雲市神西沖町	32203	W57	35° 19' 56"	132° 42' 33"	20180730 ～ 20200228	1,021 ㎡	河川改修

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神門横穴墓 第 10 支群	横穴墓	古墳時代後期	横穴墓 15 基	須恵器・鉄製品	肋骨状加工痕のある横穴墓や，馬具，有窓方頭式鉄鏃，毛抜き状鉄器などが出土した。

要　約

十間川の改修にともない出雲市神西沖町の神門横穴墓群第 10 支群を発掘調査した。10 支群における横穴墓造営初期段階の状況がわかる遺物が出土した。6 世紀末の K-1 号墓では，これまでの調査で確認していない異系統の須恵器群，鉄製馬具が出土している。全国的に出土例の少ない有窓方頭式鉄鏃の出土も特徴的で吉備との交流が伺える資料である。6 世紀末～7 世紀初頭には，毛抜き状鉄器が刀子とともに出土した J-7 号墓がある。玄室の平面形態も不整横長長方形であり，異質である。7 世紀前半には，神門横穴墓群を中心とした肋骨状加工痕の残る横穴墓が増える。これは，神門横穴墓群を中心とした広がりとも考えられ，出雲西部地域を中心とした横穴墓造墓集団が想定できよう。また，宮崎県，石川県や神奈川県においても同様に肋骨状加工痕を残す横穴墓があり，技術的な交流も考えられる。H-4 号墓で出土した象嵌鍔については，畿内産である可能性が指摘できる。

出雲市の文化財報告書　45

十間川防災安全工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

神門横穴墓群　第 10 支群

2021 年３月　印刷

編　　集　出雲市市民文化部文化財課
〒693-0011 島根県出雲市大津町 2760
ＴＥＬ（0853）21-6618

発　　行　出雲市教育委員会
〒693-8530 島根県出雲市今市町 70
ＴＥＬ（0853）21-6874

印 刷・製 本　株式会社　報光社